ISSN　2186-389X

外部評価報告書

九州大学総合研究博物館

平成17～21(2005～2009)年度

外部評価委員会
自己点検・評価委員会
九州大学総合研究博物館運営委員会

2011年８月

序

博物館の未来を創造するために挑戦し続ける責任が，九州大学総合研究博物館には厳然と存在する．行き着いた感のある高度技術文明と，数値によって人間を評価し続ける閉塞した社会と，自らの存在意義の説明を経済性合理性のみに依存し始めた大学群．こうした現実に苛まれる学術文化が，人類の幸福な未来に貢献しようとするならば，九州大学総合研究博物館は，つねにその核心に位置し，先頭を走る存在でなければならない．すなわち，館が省みる自らの足跡といま構築すべき未来像は，あまりにも大きな責務を含み，無限可能性を秘めたものとなろう．

外部評価委員会は，自らの責任のあり方を人類の幸福に向けた館の創造的構築を支えられるか否かに据えた．今次，大学部局の評価なるものは，デフレーション経営への合致度に盲従した二重三重にくり返される惰性の産物と化しているケースが少なくない．本委員会はこうした疲弊した評価を克服し，九州大学総合研究博物館が，いかにして文化の担い手として高度で，深く，新しく，そして人々の心を学に導く力強いものとなり得ているかどうかを，人間臭く評価することに傾注した．

委員会メンバーは，市民，報道，経済界，学生，博物館人，教育者，研究者と可能な限り多角的な人材より構築されているが，同時に，民主主義の名に隠された衆愚や利益代表の混在を拒否し，真に，国民，市民とともに歩む「学」の新しい姿を，館に求める姿勢を貫いた．評価の対象とした項目・内容は，総務，経営，研究，教育，社会貢献，将来構想など全般に及んでいる．総合性，比較性を科学哲学にもつ博物館は一義的に目的を集約特化させることではその責任を果たすことができない．よってそれぞれの評価対象に対する評価の議論のなかみは，丁寧で緻密でなければならないと考えて，詳細にわたる評価を実施した．

報告書は，委員を中心に唱えられた評価意見を不用意にまとめることなく，できるだけ生の起案を読める形でまとめてある．簡略さを求めるよりも大部になることをためらわなかった．その結果，価値観が多彩で結果が即時性を備えるとは限らない博物館運営への進言と批判を，現在とりうる評価体系の中で，最大限目に見える形で残すことができたと確信している．多岐にわたる深奥な議論の数々について，委員会として無理に議論を収束させることはせず，熱意にあふれた委員の主張を大量に盛りこんだことが，館の未来の一助につながることを願う．本委員会の微々たる試みが，九州大学総合研究博物館の真に意義ある歩みに結実することを祈念する．

九州大学総合研究博物館外部評価委員会委員長　遠藤秀紀

目次

第１部　外部評価の概要 1
１．外部評価の対象年度と評価資料 1
２．外部評価委員会 1
３．評価の方法 2
４．外部評価要旨 4
Ⅰ．活動の理念と目標 4
Ⅱ．博物館活動 4
Ⅲ．管理・運営 8
Ⅳ．施設・設備 9
Ⅴ．将来構想・将来計画 10
Ⅵ．中期目標・中期計画 11
Ⅶ．点検評価 12

第２部　外部評価本文 13
Ⅰ．活動の理念と目標 14
Ⅱ．博物館活動 15
A．学術標本の収蔵管理 15
B．開　示―展示 19
C．開　示―情報発信 23
D．研　究 28
E．教　育 32
F．学内他部局との連携 36
G．他博物館などとの連携 38
H．社会貢献・教育普及活動 41
I．国際連携 44
Ⅲ．管理・運営 46
A．管理運営の理念 46
B．管理運営体制 46
C．教員組織と人事 47
D．財　政 48
Ⅳ．施設・設備 50
A．施設の状況 50
B．設備の状況 51

C. 新キャンパス計画 52
Ⅴ．将来構想・将来計画 54
A. 将来計画 54
B. 事業部構想 55
Ⅵ．中期目標・中期計画 57
A. 教育に関する目標 57
B. 研究に関する目標 57
C. その他の目標 57
Ⅶ．点検評価 59
A. 平成 16 年度実施の自己点検・評価 59
B. 平成 17 年度実施の外部評価 59
C. 平成 22 年度自己点検・評価 59
Ⅷ．総括 61

第３部　（付）自己点検・評価報告書（2005～2009）

第１部　外部評価の概要

外部評価の概要

１．外部評価の対象年度と評価資料

今回の外部評価の対象は，2005 年～2009 年度の博物館活動である．

対象年度の大学博物館の活動については，2010 年度に実施した自己点検・評価（2005～2009）の際に用いた資料および自己点検・評価報告書を使用することとした．

常設展示室，標本庫，実験室，第 1 分館，第 2 分館等の施設，並びに大形プリンターや実験室の設備については，博物館職員の案内で 2011 年 2 月 17 日の外部評価委員会冒頭に全員で見て回った．

２．外部評価委員会

教員会議において，2010 年度に大学博物館創設以来第 2 回目の外部評価を実施することを確認し，委員候補者を持ちより検討した．今回は，第 1 回外部評価の結果の反映状況を把握することも重要であるとして，前回委員にも入ってもらうこと，女性委員を含めて全体の委員の数を増やすこととした．

外部評価委員長は，外部評価委員会において委員の互選により，遠藤秀紀東京大学総合研究博物館教授を選出した．

2011 年 2 月 17 日に，九州大学で外部評価委員会を開催した．参加者は下記外部評価委員のほか，自己点検・評価委員（佐伯弘次人文科学研究院教授），理学部等事務部（根本正明事務長，毛利元宣企画係長，岡田昌弘博物館担当職員），大学博物館（松隈明彦館長，岩永省三副館長，中牟田義博准教授，中西哲也准教授，三島美佐子准教授，丸山宗利助教，福原美恵子研究支援推進員）である．

九州大学総合研究博物館外部評価委員会委員一覧

◎：委員長

大学博物館

◎遠藤秀紀氏　東京大学総合研究博物館教授
大木公彦氏　鹿児島大学総合研究博物館館長
大野照文氏　京都大学総合博物館館長
松枝大治氏　北海道大学総合博物館館長

一般博物館

伊藤明夫氏　北九州市立いのちのたび博物館館長
瀬戸京一氏　福岡市立少年科学文化会館館長
高田浩二氏　海の中道海洋生態科学館館長

マスコミ

上別府慶保氏　西日本新聞社文化部長

市民

牛尾昌義氏　　西区まるごと博物館推進会幹事

黒木慶子氏　　小学校教諭

島田允堯氏　　九州大学名誉教授

雪田千春氏　　主婦

学生

田中あかり氏　統合新領域学府１年

３．評価の方法

今回の外部評価では，項目が多岐にわたり，資料が膨大であることから，博物館で各委員に重点的に評価してもらう項目を割り振った．各委員は担当の項目については必ず意見と評価を出すとともに，他の関心のある項目についても適宜，意見・評価を述べることとした．

評価は，項目ごとに５段階評価で，A(5)～E(1)で評価した．

A(5)：目標・目的が十分に達成されている，向上及び改善のためのシステムが十分に機能している．

B(4)：　目標・目的が概ね達成されている，向上及び改善のシステムが概ね機能している．

C(3)：目標・目的が相応に達成されている，向上及び改善のシステムが相応に機能している．

D(2)：目標・目的がある程度達成されている，向上及び改善のシステムがある程度機能している．

E(1)：目標・目的が殆ど達成されていない，向上及び改善のシステムが殆ど機能していない．

評価項目と主たる担当委員

１．大学博物館の使命と役割（伊藤，遠藤，大木，黒木，島田，田中，雪田）

２．博物館活動

（１）研究（伊藤，遠藤，島田，松枝）

（２）教育（大木，大野，黒木，瀬戸，田中，雪田）

・学芸員の養成

・学部・大学院

（３）学術標本（牛尾，遠藤，大野，島田）

・収集

・整理

・データベース化

（４）　展示（牛尾，大木，高田，田中，松枝）

・公開展示

・特別展示

・サテライト展示

（５）社会連携・社会貢献（牛尾，大野，上別府，黒木，瀬戸，田中，松枝，雪田）

・公開講演会

・講演会

・実習

（６）学内他部局との連携（伊藤，遠藤，大木，大野）

（７）他博物館等との連携（伊藤，遠藤，瀬戸，高田）

（８）国際連携（伊藤，牛尾，上別府，松枝）

（９）情報発信（伊藤，遠藤，上別府，雪田）

（１０）出版（大野，上別府，黒木，田中）

３．管理・運営（遠藤，大木，高田，松枝）

４．財政（遠藤，瀬戸，高田）

５．施設・設備（大野，高田，松枝）

６．将来構想・将来計画（伊藤，遠藤，大野，黒木，島田，瀬戸，田中）

７．中期目標・中期計画（遠藤，大木，大野，松枝）

８．点検・評価（牛尾，大木，上別府，島田，雪田）

４．外部評価要旨

以下の項目で評価がC-D(2.5)乃至はC(2.6～3.4)と低かった．今後，館内で活動の必要性の見直しや取り組み方法・体制，情報の公開方法等について検討し，課題の克服と活動に対する社会の理解へ向けた取り組みを行う必要がある．博物館活動では，（１）社会教育・学校外教育への貢献，（２）海外研究者との交流・共同研究，（３）外国人研究者の受け入れへの積極的な取り組みが要請された．管理・運営では，（４）移転へ向けて早急な事務体制の整備と（５）教員の配置に関する将来を見据えた検討と館内の合意形成が必要であることが指摘された．施設・設備に関しては，（６）標本資料を収蔵し，整理し，教育と研究への活用を支援するためには相応の施設と設備が必要であることを学内外に訴え，大学当局の理解と支援を得る努力を行うことが重要であることが指摘された．将来構想・将来計画に関しては，（７）移転を間直に控えた現在，事業部構想よりも優先させるべき活動にエネルギーを傾注すべきであるという指摘があり，館内で検討を行い，今後の活動方針を決める必要がある．

その他の項目は何れもＢランクであったが，その中で比較的高い評価(＞4.0)を得たものとしては，（１）第１分館展示，（２）ホームページ，インターネット博物館，（３）学芸員資格関連授業・実習等の教育，および教育支援，（４）福岡市少年科学文化会館との連携などがある．これらは更に改善を重ねて，九州大学総合研究博物館の特色として充実を図るとともに，より一層大学博物館の使命・役割を効率的に果たすように努力すべきである．

Ⅰ．活動の理念と目標　　評価平均 B(4.3)

古くからある総合大学には，沢山の学術資料が残っている．それを生かして教育を行い，次世代を作ることで社会貢献することが大前提である．

理念は総花的で，大学博物館のあるべき姿を述べているように見える．一方で，学術資料の保存，保管に力点を置きすぎ，社会教育機関としての博物館の活用を前提としていない印象がある．

大学博物館が外部とどう接触するかということを理念の中で具体的に述べるべきである．

大学博物館の役割には，大学組織としての面と社会との接点としての面がある．大学のアクティビティを外へ向けて紹介する使命があるが，社会貢献に関しては博物館の自律的創造・表現の場でなければならない．大学博物館の理念と目標を何らかの形で公開し，学内外の理解を得る努力を行うとともに，常にいろいろな形と角度で批評されていなければならない．

Ⅱ．博物館活動

A．学術標本の収蔵管理　　評価平均 B(4.0)

委員の評価に大きなバラツキはなかった．

移転と博物館新建物建設までの端境期に，貴重な資料の散逸や廃棄を極力抑え，保全に全力を尽くすべきである．そのためには，能動的に活動を行い，資料部全体による調査と整理のシステムを充実させるとともに，関係各部局に対する積極的な提案が必要である．

資料の収集，学内資料の移管，学外からの寄贈の受入れには十分なスペースが必要である．保管場所の集約，スペース確保，一元管理化を積極的に進めながら，今後も教育・研究のための貴重な資料の収集・移管・受入れに努めるべきである．

学内に散在する資料の調査は，博物館の基礎的活動であり，重要である．収蔵管理の面からだけでなく，博物館展示，教育利用の面からの調査・収集も考えるべきである．

標本調査が博物館スタッフだけで行われるのではなく，資料部の兼任教員の協力を得て全学的に行われていることは評価できる．

館外，海外との連携による調査・収集活動が必要である．

移管に関する博物館内の意見が統一されていない．館の方針を明確にして作業を進めるべきである．

標本の閲覧・貸出しは博物館の重要な業務の一つであり，要綱に則って地道に継続するとともに，実績を年報等に記載して，外部から評価できるようにすべきである．

標本の活用には，整理・データベース化が不可欠であり，一層作業を進める必要がある．近未来的な移転計画を見据えて，収蔵標本の全容把握とスペース確保のために，早期のデータベース化と公開が急がれる．

B. 開示―展示　　評価平均 B(3.8)

様々な展示が行われていることは評価するが，展示の名称が複雑多岐でわかり難く，整理を要する．常設展示については，委員の評価が大きく分かれた．展示全般について，展示目的，場所，見学方法などが来館者に十分わかるような PR が必要である．

大学の公開展示が，自由な学術表現の場となっているか点検し，表現の豊かさに挑戦する必要がある．

サテライト展示等を継続するなら，労力，効果等を見極め，戦略的，計画的な実施体制が必要である．サテライト展示，「開かずの間」的展示は，展示効果を考えて閉鎖・集約などを考慮してはどうか．

集客力アップを図るためには，展示計画（年次計画，テーマ等）が必要．各展示の主担当者の明示が必要．

アンケート調査などの実施で展示の効果を測定し整理するについては，結果の解析に客観性を持たせることが必要．展示効果の検証と次の展示テーマの設定作業に生かすべきである．

常設展示は，頻繁な展示変更で，博物館の最大の機能が「展示」を通した情報発信であることの説得に，積極的に戦略的に活用してほしい．

大学博物館の性格上からも，内容が研究・専門的に傾き，入場者数や一般 PR にはな

じまない「専門学界」的な展示も必要である．

学内外に博物館の存在をアピールするためにも，スペースの問題はあるかもしれないが，箱崎キャンパスを可能な限り利用した展示の展開も必要．

ボランティアを活用した展示解説は，ボランティアの育成，博物館サポータ増強を図る上で有効．展示室ガイドマップの配布，スタンプラリーなどの工夫も必要．

C．開　示―情報発信　　評価平均 B(4.2)

ホームページは，広報メディア，収蔵物に関する検索と解説として機能をしてきた．インターネット博物館，標本資料データベースは，更新速度の改善や，所蔵標本データベースの画像データの増加，国際対応などより一層の内容の充実と教材としてのサイト機能を備えるよう努力が必要である．展示，連携事業，学芸員資格，英文ページなどの部分のさらなるコンテンツの充実が望まれる．

概要および新聞等による報道については委員の評価が大きく分かれた．概要は，大学博物館を外部に知らせるために一定の役割を果たしているが，内容，レイアウトに一層の工夫が必要である．

ニュースは，ホームペーにもバックナンバーを含めて掲載し，インターネットアクセスを可能にすると良い．

研究報告は，国際水準の学術出版が拾い切れない地道な研究論文やボリュームの大きい記事を載せていく報告集としての意義があり，要旨を英文化するなど工夫が必要である．

年報は，博物館運営に関する事業報告，博物館活動の成果や評価も盛り込み，自己点検や外部評価の資料として使えるように作っておくとよい．

マスコミは良い意味でもっと活用し，積極的に連携することが必要．記者クラブへの記事の投げ込み，定期的な記者懇談会なども効果的である．

D．研　究　　評価平均 C(3.4)

３系の研究について，現実にどの程度即したものになっているか議論が必要である．将来，博物館の建物が完成した暁には系としての研究が重要となる．

博物館こそ縦割りを無くし，学際的な研究のできる場所で，学内外の模範となるべき立場にある．共同研究の理念づくりを十分に行い，博物館として求められる研究の内容（展示や教育なども含めて）の実施を期待する．

P&P 研究については，地域を巻き込んだ活動につなげていくなど参加者増を図ること，アウトリーチ活動やツール開発についての成果を示すなど工夫が必要である．

学会を大学博物館の存在や必要性を発信する手段に活用し，会場の積極的な提供と学会活動の主導的運営への参画及び活性化の促進に貢献すべきである．

大学博物館教員の専門分野の研究は，一般市民が興味を持つ部分が少なくない．論文，修士論文要旨，学会講演要旨などを PDF で公開すべきである．

E．教　育　　評価平均 B(4.0)

学芸員資格関係科目の教育について，開講部局の教員の協力を求めるべきである．

学芸員の養成では，一般博物館に求められる学芸員の資質を高める授業，指導体制が必要であり，博物館の現場を知る教員がいて，実習先とも連携，情報交流が深まるよう努力することが望まれる．

大学院教育・学部教育については，協力講座や兼担を駆使して少しでも多くの教員が参加し，学生の出入りを拡大していくことを期待する．

リアルな実物を見せ･触らせ，五感で感じさせる博物館ならではの教育を行うために，標本や資料の所在や内容を整理し，教育への利便が図れる体制を整えるべきである．

教育支援は，今後とも博物館のスペース等施設・設備，情報と人的体制を整えて，一層充実させていくことが望まれる．

教育「支援」については，教育連携もしくは教育融合として，博物館側も教育の対象者から学び，得るもとがあるという意識をもつことが重要である．

社会教育・学校外教育への貢献については，福岡市，福岡県の教育委員会と連携し，小中学校教員向けの研修講座において，教育と研究の繋がりをつくるべきである．また，教育委員会のほかに，博物館・科学館等のレベルで，利用・活用する方法も検討できるのではないか．ボランティア等を含めた人的ネットワークを確保し，学校が入りやすいプログラムの提案をしてはどうか．

F．学内他部局との連携　　評価平均 B(3.9)

大学は学部ごとに縦割りの面が強いが，総合博物館は横軸方向の連携を進める役割を果たすべきである．

展示企画等を通じて蓄積した情報発信や，サイエンスコミュニケーションについてのノウハウを生かすソフト面での工夫が望まれる．

全学委員会に参加し，新キャンパス移転を機に博物館の重要性を全学に認識してもらう努力をすべきである．

G．他博物館などとの連携　　評価平均 B(3.8)

大学博物館等協議会に積極的に参加し，大学博物館とはどうあるべきかを，他の大学博物館との連携・情報交換を通じて考えていることは評価できる．博物科学会には基本的には全教員が参加ないし発表を行い，学会組織を守り立てる中心的な役割を担う姿勢が必要．

外部との連携には引き続き多様な可能性を探っていくべきである．一方，一般博物館との連携もすすめ，一般の利用に供する博物館である意識も高めて欲しい．

地域の博物館との連携は，単に「貸しホール」として利用するのではなく，それぞれの館の特徴・機能を利用・活用するべきであり，展示や教育といった機能を実験し，学ぶ場（大学博物館の活動を発信する場），学生･院生のコミュニケーション力鍛錬の場，大学ならでの情報発信の試みの実験場として，今後も緊密に連携を進めるべきである．

少年科学文化会館との連携は概ね高い評価を得たが，社会教育の水準に関して，自由

な博物館表現が達成されているかどうかを常に真剣に自問することの必要性が指摘された.

H. 社会貢献・教育普及活動　　評価平均 B(3.8)

大学博物館は社会貢献をどうすべきかという議論を常に行いながら，コミュニケーションの双方向性に留意しながら事業を実施すべきである.

講演会は，年１回程度の大規模のものとともに，より頻繁に小規模な講演会を開催することで，ファン層をつくりだせるのではないか．他の博物館・科学館等との連携により，より広範囲に，地の利，広報の利を得られるのではないか.

談話会（セミナー）は教員相互の間の意志疎通にも役立つ．回数をより頻繁化し，教員会議の前後に設定するなどの工夫も必要である.

大学が位置する糸島地区の理解や協力を得るためには，博物館の機能が重要になる．しかし糸島と箱崎両方の住民に対する貢献とサポータ確保が必要であり,「九州大学」は，過度に地域に偏ることなく，より広域を対象にする方向を目指すべきでもある.

博物館が地域のフィールドを活用した教育事業を行なうことは重要であるが，費用，労力，時間ほか負荷が大であり，他組織・団体，ボランティア等とのネットワークを作り，その力を活用していくなど，実施形式の工夫が必要である.

I. 国際連携　　評価平均 C(3.1)

個々の研究者の海外研究者との共同研究や交流は，ある程度行われているが，博物館間の展示交流，研究交流も考える必要がある.

外国人研究者の受け入れが，大学博物館としては少ない．増加のために，魅力的な招聘計画を起案するなどの工夫が必要であり，外部資金或いは館内予算のプール等の手法で予算確保を行い，館全体として招聘計画を立案・実施することにより，定常的な外国人研究者の招聘の実現を図ることが肝要である.

九州大学にはアジア地区をはじめ多くの国の留学生が学んでいる．これら留学生が大学博物館を頻繁に訪れて楽しみ，学び，博物館活動を支援する仕組みを工夫するべきである.

Ⅲ. 管理・運営

A. 管理運営の理念　　評価平均 B(4.0)

館長のリーダーシップのもとに，館の構成員全員の意志疎通を図り，博物館のアイデンティティと使命感を認知して，経営主義・市場原理・説明責任に破壊されない運営理念を持つべきである.

受身ではなく，主体的な管理運営の理念を強く内外に打ち出し，主導的に進める必要がある.

B. 管理運営体制　　評価平均 B(3.6)

博物館のビジョンの実現，館の宣伝のためには，館長には，活動力と指導力に長けた

マネージメントだけでなく，対外的な顔として動ける人材を充て，館長の任期をもっと長くすべきである．

大学博物館は小部局であるため，独自の事務系を持っていないが，仕事の特異性から専任の事務組織を持つべきであり，本部事務局と密接に連携の取れる体制の確立が望まれる．特に，新キャンパスへの博物館の設置の重要な局面を迎えており，十分な要員の確保と体制の確立が望まれる．

C．教員組織と人事　　評価平均 B(3.7)

博物館機能を高めるためには，他部局との人事交流を行い，増員を勝ち取る努力が必要である．

無駄な事務仕事を増やさないように，配置の操作よりも増員を看板に掲げ，博物館機能を高めるためには，展示，教育，情報などのエキスパート（博物館の現職員も視野に）も教員に迎えたい．

問題が山積みしている中で，スタッフ数が絶対的に不足している．学内運用定員の確保に努めることも必要．ボランティア等外部からのバックアップ員を検討できないか．

資料部，フィールド・ミュージアム部が組織をつくっただけに終わらず，博物館とともに活動していくことが大切である．

既にボランティアを導入している大学博物館に学び，博物館の素晴らしさを知ってもらい，口コミで大学を外とつなぐパイプ役をやってもらうという努力をすべきである．

今後とも教員選考規則に基づく公明正大な選考が行われるべきである．博物館に特化した教員の選考には，従来の教員採用基準とは異なる選考方法について模索することも必要である．分野のバランスや不足分野を視野に入れた人事選考に加えて，学内運用定員の確保にも積極的に努めて，マンパワーを増やす努力すべきである．

D．財　政　　評価平均 B(3.6)

運営交付金と学内配分により一定の予算の確保ができているが，部局の努力には限度があり，高い理念に基づく大学の一層の支援が望まれる．

博物館建設資金を外部に求めるためには，大学を挙げて民間の評価を得る努力を内外に対してすべきである．

大学博物館の活動資金は，競争的資金や寄付金など館の仕事を理解する人や仕組みから受け取るべきであり，標本分析の業務化など営利化を図るべきではない．

Ⅳ．施設・設備

A．施設の状況　　評価平均 C-D(2.5)

部局として最大限の努力を講じているものの，九州大学としての支援体制があまりにも貧困である．現状は最低限必要な施設の要因を満たしていない．

収蔵庫の拡大がないままに博物館を続けることはあり得ない．収蔵スペースの現状は不十分であり，各部局の移転に実施に伴う収蔵標本増加の見込みを考慮すると，可能な

限り現時点でスペース確保作業と収蔵整理作業を進めておく必要がある．標本を所有している部局と協力し，その支援を得て，速やかに収蔵庫の獲得・拡大を画るべきである．

現時点で可能な施設・スペースの利活用も積極的に行うべきである．現状では改修などが見込まれず，劣悪な環境と言わざるを得ないが，工夫次第では有効な利活用が可能である．今後もあきらめずに可能な改善に努めてほしい．

現在の収蔵庫を含む施設の状況は，標本収蔵室が分散しており，温度・湿度環境管理も十分に考慮されていないことから，収蔵や維持・管理の点では劣悪と言わざるを得ない．このままでは，貴重な標本の維持が危ぶまれる．この点を強く大学当局に訴え，最低限の標本収蔵管理環境を整え，計画的に施設の整備を行うべきである．収蔵標本予定量を早急に調査・収録し，将来収蔵計画を迅速に作成して，総長サイドへの申し入れをすべきである．

標本庫は，単に保管庫の役割を果たすだけではなく，保管資料が展示や教育に活用されるように努めるべきである．

移転等の特殊事情下であっても，将来資料の収蔵保全，利活用，情報発信を集中的に担える博物館の建設が不可避である．

B. 設備の状況　　評価平均 C(3.2)

博物館らしい長期的視野にたった標本資料を活かす設備要求を欠かさないよう期待したい．大学の所蔵する学術資料の中で特に重要なものを国や県の文化財に指定してもらい，大学上層部に価値の認識と活用の必要性を考えてもらうべきではないか．

C. 新キャンパス計画　　評価平均 B(3.7)

博物館が地図上にプロットされても，学内の無理解や阻害要因が絶えないことが予見され，絵に描いた餅に終わらないように，最大限の努力をお願いしたい．「大学の顔」となるべき博物館をより重要視するよう学内に訴求するとともに，学外からの応援圧力も受けられるよう努力する必要がある．

現在，大学博物館が使用している面積は常設展示室，標本庫，研究室，第 1 分館，第 2 分館など併せて 4000 ㎡弱である．10 年後に箱崎キャンパスがなくなるときまでに，九州大学が持つ 750 万点以上の学術資料を収蔵し，整理し，教育と研究に活用するための十分な面積を持った建物を確保する必要がある．

大学博物館に対する学内外の理解と支援を得るために，理念と水準に十分に気を配り，施設の獲得に向けた最大限の努力が必要である．

V．将来構想・将来計画

A. 将来計画　　評価平均 B-C(3.5)

将来計画に関しては委員の評価が大きく分かれた．評価は概してあまり高くなく，今後さらに検討を要する．

将来計画では，公開展示や社会貢献が目立つ．大学博物館の本質が学術研究に根ざす

ことをより重んじ，研究で世界をリードする博物館像を打ち出す必要がある．

新キャンパスへの移転後の新博物館のイメージ・ビジョンを明確に打ち出し，それに向けての活動計画を立てる必要がある．大学研究博物館としての具体的な基本構想を大胆に打ち出し学内外の理解を得る努力を積極的する必要がある．博物館移転事業が，オール九大の観点で全学的に進められるような機運を盛り上げるような施策を行う必要がある．

大学博物館が大学だけのものではなく，社会の大学への要望を受け取る窓口であり，地域住民の生涯教育を支援する組織でもあることを意識すべきである．

大学博物館は，地域連携の窓口であり，学生のリクルートなど大学のショーウィンドウの機能を持つことからも，館建設には全学の支援が必要である．

B. 事業部構想　　評価平均 C(2.7)

事業部構想については委員の評価がかなり大きく割れ，概して評価は低かった．

事業部が，事業と研究を一体とする大学の研究者の仕事の場か，博物館で働く教員を助ける企画・管理・運営をする場か十分に議論する必要がある．

博物館の事業に協力してもらえる教員の名前と専門分野のリストを作り，博物館がそれらの教員と日ごろからコミュニケーションを執っていることが重要である．

VI. 中期目標・中期計画

A. 教育に関する目標　　評価平均 B(3.8)　[A, B, D, B]

博物館教育は，博物館教員の本務である．本務に差し支えない範囲で行う他部局の専門教育への協力との関係は，常に博物館内で議論され，認識を共有すべきである．

博物館が行う講義・実習にも館の独自性を込め，将来の協力者，支援者を養成する視点も持つ必要がある．

B. 研究に関する目標　　評価平均 B(3.6)

大学博物館が，博物館としての社会機能を果たすためには，博物館に特有の研究（展示学や博物館教育，社会連携など）ができる体制をつくることも必要である．

総合研究博物館が雑多な分野の寄せ集めでなく，真に総合的研究の場となるための努力が必要である．

C. その他の目標　　評価平均 B(3.8)

博物館活動を左右するボランティアの活用計画があまり見えない．ボランティア制度の導入は，単に「労働力」として期待するのではなく，生涯学習，社会貢献を目指す一般の人を受け入れ，育成する一つの博物館機能として位置づける必要がある．

博物館は基本的には博物館利用者のためにあり，展示や地域連携を通して，多くの方に来てもらい，利用される博物館作りと運営を心がけるべきである．

博物館全体としての国際連携，国際共同研究の展開がほしい．

Ⅶ. 点検評価

A. 平成 16 年度実施の自己点検・評価　　評価平均 B(4.0)

自己点検・評価委員は博物館運営委員から選出された人々で構成されている．点検・評価の成果を今後の新博物館構想の礎として生かすことが重要である．

一層の発展を期するため，点検・評価委員を増やし，幅広い角度からより厳しい点検評価を受ける必要がある．

B. 平成 17 年度実施の外部評価　　評価平均 B(4.0)

外部評価委員は，学外の幅広い分野の人々で構成されている．外部評価の成果を今後の新博物館構想の礎として生かす必要がある．

一層の発展を期するため，評価委員を増やし，幅広い角度からより厳しい点検評価を受ける必要がある．

C. 平成２２年度自己点検・評価　　評価平均 B(3.8)

自己点検・評価は制度として定着してきている．建設的な批判により真に大学博物館が良くなるための点検を目指すべきである．

自己点検・評価委員が少なすぎる．委員の人数，分野について検討すべきである．

今回の自己点検・評価報告書の内容を博物館は真摯に受け止め，博物館の改善に生かすよう努めるべきである．

第２部　外部評価本文

外部評価本文

外部評価委員の評価がC-D(2.5)乃至はC(2.6～3.4)と低かった項目は以下の通りである．大学博物館をより一層良いものとするために，今後，館内で活動の必要性の見直しや取り組み方法・体制，情報の公開方法等について検討し，課題の克服と活動に対する社会の理解へ向けた取り組みを行う必要がある．特に博物館活動では，（１）社会教育・学校外教育への貢献，（２）海外研究者との交流・共同研究，（３）外国人研究者の受け入れへの積極的な取り組みが要請された．管理・運営では，（４）移転へ向けて早急な事務体制の整備が望まれ，（５）教員の配置に関しても，館内で将来を見据えた検討と合意の形成が必要であることが指摘された．施設・設備に関しては，（６）大学の移転が進行中であるとはいえ，全国一の規模を誇る標本資料を収蔵し，整理し，教育と研究への活用を支援するためには相応の施設と設備が必要であることを学内外に訴え，大学当局の理解と支援の下に，全学が一体となって博物館建設を推進する機運を盛り上げることの重要性が指摘された．将来構想・将来計画に関しては，事業部構想について評価委員の判断が大きく分かれた．（７）移転を間直に控えた現在，事業部構想よりも優先させるべき活動にエネルギーを傾注すべきであるという指摘に対して館内で検討を行い，今後の活動方針を決める必要がある．

低い評価Ｃ(＜3.4)を受けた項目

Ⅱ．博物館活動

　Ｄ－①系の研究，Ｄ－②共同研究

　Ｅ－⑤社会教育・学校外教育への貢献

　Ｇ－②他博物館等との連携－福岡市博物館

　Ｈ－②コミュニケーションミュージアム事業

　Ｉ－①海外研究者との交流・共同研究，Ｉ－②外国人研究者の受け入れ

Ⅲ．管理・運営

　Ｂ－②事務体制

　Ｃ－①教員の配置

　Ｄ－②外部資金

Ⅳ．施設・設備

　Ａ施設の状況

　Ｂ設備の状況

Ⅴ．将来構想・将来計画

　Ｂ事業部構想

他の項目は何れもＢランクであったが，その中で比較的高い評価(＞4.0)を得たものは以下の通りである．これらは更に改善を重ねて，九州大学総合研究博物館の特色として充実

を図るとともに，より一層大学博物館の使命・役割を効率的に果たすように努力すべきである．

比較的高い評価Ｂ(＞4.0)を受けた項目

Ⅱ．博物館活動

Ａ－③（標本の）受贈

Ｂ－⑥第１分館展示

Ｃ－①ホームページ，Ｃ－②インターネット博物館，Ｃ－④出版・広報

Ｅ－①学芸員資格関連授業・実習，Ｅ－②大学院教育，Ｅ－③学部教育，Ｅ－④教育支援

Ｆ－②全学委員会などへの参画

Ｇ－③（他博物館等との連携）福岡市少年科学文化会館

各委員の意見と評価

Ⅰ．活動の理念と目標　　評価平均Ｂ(4.3)　[A, B, B, B, B, A, B, B]

・遠藤：粗暴な行革主義に疲弊することなく，腰を落ち着けて世界に誇れる面白い研究の実現を目指し続けてほしい．社会貢献に関しては博物館の自律的創造・表現の場でなければならない．他方で総務的な PR・広報機能を館に背負わせる風潮が学内に感じ取られ，九大総体として博物館をより深い思慮をもって守り育てるべきであると考えられた．

・高田：記述内容は総花的で，大学博物館のあるべき姿を述べているように見える．一方で，学術資料の保存，保管に力点を置きすぎ，それらの博物館（社会教育機関）としての活用を前提としていない印象がある．各研究者の「資料倉庫」の整備をするわけではないことの自覚が必要．「博物館行き」という言葉が生まれた温床のような気がする．

・瀬戸：学術標本の有効活用を図るための大学組織としての役割と，大学と社会との接点・窓口（社会貢献等）としての役割を認識して，着実に遂行されている．

・田中：学内外の教育，研究の支援について詳しく知りたい．

・伊藤：大学における研究博物館の大きな使命は，長年にわたり蓄積されてきた学術標本資料，教育資料とそれらを集中的に整理，適切な環境のもとに保管し，学内外の研究・教育に供することである．この点は明記されてはいるが，新キャンパスへの移転に伴い散逸，廃棄される危惧のある資料の収集・保管が十分なされているかが疑問．

・大木：文の内容が一般的に見えるので，（自己点検評価報告書）p. 61 の将来計画の中に示されている九州大学の学術標本についての基本的認識の文を入れてはいかがか．

・島田：九州大学には教育憲章，学術憲章（知の探求と創造・展開の拠点）があり，また学部単位でも学部憲章，アドミッション・ポリシー等があり，それらはＨＰや掲示などの方法で学内外に公表されている．その点からいえば，UM においても活動の理念と目

標は何らかの形で公開した方が良い．そうすれば，一般市民（アウトサイダー）が外部から点検や評価をやるうえで，判断基準がより明確になる．

・大野：建物が完備しない現状では，場としてより，機能面を，将来場ができた場合に備えたネットワークづくりにも留意されたい．

・黒木：大学博物館として，国立・公立博物館との違いをより明確にすべきと思う．

・松枝：大学博物館は，大学のアクティビティを外へ向けて紹介する使命がある．一方，学術的に研究された貴重な標本からは，新しい装置・設備を使えば，また，新しい情報が出てくる．物にこだわる点で，大学博物館は重要な役割を持っているが，それをいかにして学内に周知させるかという工夫が必要．理念に留まっている嫌いがあり，短期的・長期的両面から実現を見据えたものがほしい．

・上別府：外の人間には九大の博物館のイメージが全く整理しきれていない．大学博物館は，先ず外部とどう接触するかということを理念の中に具体性を持たせた方がいい．

・雪田：九州大学は単科大学ではなく，ユニバーシティである．ユニバーシティの博物館，九大でなければならないこと，それは何なのかということをもう一度考えてもらいたい．

古くからある総合大学には，沢山の学術資料が残っている．それを生かして教育を行い，次世代を作ることで社会貢献することが大前提である．

博物館の理念を学内へどのように周知するか工夫が必要．単に理念に留まらず，短期的・長期的実現を見据えたものにすべきである．

理念は総花的で，大学博物館のあるべき姿を述べているように見える．一方で，学術資料の保存，保管に力点を置きすぎ，社会教育機関としての博物館の活用を前提としていない印象がある．

大学博物館が外部とどう接触するかということを理念の中で具体的に述べるべきである．

大学博物館の役割には，大学組織としての面と社会との接点としての面がある．大学のアクティビティを外へ向けて紹介する使命があるが，社会貢献に関しては博物館の自律的創造・表現の場でなければならない．

大学博物館の理念と目標を何らかの形で公開し，学内外の理解を得る努力を行うとともに，常にいろいろな形と角度で批評されていなければならない．

Ⅱ．博物館活動

A．学術標本の収蔵管理

A－①．標本調査と収集　　**評価平均 B(4.2)**　[A, B, B, A, C]

・遠藤：最も重要な基礎的活動の一つとして現状の努力を高く評価する．

・高田：各教員，各研究者としては，限られた時間，要員，予算の中でよく努力していると思われる．一方で，博物館展示や教育利用を想定した調査，収集であるかが疑問．

・牛尾：標本を博物館に収集するだけでなく，特に貴重種等については，現地での保全に努めることも意識すべきではないか（「現地標本」の考え方）．（因みに「西区まるごと博物館推進会」ではこれを強く意識して活動している．）また，本館プロパーの土地等を確保し，これらの保全・育成を図ることも考慮できないか（[生きた標本] の考え方）．
・大木：調査と収集を行うのは博物館スタッフだけなのか．学際的な研究を目指しているのであれば，他部局の教員への働きかけはないのか．
・島田：専任教員だけで出来る仕事ではないことから，学術標本の管理，運用にあたる資料部が置かれ，全学的な組織による活動が行われている点は評価できる．
・大野：学内他部局の研究者との連携，収集のアシストなど将来的には必要か．
・松枝：海外との交流協定を促進するなどの視点による活動の展開が望ましい．館外及び海外との連携による積極的な調査・収集活動が必要．

A－②．移　管　　**評価平均 B(4.0)**　[A, C, B, A, C]

・遠藤：質の高いコレクションの移管に尽力していると推察された．
・高田：限られた収蔵スペースの中での移管作業は困難な状況にあると見受ける．今後の博物館開設に向け，展示物の収蔵機能としても充実した体制を望みたい．
・伊藤：貯蔵スペースの確保に努力し，キャンパス移転に伴う貴重な資料の散逸や廃棄を極力抑える必要がある．一度失ったものは２度と入手できない．資料部全体による調査と整理のシステムが必要．
・牛尾：何もかも博物館に集中するのではなく，各部局での使用頻度が高いもの，収集直後でまだ十分研究・吟味されていないもの等は，各部局に収蔵・管理を任せるほうが現実的ではないか．ただ，博物館はデータベース化しておく必要はあろう．
・大木：学術標本の移管，受贈，貸出，閲覧は過去５年間にどの程度行われたのか，報告書にも「データを添付されたい」と書いていますが，データが示されていないと評価ができないと思います．
・島田：学術標本の移管実績は，自己点検・評価報告書（p. 71）にあり，過去５年間で５点が書かれている．その中には，六本松キャンパスにあった「玉泉館資料」という九大が誇れる貴重な考古学資料があり，一般公開が待たれる．この資料は，かっては九大入学時に渡されたパンフレットには詳しく記述されていたと思う．
・大野：制約有る中での努力は評価される．移転と博物館新建物建設までの端境期に九大の貴重標本の保全に全力を尽くしていただきたい．
・松枝：収集・保管場所の集約とスペース確保を行い，一元管理化の積極的な試みが必要．移転計画が必ずしも順調でないことに加え，スタッフ，スペース，予算等の制約があるとは思うが，能動的な強い意志と活動が無ければ実現が難しい．このような問題をどのように解決するかの工夫や，関係各部局に対する積極的な提案が必要ではないか．前回の外部評価以降，どのくらい進行したかが見えない．

A－③．受　贈　　**評価平均 B(4.2)**　[A, C, B, A, B]

・遠藤：量的にはおそらくさらなる可能性があろうが，狭い収蔵スペースに対して，努力の度合いは大きい．

・高田：十分な収蔵環境がないため，本来ならば九大に収蔵されるべき資料が，他の施設に寄贈されている可能性もある．

・牛尾：十分審議後に受け入れが決定されているとは思うが，一般的に寄贈申し出者への慮りや将来の利用可能性の観点から断るケースは少ないきらいがあるようである．スペースや保管・管理の負担軽減の観点からも，重複資料や利用価値が低いものは思い切って謝絶する必要もあろう．ただ，本館にとって不要，或いは低価値のものであっても，他館や他学校ではそうでないケースもあろうから，紹介や斡旋を考えるべきであろう．

・島田：学術標本の移管実績は，自己点検・評価報告書（p.　71～72）に書かれているが，その数量の多さに驚かされる．受け入れ作業，受け入れ場所，費用などで多くの問題があるだろうことは十分理解できる．それでも，学外からの貴重な標本資料を今後も進めるべきとの自己点検・評価報告書の姿勢（p.　3）は評価できる．

・大野：多岐にわたる貴重資料や文献コレクション等の収集・受贈は評価できる．東大からの受贈は，貴館の質に信頼なしにはなかっただろう．

・松枝：収集・保管場所の確保を行い，受入れ体制の明確化と公開により，さらに促進が可能であろう．

A－④．貸出し　　**評価平均 B(4.0)**　[B, B, B, B]

・遠藤：妥当な貢献が行われているものと推察された．博物館は貸衣装業と同列に振る舞う必要は毛頭なく，今後も相手の理念を吟味して良質な貸し出しに努めるべきである．

・高田：貸し出し事例はあるようだが，依頼があった場合のその業務体制，系統的な保管が整っていないことから，十分な機能が果たせていない．

・牛尾：資料の重要度に応じて事前にランク付けしておき，貸出不可，条件付き貸出，即貸出可，貸出期間等の区分を設定・表示しておくのがベターではないか．紛失・破損等の危惧は分かるが，総じて本館の現行のルールは硬直的で柔軟性に欠ける気がする．

・島田：学術資料の貸出しは，UM の理念（標本及びデータの多角的・効率的有効活用）からも重要な任務であり，貸し出しのための手続き方法が要項（p.　73）として定められている．資料の貸与や写真掲載の希望（許可申請）は年々増えつつある（P.　20）と記されていて，貸し出しのための体制整備が課題と書かれているが，人手と予算を伴う問題なので簡単に解決できる問題ではないだろう．

・大野：おおむね良好．骨格標本の扱いは，尊厳についての社会の意識の高まりに対応した見識有る運用が一層望まれる．

・松枝：貸出実績データを明確に示すべきである．データベース化と公開の促進で，貸出

業務の促進を図ることが必要.

A－⑤. 閲　覧　　**評価平均 B(3.8)**　[B, B, B, B, C]

・遠藤：特筆される研究教育実績に結び付いているという印象はないが，地道に継続してほしい.

・高田：貸し出し同様に，依頼があった際の業務体制の充実が望まれる.

・牛尾：資料の重要度に応じて事前にランク付けしておき，貸出不可，条件付き貸出，即貸出可，貸出期間等の区分を設定・表示しておくのがベターではないか．紛失・破損等の危惧は分かるが，総じて本館の現行のルールは硬直的で柔軟性に欠ける気がする.

・島田：学術資料の閲覧は，UM の理念（標本及びデータの多角的・効率的有効活用）からも重要であり，閲覧要項（p. 76）として定められている．ただし，閲覧希望の実績が不明なのでコメントできない.

・松枝：閲覧実績データを明示すべきである．データベース化の促進により，さらに活性化が進むと思われる.

A－⑥. 標本整理・データベース化　　**評価平均 B(3.8)**　[A, B, C, C]

・牛尾：膨大な量の資料の整理，大変な作業と推測する．長年にわたり収集・蓄積されてきたこのような資料は，えてして記録が的確に行われていないものもあろうかと思われるが，新キャンパスへの移転は良い機会であろうから，取捨選択も含めて，再整理とデータベース化を期待したい．なお，負担軽減のためにも単純インプット作業等については，外部委託も考えてよいのではないか.

・大木：ホームページで公表している「所蔵標本データベース」は素晴らしが，確かに移転に向かって標本の整理・登録を急ぐ必要がある.

・島田：学内での予算措置についての具体的な資料（p. 21）から，実績が良く理解できる．標本の多角的・効率的活用に不可欠なものは，標本整理とデータベースの構築であり，その現状はＨＰで見ることができ，年々更新されていることは高く評価できる.

・大野：量的には，適正に進捗．ただし，空項目が多いものもある．HP からの検索のインターフェースに工夫必要.

・松枝：画像データが少なく，検索が少しし辛い．近未来的な移転計画を見据えて，収蔵標本の全容把握とスペース確保のために，早期のデータベース化と公開が急がれる．データベースの公開により，学内の理解も得られやすくなる.

委員の評価に大きなバラツキはなかった.

移転と博物館新建物建設までの端境期に，貴重な資料の散逸や廃棄を極力抑え，保全に全力を尽くすべきである．そのためには，能動的な強い意志をもって活動を行い，資料部全体による調査と整理のシステムを充実させるとともに，関係各部局に対する積極的な提

案が必要である．

資料の収集，学内資料の移管，学外からの寄贈の受入れには十分なスペースが必要である．保管場所の集約，スペース確保，一元管理化を積極的に進めながら，今後も教育・研究のための貴重な資料の収集・移管・受入れに努めるべきである．

学内に散在する資料の調査は，博物館の基礎的活動であり，重要である．収蔵管理の面からだけでなく，博物館展示，教育利用の面からの調査・収集も考えるべきである．

標本調査が博物館スタッフだけで行われるのではなく，資料部の兼任教員の協力を得て全学的に行われていることは評価できる．

館外，海外との連携による調査・収集活動が必要である．

移管に関する博物館内の意見が統一されていない．館の方針を明確にして作業を進めるべきである．

標本の閲覧・貸出しは博物館の重要な業務の一つであり，要綱に則って地道に継続するとともに，実績を年報等に記載して，外部から評価できるようにすべきである．

大学の移転に向かって，収蔵標本の全容把握とスペース確保のために整理・登録作業を急ぐ必要がある．

標本の活用には，整理・データベース化が不可欠であり，一層作業を進める必要がある．近未来的な移転計画を見据えて，収蔵標本の全容把握とスペース確保のために，早期のデータベース化と公開が急がれる．

単純な入力作業への外部委託の導入，ホームページからの検索へのインターフェースの導入など工夫する必要がある．

B. 開示―展示

B－①．公開展示　　**評価平均 B(4.0)**　[B, B, B, B, B, A, C]

・遠藤：量的には飽和していてこれ以上を望まない．それよりも，大学の公開展示が自由な学術表現の場となり得ているかどうかを点検して欲しい．衆愚に媚びる仕事は，巷の市場原理的展覧会に任せるべきで，館の公開展示はつねに学術による創造的な挑戦として位置付けられていなければならない．

・高田：限られた人数で，学生も動員して回数もこなしているが，2 万人の見学者数は，単に開催館における展示期間中の入館者数の累計*であり，展示内容の評価の指標にするには無理がある．アンケート調査などで展示評価も必要．また展示専門職が不在も難点．(*実際に大学博物館が展示している部屋への入場者数)

・瀬戸：あえて一般向けの展示を行っていることは評価できる．新館建設に当たっては，大学として玄人受けする展示は根本であるが，両方のバランスを考慮する必要がある．

・田中：入場者からどのような反応があったのかを知りたい．

・牛尾：教育・研究の内容や成果を紹介し，社会の理解と協力を求めたいとの意図は理解できるが，大学博物館本来の性格上，それほど一般受けするテーマ，規模，場所に拘ら

なくとも良いのではないか．また，ために入場者数もそれほど気にすることはないのではないか．あまりこれらのことにウェイトを置くと，計画決定が一層困難化するのではないか．公開・展示を主目的とする他の博物館等と競争意識（？）を過度に持つことは，本博物館の独自性を失することになり，また，スタッフの物理的・精神的負担も過大になることが危惧される．

・大木：「公開」「特別」「サテライト」「常設」「平常」「第一分館」の展示の名前，内容を整理されることをお勧めします．各部局が中心になって展示することは素晴らしいと思います．学外の博物館との住み分けは考えておられますか．

・松枝：

B－②．特別展示　　**評価平均 B(3.6)**　[B, C, B, B, C]

・遠藤：量的には十分である．来館者数を評価するという価値観があるならば撤回するべきである．大学博物館の責任は集客力をもって表現・評価されるべきではない．報告に「分かりやすく展示した」とあるのも危惧される．大学博物館の展示が，標準的分かりやすさを標榜することは，展示表現の自殺に等しい．

・高田：展示内容は充実しているように見受けるが，広報に関しては，学内だけでなく一般へのＰＲやメディアの活用が不十分なため，多くの見学者に利用されていないのが残念である．また利用者のアンケートなども実施しての評価も望みたい．

・田中：入場者からどのような反応があったのかを知りたい．

・牛尾：大学博物館の性格上からも，本展示によりウェイトを持つべきだと思う．内容が研究・専門的に傾くものであるから，入場者数や一般 PR には本来なじまないものであり，「専門学界」的なもので十分ではないか．ために，本展示は，該当の部局がメインにかかわるべきで，博物館はサブでその支えをすればよいのでは，とも思われる．

・大木：入場者数が書かれていないものがあります．アンケートは重要だと思いますが行っているのでしょうか．来場者調査は「わくわくどきどき化石のヒミツ」展のみなのでしょうか．

・大野：「空と海ののりもの展」など多数の協力企業団体が入り，社会連携の良さを示唆．相手館の性格にあわせるだけでなく実験も必要．

B－③．サテライト展示・その他の展示　　**評価平均 B-C(3.5)**　[C, C, B, B, B, C]

・遠藤：館が敷地外での展示に力を入れているのは周知されているが，なぜ離れた場所まで出ていくのかを自問して欲しい．現状の企画の質は，内装企業の手で完結できるイベントにとどまっていないだろうか．

・高田：空港は頻繁に利用しているが，そこでこのようなすばらしい展示が，何度も開催されていることは知らなかった．そのほかの開催地の情報も地域の方にどれほど浸透しているのか疑問．このことから，ＰＲが行き届いていないことが大きな要因かと思われ

る．継続するならば，戦略的，計画的な実施体制が望まれる．

・田中：入場者からどのような反応があったのかを知りたい．

・牛尾：本館の存在や活動を一般に周知するための手段として有効な展示と思われる．内容も，「一般受けする」，「身近な」，「子供にも楽しめる」等のものが多いようで今後も継続・拡大がベターであろう．しかし，これらのサテライト展示場がある施設そのものを含めて，認知度が今一つ低いのが残念であり，これらの施設を保有・管理する行政当局ともタイアップして改善に努める必要が感じられる．展示の準備や展示換えに伴う労力については，興味を惹きやすい展示物を選択し，期間も長くすること，施設スタッフやその地域のボランティアの協力を求めることが考えられる．なお，本展示は，近年盛り上がりを見せつつある各地域のイベントに臨時的に便乗することが，負担軽減，入場者確保，PR 等の面からも有効と思われる．

・大木：場所の提供があれば，可能な限りサテライト展示を行うべきだと思うが，労力，効果等を見極める必要がある．

・大野：空港ロビーなどにサテライトがあること羨ましい．サテライトを見て興味を持ったヒトが満足できる本館の早期建設・充実が望まれる．

B－④．常設展示　　**評価平均 B(3.8)**　[B, B, A, B, B, D]

・遠藤：標準的な展示にとどまっているといえると思うが，もっと展示を増やせというようなよくある指摘をする考えはない．それよりも，学内他部局に生じ得る展示に対する稚拙な批評や，表層的社会貢献を求める声に負けずに，高いセンスをもって，自由な表現の場を作っていってほしいと考える．

・高田：学内に常設展示の場所を確保したことは，今後の学内へのアピールに役立ったものと思われる．頻繁な展示変更で，積極的に戦略的に活用してほしい．博物館の最大の機能は「展示」を通した情報発信であることの説得に使っていただきたい．

・牛尾：他部局移転後のみならず，キャンパス自体の移転後も見据えたパイロット展示室として，あるべき機能を果たしているように思われる．展示物も専門的なものから子供たちの興味を惹くものまで，良く選択・配慮されている．が，建物・部屋とも如何にも権威ありげで，近づき難い印象を免れない．それに，狭い上に，休憩・寛ぎの場所が無い．今は仕方ないであろうが，新博物館はこれらの難点を払拭した親しみ易い雰囲気になることを期待したい．休憩室，喫茶室，簡易食堂等の付設が望まれる．

・大木：常設展示は大学博物館にとって非常に重要だと思います．アンケートを取っておられるのでしょうか．

・大野：静謐な空間にモノが並んでいるコンセプトは悪くない．演習などへの利用が始まっていることも評価できる．

B－⑤．平常展示　　**評価平均 B (3.6)**　[B, C, A, B, D]

・遠藤：手法と空間に元々限定要因が大きい中で，なかなかのアイデンティティの発散に挑んでいると感じられる．入館者数など気にせずに，つねに表現の豊かさに挑戦して頂きたい．
・高田：常設展とどこが異なるのか，機能的にどうすみ分けしているのかが不明．またこれもＰＲ不足ではないか．
・田中：常設展示と同じ展示でしょうか．資料が無く，評価できません．
・牛尾：学究・専門的なものと子供を含めて一般の興味を惹くもの，理科系のものと文科系のもの等が適当にミックスされて展示されており，本博物館の新キャンパス移転後のあるべき形を提示しているように思われる．その点で，常設展示と底流でつながっていると思われ，この二つの展示は新キャンパスでは一体化されるものであろうか．
・大野：外部者には，常設展示との区別がしにくい．また，期間が区切られていることも意味がわかりにくい．企画展示のこと？

Ｂ－⑥．第一分館展示　　**評価平均 B(4.4)**　[A, B, A, B, B]

・遠藤：いまある空間でできることを起案していく粘り強さを高く評価したい．施設的限界などを批判されても，力を落とさずに既存の場を活かす努力を続けてほしい．
・高田：学内に分散した多くの展示空間の機能すみ分け，計画的な活用，場の環境特性を活用した展示が必要．学生にも十分に認知されていないのでは．アンケート調査などの実施で効果測定をし，整理する必要．
・牛尾：本分館，特別収納・展示室として，また新キャンパスでの九大博物館外の招き資料等の展示室を設置することの示唆となるものかもしれない．
・大野：人骨展示については，尊厳を尊重する工夫が一層望まれる

いまある空間でできることを起案して様々な展示が行われていることは評価するが，展示の名称が複雑多岐で各種の展示の区分が第三者には分かりにくい．名称は，展示の機能・目的等によりシンプル且つ少数にした方が良い

展示全般について，展示目的，場所，見学方法などが来館者に十分わかるような PR が必要である．

集客力アップを図るためには，展示計画（年次計画，テーマ等）が必要．各展示の主担当者の明示が必要である．

アンケート調査などの実施で展示の効果を測定し整理するについては，結果の解析に客観性を持たせることが必要．展示効果の検証と次の展示テーマの設定作業に生かすべきである．

大学の公開展示が，自由な学術表現の場となっているか点検し，表現の豊かさに挑戦する必要がある．

常設展示は，頻繁な展示変更で，博物館の最大の機能が「展示」を通した情報発信であ

ることの説得に，積極的に戦略的に活用してほしい．

大学博物館の性格上からも，内容が研究・専門的に傾き，入場者数や一般 PR にはなじまない「専門学界」的な展示も必要である．

学内外に博物館の存在をアピールするためにも，スペースの問題はあるかもしれないが，箱崎キャンパスを可能な限り利用した展示の展開も必要．

ボランティアを活用した展示解説は，ボランティアの育成，博物館サポータ増強を図る上で有効．展示室ガイドマップの配布，スタンプラリーなどの工夫も必要．

サテライト展示は，当館の存在や活動を一般に周知するための手段として有効な展示ではあるが，サテライト展示等を継続するなら，労力，効果等を見極め，戦略的，計画的な実施体制が必要である．サテライト展示,「開かずの間」的展示は，展示効果を考えて閉鎖・集約などを考慮してはどうか．

C．開示―情報発信

C－①．ホームページ　　**評価平均 B(4.4)**　[B, A, B, A, B, A, B]

・遠藤：整備が続けられていると認識できる．引き続き妥当な運用を期待する．大切なのは，誰よりも新しい表現感覚でページを創造することだと思われる．

・高田：広報メディアとしての機能，また収蔵物に関する検索と解説として機能をしてきた．より一層の内容の充実と教材としてのサイト機能を備えてほしい．

・伊藤：良く出来ているが，展示，連携事業，学芸員資格，英文ページなどがまだ不十分である．

・牛尾：ネット活用による情報発信や PR に逸早く取り組み，大きな成果を得られていることは，大きく評価できる．

・大木：ホームページ，インターネット博物館，所蔵データベースのいずれも素晴らしいと思います．九州大学に「基盤情報研究センター」のような組織があれば，入力情報発信はそちらにお願いすることも業務軽減化につながるのではないでしょうか．

・島田：見やすく，内容も豊富で魅力である．

・雪田：デザインはかなり心地よい印象．だが，更新される個所が限定されている．調べものをしたくてクリックし続けると，結局何もたどりつかないことがある．人的な問題があることをうかがわせる．

・大野：ほぼ必要十分な内容が盛り込まれている．とりわけオンライン博物館は見ていて楽しく役に立つ．

・松枝：良く工夫されているが，更新速度の改善や英語版の充実など改善が必要．各施設のより詳細な紹介があれば，展示見学希望者が増加するのではないか．

C－②．インターネット博物館　　**評価平均 B(4.4)**　[C, A, A, A, B, A, B]

・遠藤：ウエブ上で無理に仕事を増やす必要もないと思いながら拝見している．あまり形式的に企画するのではなく，デジタルを道具にした自由な学問表現を理念から積み重ねてほしい．デジタル技術は，合理的とされる利便性だけでなく，人の思考を閉塞させ，真の自由を市場原理に埋没させる害悪を生む．そうしたことに対処して，博物館として最も大切な根幹の姿勢を築く姿を期待したい．
・高田：建物がない現状で，利用者が保管資料の情報を得るための最大の方法として機能するようにさらなるコンテンツの充実，システムの更新を続けていただきたい．
・伊藤：1998 年に開設以来，大変充実している．多くの人々に利用してもらうためにも外部からもアクセスできるように積極的に働きかける必要がある．
・牛尾：各展示の終了後もその内容等を Web ページを作成しフォローしていることは，実質的に時空を超えての公開であり，今後とも継続してほしい．
・島田：かつてインターネット博物館という名称であったが，今は“オンライン博物館”になっている．内容が年ごとに増えており，画像も美しく大いに楽しめる．アクセス件数がどの程度か，分かるなら教えて欲しい．
・雪田：興味をそそる内容となっており，Web ページに公開する試みはかなり評価できる．こうした試みを長い期間続けることができるよう，安定的にスタッフを確保してほしいと感じる．
・大野：オンライン博物館と同義か．学外者の総合研究博物館に対する興味を惹起するのに最適．
・松枝：ある程度充実しており，評価される．

C－③．所蔵標本データベース　　**評価平均 B(3.7)**　[A, B, C, B, C, B, C]

・遠藤：収蔵データに関してここまで頑張るというのは高く評価されるべきである．
・高田：学内の研究者，教員が同じフォーマットでデータを保存管理，利用できる体制の充実が求められる．ただこれを「博物館の最重要任務」と言い切るのはどうかと思う．大学博物館として重要なことはわかるが，研究者のためだけに博物館があるのではないことを，教員などはもっと自覚願いたい．
・伊藤：データベース構築は大変な作業であることはわかるが，博物館の中心的な任務であり，充実を望む．画像データが少なく，利用しにくい．
・牛尾：ネットも保有する大量かつ迅速な諸伝達機能を最大に活用し，さらなる充実を図っていってほしい．
・雪田：一般は，公開を望んでいる．しかし標本資料の整理とデータベース化に，かなりの時間が必要なのではと考える．移転に伴い，失われてしまう資料があるのではないかと心配になる．必要なら，ボランティアスタッフを募ることも検討してほしい．
・大野：徐々に充実しつつあるが，インターフェースに工夫が必要．
・松枝：さらなる学内標本の集約とデータベース化の促進が必要．画像データの増加，国

際対応を考える必要がある.

C－④. 出版・広報　　**評価平均 B(4.2)**　[B, B, B, B, A, B]

・遠藤：十分に評価できる活動だが，主体的自律的に，学者の生の「生きる姿」をこれからも出版にぶつけてほしい.

・高田：精力的に多くの出版物を残していることは業績を示す上でも評価できる．ただ，論文なのか, 一般向けの読み物なのかで読み手を意識した内容, 編集であるべきだろう.

・牛尾：それぞれの出版物，目的に応じ所期の目的を果たしているようであり喜ばしい．なお,「自然界のなかまたち」,「昆虫のヒミツ」,「化石のヒミツ」,「親子 de クエスチョン」,「九大博物館標本かるた」等，タイトル・内容ともに大学に付随する「お固い印象」を払拭する奇抜・斬新なものであり，かなり驚かされる．が，参考等を含めて教科書等にもイラストや漫画チックなものが結構見かけられるようになった今日，我々の方が時代に順応すべきであろう．それにこのような風潮は,「学ぶなら，楽しく...」との見方によれば，本来の学問に対する姿勢にも底流で通じるものであろうから，特に子供・生徒を主対象にするものについては，より積極的に導入するのがベターであろう．博物館プロパーの出版物と「九大広報」の関係はどうなっているのか.

・大木：出版は素晴らしいと思いますが,「年報」は内部・外部評価の資料になるような内容になると良いと思います．できたら忘れないうちに毎年出版された方が，後で苦労しないと思いますが，いかがでしょうか.

・大野：館の活動を伝えるものとして全体として良好.

・松枝：博物館全体のアクティビティを十分に示すことができているか疑問.

ア．概要（和文・英文）　　**評価平均 B(3.8)**　[C, A, B, A, C, C]

・遠藤：無理して過度に大きな労力を割くに及ばないと思われるが，管理面を一覧するこうした文書は，発行自体に意義があるともいえる.

・高田：写真を多用し，分かりやすくまとめてあり，大学博物館としての機能や役割が理解できる冊子として活用できる.

・伊藤：内容，レイアウトに一工夫が欲しい．組織人事の項をもっと簡潔にしてよい．必要があれば HP から情報は得られる．　博物館の理念，沿革は大きくは変わらないが，活動，組織人事は年々変動するものであり，できる限り頻繁に改訂する必要がある.

・大野：必要十分な内容が盛り込まれている．最新情報を盛り込んだ改訂版の出版が望まれる.

・黒木：写真やレイアウトに工夫や改善の必要がある.

・松枝：迅速な更改が必要.

イ．博物館ニュース　　**評価平均 B(4.2)**　[B, B, B, A, B, B]

・遠藤：中身よりも良質な印刷の質を評価したい．型式が強く規定され過ぎている印象を受けた．より自由な中身の出版物でよいと思われる．
・高田：各教員，研究者の活動の具体的な内容が分かりやすくまとめられている．紙の質もよく保存にも適している．一方で，どの範囲の方に配布され，どう活用されているのかが不明．また，掲載内容が「博物館活動」として位置づけられているのかの確認も必要と感じる．
・伊藤：充実している．紙質を少し落としても一般向けとして広く配布してよい．
・大野：活動記録や博物学的な読み物を配し，館の主張も掲載され，バランスが取れている．
・黒木：誰に向けてというものが，明確になるとより内容に統一感がでてくるのではないか．
・松枝：ホームページにもバックナンバーを含めて掲載し，インターネットアクセスを可能にすると良い．

ウ．研究報告　　**評価平均 B(4.0)**　[B, B, B, A, C]

・遠藤：研究内容の執筆は申し分ない．疑問点は，社会貢献の若干奇妙なアンケート集や，実態の乏しいデザイン論などに誌面を費やしていると見えるところである．現在の国際水準の学術出版が拾い切れない地道な研究論文を載せていく報告集として，育てていくアイディアが必要であろう．
・高田：報告内容は興味深いものが多く，将来，博物館の展示としても活用していただきたい．また研究報告としては，最低限，要旨の部分は英訳化する必要を感じる．
・伊藤：各分野の専門誌に発表困難な研究の発表可能な場としての役割を評価するが，専門誌に可能な分野に関しては査読付きの専門誌に投稿する努力が必要．
・大野：和文が中心であるが，国際誌等には盛り込めないボリュームの記事も掲載されている．電子媒体化も考慮されたい．
・松枝：それなりのレベルを保った研究内容であることが必要であり，レフェリー制を取るべきである．英語版の充実充実が必要．

エ．年　報　　**評価平均 B(3.6)**　[C, C, B, B, B]

・遠藤：古今東西を問わず，あるべき年報とはこういう形式だと一定の評価を与えたい．
・高田：1 年間の取組をまとめたものとしてはやや内容が薄いような気がする．実施内容，取組内容だけでなく，その成果や評価，事業報告（博物館運営に関する）も盛り込むべきだろう．
・伊藤：博物館の活動を網羅しており，まとめとしては充実している．
・大野：おおむね良好．
・松枝：ホームページに可能な部分だけでも掲載して，一般のインターネットアクセス者

にも積極的に公開する．

オ．その他の出版　　**評価平均 B(4.2)**　[C, A, B, A, B]

・遠藤：図録の類がこの項に当たるかと思う．もちろんどれもよくできた水準のものである．印象としては，学者の自己表現のために，もっと自由・無目的に筆を執ってもらえる方が嬉しい．ユーザーや消費者を自称する層を意識して，無骨さを必要とする学術・文化の面白さの吐露が，日本語としては二の次になっていると受け止められた．

・高田：展示会の図録，カタログ，パンフレット類は，展示解説を補完しまた実施記録としても残すことができ有効と考える．

・大野：学外と共同での学生実習の成果などもあり，制作過程での教育，連携の効果もある．

・松枝：公開展示等に関しては毎回図録を作成して，館外へのアピールに役立てるのが望ましい．

C－⑤．新聞等による報道　　**評価平均 C(3.4)**　[D, A, C, B, C]

・遠藤：マスコミを制御できていない印象が見受けられる．活字も電波も使いこなすべき対象であって，たとえば低質なジャーナリストにいいように取材・報道されても，館の考えを正しく社会に広めることにはつながらない．

・高田：年を重ねるごとに取材件数も増加し，また博物館活動についての広報に役立っていると感じる．広報は各教員に一任するのではなく，窓口業務となる担当を決め，また館長の名前を必ず掲載していただくなどの工夫をし，「館長」を顔としてＰＲしたい．

・牛尾：良し悪しは一応措くとして，マスコミの影響が大きくなっている現在，良好な関係の構築や維持により努める必要がある．ただ，得てして表層的，好奇的な報道になりがちなのには注意しなければならない．大学人には結構「マスコミ嫌い」や「及び腰」の方が多いようであるが，定期的な情報提供や懇談の場の設定ほか，より良好な関係を築き，率直な意見交換や要望提示を行えるように一層努力する必要があろう．

・大木：「新聞等による報道」は，良い意味でもっと活用されるべきだと思います．全部の記事を載せているのではないと思いますが，もう少し取り上げられても良いような気が致します．

・大野：おおむね良好．

・松枝：マスコミとの積極的な連携は必須．記者クラブへの記事の投げ込み，定期的な記者懇談会なども効果的．

ホームページは，広報メディア，収蔵物に関する検索と解説として機能をしてきた．更新速度の改善や，所蔵標本データベースの画像を増やすなどより一層の内容の充実と教材としてのサイト機能を備えるよう努力が必要であり，展示，連携事業，学芸員資格，英文

ページなどの部分の充実が望まれる．

インターネット博物館・データベースは，学外者の総合研究博物館に対する興味を惹起するために，さらなるコンテンツの充実（画像データの増加，国際対応など），システムの更新が必要である．

出版・広報は，博物館全体のアクティビティを十分に示すことを心がけ，読み手を意識した内容，編集をすべきである．

概要および新聞等による報道については委員の評価が大きく分かれた．概要は，大学博物館の機能や役割を外部に知らせるために一定の役割を果たしているが，頻繁に改訂し，内容，レイアウトに一層の工夫が必要である．

ニュースは，ホームページにもバックナンバーを含めて掲載し，インターネットアクセスを可能にすると良い．

研究報告は，国際水準の学術出版が拾い切れない地道な研究論文やボリュームの大きい記事を載せていく報告集としての意義があり，要旨を英文化するなど工夫が必要である．

年報は，博物館運営に関する事業報告，博物館活動の成果や評価も盛り込み，内部・外部評価の資料として使えるように作っておくとよい．

活字も電波も使いこなすべき対象であるから，良い意味でもっと活用し，積極的に連携することが必要．記者クラブへの記事の投げ込み，定期的な記者懇談会なども効果的である．

D．研　究

D－①．系の研究　　**評価平均 C(3.2)**　[B, C, C, C, C, C]

・遠藤：全体として申し分ない活力を見せている．あえていうと，この部局で研究することの理念や意義をもう一度確認してもらいたい．社会貢献を使命として背負おうが背負うまいが，研究に求められるセンスは例外なく高く設定しなくてはならない．研究の目指す水準をさらに高く掲げていただきたい．

・高田：３つの系があることは理解できるが，内部評価でも「改組」の意見があるように，見直しも検討したい．博物館機能をさらに高め，一般博物館との競合を乗り切るには，①研究系，②展示系，③教育系，という３つの研究系に分ける必要を感じる．

・伊藤：目標としてはわかるが，系としての具体的な成果が見えない．

・牛尾：これら３系区分の趣旨・背景は理解できないわけではないが，これらは相互に密接に関連し合っており，現実上は区分が真に有意あるのかどうか，素人の私には疑問やもやもや感が禁じ得ない．

・大木：３系について，「系としての研究がどの程度実体を備えたものであるかについても検討する必要がある」と書かれているように，現実にどの程度即したものになっているか議論が必要だと思う．

・大野：収蔵・展示が分散した困難な状況のもとでは，良くやられている．将来館の建物

が完成した暁には，系としての研究が重要となる．

・松枝：系の区分にあった研究が本当に行われているか，また機能しているか疑問．各自の専門分野の研究以外に，博物館学的研究がどの程度実質的に行われているか不明瞭．

D－②．共同研究　　**評価平均 C(3.0)**　[D, C, B, C, B, D]

・遠藤：活動の内容が，正確にいえば，理念づくりが十分に行われているかどうか，不詳であった．

・高田：個々の教員において外部との共同研究は行なわれているのかもしれないが，博物館としての共同研究が少ないのであれば，一層に博物館として求められる研究の内容（展示や教育なども含めて）を実施されることを期待したい．

・伊藤：博物館内での学際的共同研究への努力は感じられるが，その成果が見えない．具体的な計画内容を挙げてほしかった．

・牛尾：共同研究の考え方や利点は理解できないわけではないし，それなりの成果も上げているようであるが，これは大半は博物館の本来機能としてではなく，博物館各スタッフ個人と他専門部局スタッフとのタイアップとして捉えるべきではないだろうか．それで，博物館本来機能としての共同研究の対象は，博物館そのものに対する研究，即ち「博物館学」に絞るべきではないだろうか．因みに，図書館は性格上も博物館内部の１組織，或いは外局的機関として位置づけ，合体，或いは統合する考えもあるのではなかろうか．なお，現実的にこの考え方に難があるとしても，博物館と図書館とは近接（できれば隣接）して設置され，相補・相乗の効果が期待されるべきと思われる．

・大木：博物館こそ縦割りを無くし，学際的な研究のできる場所で，学内外の模範となるべき立場にあるような気がする．スタッフは自分の分野の研究はもちろん進めなくてはならないが，その場合でも他分野との共同研究を意識しておく必要がある．

・松枝：館外（国内，国外）との共同研究がどの程度行われているか不明瞭．博物館全体の組織的な共同研究が実施されているようには見えない．

ア．P&P 研究　　**評価平均 B(3.6)**　[D, B, B, A, C]

・遠藤：学内公募が採択する課題は，何も低水準の広報的アウトリーチに固執しているわけではないだろう．現状は教育現場での実践などということばかりに力を入れているように思われた．もっと基礎学術を館員総体で取り組んで，それを大学博物館の手で学術の世界から表現することが期待されているはずである．この資金の枠組が，学外サービスの形式的履行のためだけに費やされるものだとは思われない．

・高田：実施回数も多く，ゲストも多岐にわたり，内容も博物館の展示や教育，運営など，興味深いものが多い．一方で，このプロジェクトの事業への参加者数がそう多くないことも現実としてあり，参加者増のための工夫も今後は必要と思われる．

・伊藤：博物館固有の課題について館全体で取り組んだことは評価できる．今後，地域を

巻き込んだ活動につなげて行くことが期待される.

・大木：P&P 研究は興味深いが，研究経費の交付の打ち切り後はどのようにするのか.

・大野：多彩に活動されているが，研究というからには，アウトリーチ活動やツール開発についての成果をコンサイスに説明して欲しい.

・松枝：新しい試みで評価されるが，具体性に乏しく全員参加型の取り組みであるか疑問.

イ．学会の開催　　**評価平均 B(3.7)**　[C, B, B]

・遠藤：さまざまな学会開催の機会が考えられるであろうから，部局のオリジナリティに溢れた開催概念を今後も考慮するとよいだろう.

・高田：大学博物館の立場での学会開催は，他の学会の受け入れとはまた異なる分野であり，まだ大学博物館の数がそれほど多くない間は，他学会との共催などを行い，大学博物館の存在や必要性を発信する手段に活用されたい.

・伊藤：学会の開催は評価できるが，その場での博物館としての研究成果の発信が見えず，共同研究の成果としては不満.

・松枝：博物館を会場にした分野ごとの学会，支部会，研究会等の主体的かつ定期的な開催が必要. 会場の積極的な提供と学会活動の主導的運営への参画及び活性化の促進に貢献することを期待する.

D－③．専門分野の研究　　**評価平均 B(4.0)**　[B, B, B, B, A, C]

・遠藤：学内の乏しい研究支援体制にもかかわらず，現場はよく頑張っていると思う．数値化された業績にとらわれるような苦言があってもそれを無視し，九大博物館としての未来に恥じない真理探究の足跡をこれまで以上に積み重ねていただきたい.

・高田：自己点検評価に，国際誌での発表が少ないとの記述があり，それが大学博物館としての質が問われるほどの状況であれば，一層の充実をはかりたい.

・伊藤：多岐にわたる博物館業務のもとで，自身の専門研究を十分に行うことが困難な状況はよくわかるが，学内に（身近に）共同研究の可能性もあり，大学以外の博物館学芸員にくらべ恵まれた環境にある．査読付き学術雑誌への発表をより努力してほしい.

・牛尾：博物館のスタッフをしながら専門分野の研究も本格的に行うのは，物理的にも精神的にも負担が相当に大きいように思われる．博物館スタッフは，その専門的知識を生かしながら他部局員の研究等のバックアップをする，即ち「縁の下の力持ち」に徹する（甘受する），との考え方もあるのではなかろうか．専門分野の研究は，出身の部局に戻った後に博物館で得た知識も活用して行えばよい．ただ，博物館スタッフは，他部局員よりも学生教育に割く時間・労力が相対的に軽いのであれば，かえって専門分野の研究には好都合なのかもしれないが，何れにせよ，実態をより知りたいものである.

・大野：現状の困難な中では十分な成果と考える.

・島田：UMのスタッフの研究は専門性がきわめて高いが，その内容は一般市民でも興味

を持てる部分が少なくない．しかしながら，発表されている雑誌や講演要旨などは九大OPAC でも読めない特殊なものが多いので，見ることさえできない．そこで提案したいのは，研究業績のリストに論文等のコピーをＰＤＦとして添付したらどうだろうか．研究室単位で，論文や修士論文要旨．学会講演要旨をＰＤＦで公開している例は稀ではないし，情報公開は出来るところからというセンスでお願いしたい．

・松枝：論文等の業績が少なく，国際誌への発表も少ない．博物館活動と関連付けた専門分野の論文も欲しい．

３系の研究について，現実にどの程度即したものになっているか議論が必要である．現状の系の区分を変えるべきとする考えと，将来，博物館の建物が完成した暁には系としての研究が重要となるとする考えに分かれる．

博物館こそ縦割りを無くし，学際的な研究のできる場所で，学内外の模範となるべき立場にある．共同研究の理念づくりを十分に行い，博物館として求められる研究の内容（展示や教育なども含めて）の実施を期待する．

P&P 研究については，博物館固有の課題について館全体で取り組んだことは評価できるが，地域を巻き込んだ活動につなげていくなど参加者増を図ること，アウトリーチ活動やツール開発についての成果を示すなど工夫が必要である．

学会を大学博物館の存在や必要性を発信する手段に活用し，会場の積極的な提供と学会活動の主導的運営への参画及び活性化の促進に貢献すべきである．

大学博物館教員の専門分野の研究は，一般市民が興味を持つ部分が少なくない．論文，学会講演要旨などを PDF で公開すべきである．博物館活動と関連付けた専門分野の論文も欲しい．

E. 教　育

E－①．学芸員資格関連授業・実習　　**評価平均 B(4.1)**　[A, C, B, B, B, A, B, B]

・遠藤：十分すぎるほどの努力と成果を見ている．あえていうと，社会教育や学芸員の法制度そのものにまつわる矛盾や難点を，九大発の創造性でカバーしていって頂きたい．

・雪田：（以下の）すべての教育に関係することであるが，博物館にかかわる教員の研究分野に偏らざるを得ない．やや理系への偏りを感じさせる．

・高田：博物館法改正において新たに設置されたり，単位数が増加した展示や教育，情報に関する講師陣が不十分．学芸員＝研究者という指導にならないよう，一般博物館に求められる学芸員の資質を高める授業，指導体制が求められる．もっと博物館の現場を知る教員がいて，実習先とも連携，情報交流が深まるよう望みたい．

・瀬戸：社会貢献・還元，また各人の専門性を高めるための方法の一つとして有効．ここの専門領域とともに（関連する）他の領域も視野の中に入れている学芸員が求められている．

・牛尾：学芸員養成の開講部局は直接博物館に置く考えはないのだろうか．博物館の性格上，また保存・展示資料に「物」が多いことから，スタッフは理科系出身者が多いことは推測できるが，文科系出身者も配されているのだろうか．

・大木：学芸員資格取得のための開講科目の単位認定は，最終的には各学部が行うと思うが，九大ではどのようになっているか．開講部局が理学部，文学部，農学部となっているが，それらの学部の教員は開講科目の講義の一部でも受け持つべきだと思うが，いかがか．実習は一部の教員が協力しているようだが，これも博物館教員が中心に行っているようである．現状では博物館教員の負担が余りにも大きいと思うが，平成２４年度以降に増える科目も博物館教員が担当するのか．

・雪田：（以下の）すべての教育に関係することであるが，博物館にかかわる教員の研究分野に偏らざるを得ない．やや理系への偏りを感じさせる．内容はかなり充実しており，努力の跡を感じさせる．しかし，どこまで継続できるのかが課題．教員・職員の自助努力だけでは，限界がある．24 年度よりの学芸員資格取得要件の変更にともなうカリキュラム変更にも対応しうると思われる先見性あり．

・大野：24 年度よりの学芸員資格取得要件の変更にともなうカリキュラム変更にも対応しうると思われる先見性あり．

・黒木：実習カリキュラムが，博物館をより身近なものに感じさせる学びの場になっていた．

・松枝：単なる資格ではなく，現場で使える学芸員養成に対する民間博物館の要請が強いことを意識した教育の展開を心がけてほしい．他の文芸館，美術館，動物園等多様な組織と密接な連携を取りながらの学芸員養成が望まれる．

E－②．大学院教育　　**評価平均 B(4.1)**　[A, B, B, B, A, B, C]

・遠藤：いわゆる協力講座や兼担を駆使しての参加と思う．研究科コアが他部局に冷淡なことも少なくないであろうが，館としての頑張りは高く評価できる．少しでもたくさんの教員が参加し，院生の出入りを拡大していくことを期待する．分野の構成比など一切問う必要はない．そもそも体系や分野を超えた教育に挑むのが，博物館の姿である．
・高田：大学院で研究した内容や教育を受けた内容が，大学博物館としてだけでなく，一般博物館でも活用できるなど，一般博物館からニーズの深まる教育体制を整備していただきたい．
・瀬戸：博物館関係職員の方々の積極的姿勢は認められる．今後の教育効果についての言及が期待される．
・牛尾：博物館教員が学府および学部教育にもタッチすることは，教育現場との関わりの維持，資料の分析法の伝授，博物館の機能の認知アップ等が期待できよう．が，博物館と他部局との人事の交流はどの程度なされているのだろうか．
・大木：「大学院教育の指導に当たっている」という指導の内容は修士・博士の主指導教員になっている，主査・副査になれるという意味でしょうか．また，大学院の教授会のメンバーなのでしょうか．ここでいう大学院生の教育とは，他学部の学生の教育を支援するという意味なのでしょうか．あるいは博物館教員の大学院生の教育，あるいは両者なのでしょうか．博物館教員の専門に近い学部との関係を保つことは大事だと思います．負担にならない程度に講義（特論）を１コマ持つように努力する必要があると思いますがいかがでしょうか．教員によってはかなり多いような気が致します．ほかの博物館業務に支障はないのでしょうか．
・雪田：研究をしながら，成果に結び付ける授業のあり方は評価できる．ただ，内容がどの程度のことをどのくらいの量でこなしているのか，見えてこない．おそらく，かなりの標本が手つかずの状態であるのではと感じさせる．
・大野：開講科目は充実．教育環境整備との関連は希薄．博物館ならではの特色を生かした能動的で特色ある教育のさらなる充実が望まれる．
・黒木：統合新領域学府という新しい学府の教育にも携わることで，幅広い人材の育成につながってきている．
・松枝：具体的な内容や成果が不明．

E－③．学部教育　　**評価平均 B(4.3)**　[B, A, B, B, A, B]

・遠藤：引き続き若い学部生にも刺激を与えていただきたい．
・高田：学部単位では，専門性の高い指導体制が整っていると思われるが，学芸員に求められるスキルを，新たな養成課程を基に再構築願いたい．
・瀬戸：学生たちとの距離を縮める意味でも重要ですし，又，学生達から得るものも多いと思われ，今後が期待される．
・大木：学部で開講されている講義数はこの５年間でみるとかなり減っているが，負担が

大きかったということか．博物館教員の専門に近い学部との関係を保つことは大事で，負担にならない程度に担当することが望ましいと思うがいかがか．学部学生の卒論指導（主指導教員）を行うことができるのか．

・雪田：バーチャルな IT 世界が身近にある世代に対し，リアルな実物を見せ・触らせ，五感で感じさせる博物館ならではのアプローチは，これからの社会の中で重要と感じている．

・大野：開講科目は充実．教育環境整備との関連は希薄．博物館ならではの特色を生かした能動的で特色ある教育のさらなる充実が望まれる．

・松枝：物に拘るという博物館の特性を生かした実証的な教育の意識的な展開が必要．

E－④．教育支援　　**評価平均 B(4.1)**　[A, B, B, B, B, A, C]

・遠藤：懸命に進めていることは一目瞭然である．むしろ法人化後の大学本部経営陣や大きな部局が，博物館を後方支援装置だと見なして，創造性の尺度において軽視する風潮が高まっていると見受けられた．教育支援の場では毅然たる態度で館独自の能力を発揮し続けていただきたい．

・高田：標本や資料が，学習や研究の内容に応じてすぐに活用できるように，その所在や資料内容を整理し，学部内の教育への利便が図れる体制を一層，整えていただきたい．また「支援」という言葉の意味には，「困っているので助けてやる」というやや上から目線の意味が含まれている．ここは教育支援ではなく，教育連携もしくは教育融合として，博物館側も教育の対象者から学び，得るもとがあるという意識をもつことが重要である．

・瀬戸：限られた条件の中で努力していることが認められる．今後とも博物館のスペース等施設・設備と体制を充実させていくことが望まれる．

・牛尾：本博物館は，「総合研究博物館」と銘打たれている．この教育支援を人，物，情報ほか多岐にわたって，また直接的に行えるようにすることが重要な機能であろう．また博物館の存在価値を高めるためにも，一層の充実が期待される．

・雪田：さまざまな努力の跡を感じさせる．しかし，その時々の流れの中でムラがあるように思う．現在のスタッフの人数では，限界があることを感じさせる．

・大野：中核施設のない状況で良くやられている．P&P の成果等をふまえたコミュニケーション力強化など，ソフト面での支援も視野に！

・松枝：各種展示を利活用した実証的な教育支援の展開が望まれる．

E—⑤．社会教育・学校外教育への貢献　　**評価平均 C(3.4)**　[D, C, B, B, B, B, C]

・遠藤：P&P とのかかわりが強いと思われるが，学校教育や生涯学習の「補完」という立場に自らを矮小化しているように見えてならない．社会教育も学校外教育も，館が自律的に率いて社会に学術文化の懐の大きさを示していくべき場である．予算に対する説明

責任のためにこなしていくという構図があるのならば本末転倒で，館の質的劣化を招くので，気をつけてほしい．

・高田：博物館の存在意義は「教育」にあると思われる．しかしながら，いくつかの実践例はあっても，博物館職員に，社会教育や学校教育に関する専門家が少ないため，博物館の資料や人材を研究レベルで有効に実施できる体制がまだ整っていないと感じる．

・瀬戸：努力は認められる．教育委員会のほかに，もっと博物館・科学館等のレベルで，利用・活用する方法も検討できるのではないか．

・田中：資料が見つからず評価できない．F-④，F-⑤については，特に知りたいと思っているため，当日の説明をお願いする．

・牛尾：大学は，特に旧帝国大学の後身である大学群は，「象牙の塔」的イメージが色濃く残されているようである．国立大学法人化ほか大学をめぐる諸情勢が大きく変わっていく中において，本大学もこのような一般的なイメージを薄めていくことが重要な課題であろう．そのためにも，本大学も社会との関わりを深めていくことが強く要請され，社会と接することが多い博物館はリーダー的役割を果たすべきであろう．

・雪田：さまざまなアイディアを駆使していることを，ひしひしと感じさせる．しかしこれも，人が変われば，失われてしまう危惧を感じる．ボランティア等を含めた人的ネットワークを確保することが，必要と感じる．学校が入り込みやすいプログラムの提案をこちらからしてもいいのでは(1時間コース，3 時間コース，7 時間コースなど．)．相手の出方を受けるだけでは，こちらもスケージュールを立てることができない．こちらからあらかじめ「こうしたコースがあります」と提案してあげた方が，相手も乗りやすいのでは．

・大野：様々な検討をされているようであるが，せっかくの「海のゆりかご」企画の経験などを生かして具体的な企画を実行して行けば，自然と地域が連携を欲するようになるはず．

・黒木：福岡市，福岡県の教育委員会と連携し，小中学校教員向けの研修講座において，教育と研究の繋がりをつくるべきである．

・松枝：積極的な各種セミナーや市民講座の展開が必要．

学芸員資格関係科目の教育について，開講部局の教員の協力を求めるべきである．

学芸員の養成では，専門領域とともに（関連する）他の領域も視野の中に入れている学芸員，現場で使える学芸員養成に対する民間博物館の要請が強いことを意識し，一般博物館に求められる学芸員の資質を高める授業，指導体制が必要であり，博物館の現場を知る教員がいて，実習先とも連携，情報交流が深まるよう努力することが望まれる．

大学院教育・学部教育については，協力講座や兼担を駆使して少しでも多くの教員が参加し，学生の出入りを拡大していくことを期待する．

バーチャルな IT 世界が身近にある世代に対し，リアルな実物を見せ・触らせ，五感で感

じさせる博物館ならではの教育を行い，若い学部生にも刺激を与えることが，これからの社会の中で重要であり，標本や資料の所在や内容を整理し，教育への利便が図れる体制を一層，整えるべきである．

教育支援は，今後とも博物館のスペース等施設・設備，情報と人的体制を整えて，一層充実させていくことが望まれる．

教育「支援」については，教育連携もしくは教育融合として，博物館側も教育の対象者から学び，得るものがあるという意識をもつことが重要である．

社会教育・学校外教育への貢献については，福岡市，福岡県の教育委員会と連携し，小中学校教員向けの研修講座において，教育と研究の繋がりをつくるべきである．また，教育委員会のほかに，博物館・科学館等のレベルで，利用・活用する方法も検討できるのではないか．ボランティア等を含めた人的ネットワークを確保し，学校が入り込みやすいプログラムの提案をこちらからしてもいいのではないか．

F．学内他部局との連携

F－①．教育研究における連携　　**評価平均 B-C(3.5)**　[C, C, B, B, B, C]

・遠藤：P&P や上記 F 項目などに含まれることであり，全般によく努力しているといえる．

・高田：学部ごとで縦割りの状況にあるような印象を感じる．総合博物館であれば，横軸方向の連携が一層に求められる．そのコーディネーター役も必要だろう．

・伊藤：常設展示室を持つようになり，他部局による教育への博物館利用が増したことは評価できる．

・牛尾：資料部の位置づけが良く理解できない．コンセプト的には博物館イコール資料部ではないのか．あるいは，資料部は博物館の内部組織なのだろうか．

・大野：展示企画等を通じて蓄積した情報発信や，サイエンスコミュニケーションについてのノウハウを生かすソフト面での工夫が望まれる．

・松枝：関係部局とのさらなる幅広い連携と学内外サポータの増加を図る必要がある．

F－②．全学委員会などへの参画　　**評価平均 B(4.2)**　[B, A, A, B, B, C]

・遠藤：全学委員会に参画しているかどうか自体は，評価に馴染む事柄ではない．それよりも，トップダウンに伴う経営至上主義の立場からは，大学博物館を育てずに消耗させる悪しき指針が必ず生じるので，全学委員会等は，館として確たる姿勢をもって正しい主張を繰り広げる場と考えて欲しい．

・高田：内部評価ではよく貢献していると評価されているようであるので，一層，その機能を充実されたい．

・伊藤：少人数のスタッフの中からいくつもの全学委員会に参加しているのは評価する．とくに，新キャンパス移転を機に博物館の重要性を全学に認識してもらうよい機会である．

・牛尾：創設が新しく，ために組織，場所，設備上もまだ間借り的印象を免れない博物館は新キャンパス移転を絶好の機会として確固たる地位を確保することが要請される．ために，諸委員会等には積極的に参画を求め，また必要性を十分に主張し，その目的達成を期すべきである．

・松枝：キャンパス移転に向けて極めて重要であるから，積極的に取り組む必要がある．職員の負担の公平化も考慮する必要がある．

大学は学部ごとに縦割りの面が強いが，総合博物館は横軸方向の連携を進める役割を果たすべきである．展示企画等を通じて蓄積した情報発信や，サイエンスコミュニケーションについてのノウハウを生かすソフト面での工夫が望まれる．

全学委員会に参加し，新キャンパス移転を機に博物館の重要性を全学に認識してもらう努力をすべきである．

G. 他博物館などとの連携

G－①．大学博物館等協議会　　評価平均 B(4.0)　[B, B, B, A, A, B, D]

・遠藤：頑張りには感銘を受ける．あえて付記すると，可能なら，同協議会を高い創造性を交錯させる場に育ててほしいと思う．

・高田：大学博物館とはどうあるべきかを，他の大学博物館の事例を参考に連携を深めていただきたい．一方で，一般博物館との連携もすすめ，一般の利用に供する博物館である意識も高めていただきたい．

・瀬戸：他の大学博物館をリードしている状況がうかがえる．今後は，情報交換の結果をどのように生かしていくのかが期待される．

・伊藤：大学博物館等協議会や博物科学会の開催など大学博物館間連携に積極的に関与していると評価できる．

・牛尾：各大学博物館が直面している問題には，多・少の違いがあろうが，共通するところが多いと推測される．ために，本協議会を大学内外に対する訴求の場としても積極的に活用すべきであろう．

・松枝：九大からの参加者がごく一部に限られている．博物科学会には基本的には全教員が参加ないし発表を行い，学会組織を守り立てる中心的な役割を担う姿勢が必要．

G－②．福岡市博物館　　評価平均 C(3.3)　[D, B, B, C, C, B, C]

・遠藤：かつての展示施設の乏しさなどから出来上がってきた関係であろうが，九大として展示・教育の場の創生にはつねに挑戦していく必要があろうから，外部との連携には引き続き多様な可能性を探って頂きたい．

・高田：福岡，博多という地域の歴史に根ざした博物館として，その運営のあり方，展示や教育活動などにも深く関わりたい．

・瀬戸：それぞれの館の特徴・機能を利用・活用行くこととして，今後とも息の長い連携が望まれる．

・伊藤：福岡市博物館の性格上，公開展示場としての連携は定常的に行うことが困難なことは理解できる．しかし，日常的な人的，物的連携は可能であり，それがどの程度行われているか不明．

・牛尾：当博物館は「歴史資料博物館」の性格が大きく，連携のメリットは大きくない感がある．

・大野：会場を単なる貸展示場ととらえるのではなく，大学ならでの情報発信の試みの実験場として連携協力して活用されたい．

・松枝：より密接な連携・交流が必要．

G－③．福岡市少年科学文化会館　　評価平均 B(4.4)　[D, A, A, A, A, A, B]

・遠藤：一見行事が回転しているように思われるが，社会教育としての水準は高くないと

思われる．外部の社会教育機関との関係において，真に自由な博物館表現が達成されているかどうかを，引き続き自問してほしい．

・高田：低学年や家族利用の多い博物館との連携は，博物館に求められる「伝える力」「コミュニケーション能力」を醸成できる実践の場として，今後も積極的に連携をすすめてほしい．また，この館を「貸しホール」として利用するのではなく，展示や教育といった機能を学ぶという視点での連携ももちたい．

・瀬戸：それぞれの館の特徴・機能を利用・活用行くこととして，今後とも息の長い連携が望まれる．

・伊藤：児童生徒を対象とする公開展示，学習教室などの取り組みは評価できる．

・牛尾：当館は「科学文化会館」であるが，科学のウェイトが極めて高い．ために，理科系のウェイトが相対的に高くなる傾向を持つであろう大学博物館は，児童生徒に「科学する心」を涵養する場として一層連携を強めるべきである．なお，かなり古くなっており，狭隘でもあるので移転を検討すべき時期になっている感がある．ために，自然環境に恵まれた新キャンパスにおいて大学博物館の別館「少年科学文化館」として移転・合併することも構想されて良いのではなかろうか．当館は福岡市立であるので困難ということであれば，大学が敷地を貸与し，隣接して建設されても良いのではないか．

・大野：企画についても統一テーマを分担するなどの試みが評価できる．学生・院生のコミュニケーション力鍛錬の場としても生かされたい．

・松枝：比較的連携・交流がすすめられている．

G－④．九州国立博物館　　**評価平均 B(3.6)**　[C, B, B, B, C, B, C]

・遠藤：九国とどう付き合うかというのは，館がしっかり考えて決めていくべきことである．現状ではおそらく館の姿勢の考慮がされていないと思うので，今後に期待したい．

・高田：多くの利用者がある博物館として，大学博物館の活動を発信する場に活用したい．また，資料保存の専門性が高い博物館と連携することで，大学の貴重な学術資料の保存にも役立てたい．

・瀬戸：それぞれの館の特徴・機能を利用・活用行くこととして，今後とも息の長い連携が望まれる．

・伊藤：文化交流展示の実施，教育面での連携の計画等は評価できるが，日常的な連携の様子が不明．

・牛尾：当博物館は「歴史資料博物館」の性格が大きく，連携のメリットは大きくない感がある．

・大野：九博・九大総合研究博物館とも展示スタイルを確立出来るほどの蓄積はないはず．九博の展示スタイルの変更を迫るくらいに迫力ある提案をして欲しい．

・松枝：密接な連携・交流が進められているようには見えない．

G－⑤．他大学博物館　　**評価平均 B(3.7)**　[C, B, B, B, B, B, C]

・遠藤：理念と施策，そしてどういう相手と交流するかに無限の可能性があろう．無理に手近な大学と交流する必要もないと思われ，概念作りから慎重に構築することが望まれよう．

・高田：資料保存や研究だけでなく，展示や教育の面でも注目されている大学博物館もあり，広い役割や機能を発揮することを他の大学博物館との連携から学んでいただきたい．

・瀬戸：九州の大学の総合研究博物館となるよう，各大学との連携を更に充実・発展させることが望まれる．

・伊藤：他大学との連携は計画・準備段階であり，今後に期待する．

・牛尾：それぞれの歴史と特色があり，適当にすみ分けて，かつ相補・相乗のメリットを指向すべきであろう．

・大野：地域の大学博物館との連携は評価できる．特にお互いの得意分野を持ち寄れば新たな大学博物館連合も構築可と思われる．

・松枝：単に九州管内，或いは福岡近隣の大学博物館だけではなく，全国的規模での連携・交流を積極的に進めていくことが望ましい．

大学博物館等協議会に積極的に参加し，大学博物館とはどうあるべきかを，他の大学博物館との連携・情報交換を通じて考えていることは評価できる．博物科学会には基本的には全教員が参加し，発表を行い，学会組織を盛り上げる中心的な役割を担う姿勢が必要．

外部との連携には引き続き多様な可能性を探っていくべきである．

一般博物館との連携もすすめ，一般の利用に供する博物館である意識も高めて欲しい．

地域の博物館との連携は，単に「貸しホール」として利用するのではなく，それぞれの館の特徴・機能を利用・活用するべきであり，展示や教育といった機能を実験し，学ぶ場（大学博物館の活動を発信する場），学生・院生のコミュニケーション力鍛錬の場，大学ならでの情報発信の試みの実験場として，今後も緊密に連携を進めるべきである．

少年科学文化会館との連携は概ね高い評価を得たが，社会教育の水準に関して，自由な博物館表現が達成されているかどうかを常に真剣に自問することの必要性が指摘された．

H. 社会貢献・教育普及活動

H－①. 公開講演会　　評価平均 B(4.0)　[B, B, B, B, B, B, B, B, B, B]

・遠藤：妥当な活動ぶりではあるが，大前提として館の社会貢献をどうするべきかを一通り見直していただきたい．ただ講演会をこなしていくだけのために大学博物館が存在するわけではない．九大の館らしい独自の貢献理念の提示を期待したい．

・高田：内容が理系に偏りがちではあるが，内容は興味深く多くの参加者もあるので，今後も継続していただきたい．講演会とリンクした展示会もあると参加者にも一層に博物館活動として認識されるものと思われる．

・瀬戸：他の博物館・科学館等との連携により，より広範囲に，地の利，広報の利を得て開催してはいかがか．

・牛尾：評価できる催しであるが，各種展示会の際にそのテーマに合わせて実施するのがより効果的ではないか．

・大木：参加者数で評価することを好まないが，セミナーの参加者数を把握しておくことは大事だと思う．

・雪田：F-⑤と内容が重なる部分がある．多彩なテーマで，関心をひきつけている．以前公開されたテーマの中で，「定番」を持つことも大切と考える．

・大野：年１回程度の大規模のものとともに，より頻繁な講演会を開催することで，ファン層をつくりだせるのでは．

・黒木：公開講演会を各博物館やさまざまなところで行うことで，博物館に興味関心のある層を集め，その層に対してサイエンスコミュニケーター養成講座や博物館ボランティア養成講座などをセミナーで仕組んでみてはどうか．

・松枝：学内（できれば館内）で適切な会場を確保し，頻繁に講演会・セミナーの開催を企画し，リピータの確保を模索する必要がある．

H－②. コミュニケーションミュージアム事業　　評価平均 C(3.4)　[C, B, A, B, C, A, C]

・遠藤：上記と似ていて，貢献としての一実例を提示してきているにすぎないだろう．社会との付き合いの形と姿勢を，根本的に提示し直す気持ちであってほしいと思う．

・高田：博物館の公共性や地域連携がますます求められており，大学が位置する糸島地区の理解や協力を得るためには，研究者と地域をつなぐ位置づけである博物館の機能が一層に必要になると考える．

・瀬戸：大学全体で取り組むべきことと思うが，そのマネージメントを行う一つの窓口として，博物館が担当することは，とても有効であると考える．

・牛尾：新キャンパス周辺住民の理解を得，交流を深めるためにも良い事業で所期の効果を上げつつある．ただ，地域貢献特別支援事業費により経費が賄われているので地域に偏るのはしかたないとしても，「九州大学」であるので，今後は過度に地域に偏ること

なく，より広域を対象にする方向を目指すべきであろう．

・雪田：内容がよくわからないので，判断に困る．ただ，「糸島」という場を利用するという意味では，実習等での展開は期待できる．

・大野：Give だけでなく Take の部分をどうするのかについて，より具体的な検討を要する．コミュニケーションの双方向性に留意されたい．

・松枝：将来の移転を見越しての展開は高く評価されるが，一方で箱崎キャンパス周辺の地元住民への対応が疎かになっていないか．新キャンパスと箱崎両方の住民に対する貢献とサポータ確保が必要であろう．

H－③．談話会（セミナー）　**評価平均 B(3.6)**　[B, C, B, C, C, B, B]

・遠藤：あってしかるべき起案を実施してきているという一定の評価を与えたい．異分野と簡単に言っているが，この辺の分野云々を問う前に，談話会として学者の自己表現ができているかどうかを再確認してほしい．

・高田：セミナーの対象が誰なのか，その対象の知識や学力，経験，興味にあわせた内容になっているか，常に検証しながら，分かりやすいセミナーを続けていただきたい．

・瀬戸：異分野交流・学際的研究の水深を目的としていることは評価できる．今後はたくさんの参加者があることが望まれる．

・牛尾：専門分野者の交流から，異分野者の交流および学際的研究の推進に対象者や目的が推移してきており，博物館の業務に接近してきているが，これが博物館の本来業務に馴染むのか，との疑問が残る．

・雪田：まだまだ，これからという感じがする．ただ，こうした一般と研究者との知識の差を埋めていく努力は，評価に値する．ぜひ，継続していただき，今後の動きに期待していきたい．

・大野：教員相互の間の意志疎通にも役立つ．回数をより頻繁化し，教員会議の前後に設定するなどの工夫も必要か．

・松枝：学部生・院生も取り込んだ事業としての展開が望まれる．

H－④．きらめき☆ときめきサイエンス　**評価平均 B(3.9)**　[C, A, B, C, B, B, B, B]

・遠藤：労力は容易に推し量れるが，部局のあり方としてこういう策を推進するのかどうかは，今後も議論していただきたい．

・高田：博物館が地域のフィールドを活用した教育事業を行なうことは，「アウトリーチ」な機能として重要である．今後も色々なフィールドにおいて実施していただきたい．

・瀬戸：事業活用方式で外部資金を活用できたことは評価できる．いろいろな団体・学生ボランティア等とのネットワークを作り，その力を活用していくことも考えてよいのではないか．

・牛尾：意欲は評価できるが，実施に伴う費用，労力，時間ほか負荷が大と思う．イニシ

アティブは，学生を含めて他組織・団体，ボランティア等に任せ，博物館は説明・案内人の派遣等でバックアップする形の方が現実的ではないか.

大木：野外実習（自然体験ツアー）は現場を知る意味で重要だと思う．大掛かりなものである必要はないので，負担にならない程度の日帰り野外実習を毎年１回は行って欲しいと思う.

・雪田：外部に対して，最も資金・人的資源に大変さを感じさせる．研究者は大変と思うが，フィールドワークの面白さを教えるのには，絶好の機会と思う．中・高校生を対象とする場合，学校の部活や補習授業，受験との兼ね合いがあり，興味はあってもなかなか参加ができないのが現状である．でも，とっても面白い.

・黒木：九大キャンパス内でも，十分可能なカリキュラムなので，この機会を利用して，いつも公開できない標本，資料の公開を行ってみてはどうか.

・松枝：内容，参加者数など不明．資金面の確保と拡充の施策が必要.

大学博物館は社会貢献をどうすべきかという議論を常に行いながら，九大博物館独自の貢献理念の提示をめざして，事業を実施すべきである．コミュニケーションの双方向性に留意する必要がある.

講演会は，年１回程度の大規模のものとともに，より頻繁に小規模な講演会を開催することで，ファン層をつくりだし，リピータの確保ができるのではないか．他の博物館・科学館等との連携により，より広範囲に地の利，広報の利を得られるのではないか．サイエンスコミュニケーター養成講座や博物館ボランティア養成講座などをセミナーで仕組んでみてはどうか.

大学が位置する糸島地区の理解や協力を得るためには，研究者と地域をつなぐ位置づけである博物館の機能が一層に必要になる．しかし糸島と箱崎両方の住民に対する貢献とサポータ確保が必要であるし，「九州大学」は，過度に地域に偏ることなく，より広域を対象にする方向を目指すべきでもある.

談話会（セミナー）は異分野交流・学際的研究の水深を目的としていることは評価でき，教員相互の間の意志疎通にも役立つ．回数をより頻繁化し，教員会議の前後に設定するなどの工夫も必要である．セミナーの対象が誰なのか，その対象の知識や学力，経験，興味にあわせた内容になっているか，常に検証しながら行う必要がある.

博物館が地域のフィールドを活用した教育事業を行なうことは，「アウトリーチ」な機能として重要であるが，費用，労力，時間ほか負荷が大であり，他組織・団体，ボランティア等とのネットワークを作り，その力を活用していくなど，実施形式の工夫が必要である.

Ⅰ．国際連携

Ⅰ－①．海外研究者との交流・共同研究　　評価平均 C(3.2)［B, C, C, C, B, D］

・遠藤：なかなかよく努力していると思う．海外との共同研究は研究者個人が楽しいと思う仕事を世界水準で進めることがその意義のすべてであり，この仕事に学芸員養成のことや管理面を混入させようという意見は間違っている．

・高田：各研究者が，「博物館」としての機能面の交流をすすめ，展示や教育といったジャンルでの交流や共同研究もすすめていただきたい．

・伊藤：中期計画に謳われている「個々の研究者の海外研究者との共同研究や交流」はある程度行われていると思うが，博物館間の交流に関しては計画にも上がっていない．博物館間の展示交流，研究交流も考える必要がある．

・牛尾：対象者は海外の博物館員で，内容は博物館に馴染むものなのだろうか．そうでなければ，部局における海外交流と大差ないと思われる．

・大野：実績で示されているものを，より戦略的なものにして行くための検討と具体的施策が必要．

・松枝：分野限定的で，オール九大博物館としての試みが見えない．海外研究者との積極的な共同研究により高度な成果を上げることにより，欧文論文印刷の増大，国際化の実現が期待される．

Ⅰ－②．外国人研究者の受け入れ　　評価平均 C(3.0)［C, C, C, B, D］

・遠藤：もっと受け入れていていいと思う．予算支援などが乏しいことが阻害要因だろうが，少しでも魅力的な招聘計画を起案して実行に移すことを期待する．

・高田：日本の九州という地にあることを活かした研究活動で，諸外国の方との交流を一層に深めていただきたい．また博物館に関する研究者の受け入れにより，博物館力向上にも活用したい．

・伊藤：大学博物館としては少ない．

・牛尾：本学はアジア地区をメインに多くの留学生が学んでいるが，これら留学生が博物館を訪れることはあるのだろうか．留学生はその国のエリートで，将来重要な地位に就くことが多いだろうから，来館経験は本博物館の将来にもなにかと資することあることが期待される．

・大野：定期的に交流する機会の拡充を検討されたい．

・松枝：海外研究者の招へいが著しく少なく，分野も限定的である．外部資金或いは館内予算のプール等の手法で予算確保を行い，館全体として招聘計画を立案・実施することにより，定常的な外国人研究者の招聘の実現を図ることが肝要である．

個々の研究者の海外研究者との共同研究や交流は，ある程度行われているが，博物館間の展示交流，研究交流，教育での交流や共同研究も考える必要がある．

外国人研究者の受け入れが，大学博物館としては少ない．増加のために，魅力的な招聘計画を起案するなどの工夫が必要であり，外部資金或いは館内予算のプール等の手法で予算確保を行い，館全体として招聘計画を立案・実施することにより，定常的な外国人研究者の招聘の実現を図ることが肝要である．

九州大学にはアジア地区をはじめ多くの国の留学生が学んでいる．これら留学生が大学博物館を頻繁に訪れて楽しみ，学び，博物館活動を支援する仕組みを工夫するべきである．

Ⅲ．管理・運営

A．管理運営の理念　　評価平均 B(4.0)　[C, A, B, B]

・遠藤：大学博物館が経営の難しい部局であることは容易に想定される．戦略などといっても所詮は文言でしかないので，経営主義・市場原理・説明責任に破壊されていく文化と学術を，身を挺して守る存在であることを力強く宣言してもらいたい．

・高田：博物館のアイデンティティ，館長のリーダーシップということが自己評価にも記述されており，このような運営理念を強くもっていただきたい．

・大野：館長のリーダーシップとともに，館の構成員全員の意志疎通，使命感の高揚とその認知をして，全館的な運営にすべき．

・松枝：構成員全員の共通認識が大切であり，館長のみへの権限・負担集中や，やらないで非難のみする無責任体制になることは避けるべきである．受身ではなく，主体的な管理運営の理念を強く内外に打ち出し，主導的に進める必要がある．

館長のリーダーシップのもとに，館の構成員全員の意志疎通を図り，博物館のアイデンティティと使命感を認知して，経営主義・市場原理・説明責任に破壊されない運営理念を持つべきである．受身ではなく，主体的な管理運営の理念を強く内外に打ち出し，主導的に進める必要がある．

B．管理運営体制

B－①．運営体制と意志決定　　評価平均 B(3.8)　[B, B, B, C]

・遠藤：どんな意志決定体制も紙上の検討では必ず弱点をもつ．現体制は最大限に認められる妥当な仕組みだと認識する．運用面でも穏当に活用されていると認識された．

・高田：館長の位置づけや権限などが明記されておらず，また任期も短いのは課題と感じる．館長は活動力と指導力に長けたマネージメントだけでなく，対外的な顔として動いていただける人材を充てたい．

・牛尾：腰を据えて取り組むべき問題に直面しているにも拘らず，館長・副館長の任期は短すぎるのではないか．学外折衝・対応関係業務を担当するもう一人の副館長を学外人から求めることが考えられないか．

・松枝：常設的な標本，展示，将来構想関連等の各種委員会は無いのか．館長・副館長を館内，館外から出すことは良いが，館内スタッフに必要以上の負担がかからないようにする工夫も必要. 副館長を複数名にして, 1 名は事務サイドから出てもらうことも一案.

B－②．事務体制　　評価平均 C(3.4)　[B, B, C, B, D]

・遠藤：部局の大きさを見るとき，他部局等の事務部が責任を負っていることはあり得る現実だろう．このサイズでは，要はシステム云々ではなく，事務スタッフ個人の力量に着目すべきである．有能な人員の確保のために館長中心に努力されることを期待する．

・高田：博物館設置の重要な局面を迎えており，事務体制は一層に重要かつ重責になると思われる．それらを遂行できる要員体制を望みたい．
・大野：館直属の事務職員が存在し，本部事務局と密接に連携の取れる体制の確立が望まれる．
・松枝：博物館の多様な事務内容等を考慮した場合，事務組織の人員は絶対数が不足で，負担が大きい．理学部が数年後に伊都キャンパスに移ることを考慮すると，早急に博物館独自の事務組織の設置が必要である．

博物館のビジョンの実現，館の宣伝のためには，館長には，活動力と指導力に長けたマネージメントだけでなく，対外的な顔として動ける人材を充て，館長の任期をもっと長くすべきである．
大学博物館は小部局であるため，独自の事務系を持っていないが，仕事の特異性から専任の事務組織を持つべきであり，本部事務局と密接に連携の取れる体制の確立が望まれる．特に，新キャンパスへの博物館の設置の重要な局面を迎えており，十分な要員の確保と体制の確立が望まれる．

C．教員組織と人事

C－①．教員の配置　　**評価平均 C(3.3)**　[B, C, B, D]

・遠藤：何よりも増員を勝ちとることが期待され，大学本部の博物館に対する支援姿勢が問われているといえる．なお 10 名前後の教員組織を形式的に改組することはまったく意味がないと断言できる．無駄な事務仕事を増やさないように，配置の操作よりも増員を看板に掲げてほしい．
・高田：現在はどちらかといえば研究中心の３系で教員体制も配置されているが，今後，博物館機能を高めるためには，展示，教育，情報などのエキスパート（博物館の現職員も視野に）も教員に迎えたい．
・牛尾：問題が山積みしている中で，スタッフ数が絶対的に不足している．ボランティア等外部からのバックアップ員を検討できないか．博物館員と他部局との人事交流がなされるべきではないか．
・大木：教員７名で頑張っておられると感心する．３系は実状に即した組織に変える必要があるかもしれない．組織・機構で，研究部，フィールド・ミュージアム部，資料部の関係はどのようになっているのか．博物館教員はすべての組織に入っているが，すべてに対応できているのか．他部局の教員に入っていただくことが重要であると思うが，まずは博物館教員が行動しやすいようにすることが大事だと思う．ボランティアは大学と外をつなぐパイプ役をやってくれる．ボランティア，さらにはいろんな市民との交流の場を多く設けていって，人の輪をつくっていけばいろんなところで力になってくれる．
・大野：３系体制は，博物館開設時にはミッションに即した系方式が良かった．異分野か

らの教員の意志疎通が確立されているなら，より資料重視型の資料部等の充実が望まれる．

・松枝：教員の絶対数が不足しており，学内運用定員の確保に努めることも必要．教員の適切な配置計画の再考が必要．今後の博物館活動を見据えて学際的研究の展開を含めた分野のバランスや不足分野，再編等を考慮する必要がある．

博物館機能を高めるためには，他部局との人事交流を行い，増員を勝ち取る努力が必要である．無駄な事務仕事を増やさないように，配置の操作よりも増員を看板に掲げ，博物館機能を高めるためには，展示，教育，情報などのエキスパート（博物館の現職員も視野に）も教員に迎えたい．

問題が山積みしている中で，スタッフ数が絶対的に不足している．学内運用定員の確保に努めることも必要．ボランティア等外部からのバックアップ員を検討できないか．

資料部，フィールド・ミュージアム部が組織をつくっただけに終わらず，博物館とともに活動していくことが大切である．

既にボランティアを導入している大学博物館に学び，博物館の素晴らしさを知ってもらい，口コミで大学を外とつなぐパイプ役をやってもらうという努力をすべきである．

C－②．教員の選考　　**評価平均 B(4.0)**　[A, B, B, C]

・遠藤：批判されようのない適切な理念と施策で臨んでいると認められた．

・高田：博物館に特化した教員の選考には，従来の教員の採用体制とは異なる方法も模索願いたい．

・大野：少ない事例ながら，原則に従った選考が行われていると判断される．

・松枝：分野のバランスや不足分野を視野に入れた人事選考に加えて，学内運用定員の確保にも積極的に努めて，マンパワーを増やす努力が必要．

今後とも教員選考規則に基づく公明正大な専攻が行われるべきである．博物館に特化した教員の選考には，従来の教員採用基準とは異なる選考方法について模索することも必要である．

分野のバランスや不足分野を視野に入れた人事選考に加えて，学内運用定員の確保にも積極的に努めて，マンパワーを増やす努力が必要．

D．財　政

D－①．予　算　　**評価平均 B(3.8)**　[C, B, B, B, B]

・遠藤：この予算案でよく施策を動かしていると，館の不休の努力を最大限に評価したい．部局の努力にも限界があり，2400 万程度の運営費交付金とその半分程度の学内配分を見るとき，館に対する九州大学の支援体制は高い理念に基づいているとは思われず，学

内外から厳しく批判されてしかるべきである．

・高田：これまで，どの程度の外部資金の獲得をしてきたのか，またその収支も見えないので評価しにくいが，現状の研究活動だけでなく，博物館を一つ整備するための事業計画にのっとり，その年度ごとに必要な予算の獲得をしたい．

・瀬戸：厳しい状況の中で，一定の予算が確保できている．

・大野：館のミッションに応じた学内予算の獲得などの努力が読みとれる．

・松枝：積極的な学内予算確保活動を毎年行う必要がある．

D－②．外部資金　　**評価平均 C(3.4)**　[C, C, B, B, C]

・遠藤：標本分析などを業務化し，受益者負担をふりかざして小額の現金に振り回される道を選択するのはぜひやめて頂きたい．資金は科研費や寄附金など，館の仕事を真に理解する人や仕組みから受けとってこそ，意義がある．ただ現金を得るだけなら巷の営利組織と何ら変わりない．

・高田：博物館の整備には莫大な経費が必要であり，それらを外部資金に頼ることはできないだろう．日常的な研究（博物館に関わる）には積極的に外部資金（博物館研究に関した外部資金）を獲得して実績を残し，将来の施設整備の予算獲得につなげたい．

・瀬戸：博物館建設の資金を外部にも求める場合には，それなりの民間の評価が得られないといけない．これは博物館のみではなく，大学全体で取り組むべきことで，そのための努力を内部にも，外部に対しても行うことが大切だと考える．

・大野：館の規模，多岐にわたる業務をこなしながらの資金獲得として評価される．

・松枝：館全体の活動のための外部資金獲得に積極的に努力すべきである．

運営交付金と学内配分により一定の予算の確保ができているが，部局の努力には限度があり，高い理念に基づく大学の一層の支援が望まれる．

博物館建設資金を外部に求めるためには，大学を挙げて民間の評価を得る努力を内外に対してすべきである．

大学博物館の活動資金は，競争的資金や寄付金など館の仕事を理解する人や仕組みから受け取るべきであり，標本分析の業務化など営利化を図るべきではない．

Ⅳ．施設・設備

A．施設の状況

A－①．博物館の施設の状況　　**評価平均 C-D(2.5)**　[D, C, C, D]

・遠藤：部局として最大限の努力を講じていることとは別に，九州大学としての支援体制があまりにも貧困である．博物館は机上で空想されるだけの組織ではない．現状は最低限必要な施設の要因を満たしていないであろう．

・高田：少しずつ博物館に必要な居室，実験準備室などは準備されているようであるが，計画的に整備されたい．また，学芸員を養成するために必要な施設も視野に入れておいていただきたい．

・大木：整備され，全学の学術標本の何パーセントが移管されたか．今後，どの程度の学術標本が移管される予定なのか．現状を教えて欲しい．

・大野：移転等の特殊事情下であっても，将来資料の収蔵保全，利活用，情報発信を集中的に担える博物館の建設が不可避．

・松枝：現時点で可能な施設・スペースの利活用も積極的に行うべきである．現状では改修などが見込まれず，劣悪な環境と言わざるを得ないが，工夫次第では有効な利活用が可能である．今後もあきらめずに可能な改善に努めてほしい．

A－②．部局の標本収蔵庫の状況　　**評価平均 C-D(2.5)**　[D, D, B, D]

・遠藤：収蔵庫の拡大がないままに博物館を続けることはあり得ない．妥当な支援を得て速やかに収蔵庫の拡大を画っていただきたい．

・高田：博物館の学術資料を保管するための施設としては劣悪であるようだが，研究者の「保管庫」を作るのではなく，博物館の収蔵庫（展示や教育にも活用すること）を前提にした標本収蔵であってほしい．また，新しい学芸員養成課程の中で，「博物館資料保存論」という科目が新たに立ったのは，資料保存が大事という事由だけでなく，保存された資料の再利用や保存資料の情報発信をも意味しており，それはある意味，「博物館資料福祉」という考え方から生まれたものである．今後の保管資料の有効的活用を望みたい．

・大野：決して好条件とは言えない中，各部局の努力も含めて貴重な資料がとりあえず保全されている状況は評価できる．

・松枝：標本収蔵室が分散しており，収蔵や維持・管理の点では劣悪と言わざるを得ない．収蔵スペースの観点からいっても不十分であり，各部局の移転に実施に伴う収蔵標本増加の見込みを考慮すると，可能な限り現時点でスペース確保作業と収蔵整理作業を進めておく必要がある．現在の収蔵スペースは温度・湿度環境管理も十分に考慮されていないことから，貴重な標本の維持が危ぶまれる．この点を強く大学当局に訴え，最低限の標本収蔵管理環境を整えるべきである．収蔵標本予定量を早急に調査・収録し，将来収蔵計画を迅速に作成して，総長サイドへの申し入れをすべきである．

部局として最大限の努力を講じているものの，九州大学としての支援体制があまりにも貧困である．現状は最低限必要な施設の要因を満たしていないであろう．

収蔵庫の拡大がないままに博物館を続けることはあり得ない．収蔵スペースの観点からいって現状は不十分であり，各部局の移転の実施に伴う収蔵標本増加の見込みを考慮すると，可能な限り現時点でスペース確保作業と収蔵整理作業を進めておく必要がある．標本を所有している部局と協力し，その支援を得て，速やかに収蔵庫の獲得・拡大を画るべきである．

現時点で可能な施設・スペースの利活用も積極的に行うべきである．現状では改修などが見込まれず，劣悪な環境と言わざるを得ないが，工夫次第では有効な利活用が可能である．今後もあきらめずに可能な改善に努めてほしい．

現在の収蔵庫を含む施設の状況は，標本収蔵室が分散しており，温度・湿度環境管理も十分に考慮されていないことから，収蔵や維持・管理の点では劣悪と言わざるを得ない．このままでは，貴重な標本の維持が危ぶまれる．この点を強く大学当局に訴え，最低限の標本収蔵管理環境を整え，計画的に施設の整備を行うべきである．

収蔵標本予定量を早急に調査・収録し，将来収蔵計画を迅速に作成して，総長サイドへの申し入れをすべきである．

標本庫は，単に保管庫の役割を果たすだけではなく，保管資料が展示や教育に活用されるように努めるべきである．

移転等の特殊事情下であっても，将来資料の収蔵保全，利活用，情報発信を集中的に担える博物館の建設が不可避である．

B. 設備の状況　　評価平均 C(3.2) [D, C, B, B, C]

・遠藤：研究・教育のための設備が現状のまま推移しては，やはり「鈍す」という状況が避けられないだろう．無理に大規模な構想を掲げて他者と競争しても実現の目はないだろうが，博物館らしい長期的視野にたった標本資料を活かす設備要求を欠かさないよう期待したい．

・高田：各教員の研究に必要な設備だけでなく，博物館活動に必要な設備もリストアップし，十分な博物館機能が果たせる設備を設置していただきたい．

・大木：博物館にこそ必要な機器を導入されることを望む．例えばソフト X 線撮影装置，写真撮影システム（マイクロ・マクロ）など．

・松枝：不十分．予算・効率・経済性を考慮した時，必ずしも自前の設備が必要ではないことも念頭に入れておく必要がある．

博物館らしい長期的視野にたった標本資料を活かす設備要求を欠かさないよう期待したい．

大学の所蔵する学術資料の中で特に重要なものを国や県の文化財に指定してもらい，大学上層部に価値の認識と活用の必要性を考えてもらうべきではないか.

C. 新キャンパス計画

C－①. 位置　　**評価平均 B(3.8)**　[B, B, B, B, C]

・遠藤：机上プランとしては至当であるが，今後は，より優れた理念をもって実現へ挑まねばなるまい．部局が地図上にプロットされても，学内の無理解や阻害要因が絶えないことが予見され，仕事が大変なのはこれからである.

・高田：新キャンパスに移転することを前提に建設位置を検討することは必要と感じるが，一般の利用者（見学者）の利便も考えた設置位置であるべきである.

・牛尾：「大学の顔」となるべき博物館をより重要視するよう学内に訴求するとともに，学外からの応援圧力も受けられるよう努力する必要がある.

・大野：絵に描いた餅に終わらないように，最大限の努力をお願いしたい.

・松枝：構想上は新キャンパスの中心部に予定されており申し分ない．ただし，伊都キャンパスでなければならない必然性は無いようにも思える．効果的な博物館活動のためには，博物館の分館的なセンスで箱崎キャンパスでの将来的な展開の可能性も見据えてはどうか.

C－②. 建物　　**評価平均 B(3.6)**　[C, B, B, B, C]

・遠藤：部局の案に欠陥があるわけではない．気になるのは学内からの館への理解と支援であり，そのためにも建物に込める理念と，施設の水準に気を配って頂きたい.

・高田：建物の外観にこだわらず，機能中心の設計でありたい．また収蔵機能だが，博物館としての展示や教育の機能も十分に果たせる博物館建築であってほしい．一般博物館で実践力となる学芸員養成のための博物館であることが，大学博物館でもある.

・牛尾：建物だけでなく，本館プロパーの付属土地等を確保し，希少植物等の保全・育成を図ることも考慮できないか．ミニ水族館，植物園等を設置できないだろうか.

・大野：絵に描いた餅に終わらないように，最大限の努力をお願いしたい.

・松枝：グランドデザインは理想的なものとなっている．移転スケジュールを意識した短期的・長期的なプランニングとともに大学当局に絶えず提示して，理解・浸透を図ることが必要である.

部局が地図上にプロットされても，学内の無理解や阻害要因が絶えないことが予見され，絵に描いた餅に終わらないように，最大限の努力をお願いしたい.「大学の顔」となるべき博物館をより重要視するよう学内に訴求するとともに，学外からの応援圧力も受けられるよう努力する必要がある.

現在，大学博物館が使用している面積は常設展示室，標本庫，研究室，第 1 分館，第 2

分館など併せて 4000 ㎡弱である．10 年後に箱崎キャンパスがなくなるときまでに，九州大学が持つ 750 万点以上の学術資料を収蔵し，整理し，教育と研究に活用するための十分な面積を持った建物を確保する必要がある．

大学博物館に対する学内外の理解と支援を得るために，理念と水準に十分に気を配り，施設の獲得に向けた最大限の努力が必要である．

構想上は新キャンパスの中心部に予定されており申し分ない．ただし，伊都キャンパスでなければならない必然性は無いようにも思える．効果的な博物館活動のためには，博物館の分館的なセンスで箱崎キャンパスでの将来的な展開の可能性も見据えてはどうか.

Ｖ．将来構想・将来計画

A. 将来計画　　評価平均 B-C(3.5)　[C, C, B, C, B, A, C, C]

・遠藤：展示公開や社会貢献ばかりに手堅いアイデアが躍っているように見える．館の本質が学術研究に根ざすことをより重んじ，研究で世界をリードする博物館像を打ち出す必要がある．現状の案は九大全体の対納税者説明責任を独りで背おうかのような閉塞感が強い．他人に貢献する以前に，真理探究者としての未来像をより強く示してほしい．

・高田：現状では，学内に逸散している貴重な学術資料を，適正な環境の元に整理，統合，保管し，系統的に管理運営することが第一目標であることとは認める．一方で，大学博物館は研究者のための「保管倉庫」ではなく，それらの学術標本資料を，広く社会教育のために活用することを大前提にした管理を行なうべきであろう．このためには，収蔵計画の時点から，将来的な展示や教育での活用を見据えての計画性が求められる．けっして「お蔵入り」「博物館行き」となった死蔵物の山にならないことを願いたい．きちんとした収蔵保存の計画が終わってから次の展示構想や教育システムの構築をするのではなく，同時並行して，すべての博物館の役割を整え，新博物館完成時には，主要ミッションにかかげる役割を果たせる機関であるべきだろう．

・瀬戸：大学として，博物館の位置づけ，求める機能の再整理と共有化が必要ではないか．理念・ビジョン・役割・事業の方向性を明確に整理して，素晴らしい新博物館の建設を期待する．

・伊藤：現時点での将来構想・将来計画は新キャンパスへの移転後の新博物館を念頭に置かずには考えられない．前項にも関連するが，まず，新博物館のイメージ・ビジョンを明確に打ち出し，それに向けての活動計画を立てる必要がある．現在の構想・計画からは生き生きとしたイメージがわかず，新博物館への力強い意志が伝わってこない．大学研究博物館としての具体的な基本構想を大胆に打ち出し学内外の理解を得る努力を積極的にされることを望む．

・大木：他学部が新キャンパスへ移転する中で，他学部との連携，教育，とくに学芸員資格のためのカリキュラムはどのようにするのか．

・島田： ＵＭの主要ミッションについては，ＵＭの理念・目的に沿って書かれてはいるが，「社会の大学への要望を受け取る窓口」，「地域住民の生涯教育支援」に関する文言が省かれているが，何か理由があるのだろうか．学術標本についての基本的認識とＵＭの役割については，学術標本の重要性と一元的保存・管理が強調されている．しかし，理念でいう「分野横断的研究」，「知的刺激を与える実物教育」，「標本及びデータの多角的・効率的有効活用」や，ＵＭ設置目的の④については省かれている．ミッションの絞り込みを意識してのことだろうか．ＵＭの新キャンパスへの移転に関する要望については，ＵＭの伊都キャンパスへの移転に関する真剣で強い希望が記されていて，大いに評価できる．旧工学部本館建物のサテライト展示についての要望には賛成である．移転に向けたＵＭの活動計画，移転までの具体的活動計画については，あらゆる可能性を視野に入

れた網羅的な計画になっているようにみえる．スタッフの労力と負担を考えると，優先順位をつけて実施することが望ましい．伊都キャンパス内に，どのような規模で博物館をつくるかについては，学内でもいろいろな提言がなされてきた．将来構想として建物の模型をも作り，それを絶えず掲げてソフト・ハードの両面からあるべき姿を模索していく，そういう努力を継続して欲しい．かつて，学内には博物館または資料館をつくるための準備委員会が実に 30 年に亘って設けられ，議論だけでなく時には陳情までも繰り返してきたが，この先人達の不屈の精神を忘れてはならない．社会には構想から５０年，１００年かかって出来上がった事例は山ほどある．

・大野：資料保全をふまえた優れた計画．地域連携，学生のリクルートなど，大学のショーウィンドウの機能の面からも館建設に全学の支援が必要．

・黒木：展示公開や社会貢献において，研究者とユーザーをつなぐ人材の必要性を感じる．

・松枝：博物館移転事業が，オール九大の観点で全学的に進められるような機運を盛り上げるような施策を行う必要がある．

将来計画に関しては委員の評価が大きく分かれた．評価は概してあまり高くなく，今後さらに検討を要する．

将来計画では，公開展示や社会貢献が目立つ．大学博物館の本質が学術研究に根ざすことをより重んじ，研究で世界をリードする博物館像を打ち出す必要がある．

新キャンパスへの移転後の新博物館のイメージ・ビジョンを明確に打ち出し，それに向けての活動計画を立てる必要がある．大学研究博物館としての具体的な基本構想を大胆に打ち出し学内外の理解を得る努力を積極的する必要がある．博物館移転事業が，オール九大の観点で全学的に進められるような機運を盛り上げるような施策を行う必要がある．

大学博物館が大学だけのものではなく，社会の大学への要望を受け取る窓口であり，地域住民の生涯教育を支援する組織でもあることを意識すべきである．

大学博物館は，地域連携の窓口であり，学生のリクルートなど大学のショーウィンドウの機能を持つことからも，館建設には全学の支援が必要である．

B. 事業部構想　　評価平均 C(2.7) [E, D, B, C, C, B, D]

・遠藤：ここで論じられてきたような事業部は不要である．構想された事業部は自治体の社会教育機関が満足するレベルの，表現なき「順法装置」に陥るであろう．館の組織的未来像は，博物館の低質化を許すこのような部門を肥大化させることではなく，高い表現力を磨き楽しむ，力量あふれた学者を増員することで構築すべきである．

・高田：言葉のあやかも知れないが「社会貢献」という言葉はどちらかといえば，「社会責任」言い換え，もう少し強い意識（必ずやらねばならない責任として）のミッションとしてとらえるべきだろう．また，自己点検評価に書かれているように，公共団体や民間組織などの外部の人材を配置することは，いろんな経験や文化を導入することに

なり，ぜひ，前向きに実現の方法を模索していただきたい．大学博物館が，単に研究の機能を主とし，学芸員養成も「研究者育成」という偏った教育にならないよう，広く様々な博物館で活躍する人材育成をする機関ととらえていただきたい．

・瀬戸：事業部構想が目指した事柄は，博物館としても重要なものであり，大学としても力を入れていくべきものと考える．長期的構想の中で，具体化が望まれる．

・伊藤：事業部構想としては頓挫してしまったが，博物館は大学が地域市民と結びつく最も近い位置にあることに変わりはなく，将来構想の中で十分検討する必要がある．

・牛尾：法人化に伴い大学は一層地域社会との共生を指向し，その支援を受けることが存立の必須条件であろう．これは「開かれた大学」のフレーズに集約されるものであろうが，そのためには企業と同様に社会貢献活動や広報・広聴活動が重要である．この目的を円滑に果たすためには，これらの活動全般に関わり管理する新組織を設立することが望ましい．事業部も同様なコンセプトで構想されていたものと推測するが，頓挫したのは残念である．しかし，この問題は今後の大学の存立・発展のためには避けては通れないものであることを今後も強く主張・提言し，復活を求めていく必要があり，博物館はそのイニシアティブを強力に執ることが期待される．

・大木：研究部と事業部に分けることのメリット，デメリットの議論はなされているか．スタッフは数十人，数百人いる一般の博物館（大学博物館の理念と異なる）であれば事業部は必要だと思います．また，社会貢献だけを分けることができるのでしょうか．

・大野：日常業務だけでなく，サイエンスコミュニケーション力向上など研究博物館としての機能もになった事業部の設置が望まれる．

・松枝：事業部構想は，大学博物館として将来考慮すべき重要な案件であるが，その実現のためにはクリアすべき種々の難題が横たわっている．現時点ではそれよりも優先すべき課題の解決にまず取り組むべきである．

事業部構想については委員の評価がかなり大きく割れ，概して評価は低かった．

事業部が，事業と研究を一体とする大学の研究者の仕事の場か，博物館で働く教員を助ける企画・管理・運営をする場か十分に議論する必要がある．

博物館の事業に協力してもらえる教員の名前と専門分野のリストを作り，博物館がそれらの教員と日ごろからコミュニケーションを執っていることが重要である．

Ⅵ. 中期目標・中期計画

A. 教育に関する目標　　評価平均 B(3.6)　[A, B, D, B, C]

・遠藤：申し分ない文言である．

・高田：博物館専任教員が学部，学府の「兼任」であることがまず問題．博物館学という一つの学問分野における専任教官を据え，それを本務にすることが求められる．（本務に差し支えない範囲で，という考え方は，博物館教育は片手間でしかなくなると危惧する）

・大野：講義・実習にも館の独自性を込め，将来の協力者，支援者を養成する視点も必要．

・松枝：教育委員会との連携について検討が必要．学生の卒・修・博論始動の実態が見えない．どのような方向性を考えているのか，十分な議論と公開が必要であろう．

博物館教育は，博物館教員の本務である．本務に差し支えない範囲で行う他部局の専門教育への協力との関係は，常に博物館内で議論され，認識を共有すべきである． 博物館が行う講義・実習にも館の独自性を込め，将来の協力者，支援者を養成する視点も持つ必要がある．

B. 研究に関する目標　　平均 B(4.0)　[A, C, B, B, B]

・遠藤：適切，妥当な目標である．

・高田：自己点検評価に書かれているように，博物館学に特有の研究（展示学や博物館教育，社会連携など）の研究をできる体制をつくらなければ，博物館が単に学部教員の成果の保管庫になってしまい，博物館としての社会機能を果たせなくなるのではと危惧される．

・大野：「総合」研究博物館の「総合」を，雑多な分野の寄せ集めとするか，諸分野を統合して新たな地平を開く意味にとるのか，より明瞭なスタンスの表明が期待される．

・松枝：掲げられた目標は評価されるが，実現性はどうか．

大学博物館が，博物館としての社会機能を果たすためには，博物館学に特有の研究（展示学や博物館教育，社会連携など）の研究をできる体制をつくることも必要である． 総合研究博物館が，雑多な分野の寄せ集めでなく，真に総合的研究の場となるための努力が必要である．

C. その他の目標　　評価平均 B(3.8)　[A, C, B, B, C]

・遠藤：今後も幅広く構想してほしい．

・高田：ボランティア制度の導入は，単に「労働力」として期待するのは間違いで，ボランティア育成をすることが一つの博物館機能として位置づける必要がある．「何をしてもらう」のではなく彼等に「何をさしあげることができるか」という視点でボランティ

アを受け入れ，育成していく体制がなければ，流行や真似事での制度となり意味がない．そこまでの覚悟を持って取り組むべきだろう．また，博物館は基本的に「博物館利用者（一般）」のためにあると考え，展示や地域連携などを通して，多くの方に利用，来館される博物館作りと運営を心がけたい．

・大野：さまざまな取り組みのノウハウの蓄積，構築されたネットワークの維持拡大に向けた方策を真剣に考えて欲しい．

・松枝：博物館活動を左右するボランティアの活用計画があまり見えない．市民セミナー，公開講座の今後の展開に関する展望が明瞭でない．博物館全体としての国際連携，国際共同研究の展開がほしい．

博物館活動を左右するボランティアの活用計画があまり見えない．ボランティア制度の導入は，単に「労働力」として期待するのではなく，生涯学習，社会貢献を目指す一般の人を受け入れ，育成する一つの博物館機能として位置づける必要がある．

博物館は基本的には博物館利用者のためにあり，展示や地域連携を通して，多くの方に来てもらい，利用される博物館作りと運営を心がけるべきである．

博物館全体としての国際連携，国際共同研究の展開がほしい．

Ⅶ. 点検評価

A. 平成 16 年度実施の自己点検・評価　　評価平均 B(4.0)　[A, B, B, B, B, C]

・遠藤：幅広い角度からの意見を統合した妥当なものである．

・高田：前述したが，ここまでは各学部の教員が蓄積してきた研究成果や収集資料を，どのように保管，保存するかに腐心してきたように思える．確かに，これまでの学内環境では致し方ない部分も多いが，この点検・評価の成果を今後の新博物館構想の礎にしていただきたい．

・雪田：まだ始めたばかり．様々な問題点が，浮かび上がってきた段階．

・松枝：総合的且つ客観的な点検評価となっているが，もう少し厳しい評価をすることによって一層の発展が望めたように思う．

自己点検・評価委員は博物館運営委員から選出された人々で構成されている．まだ問題点が浮かび上がってきた段階であり，点検・評価の成果を今後の新博物館構想の礎として生かすことが重要である． 一層の発展を期するため，点検・評価委員を増やし，幅広い角度からより厳しい点検評価を受ける必要がある．

B. 平成 17 年度実施の外部評価　　評価平均 B(4.0)　[B, B, A, C]

・遠藤：筆者自身が委員であるので無記入とする．

・雪田：予想されうる内容となっている．

・松枝：外部評価は，次の発展を期待してある程度厳しい評価が必要であるが，厳しい評価が少なかったように思われる．特に移転問題に関して，実現までにどのように取り組んでいくべきかの建設的な提言がほしかった．

外部評価委員は，学外の幅広い分野の人々で構成されている．外部評価の成果を今後の新博物館構想の礎として生かす必要がある．

C. 平成 22 年度自己点検・評価　　評価平均 B(3.8)　[B, B, B, B, B, C]

・遠藤：「評価疲れ」という，評価に対する批判的で妥当な考え方も幸に定着したと思う．今後は真に館がよくなるための，より建設的な点検を目指してほしい．

・高田：現状の大学の課題や問題点を踏まえて，ここ数年以内に実現可能な範囲や努力目標としての評価と感じた．今回（２２年度，外部評価）は，新キャンパスに移転後，もしくは移転を前提とした評価や目標設定の「外部評価」との立場で論述させていただいた．内部的には十分に課題分析ができているが，まだ「研究博物館」を目指しており，公に公開されるものという意識の到達度が低いという印象がある．一方で，外部委員の意見も汲み入れようとする記述もあり，現状の体制への危機感は共有できているとも思

われる．

・牛尾：評価・点検項目の説明文にマイナスや反省の言及が少ない．評価委員が少なすぎる．理系に偏奇していないか．工学部，医学部系がゼロなのは何故か．少なくとも全学部から１人は評価委員に就くべきではないか．

・島田：報告書は１４０ページに及ぶ分厚いもので，内容も広い視野から点検されていて評価できる．この内容は，UM自体が中期計画に反映させるべきものであって，ＨＰで公表する必要性はない．

・雪田：前回問題となっていた「業務が多岐に広がり過ぎ」「ミッションの絞り込み」に関し，努力の跡を感じさせる．しかし，それは教員を含めたスタッフの，人的資質によるものであると考える．今後，継続・発展させるためには，具体的に目標を明確化し，資金を確保の上，教員組織とは別に企画・管理運営を担当する事務職組織をしっかりと確立させ，教員と事務職員との両輪で運営していく必要があると考える．

・大野：多岐にわたる課題を点検されており，今後の館の活動指針として有用．最大の課題は，将来計画を実現できる施設整備．

・松枝：全体的に甘めの評価になっているような印象を受ける．今後の博物館活動に関する優先順位を付けた目標設定の提示が必要．評価内容に関して，差し支えない範囲でホームページに掲載し，公開した方が良い．前回の外部評価からの改善点や反省点を盛り込まなければ，点検評価の意味合いが著しく薄れる．

自己点検・評価は制度として定着してきている．建設的な批判により真に大学博物館が良くなるための点検を目指すべきである．

自己点検・評価委員が少なすぎる．委員の人数，分野について検討すべきである．

今回の自己点検・評価報告書の内容を博物館は真摯に受け止め，博物館の改善に生かすよう努めるべきである．

Ⅷ．総括

思えば，博物館を学術文化の中心地として育てることが非常に難しい国情を背負ってきたといえる．わが国では，社会教育も博物館も，戦前は底辺の普及装置，戦後は誘客観光業のための看板か，地方議会の公共事業的利益誘導のための文言でしかなかった．他方，中央省庁における社会教育・博物館と学術・アカデミズムは，縦割りの典型に終始した．長く，博物館は行政官の指揮の下で学問のできない催事場と化し，一方で大学と学者は博物館に我関せずという態度をとり続けたと批判できる．

私はといえば，社会教育・博物館が，作り手からも，利用者からも，取り巻く様々な力からも，不毛なまでに遊離した時代の終わり際に，アカデミズムと社会教育をまたぐかのような立ち位置から，博物館を見ることを始めた人間である．社会教育を体系として学び，同時に専門分野を発展させる場としての博物館が私の目に見えてきたころ，まだ博物館は，ときに官僚の第二の人生の演出場所として，ときに代議士の辣腕ぶりを見せる一項目として，ときに経済大国日本における国際的研究教育水準から取り残された一断面として，申し訳程度に語られ始めたに過ぎなかった．

時移り行革とデフレーションの中で，今日の博物館は，次なる難敵「拝金」と対峙している．大学が，学術が，結局は金銭の出入りで批評され，本質をともなった長期的文化構想に基づいて意義ある施策を打ち出すことができなくなってしまっている．次世代の豊かな文化よりも半年後の特許の数を重んじる風潮が，大学にも学界にも蔓延している．すべての価値観世界観が，半世紀前とは異なる形をとりながら，所詮は現金よりも説得力を持ち得ないと決めつけられる時代に足を踏み入れつつあるのかもしれない．

委員会は本外部評価を，そうした今日的背景を元に，数十年後に向けた未来に恥じることのない提言として残すことを決意した．経営と財政の健全性は重要であるが，それは大学博物館の未来への責務の中では必要条件のひとつでしかない．大学博物館を営利へ向けた合理主義で運営してはならない．大学博物館を一大学法人の広報広告部門に陥らせてはならない．ましてや，大学博物館を市場原理に躍らされる誘客遊興施設に位置づけてはならない．大学博物館には，真理を探求し，社会と人類に新しい考え方をもたらす責務があり，それは文化の深化という現実として未来へ受けつがれるものである．崇高でも高貴でもなく，市民にもっとも近い素朴な学術文化の自律した中心地として，大学博物館に活躍してもらうべく，委員会はいくばくかの評価と提言を行った．

それぞれの項目における各委員から博物館への投げかけは，一部局が受け身に終始するという平凡な評価の有り様を克服し，字面の一つ一つが，博物館の未来へ向けた姿勢理念づくりと，実効性高い施策創出に関わってくることを念頭に置いた．したがって，小さな項ごとに五段階評価や点数が書き込まれてはいるが，そうしたものは印刷物上の最小限の必要悪だと考えていただきたい．本委員会は，社会の未来へ向けた博物館職員の営みを，ただのアルファベットや数字に置き換えるほど，“評価”と称する愚昧な行動に出たもので

はないことを明言しておく．各委員の意見の一字一句が，文化を築くことを真に願う博物館と評価者の間で，創造に堅固に結び付きながらで成就することを祈りたい．

また評価においては，施設や研究計画など，予算的にも規模的にも一朝一夕に解決のつかない課題に対して，現実には無力に近いかもしれない理想論を戦わせることを躊躇しなかった．それが，いずれいつの日か，高い志とともに文化の中心たる九州大学総合研究博物館のさらなる具現化に貢献する議論であることを，信じて疑わなかったからである．

最後になるが，本委員会の残す考え方の数々が博物館を進歩させ，社会と人類に末長く愛される存在となることを，心より祈る次第である．

九州大学総合研究博物館外部評価委員会委員長　遠藤秀紀

あとがき

前回の九州大学総合研究博物館(2000～2004)外部評価では，大学博物館関係者，公立博物館関係者，マスコミ，学生，市民から８名の方に評価委員に就任していただいた．委員には様々な立場からご批判・御助言をいただいたが，初等・中等教育関係者や一般博物館関係者，女性が含まれていなかった点などは反省すべきであった．

今回の九州大学総合研究博物館(2005～2009)外部評価では，評価委員の数を女性３名を含む 13 名（大学博物館４名，私立博物館を含む大学博物館以外の博物館３名，マスコミ１名，主婦・小学校教諭を含む市民４名，学生１名）に増やした．大学博物館関係者とは，日ごろから大学博物館等協議会・博物科学会等を通じて意見・情報を交換する機会があるが，私立博物館から大学博物館とその他の博物館の連携・交流，博物館教育の充実を図るべきだという指摘を受けたことは，これまで大学博物館に不足していた視点であろう．今回評価委員の数を増やしたお陰で，主婦，小学校教師，ボランティア団体活動家など様々な視点から批判や助言がなされた．市や県の教育委員会との連携，ボランティア制度の導入など真剣に検討すべき課題である．

今回の外部評価では，各委員の評価は，項目によってはＡからＤまでばらついたものもあったが，各項目の評価平均は全てＢとＣになってしまった．外部評価の目的は，今後の大学博物館のより良いあり方を考える上で参考とするために，この５年間の博物館活動を評価し，批判・助言してもらうことにあるので，次回の外部評価では改善や再検討を要する項目についてはより厳しい評価を，優れている項目についてはより高い評価を付け，全体として改善・再検討を要する項目と，九州大学総合研究博物館の特色として力を入れ，一層伸ばすべき項目とを際立たせるという外部評価の方針を決めておく必要があろう．

（松隈）

第３部　（付）自己点検・評価報告書（2005～2009）

は じ め に

九州大学総合研究博物館（以下博物館という）は、平成12年4月に創設され、本年4月に10周年を迎えた。この間、専任教員７名の体制で多種多様な活動を行なってきた。各種展示会や講演会などを通じて九州大学の教育研究活動を社会に紹介し理解と支援を求める活動、学内に分散保存されている学術標本の収蔵管理・活用体制の構築、学芸員資格に関連する講義・実習、各専任教員の専門に沿った学部教育・大学院教育などの高等教育、各専任教員の専門に応じた研究など多岐に亘る。

それらの殆どは継続的に実施してきたが、博物館を取り巻く状況の変化によって、活動の重点がしだいに変化してきたことは否めない。創設時の当館にとっての最大の問題は、九大が伊都キャンパスへの移転を控え、箱崎キャンパスに新規の建物が建てられないのに加え、既存の建物にも空き部屋が乏しいために独自の建物を持てず､使用面積350㎡という狭小な面積での出発を余儀なくされたことであった。博物館でありながら、標本・資料類の収蔵施設がなかったのである。そのため当初の５年間、すなわち平成12～16年度（前回の自己点検評価期間に当たる）には、公開展示・特別展示・サテライト展示などさまざまな開示活動によって、当館の存在を学内外にアピールすることに重点を置かざるを得なかった。

平成17年度から、第Ｉ期移転、すなわち工学部の伊都キャンパスへの移転が始まり、箱崎キャンパスに空き建物ができたため、部屋の獲得の努力を続けて収蔵施設・常設展示室・教員研究室などを設け、設備の充実にも努め、平成22年度現在で、約4000㎡の使用面積に至っている。そこで前評価期間における最大の課題であった各部局からの標本・資料の移管・収蔵を鋭意進めるとともに、それらの教育・研究への積極的活用を開始した。しかし、理学部・農学部・文化系諸学部の伊都への移転に伴う標本・資料類の移転対策、伊都キャンパスでの博物館施設の建設に向けた活動の展開など、難題が山積している。

そこで博物館は、この平成17～21年度の５年間の活動について自ら点検・評価を行って真摯に総括し、今後の活動の指針の策定に反映させようと考えた。

本自己点検・評価報告書は、運営委員会で選ばれた自己点検・評価委員会委員が実施した自己点検・評価の結果と課題についてまとめたものである。評価は大学評価・学位授与機構の例に倣い、評価項目をたて、項目を更に要素に分けて、それぞれについて、個々の委員が評価し、その結果を総括する方法で行った。

自己点検・評価の目的は、博物館の問題点を洗い出し、教育研究活動、社会連携活動などの改善と今後のより一層の発展に役立てることである。従って、本報告に博物館の現状を正しく反映させるために、根拠となる具体的資料を可能な限り全て揃えた。今後、博物館は、本報告書に指摘された不十分な点について掘り下げて問題を分析し、改善に取組むことが重要である。

平成22年12月

九州大学総合研究博物館運営委員会
自己点検・評価委員会委員長　　岩永省三

目　　次

第一部　自己点検・評価結果……1

第二部　自己点検・評価本文……18

Ⅰ.博物館活動
Ａ．活動の理念と目標……18
Ｂ．学術標本の収蔵管理……18
Ｂ－①．標本調査と収集……18
Ｂ－②．移　管……19
Ｂ－③．受　贈……19
Ｂ－④．貸出し……20
Ｂ－⑤．閲　覧……20
Ｂ－⑥．標本整理・データベース化……20
Ｃ．開　示―展　示……22
Ｃ－①．公開展示……22
Ｃ－②．特別展示……23
Ｃ－③．サテライト展示・その他の展示……23
Ｃ－④．常設展示……24
Ｃ－⑤．平常展示……25
Ｃ―⑥．第一分館展示……26
Ｄ．開　示―情報発信……26
Ｄ－①．ホームページ……26
Ｄ－②．インターネット博物館……27
Ｄ－③．所蔵標本データベース……28
Ｄ－④．出版・広報……29
ア．概要（和文・英文）……29
イ．博物館ニュース……29
ウ．研究報告……29
エ．年　報……30
オ．その他の出版物……30
Ｄ－⑤．新聞等による報道……31
Ｅ．研　究……31
Ｅ－①．系の研究……31
Ｅ－②．共同研究……32
ア．P&P 研究……32
イ．学会の開催……35
Ｅ－③．専門分野の研究……35
Ｆ．教　育……35
Ｆ－①．学芸員資格関連授業・実習……36

Ｆ－②．大学院教育……36
Ｆ－③．学部教育……37
Ｆ－④．教育支援……37
Ｆ－⑤．社会教育・学校外教育への貢献……39
Ｇ．学内他部局との連携……40
Ｇ－①．教育研究における連携……40
Ｇ－②．全学委員会などへの参画……40
Ｈ．他博物館などとの連携……41
Ｈ－①．大学博物館等協議会……41
Ｈ－②．福岡市博物館……41
Ｈ－③．福岡市少年科学文化会館……42
Ｈ－④．九州国立博物館……42
Ｈ－⑤．他大学博物館……43
Ｉ．社会貢献・教育普及活動……43
Ｉ－①．公開講演会等……43
Ｉ－②．コミュニケーションミュージアム事業……44
Ｉ－③．談話会・セミナー……44
Ｉ－④．ひらめき☆ときめきサイエンス……45
Ｊ．国際連携……45
Ｊ－①．海外研究者との交流・共同研究……45
Ｊ－②．外国人研究者の受け入れ……46

Ⅱ．管理・運営……46
Ａ．管理運営の理念……46
Ｂ．管理運営体制……47
Ｂ－①．運営体制と意志決定 ……47
Ｂ－②．事務体制……49
Ｃ．教員組織と人事……49
Ｃ－①．教員の配置……49
Ｃ－②．教員の選考……51
Ｄ．財　政……51
Ｄ－①．予　算……51
Ｄ－②．外部資金……53

Ⅲ．施設・設備……56
Ａ．施設の状況……56
Ａ－①．博物館の施設の状況……56
Ａ－②．部局の標本収蔵庫の状況……57
Ｂ．設備の状況 ……57
Ｃ．新キャンパス計画……59
Ｃ－①．位　置……60
Ｃ－②．建　物……60

Ⅳ. 将来構想・将来計画……61
Ａ．将来計画……61
Ｂ．事業部構想……64

Ⅴ. 中期目標・中期計画……64
Ａ．教育に関する目標……64
Ｂ．研究に関する目標……65
Ｃ．その他の目標……65

Ⅵ. 点検評価……65
Ａ．平成 16 年度実施の自己点検・評価 ……66
Ｂ．平成 17 年度実施の外部評価 ……66
Ｃ．今回の自己点検・評価……67

第三部　参考資料……69
資料ＩＡ　九州大学総合研究博物館の概要……69
資料ＩＢ②　移管標本・資料一覧 ……71
資料ＩＢ③　受贈標本・資料一覧 ……71
資料ＩＢ④　九州大学総合研究博物館標本・資料貸与要項……73
資料ＩＢ⑤　九州大学総合研究博物館標本・資料閲覧要項……76
資料ＩＣ①　公開展示一覧 ……79
資料ＩＣ②　特別展示一覧……80
資料ＩＣ③　サテライト展示一覧……84
資料ＩＤ④　出版物一覧……88
資料ＩＤ⑤　新聞等による報道一覧……89
資料ＩＥ②ア　Ｐ＆Ｐ研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」での事業一覧……90
資料ＩＥ②イ　第 10 回全国大学博物館等協議会・第２回博物科学会の開催 ……93
資料ＩＥ③　専門分野の研究一覧……95
資料ＩＦ①　学芸員資格関連授業・実習一覧……113
資料ＩＦ②　大学院教育関係授業一覧……114
資料ＩＦ③　学部教育関係授業一覧……115
資料Ｉｉ①　公開講演会等一覧……117
資料Ｉｉ②　コミュニケーションミュージアム事業一覧……119
資料Ｉｉ③　セミナー一覧……121
資料ⅡＢ①　九州大学総合研究博物館規則……123
館長・副館長・運営委員会委員・事務部名簿……124
資料ⅡＣ①　九州大学総合研究博物館の教員組織に関する内規……127
九州大学総合研究博物館資料部内規……127
九州大学総合研究博物館資料部名簿……128
九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部内規……131

九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部名簿……131
協力研究員の受け入れに関する内規……132
協力研究員名簿……132
専門研究員の受け入れに関する内規……134
専門研究員名簿……134
資料ⅡＣ②　九州大学総合研究博物館教員選考内規……135
資料Ⅴ　九州大学総合研究博物館の中期目標・中期計画……136
資料ⅥＡ　九州大学総合研究博物館自己点検・評価委員会内規……140

第一部　自己点検評価結果

今回の自己点検評価においては、大学評価・学位授与機構の例に倣い、評価項目をたて、項目を更に要素に分けて、それぞれについて、個々の委員が評価し、その結果を総括する方法で行った。

評価項目として次の6項目を取り上げ、項目・要素に応じて理念、実施体制、活動の内容及び方法、活動の実績、達成状況及び効果のいずれかについて検討した。

I. 博物館活動
II. 管理・運営
III. 施設・設備
IV. 将来構想・将来計画
V. 中期目標・中期計画
VI. 点検評価

評価は5段階とし、以下の表現で表す内容を意味する。

５；目標・目的が十分に達成され、向上及び改善のためのシステムが十分に機能している。
４；概ね達成されている、或いは概ね機能している。
３；相応に達成されている、或いは相応に機能している。
２；ある程度達成されている、或いはある程度機能している。
１；ほとんど達成されていない、あるいはほとんど機能していない。

以下では、項目ごとに５名の評価委員が与えた評価（５～１）を、５４４４３のように列記し、その平均を示す。平均値の小数点以下の数値に細かい意味は無いが、「評価４でも３に近い」といった大勢は伺える。

続けて、評価委員のコメントを記す。コメントは類似内容で纏められるものは纏めたが、評価が割れる場合も多く、そのような場合は、なるべき原文に近い形で記した。本評価は、九州大学総合研究博物館（以下、博物館と略記）が 2005 年度から 2009 年度の活動を総括し、今後の活動に生かすためのものであり、評価者の立場・視座の相違から来る多様な意見の存在を知ること自体が、活動を振り返りより良い方向を目指すうえで、重要な意義を有すると考えられるからである。

自己点検評価委員

坂上　康俊　人文科学研究院
佐野　弘好　理学研究院
岩永　省三　総合研究博物館
中牟田義博　総合研究博物館
根本　正明　理学部等事務長

自己点検評価委員会実施日

平成 22 年 9 月 30 日（木）・10 月 18 日（月）・12 月 7 日（火）

Ⅰ．博物館活動

A. 活動の理念と目標　５５４４４；平均4,4

○博物館の活動理念として多岐にわたる目標が掲げられているのは変更を要しないが、恒常的にすべてを同じエフォーとで実施し続けるのは無理があり、学内外で当館が置かれた状況に応じて、時期ごとに重点的に実施すべき活動をある程度絞って目標を設定する必要がある。

○博物館の任務・使命が多岐にわたることは理解できる。しかし、現在博物館が面している厳しい状況を考えれば、なかでも学部・大学院教育をより一層拡大・充実させることを理念・目標のなかで鮮明に打ち出すことを検討すべきである。

○博物館が収集・分類・整理・保存・管理に責任を負う学術標本・資料を明確に規定しなおすべきではないか。埋文センター、記録資料館との関係を整理しなければならない。

B. 学術標本の収蔵管理

B－①. 標本調査と収集　５４３３３；平均3,6

○博物館教員の日常的活動の成果としての、調査と収集は地道に進めるべきである。

○海外での調査・標本資料採集については、現地の研究機関・研究者との共同研究が不可欠である。これを海外研究機関等の連携・協力関係の強化のチャンスと捉え（姉妹博物館協定の締結など)、学術活動の活性化を図ることも検討すべきである。

○専任教員による調査・収集のみではなく、大学博物館として、資料部全体で行われている活動も視野に入れる必要がある。

○計画性・自主性という観点からは、個々の調査の位置づけが説明不足である。

B－②. 移　管　４４３３３；平均3,4

○理・農のキャンパス移転の時期が迫ってきているなかで、収蔵スペースが決定的に不足している現状はきわめて深刻である。しかし建物新設のメドがたたない現状では、学内の各種標本資料の一時的収蔵・管理のために、より広く、利便性に優れたスペースの確保に向けてあらゆる可能性を模索し、方策を講じる必要がある。

○更なる収蔵場所確保と保存環境の整備が課題である。

○理念にある学術標本の効率的管理と恒常的保存をひろく行うためには移管にこだわらない、資料部を活用したシステム作りが必要ではないか。

○収集・移管・受贈はいずれも博物館独自の収蔵資料の形成に関わる手段である。収集・受贈も含めてのことだが、大学博物館は独自の収蔵資料をあまり持つ必要がなく、日常的な収集・収蔵・管理は各部局に任せておき、博物館は各部局館の調整業務だけしていれば良いという考えもあるが、そのような消極的な態度では、各部局あるいは学外からの信頼は得られない。鼎の軽重を問われることになろう。設立後５年間、収蔵施設をほとんど持てなかったという事情はあったものの、博物館の消極的な態度が博物館の設立に真剣に取り組んだ人々や資料部諸氏の失望・顰蹙を買い、博物館への支持・理解を減少させたことは事実である。国立新美術館のよ

うに独自の収蔵品は持たず、展覧会と貸し会場業務だけするような博物館なら大学に必要ない。独自の重要資料を持つことが博物館の存在意義を高めるのである。そのような意味で収集・移管・受像は積極的に進めなければならない。もちろんそのための物的・人的体制の整備が不可欠である。

○貴重な資料を受け入れた以上、整理・活用が望まれるが、その進捗と態勢に不安がある。

B－③. 受　贈　４４４３３；平均3,6

○学外からの貴重標本資料の受入は今後とも進めるべきである。しかし、今後の受贈標本資料数量の増加を想定し、上記B−②と場合と同様、一時的収蔵スペースについてさまざまの可能性を探り、獲得に向けて一層の努力が必要である。

○受贈が九大本来の標本・資料管理の妨げにならないように注意を要する。

○更なる収蔵場所確保と保存環境の整備が課題である。

○貴重な資料を受け入れた以上、整理・活用が望まれるが、その進捗と態勢に不安がある。

B－④. 貸出し　４４４４３；平均3,8

○貸し出しにあたっては、所蔵標本資料の紛失、破損等に十二分に注意が必要であり、貸し出し業務の体制の確立とルールの策定が急務である。

○九大が所蔵する標本・資料の活用と認知の上で重要なので、資料部を含めた体制の整備が望まれる。

○貸し出し希望の増に対応する体制整備が課題である。

○貸し出し実績のデータを添付されたい。

B－⑤. 閲　覧　４４４３３；平均3,6

○閲覧にあたっては、所蔵標本資料の紛失、破損等に十二分に注意が必要であり、閲覧業務の体制の確立とルールの策定が急務である。

○九大が所蔵する標本・資料の活用と認知の上で重要なので、資料部を含めた体制の整備が望まれる。

○閲覧希望の増に対応する体制整備が課題である。

○閲覧実績のデータを添付されたい。

B－⑥. 標本整理・データベース化　４４４３３；平均B3,6

○伊都キャンパスへの移転を控え、移転時の混乱を避けるために、標本・資料の整理・データベース化の促進が急務である。

○タイプ標本などの重要標本については、他大学博物館で進めている事例等も参考にし、画像データを添えた Web 上での公開サービスについても検討すべきである。また現在公開されているデータベースについても検索項目の増設やあいまい検索機能の付加などを行って、利便性を高めるなどの改善が必要である。

○データベースの公開にこだわらず、移転に向け、ひろく標本整理が行われることが望ましい。

○記録資料のデータベース化は、博物館がするべき事ではないのではないか。業務を整理し、効率的に館務を遂行する必要がある。

C. 開示―展示

C－①. 公開展示　５５５４４；平均 4,6

○少ないスタッフでよく回転させている。

○各部局の教員を中心とした展示活動や二万人以上の見学者は評価できる。

○先行展示の開催以後、さまざまなテーマで毎年公開展示を継続してきた点は、博物館の社会貢献事業として高く評価できるので、今後も発展的に継続することを期待する。しかし、これまでは、標本資料を取り扱うテーマの展示が中心に行われてきた。公開展示の主な目的が学内各部局の研究成果の社会への発信であるならば、今後は実験・理論系の研究成果の発信をテーマとして開催することも検討すべきである。

○自然史系展示の会場はここ数年、来客の大部分が小学生とその保護者という少年科学文化会館を借用している関係上、概説的・入門的内容にせざるをえなくなっている。少文における小学生対象のわかりやすい展示は、将来の科学者を育てる意味で重要なのは重々承知しており、公立博物館の場所を借りる場合、少文でなくても、一般向け・一般受けを考慮せざるを得ないであろう。しかし、他の大学博物館の展示のように、大学ならではの高度な研究成果の発信ができにくく、新しい実験的試みや玄人受けする展示ができないのは問題である。

○博物館建設への理解も得られるような工夫が必要である。

C－②. 特別展示　４４３３２；平均 3,2

○特別展示の学内へのＰＲが不十分であり、本企画に対する認知度・関心が高いとは言えないようである。本企画の重要性のアピールを含めて、より一層のＰＲ活動が必要である。

○P&P 展は、説明パネル主体で、内容が専門的であるために来場者が少ないのが悩みであるが、九大の高度な研究・教育成果の発信は大学博物館の展示として意義があり、伊都キャンパスの共通教育棟などに場を移すのが手かも知れない。

○博物館建設への理解も得られるような工夫が必要である。

○Ｐ＆Ｐは本来博物館の業務とは関係ない。広報業務一般を引き受けるべきではない。

C－③. サテライト展示・その他の展示　４４３３３；平均C3,4

○空港ターミナルビルでの展示は、ほとんど目にとまらず、情報発信の目的が達せられているか甚だ疑問にかんじる。廃止も含めて、空港でのサテライト展示の存続について検討すべきある。伊都キャンパス周辺の公共施設での展示についても同様。

○多大な労力がかかる割りに効果が得られていないのは確かであろうが、伊都地区においては地元での博物館建設支持の機運を高めるために、サテライトを充実させざるを得ない。地元自治体とも協力して情宣を図り、学校教育での利用などを図る必要がある。

○広報の充実が望まれ得る。

○博物館建設への理解も得られるような工夫が必要である。また、展示場所の検討も必要と思われる。

○館員のかけた時間・労力・費用に対して、効果が期待できない。

C－④. 常設展示　５４４４４；平均 4,2

○常設展示室を獲得し、常設展示を開始したことは博物館活動の学内外へのアピールの点からみ

てたいへん意味が大きく、高く評価したい。今後はボランティアなどによる説明員の配置、小・中学生の見学の誘致などについても検討し、より積極的に本展示を活用すべきである。また常設展示や分館展示の公開によってオープンキャンパス企画に参画し、広く高校生にも博物館の存在をアピールすべきである。

○記念講堂展示室が常時開館できなかった状態に比べれば、そう多くは無いながらも毎日入場者があり、団体客への対応もし易くなった点で評価できる。面積の狭さ、展示物の少なさが問題だが、要望を受けた場合には、本館４階会議室、３階列品室、第一分館展示と抱き合わせで公開することで補える。展示替えを時々行なわないとマンネリになる。

○施設が狭い分、展示にさらなる工夫が必要。

○もっと入りやすく、広い空間を確保されたい。

C－⑤．平常展示　４４４３２；平均 3,4

○認知度が低く、入場者数の増加について方策を講じる必要がある。認知度の低さの理由のひとつとして、会場設定の問題があると思われる。常設展示室に近いスペースを獲得して、展示をより効果あるものとすることを検討すべである。

○ファカルティクラブ営業時には、辛うじて入場者を確保していたが、ファカルティが閉鎖し、記念講堂に博物館職員がいなくなった現在では、殆ど開けることができなくなっている。しかも大学本部の方針で、旧工学部本館にこれ以上広い部屋を獲得できないため、本館に移転することもできない。しかしすぐに廃止するのでなく、収蔵展示に性格を切り替えて、「事前申し込みで依頼があった場合に見学可」という形でしばらく存続させるのが良い。

○常設展示との統合整理が必要。

○常設展示と近接した空間を用意して欲しい。

C－⑥．第一分館展示　５４４３３；平均 3,8

○北工場にもともとあった機械類を移動できないこと、南工場の大空間を収蔵庫に使っていること、などから旧工学部本館などに移転するのは無理で、伊都への移転までは現状のまま使わざるを得ない。骨格標本室、高標本室のオープンキャンパス、ホームカミングデーなどでの公開、北工場の各種イベントでの使用が定着しつつあり、設置した意義は十分あったと認められる。

○C−⑤と同様、認知度が低く、常設展示室近くのスペースでの展示室設置を検討すべきである。またボランティアの説明委員を配置する、照明を増設する、建物内のパネル設置、植栽の整備、行き先案内板の増設などの工夫が必要である。

○工場跡を活用した展示も考えられるのではないか。

○常時公開できない状況の改善が課題である。

○展示空間があまりにも分散し、管理・公開に支障をきたす現状は異常である。

D．開示―情報発信

D－①．ホームページ　５５５４３；平均 4,4

○現在のＨＰには各種の情報が掲載され、博物館の最大のＰＲ方法としての機能を果たしていると考えられる。今後は、中期計画・目標、公募情報の掲載も検討すべきである。また関連部局等へのリンク、専任教員紹介、英文ページの構築が不十分で、より魅力的なＨＰにするために

さまざまな工夫がさらに必要である。
○充実したものとなっており、評価できる。
○更新が遅く、「準備中」など解決してもらいたい。

D－②．インターネット博物館　５５５４４；平均 4,6

○公開展示の資料等を公開する場合は、公開展示の共催団体や少年科学文化会館などのサイトからもアクセスを可能にするなど、より一層のＰＲ活動が必要である。また代表的な収蔵標本のＷｅｂ上での公開を目的として、「バーチャルミュージアム」や「館内散歩」に類するものの開設も検討すべきである。
○充実したものとなっており、評価できる。
○面白いものは入館者も多いことが実感できる。この点を踏まえて効率的に運営していただきたい。
○今後も継続して情報を追加・充実させる必要がある。

D－③．所蔵標本データベース　４４４４３；平均 3,8

○博物館の最重要任務であるのも関わらず、予算が限られているなかで、各部局の協力を得て、整備が進められている点は高く評価する。公開済みのＤＢについては、より多くの利用の促進のために、関連学会や他の博物館等のＨＰにリンクの設定を行うなどのＰＲ活動についても検討すべきである。
○標本の移転を控え、データベース公開そのものより、それを目指して各部局で資料整理を進めることが重要である。
○九大にある全体の所蔵標本に対してのデータベースの位置づけが必要。
○画像資料が少なく、活用しにくい。記録資料データベースは記録資料館の任務ではないか。データベース公開の目的を明確にし、館務として効率的に充実するよう図られたい。

D－④．出版・広報

ア．概要（和文・英文）　４４４３３；平均 3,6

○英語版の配布先が不明。G30 への参画、国際教養学部新設構想などの本学の教育研究戦略に呼応する形で、アジア各国の博物館や関係機関等への配布を通じて、国際化の推進を検討すべきである。
○図像のレイアウト、キャプションに工夫を。
○人事異動によるメンバー交替と改訂のタイミングとの関係でここ数年改訂改定できていない。改訂を急ぐべきである。

イ．博物館ニュース　５５４４３；平均 4,2

○学外向けには冊子体の配布が望ましいが、学内向けにはＨＰ掲載や希望に応じて電子媒体での配布を行い、経費節減を検討すべきである。
○博物館活動上のニュースの役割と位置付けについて吟味されることが必要。
○内容が面白く、印刷も良い。概要との落差に驚く。

ウ．研究報告　４４４４４；平均 4,0

○「博物館概要」と同様、海外の博物館との関係強化のためには、英文による学術論文の投稿・掲載を推奨する必要がある。

○内容は高度であるが、博物館・所蔵資料との関連に問題がないか。

○博物館教員の研究成果のうち､各自の専門分野に関わるものは､学会誌に発表の機会があるが、さまざまな博物館活動に関わるものは、博物館学の学会誌がなく、大学博物館協議会も学会誌を刊行していない現状では、発表の場が乏しく、業績にカウントされない難点がある。したがって当研究報告は、それらの業績の発表の受け皿として機能している。内容は博物館活動や個人の研究テーマなど様々なものがあってよく、縛りをかけないほうが良い。

エ．年　報　４４４４４；平均 4,0

○「博物館ニュース」と同様に、学内配布には電子媒体を活用することやＨＰ掲載などを検討すべきである。

○発行は次年度の早い時期が望ましい。

○回を追って充実している。

オ．その他の出版　５４４４４；平均 4,2

○公開展示のカタログなどは普及という意味で評価できる。

○現状の公開展示では、少年科学文化会館・九州国立博物館など展示施設の性格や方針などによって、展示パネルの内容が平易なものに限られたり、展示パネル数に制限があったりするため、学術的に高度な内容を盛り込みにくい。公開展示カタログはその欠点を補う意味がある。

○出版物全体について、九大出版会などと提携して販売するなど、博物館らしい収益法を考えてはいかがか。

○「博物館ニュース」「年報」と同様、電子媒体を最大限に活用する方策を検討すべきである。

D－⑤．新聞等による報道　５４４３３；平均 3,8

○よりいっそうのマスメディアへの登場を期待する。

○今後、報道機関との関係を深めていくことが重要と考えられる。

○博物館建設への理解を得るためにも一層の情報発信が必要。

○宣伝としては良いが、物珍しさに頼っており、単発的な一過性の記事になりがちである。

E．研　究

E－①．系の研究　４４３３３；平均 3,4

○３系の研究は多岐に及んでいるが、それぞれの使命や設置の主旨に沿い、かつ独自性を活かした特色ある研究が展開されているかどうかについて検討する必要がある。また博物館設立 10 年を迎えた現在、系としての研究がどの程度実体を備えたものであるかについても検討する必要がある。

○各系での具体的な研究計画の策定が必要。

○理念的にはわかり、研究報告もあるが、系ごとの実例をあげなければ､「系の研究」という形態が有効なのか評価しにくい。

E－②．共同研究　４３３３２；平均 3,0

○博物館の特色を活用した内容の各専門分野に関する共同研究は、件数が少なく、やや不活発・低調で、中期目標を達成していないと思われる。専任教員が関係部局等に出向いて、セミナーや談話会等での発表の機会を得て、積極的に自己の研究をＰＲし、共同研究を模索する必要がある。また貴重図書や古文書の収集・保存・管理などについて、付属図書館との連携を強化すべきである。

○分野を超えた計画の策定が必要。

○データがなく、実施されたのか、また科研に採用されたのか不明。

ア．P&P 研究　４４４４３；平均 3,8

○この種の研究が着手されて日が浅いことは事実であるが、博物館学等に関する共同研究には、その主旨から考えて、博物館専任教員の全員が参画して推進すべきであり、適切な課題の提案、組織の構築などが必要である。

○博物館固有の研究課題に始めて本格的・学際的に取り組んだものとして評価できる。研究期間終了後も何らかの形で研究を継続させ、今後、この研究で形成された人的ネットワークを基礎にさらに研究連携の幅を広げ、質的にも向上を図れるように共同研究をさらに展開し、将来の九大博物館での実践プランを立てる必要がある。

○好評と自己採点した根拠は何か不明である。せめて参加者数ぐらいは提示されたい。

イ．学会の開催　４４４４３；平均 3,8

○協議会などへの参加の重要性は十分に認められ、今後も積極的参加が必要である。しかし、このような場で、九大博物館としてどのような情報を発信し、どのような質疑が行われ、それらを専任教員全員が共有し、その後の博物館運営にどう活かされたのかが不明である。教員会議などで報告が行われていると想像するが、より広く（運営委員会レベルなど）、各大学博物館が抱える課題や対応策について情報を共有することが必要である。

○博物科学会の開催は評価できる。

○事務局運営としてはともかく、この機会をとらえて九大から発信した様相が窺えないのは寂しい。

E－③．専門分野の研究　４４４４３；平均 3,8

○博物館専任教員の研究面でのポテンシャルをはかるひとつの尺度として国際誌上での論文発表はきわめて重要であると考えられる。しかし、国際誌での論文出版が全体に少なく、博物館としての特色ある研究の成果発表も決して十分とはいえない状況にあるといわざるをえない。博物館としての業務が多岐にわたり、自身の研究に割く時間が十分ではないことを容易に想像されるが、教員各個人が国際誌出版について数値目標を自ら設定し、専門分野における研究活動を発展させる必要がある。

○各専門分野の相互理解と境界領域の研究も望まれる。

○査読付き学術雑誌や啓蒙書をも通じて、広く成果を社会に還元していただきたい。

F．教　育

F－①．学芸員資格関連授業・実習　５５４４３；平均 4,2

○他部局が行っているように、ＦＤを実施して教育方法の改善に役立てるべきである。

○全国に存在する博物館の種別に比して、今後、ますます理系偏重に陥る懸念がある。

○これらの授業・実習は、将来学芸員となる人材の養成に留まらず、博物館一般あるいは学術標本・文化財に対する理解・愛着を有す人材を少しでも多く社会に送り出す上で不可欠な業務であり、学生の関心を深めることに寄与している。今後も継続するとともに、日常的な博物館活動の成果を反映させつつ学生の興味関心を引き出す工夫を重ねる必要がある。

F－②．大学院教育　５４４４３；平均 4,0

○中期計画に掲げられている「実物を用いた教育」（大学院）が実行されたのかどうか不明。実行されているのであれば、その内容や教育効果について上記Ｅ—②アのような協議会等で報告し、方法等についていっそうの改善を図るべきである。

○全国に存在する博物館の種別に比して、今後、ますます理系偏重に陥る懸念がある。

○博物館教員は博物館職員としての業務以外に各自の専門分野の研究を遂行しており、その成果を大学院生の教育に反映させる場を持つことは研究の深化上でも有効に作用している。理学府・比較社会文化学府では、それぞれの学府における大学院生教育に不可欠の役割を担うに至っている。

F－③．学部教育　５４４４３；平均 4,0

○博物館専任教員としての特色ある授業の実施が期待される。

○全国に存在する博物館の種別に比して、今後、ますます理系偏重に陥る懸念がある。

F－④．教育支援　５４４４４；平均 4,2

○標本の教育利用について、ＰＲ活動をいっそう強化する必要がある。

○支援業務の推進のためには、今後も実物資料の公開場所の獲得と展示・活用方法の研究・改善に努めるべきであるが、九大全体の所蔵資料の量に比べると、提供が可能になった情報量はまだ多くはないため、継続的に実施して提供量の増大を図る必要がある。これらを博物館職員が教育に活用するだけでなく、学内の各部局に積極的に情宣し、学際的活用を促していく必要がある。

○どのような教育支援が出来るかを整理し、広報を行うことにより、博物館の認知度を上げることが望ましい。

○努力の跡は見られるが、実績が年ごとに減少している現実を変えなければならない。

F—⑤．社会教育・学校外教育への貢献　４４４４２；平均 3,6

○社会教育・学校外教育への貢献は避けて通れない任務となっており、方法論の研究、様々な実践を試行的に行なっていく必要がある。大学博物館が側面からの支援でなく主体的に初等・中等教育に関わる程度・方法については、大学博物館の主要ミッションとの関係で議論を重ねる必要がある。

○次世代の科学者を養成するという重要な任務の一環を博物館が担っていることについてより自覚・認識を深め、小・中・高校での出前講義・実習・展示への積極的参加、常設展示室の利

用拡大、博物館関係の学生による九大祭参加などについて検討する必要がある。要請を受けてからではなく、積極的に機会を求める姿勢で臨むことが必要である。
○公開展示や公開講演会が機能しており、評価できる。
○一部達成できていない計画・構想がある。
○努力は窺えるが、成果が見えてこない。

G. 学内他部局との連携

G－①. 教育研究における連携　４４４４３；平均 3,8

○実物教育の重要性のアピールが不十分であり、ＨＰのリンク拡大・充実、新入生オリエンテーション企画への積極的参加なども検討すべきである。
○博物館をフィールドとする芸術工学研究院・人間環境学研究院・統合新領域学府との連携をさらに推進し、新しい展示手法、展示空間の研究を推進すべきである。
○博物館施設の改善と連携のための広報が望まれる。
○データがなく、進捗状況などがよく分からない。

G－②. 全学委員会などへの参画　５５４４４；平均 4, 4

○全学レベルでのマネージメントへの貢献は高く評価する。今後はとくにキャンパス移転に関する委員会等にはいっそう深いコミット、リーダーシップの発揮が必要である。
○伊都キャンパスへの移転に向けて農学部・理学部・文系諸学部・図書館などが設ける委員会にも何らかの形で関係し、情報を収集しつつ協力関係を築く必要がある。
○一部の教員に負担が重くないか懸念がある。

H. 他博物館などとの連携

H－①. 大学博物館等協議会　５４４４４；平均 4,2

○Ｅ−②アの場合と同様、協議会等で提出された問題点を博物館教員・事務組織全員で共有することが必要で、それをその後の博物館の運営に十分に反映させる必要がある。
○中心となる活動をしており評価できる。
○学会開催は労を多とするが、参加・連携の成果をどう示すかが課題である。
○協議会・博物科学会に積極的に参加することによって、同学会を研究情報交換システムとして熟成させていくことが望ましく、当館が主導的役割を果たせるように努力する必要がある。

H－②. 福岡市博物館　４３３３３；平均 3,2

○連携強化と同時に、同一地域内に存在する歴史・民俗系博物館との役割分担（棲み分け）の明確化と特色を活かした差別化を図る必要がある。
○普段の交流が望まれる。
○今後の連携のあり方についての検討が必要である。
○九国博との違いを見定められたい。

H－③. 福岡市少年科学文化会館　５５４４４；平均 4,4

○同館は、小学生の利用が中心的であると思われるので、利用者の年令・知識レベルがより幅広いと思われる北九州市立「いのちのたび」博物館との連携強化も検討すべきである。
○公開展示などの協力関係が出来ており、良好と考えられる。
○科学文化会館の今後をにらみ、積極的に提言・提案していただきたい。

H－④. 九州国立博物館　４４４３３；平均 3,6

○連携強化と同時に、同一地域内に存在する歴史・民俗系博物館との役割分担（棲み分け）の明確化と特色を活かした差別化を図る必要がある。
○普段の交流が望まれる。
○九国博での展示は、説明パネルの数・文字数が制限され、展示手法も美術展示風であるので、必ずしも大学博物館の研究展示に向いているとはいえない。しかし、来客数が多い九国博との展示での連携の過程で、当館の存在・業務・新キャンパスでの建物建設などへの一般の理解を増進する活動を行なっていく必要がある。
○今後の連携のあり方についての検討が必要である。
○福岡市博との違いを見定められたい。教育面での提携も期待する。

H－⑤. 他大学博物館　４４４４３；平均 3,8

○九州圏内の各大学博物館との連携を今後もさらに充実・発展させることが重要である。とくに近隣の福岡大学や佐賀大学などの関連部局との連携を一層強化する必要がある。
○カリキュラムのみではなく普段の交流が望まれる。
○教育面での提携の深化を期待する。

I. 社会貢献・教育普及活動

I－①. 公開講演会　５４４４４；平均 4, 2

○これまでに多彩なテーマで公開講演会を開催してきた実績はおおいに評価できる。しかし、市民の生涯学習に寄与することが主な目的であれば、学内で開催するのではなく、市民がより気軽に参加が可能である、学外の適切な会場で開催することを検討すべきである。
○興味深いテーマを揃えているが、広報が足りないのではないか。カルチャーセンターなどと提携して定期化し、広く世間に宣伝することを望む。

I－②. コミュニケーションミュージアム事業　５５４４３；平均 4,2

○糸島地区住民との連携・交流の促進事業は、九州大学として取り組むべき重要な事業であると認識する。ただ博物館本来の社会貢献・普及活動とは若干主旨を異にすると思われるので、本務に支障が起きない範囲内での協力を進めるべきである。
○博物館固有の社会貢献活動をはみ出す部分も有るが、糸島地区自治体の社会教育関係職員との人的ネットワークの構築に効果があり、地元住民に博物館への理解を深める活動の一環として機能している。
○地域貢献の一環として評価できる。
○博物館の業務としなければならないのか、再検討を要する。

I－③. 談話会（セミナー）　５４４４３；平均 4,0

○談話会を再開し、異分野交流の促進を目指している点は高く評価できるし、継続させる必要がある。ただ談話会の認知度が低いので、今後はＰＲ活動にも力を入れ、より広汎な研究者の参加が実現するよう努力すべきである。

○性格がしだいに変化してきたが、学内外の異分野研究者とのネットワーク構築に機能し始めている。

○資料部教員なども参加しやすい環境での開催と広報が望まれる。

○目的と位置づけが曖昧に見え、果たして「社会貢献・教育普及活動」に入る項目か疑問。

I－④. ひらめき☆ときめきサイエンス　５４４４４；平均 4,2

○資金面でのサポートが必須であり、科研費等の外部資金の獲得、地元公共団体によるマンパワーの提供を通しての支援・協力などを仰ぐ必要がある。また福岡市および近郊地区での自然観察会や文化財見学ツアーなどを企画・実施することも検討すべきである。こうした事業の企画・立案・実行などを学生主導で行い、単位化することも検討すべきではないだろうか。

○自然史系・文化史系を問わず、フィールドワークを行なう一般向け講座の実施には労力を要するが、ニーズは多いはずで、拡充が望まれる。

○一般市民を募集したこのような活動は評価出来るので、継続可能な形での類似の活動が望まれる。

○今後の発展を望みたい。少なくとも参加者数のデータは欲しい。

J. 国際連携

J－①. 海外研究者との交流・共同研究　４４４３３；平均 3,6

○単に専門分野に関する共同研究の推進だけにとどまらず、学芸員養成や博物館管理・運営等の面での情報提供・意見交換も必要である。

○海外の博物館職員と交流し、日本の博物館との比較研究をするのが、当館の研究テーマとなりえるのではないか。

○博物館としの活動なのか、個人研究なのか、また、成果を博物館の事業に活かせているのか、説明が必要ではないか。

J－②. 外国人研究者の受け入れ　４４４３３；平均 3,6

○アジア諸国を中心に外国人研究者の受入を積極的に進め、活性化を図るべきである。

○決して多いとは言えない。短期間の調査者もリストアップしてはいかがか。

Ⅱ. 管理・運営

A. 管理運営の理念　５４４３３；平均 3,8

○博物館を取り巻く厳しい学内情勢や他博物館との競合のなかで、学内外に博物館のアイデンティティを示し、学内におけるステイタスの確立・向上を目指していくための管理運営理念の策

定と弾力的・機動的な管理運営体制の確立も検討すべきである。とくに館長の強力なリーダーシップの下で、建物建設や移転を推進し、博物館を九大の顔にしていく必要がある。

○少ない予算・スタッフ、劣悪な展示空間であるから、機動的・戦略的に加えて効率的・選択的な運営が強いられるのではないか。

B. 管理運営体制

B－①. 運営体制と意志決定　４４４３３；平均 3,6

○専任教授から館長が選任された場合、この教授は館長としての管理運営の任務と教授としての教育研究の任務の両方を背負うこととなり、スタッフの少なさからも、その仕事量は想像を超える。移転、建物建設という博物館にとってきわめて重要な大事業を控えた多難な時期をこれから迎えることとなる。そのため。原則として館長は博物館外から迎えるのが妥当ではないかと思われる。

○館長の選出方法の再検討が必要ではないか。専任教員の館長と館外の館長とどちらが良いかは、どちらも一長一短があって一概には言えないが、いずれにせよアクティブでリーダーシップがある館長が選出されるような制度が望まれる。

○意志決定機関としての教員会議の役割を明文化すべきである。

○制度としては問題ないが、実際に館長が２年限りで交替し続けては、方針が安定しない恐れがある。

B－②. 事務体制　４４３２１；平均 2,8

○少人数ながら、適切なサポート体制が機能していると思われる。ただ、移転および建物建設という重要な局面が迫っているため、事務局との太いパイプを持ち、各種の情報を素早く入手し、迅速・適切に対応することがますます重要になる。そのため、専門職員については理学部等事務部に依存するのではなく、大学事務局専門職員の配置を要請することを検討すべきである。

○独立した一部局として、少なくとも一名の専任の事務官が配置されるべきである。

○業務量増への対応や将来の位置付けについての検討が必要。

○事業を整理し、事務局の業務を効率化する必要がある。

C. 教員組織と人事

C－①. 教員の配置　４４４３３；平均 3,6

○開館 10 年を迎え、博物館を取り巻く情勢はかなり変容しているにもかかわらず、博物館設置以来、数少ない専任教員をあえて３系に配置する方式はほとんど変わっていない。これを機に、3 系に教員を配置することのメリット、デメリットを検討し、３系の廃止をも含めた改組について検討すべきである。

○1996 年以降新設された全国の大学博物館横並びの３系体制は、業務の実態と乖離している。実態に即した組織への改組が必要である。

○部門はわかりやすいが、系は実際には分かちがたい。単純に部門で配置するのが望ましい。兼任教員の実態・活動内容が不明である。

C－②．教員の選考　５４４４３；平均 4,0

○完全公募により、適切な人材を広く求めてきた選考方式には問題がなく、今後も維持していくべきであると考えられる。ただ、ポイント制度の弾力的運用が可能になっているので、転出・退職等による欠員が生じた場合や余剰ポイントの有効活用などにより戦略的・機動的に人事選考を行って、博物館の各種業務を発展させることも検討すべきである。

○選考委員の選出方法の再検討が必要ではないか。

○部門ごとの教員数のバランスに不安がある。

D．財　政

D－①．予　算　５４４４３；平均 4,0

○学内の競争的資金獲得、有効利用を一層進めるべきである。

○積極的に外部資金の導入を図るべきである。

D－②．外部資金　４４３３２；平均 3,2

○根拠資料にリストされている外部資金獲得状況では、専任教員の専門分野での応募が大多数を占め、博物館学等に関する細目での獲得がきわめて少ない。科研費、民間財団、地方公共団体等の各種助成に対して、博物館として組織的に申請・応募して、資金を獲得することを検討すべきである。

○博物館建設に係る資金確保の活動へ取り組む必要がある。

○基盤のＢ、更にはＡクラスの採択に取り組むべきである。

○地道に競争的資金獲得の努力を続ける必要があるが、外部に寄付を仰ぐには、外部からの評価を受けるに足る、活動の蓄積とそれなりの自前の施設の獲得とが必要である。

Ⅲ．施設・設備

A．施設の状況

A－①．博物館の施設の状況　５３２２１；平均 2,6

○教員の居室、会議室、準備室などの整備拡充が徐々にではあるが進められている点は高く評価できる。

○スペースの確保と少ないスペースの有効活用が望まれる。

○今後もスペースの拡充を図る必要がある。

○劣悪きわまりないが、これは博物館の責任ではなく、本学執行部の見識の問題であろう。

○博物館設立後５年間の状況に比べれば、状況改善の努力は少しずつ成果を出しつつある。しかし、現状が劣悪であるのは否めない。今後の移転部局の協力を得ながら施設獲得の努力を続ける必要がある。

A－②．部局の標本収蔵庫の状況　３３２２１；平均 2, 2

○工学部移転後の空き施設の利用等が進められてきたことは高く評価できる。しかし、狭隘性、

分散配置、収蔵室としての機能等の点で、一時的標本資料収蔵施設としても不適当・不十分であることは明白である。博物館の設置目的、理念、将来構想をふまえ、博物館の最優先課題のひとつとして十分な一時的収蔵施設の確保について早急に検討を進めるべきである。

○収蔵すべき標本資料のリスト等を早急に策定し、大学当局との交渉を進めるべきである。

○博物館の収蔵庫不足の解消が課題である。

○劣悪であるが、これは博物館の責任ではなく、本学執行部の見識の問題であろう。

B. 設備の状況　４３３３２；平均 3,0

○将来構想や人事構想に対して整合性をもった設備導入計画も検討すべきである。大型機器の導入設置に関しては、キャンパス移転を念頭に置いて、関連部局所有の設備との重複の回避は考慮されるべきである。また現有主要設備が、専門分野の研究だけではなく、社会貢献や普及活動に対して利用され、十分な役割を果たしているかについては継続的・自律的に点検を行い、将来の設備導入の際の検討材料とすべきである。

○教育・研究支援を遂行するためにさらなる充実が望まれる。

○標本の保存環境の整備が必要である。

○博物館が独自に備えるべきものと他部局と共同購入・利用すべきものとの境界が曖昧。

C. 新キャンパス計画

C－①. 位置　５４４４３；平均 4,0

○早期移転の実現に向けて、あらゆる方法・可能性を探ると同時に、学内外の支持を拡大していくことに全力を注ぐべきである。

○位置に問題はないが、そこに相応しい建物が建たなければ、好条件が逆効果となる。

○博物館建設の具体的なビジョンを明確にする必要がある。

C－②. 建物　４４３２２；平均 3,0

○建物建設には学内外の圧倒的な支持・協力が不可欠であり、大学の経営戦略もふまえた将来構想を掲げ、博物館の存在意義・重要性を強烈・鮮明に主張する必要がある。また建物設計に際しては、他の博物館（とくに海外の大学博物館）の事例を入念に検討し、長所を取り入れる必要がある。

○早急に予算処置についての対策と対応が必要である。

○６年前の計画がまだ有効なのか、不安である。

○博物館建設の具体的なビジョンを明確にする必要がある。

Ⅳ. 将来構想・将来計画

A. 将来計画　４４３３３；平均 3,4

○多くの項目が示されており、博物館業務がきわめて多岐に及ばざるを得ない状況がよく見て取

れる。しかし、その中でも移転・建物建設という大事業の推進のために、総花式に項目を羅列するのではなく、より多くの精力を注ぐべき重点項目を選んで取り組んでいく必要がある。またここに列挙された項目はどれも重要なものであるが、博物館が直面する厳しい情勢を突破できる斬新な内容を含んだ魅力的なものかどうかやや疑問にかんじる。たとえば、全学教育の担当拡大、学芸員リカレント教育の継続的実施など教育面での積極的貢献について将来計画として検討すべきである。関連して、外国人学生をも対象とする学芸員養成コースやサイエンスコーディネーター養成コース、国内外の学芸員リカレント教育コースなどを含む“ミュージアムサイエンス専攻”の新設を視野に入れた将来計画を検討すべきである。

○博物館の将来計画について、どのように学内外の理解を得ていくかという構想も必要である。

○博物館建設の具体的なビジョンを明確にする必要がある。

○具体的活動計画に具体性がない。総花的でメリハリがなく、スタッフ数から見て無理が無いか不安である。

B. 事業部構想　３２２２１；平均 2,0

○「事業部」がかつてめざした社会貢献、社会への情報発信を専門とし、実践能力を備えた人材の採用について将来構想および人事構想の中で検討すべきである。

○博物館の理念と将来構想に則った事業計画を策定し､新たな構想を立ち上げることが望まれる。

○構想が達成されていない。

○現状分析と今後の方針が未定である。

Ⅴ．中期目標・中期計画

A. 教育に関する目標　５４４４３；平均 4,0

○H15 年当時としては、適切な目標・計画の設定であったと評価できる。

○博物館専任教員全員が一体となって教育できる環境への移行が望まれる。

○「兼任教員として」ではなく、博物館教員として博物館関係の授業に重点を置くべきではないか。

B. 研究に関する目標　５４４４４；平均 4,2

○H15 年当時としては、適切な目標・計画の設定であったと評価できる。

○展示研究など、博物館に特有の研究をも遂行すべきである。

C. その他の目標　５４４３３；平均 3,8

○H15 年当時としては、適切な目標・計画の設定であったと評価できる。

○博物館のアイデンティティを活かした幅広い活動目標が望まれる。

○展示の充実、展示施設の確保などを通じて、人を呼び込む努力を記さなければならない。

Ⅵ. 点検評価

A. 平成 16 年度実施の自己点検・評価　５４４４４；平均 4,2

○多方面からの有意義な指摘がなされており、Ｈ１７以降の博物館業務の重要な指針になった点で高く評価できる。

○効果の面だけでなく、反省点も記すべきではないか。

B. 平成 17 年度実施の外部評価　５４４４４；平均 4,2

○多彩な分野から選定された評価委員による評価結果は、いずれも当を得たものと思われ、改善に向けたポジティブな指摘が多くなされている。

○その後の５年間の活動指針となった。

○効果の面だけでなく、反省点も記すべきではないか。

C. 今回の自己点検・評価　４４４４４；平均 4,0

○評価項目・方針および結果等について、ＨＰ上での公開を検討すべきである。

○総合評価のような項目、重点を置いて解決すべき問題の指摘、などといった項目があっても良かったと思う。特にＢで既に指摘されていた「業務が多岐に広がり過ぎ」「ミッションの絞り込み」といった課題がそのまま残されているというのが実感であるが、項目分けした結果、こうした課題が却って見えにくくなった憾みがある。

第二部　自己点検・評価本文

Ⅰ. 博物館活動

A．活動の理念と目標　　資料ＩＡ

博物館は、学内共同教育研究施設として学内に長年に亘り蓄積された学術標本の効率的管理と恒常的保管を図り、学際的研究の拠点となるとともに、教育・研究への活用を支援する。このため、博物館は学術標本の収集・整理・保管、分析を行い、学術標本及びそれから抽出された情報を活用した教育・研究を支援するとともに、学術標本に関する調査研究並びに情報の発信を行う。併せて、地域の行政や他の博物館などと密接に連携して学内外の人々の知的営為の活性に資し、自己啓発・生涯学習の場となるとともに、児童生徒のための学校外学習の場となり、社会教育に寄与することを目指す。

（評価と課題）　５５４４４；平均4,4

○博物館の活動理念として多岐にわたる目標が掲げられているのは変更を要しないが、恒常的にすべてを同じエフォートで実施し続けるのは無理があり、学内外で当館が置かれた状況に応じて、時期ごとに重点的に実施すべき活動をある程度絞って目標を設定する必要がある。

○博物館の任務・使命が多岐にわたることは理解できる。しかし、現在博物館が面している厳しい状況を考えれば、なかでも学部・大学院教育をより一層拡大・充実させることを理念・目標のなかで鮮明に打ち出すことを検討すべきである。

○博物館が収集・分類・整理・保存・管理に責任を負う学術標本・資料を明確に規定しなおすべきではないか。埋文センター、記録資料館との関係を整理しなければならない。

B．学術標本の収蔵管理

B－①．標本調査と収集

標本の新規収集に関しては、中期計画で「科学研究費補助金等を利用して、東南アジアを始めとする国内外の学術調査を行い、標本の充実を図る」と掲げている。平成 19 年度は中島平和財団のアジア地域重点研究助成で採択された中国の研究者との共同研究により、中国内陸部での植物の学術調査を行うと同時に、現地の自生植物の標本を収集した。平成 20 年度には中国海洋大学から南海北部湾産のタマキガイ類標本の提供を受け、日本産類似種と遺伝学的な比較を行った。

（評価と課題）　５４３３３；平均3,6

○博物館教員の日常的活動の成果としての、調査と収集は地道に進めるべきである。

○海外での調査・標本資料採集については、現地の研究機関・研究者との共同研究が不可欠である。これを海外研究機関等の連携・協力関係の強化のチャンスと捉え（姉妹博物館協定の締結など）、学術活動の活性化を図ることも検討すべきである。

○専任教員による調査・収集のみではなく、大学博物館として、資料部全体で行われている活動も視野に入れる必要がある。
○計画性・自主性という観点からは、個々の調査の位置づけが説明不足である。

Ｂ－②. 移　管　　**資料ＩＢ②**

平成17年度までは、当館独自の収蔵施設を持たなかったため、他部局からの標本・資料の移管はできなかった。平成18年度以降ようやく、旧知能機械工場建物や旧工学部本館３階に獲得した諸室に、ある程度まとまった量の資料を移管することが可能になった。

（評価と課題）　４４３３３；平均 3,4

○理・農のキャンパス移転の時期が迫ってきているなかで、収蔵スペースが決定的に不足している現状はきわめて深刻である。しかし建物新設のメドがたたない現状では、学内の各種標本資料の一時的収蔵・管理のために、より広く、利便性に優れたスペースの確保に向けてあらゆる可能性を模索し、方策を講じる必要がある。
○更なる収蔵場所確保と保存環境の整備が課題である。
○理念にある学術標本の効率的管理と恒常的保存をひろく行うためには移管にこだわらない、資料部を活用したシステム作りが必要ではないか。
○収集・移管・受贈はいずれも博物館独自の収蔵資料の形成に関わる手段である。収集・受贈も含めてのことだが、大学博物館は独自の収蔵資料をあまり持つ必要がなく、日常的な収集・収蔵・管理は各部局に任せておき、博物館は各部局館の調整業務だけしていれば良いという考えもあるが、そのような消極的な態度では、各部局あるいは学外からの信頼は得られない。鼎の軽重を問われることになろう。設立後５年間、収蔵施設をほとんど持てなかったという事情はあったものの、博物館の消極的な態度が博物館の設立に真剣に取り組んだ人々や資料部諸氏の失望・顰蹙を買い、博物館への支持・理解を減少させたことは事実である。国立新美術館のように独自の収蔵品は持たず、展覧会と貸し会場業務だけするような博物館なら大学に必要ない。独自の重要資料を持つことが博物館の存在意義を高めるのである。そのような意味で収集・移管・受像は積極的に進めなければならない。もちろんそのための物的・人的体制の整備が不可欠である。
○貴重な資料を受け入れた以上、整理・活用が望まれるが、その進捗と態勢に不安がある。

Ｂ－③. 受　贈　　**資料ＩＢ③**

学外の標本・資料で，とくに学術上貴重と判断されたものについては，収納場所について資料部の該当分野の協力を得た上で，博物館への寄贈を受け入れてきた。標本の評価は、関連の専任教員が教員会議で資料の概要（標本の種類、点数、整理の状態、貴重とされる理由、当面の保管場所など）を紹介し、審議の上で判断している。平成17年度までは、当館独自の収蔵施設を持たなかったため、九大の教員が収集した貴重な資料が他館に寄贈された例もあった。また受贈する場合でも少量の資料に限られ、記念講堂の展示室や他部局から借用したスペースに収めていたが、平成18年度以降ようやく、旧知能機械工場建物や旧工学部本館３階に獲得した諸室に、ある程度まとまった量の資料を収納することが可能になった。

（評価と課題）　４４４３３；平均3,6
○学外からの貴重標本資料の受入は今後とも進めるべきである。しかし、今後の受贈標本資料数量の増加を想定し、上記Ｂ−②と場合と同様、一時的収蔵スペースについてさまざまの可能性を探り、獲得に向けて一層の努力が必要である。
○受贈が九大本来の標本・資料管理の妨げにならないように注意を要する。
○更なる収蔵場所確保と保存環境の整備が課題である。
○貴重な資料を受け入れた以上、整理・活用が望まれるが、その進捗と態勢に不安がある。

Ｂ−④．貸出し　資料ＩＢ④

博物館所蔵標本・資料の貸出しに付いては関係する分野の専任教員が対応している。貸出し希望に対処するため、標本資料貸与要綱（平成 19 年度制定）を定め、骨格標本については要綱に則って貸与を開始した。貸与や一般書・学術書などへの写真掲載の希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

（評価と課題）　４４４４３；平均3,8
○貸し出しにあたっては、所蔵標本資料の紛失、破損等に十二分に注意が必要であり、貸し出し業務の体制の確立とルールの策定が急務である。
○九大が所蔵する標本・資料の活用と認知の上で重要なので、資料部を含めた体制の整備が望まれる。
○貸し出し希望の増に対応する体制整備が課題である。
○貸し出し実績のデータを添付されたい。

Ｂ−⑤．閲　覧　資料ＩＢ⑤

博物館所蔵標本資料の閲覧希望に対処するため、標本資料閲覧要綱（平成 18 年度制定）を定め、骨格標本については両要綱に則って閲覧を開始した。閲覧や写真撮影などの希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

（評価と課題）　４４４３３；平均3,6
○閲覧にあたっては、所蔵標本資料の紛失、破損等に十二分に注意が必要であり、閲覧業務の体制の確立とルールの策定が急務である。
○九大が所蔵する標本・資料の活用と認知の上で重要なので、資料部を含めた体制の整備が望まれる。
○閲覧希望の増に対応する体制整備が課題である。
○閲覧実績のデータを添付されたい。

Ｂ−⑥．標本整理・データベース化

博物館では、九州大学が所蔵する740万点におよぶ学術標本・資料について、平成15年度より全学共通分間接経費の配分を受けるとともに、博物館運営経費の中にも予算を組んで、標本資料の整理とデータベース化を推進してきた。費用は以下の各分野に配分し資料部兼任教員の協力を得て進めている。

自然史分野：動物・医動物，植物，昆虫，化石，鉱物
文化史分野：記録資料，考古資料，人類資料
技術史分野：資源・素材

平成 17 年度は九州大学間接経費(全学共通分）から 534.7 万円の配分をうけ，博物館運営経費と併せて 634.7 万円、平成 18 年度は九州大学間接経費(全学共通分）から 576.1 万円の配分をうけ，博物館運営経費と併せて 676.1 万円、平 19 年度は九州大学間接経費（全学共通分）から 532.3 万円の配分を受け、博物館運営経費と併せて 632.3 万円、平成 20 年度は、九州大学間接経費（全学共通分）から 641.2 万円の配分を受け、博物館運営経費と併せて 741.2 万円、平 21 年度は九州大学間接経費（全学共通分）から 695.1 万円の配分を受け、博物館運営経費と併せて 795.1 万円の予算を組み、資料部を中心に標本整理・データベース化を行なった。

また，データベース化の完了したところから，順次，博物館ホームページ(http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/DB/dbindex.html)上で「所蔵標本データベース」として一般に公開している。これまでに公開した分野と登録データ件数は以下の通りである。

動物・医動物標本（615）、海洋生物標本（4086）、昆虫標本（77916）、植物標本（22244）、化石標本（13917）、化石関連文献資料（6976）、鉱物・岩石（12346）、考古遺物（7431）、骨格標本（2392）、記録資料（1234350）

今後もデータが集まり次第、随時追加・更新を行っていくとともに、未公開分野の情報公開を急ぐ。

（評価と課題）　４４４３３；平均Ｂ3,6

○伊都キャンパスへの移転を控え、移転時の混乱を避けるために、標本・資料の整理・データベース化の促進が急務である。

○タイプ標本などの重要標本については、他大学博物館で進めている事例等も参考にし、画像データを添えた Web 上での公開サービスについても検討すべきである。また現在公開されているデータベースについても検索項目の増設やあいまい検索機能の付加などを行って、利便性を高めるなどの改善が必要である。

○データベースの公開にこだわらず、移転に向け、ひろく標本整理が行われることが望ましい。

○記録資料のデータベース化は、博物館がするべき事ではないのではないか。業務を整理し、効率的に館務を遂行する必要がある。

Ｃ．開　示―展　示―

九州大学が、市民に開かれた大学としての責任を果たす事業の一つとして、大学で行っている教育・研究の成果を広く一般に公開・情報発信する目的で各種の展示を行っている。展示の公開は博物館として不可欠な業務であり、当館がもっとも時間と労力を費やし努力している事業である。中期計画では、「学内展示及び国公私立博物館との共催の公開展示、サテライト展示を通じて、大学の研究、教育を社会に紹介する」と掲げている。

開設以来６年間、50 周年記念講堂２階の常設展示室を公開してきたが狭小であり、学内における展示公開施設が乏しい状況から脱することができずにきた。そのため、学外会場を借りて公開展示を開催するとともに、学外数か所にサテライト展示も開設した。しかし、平成 18 年度以降、工学部の伊都キャンパスへの移転に伴って、空き建物の活用が認められたことから、ようやく展示施設を増やせるようになってきた。

平成 19 年度に利用が認められた旧工学部本館３階に、平成 19 年度末から平成 20 年度にかけて常設展示室を整備して平成 20 年度から公開を開始したのに伴い、記念講堂の展示を平常展示と改称した。また、第一分館の展示室も年に数回公開している。このように平成 18 年度以降着実に施設・設備・展示の公開を進めており、今後さらに質の向上をはかっていく必要がある。

Ｃ－①．公開展示　　資料ＩＣ①

博物館の新設に先立ち、ユニバーシティー・ミュージアム構想の一環として、平成9～11年に3回の先行展示が行われた。第1回「倭人の形成」では、九州大学比較社会文化研究院が中心となり、九州大学が所蔵する縄文・弥生時代の古人骨の形質変化に関する研究を一般に公開した。第2回「雲仙普賢岳の噴火とその背景」では、理学研究院により平成2年に噴火した雲仙普賢岳の火山活動についての研究が紹介された。第3回「九州大学・医学の歩み-寄生虫学の展開と医の文化」では医学部寄生虫学研究室により、九州大学における寄生虫学の研究が医学史上果たしてきた役割が紹介された。

「公開展示」は、九州大学で行われている教育と研究を社会に紹介し、理解と協力を求めるための展示会のうち、学外の施設を借用して年に一回実施する、一般向きで規模の大きな展示会を指す。資料部を通して学内諸部局に研究成果の発表を依頼している。

会場は一般の人が入場し易い場所で、理科系の展示では福岡市立少年科学文化会館の学習室（約300㎡）、文化系の展示では福岡市博物館特別展示室、或いは九州国立博物館文化交流展示室を借用している。展示はパネル、標本、模型で構成され、展示に関連する分野の学生数名が受け付け、展示案内に付き、１ヶ月から１ヶ月半、入場料無料で公開される。期間中の入場者数は5,000人から12,000人程度である。入場者の感想、希望などを次回からの展示に反映させるため、毎回アンケート調査を実施している。

公開展示は学内各部局の研究・教育の成果を展示・情報発信するものであり、借用する会場の主要来館者層に合わせて展示の手法や説明の難易度を調整し、アンケートで感想や意見を回収するなど、将来の新キャンパスでの開館に備えて様々な試みを行なってきた。来館者の反応は概ね良好であったが、回を重ねるにつれて、次年度の担当部局・テーマ・開催場所を決定するのが容易ではなくなってきており、できるだけ早めに準備に着手し円滑に事業を進める努力が今後も必要である。

（評価と課題）　公開展示　５５５４４；平均 4,6

○少ないスタッフでよく回転させている。

○各部局の教員を中心とした展示活動や二万人以上の見学者は評価できる。

○先行展示の開催以後、さまざまなテーマで毎年公開展示を継続してきた点は、博物館の社会貢献事業として高く評価できるので、今後も発展的に継続することを期待する。しかし、これまでは、標本資料を取り扱うテーマの展示が中心に行われてきた。公開展示の主な目的が学内各部局の研究成果の社会への発信であるならば、今後は実験・理論系の研究成果の発信をテーマとして開催することも検討すべきである。

○自然史系展示の会場はここ数年、来客の大部分が小学生とその保護者という少年科学文化会館を借用している関係上、概説的・入門的内容にせざるをえなくなっている。少文における小学生対象のわかりやすい展示は、将来の科学者を育てる意味で重要なのは重々承知しており、公立博物館の場所を借りる場合、少文でなくても、一般向け・一般受けを考慮せざるを得ないであろう。しかし、他の大学博物館の展示のように、大学ならではの高度な研究成果の発信ができにくく、新しい実験的試みや玄人受けする展示ができないのは問題である。

○博物館建設への理解も得られるような工夫が必要である。

Ｃ－②. 特別展示　　**資料ＩＣ②**

大学内の施設で年に数回実施する小規模な展示を「特別展示」と呼んでいる。研究成果のやや専門的な紹介や九大所蔵標本の公開を主とする。

平成14年度からは、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）専門委員会との共催でP&P研究に採択された課題の研究成果の一般公開を恒例とし、パネル展示を主体として学内の各分野の研究を学内外に公開してきた。開催場所は、08年度までは九州大学50周年記念講堂の展示スペースを利用していたが、09年度からは、旧工学部本館での常設展示室の公開に伴い、同室でP&P展を開催するように変更した。P&P展示以外にも、トピック的展示を年１～２回開催している。

P&P展は、説明パネル主体で、内容が専門的であるために来場者が少ないのが悩みであるが、同じ内容を当館ホームページのインターネット博物館で公開しており、こちらはアクセス数が多いことから、P&P採択研究の成果発表は継続する意義がある。

（評価と課題）　４４３３２；平均 3,2

○特別展示の学内へのＰＲが不十分であり、本企画に対する認知度・関心が高いとは言えないようである。本企画の重要性のアピールを含めて、より一層のＰＲ活動が必要である。

○P&P 展は、説明パネル主体で、内容が専門的であるために来場者が少ないのが悩みであるが、九大の高度な研究・教育成果の発信は大学博物館の展示として意義があり、伊都キャンパスの共通教育棟などに場を移すのが手かも知れない。

○博物館建設への理解も得られるような工夫が必要である。

○Ｐ＆Ｐは本来博物館の業務とは関係ない。広報業務一般を引き受けるべきではない。

Ｃ－③. サテライト展示・その他の展示　　**資料ＩＣ③**

箱崎地区が集客上やや難があるため、当館の存在や活動を知ってもらうべく、学外の数か所の施設を借用してサテライト展示を設け、小規模な展示を行っている。

福岡空港サテライト展示は、福岡空港ビルディング(株)の協力により、平成14年10月1日から福岡空

港で国内地方線が発着する第1ターミナル2階待合室および乗降客通路に、ケース３基分で設けた。とくに、地域に密着した話題を中心に取り上げてきた。糸島地区では、平成16年1月に前原市伊都文化会館にサテライト展示を開設したのを皮切りに、二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」、志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」にも開設し、展示パネルを巡回させている。

平成 15 年度以前からの継続分として福岡空港、前原市立伊都文化会館、平成 17 年度から福岡市保険環境研究所「まもるーむ福岡」、二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」、志摩町総合保健福祉センターで展示を定期的に更新した。ここ数年でサテライト展示が増加し、展示の準備や展示換えなどの労力が次第に過大になりつつあるため、平成 22 年度以降に現体制で続けるか検討する必要がある。そのほか大学の研究・教育を社会に紹介する事業として、平成 20 年度に福岡空港で昆虫標本を展示し、「カブトムシ教室」の講師をした。

（評価と課題）　４４３３３；平均C3,4

○空港ターミナルビルでの展示は、ほとんど目にとまらず、情報発信の目的が達せられているか甚だ疑問にかんじる。廃止も含めて、空港でのサテライト展示の存続について検討すべきある。伊都キャンパス周辺の公共施設での展示についても同様。

○多大な労力がかかる割りに効果が得られていないのは確かであろうが、伊都地区においては地元での博物館建設支持の機運を高めるために、サテライトを充実させざるを得ない。地元自治体とも協力して情宣を図り、学校教育での利用などを図る必要がある。

○広報の充実が望まれ得る。

○博物館建設への理解も得られるような工夫が必要である。また、展示場所の検討も必要と思われる。

○館員のかけた時間・労力・費用に対して、効果が期待できない。

Ｃ－④．常設展示　　**資料ＩＣ④**

平成 19 年 10 月の博物館の旧工学部本館３階への移転に伴い、移転後の展示室設計にむけたパイロット展示室として、旧工学部本館での常設展示室の設置を計画した。平成 20 年３月に第９番講義室を改修して、暫定的なレビュー展示を設営し、５月８日に梶山千里総長・全理事の出席のもと、開設セレモニーを行なった。開設時間は平日の 10:00～16:30。展示面積は約 208 ㎡。展示品は、学内各部局および総合研究博物館に収蔵される考古学資料、記録史料、化石標本、岩石・鉱物標本、動物標本、植物標本、昆虫標本、、技術史資料の中から、貴重で興味深く教育効果の高い標本・資料類を選んで展示した。平成 20 年度から本展示室を利用して芸術工学府の演習授業が始まったほか、各学部の授業での利用が増えつつある。

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2

○常設展示室を獲得し、常設展示を開始したことは博物館活動の学内外へのアピールの点からみてたいへん意味が大きく、高く評価したい。今後はボランティアなどによる説明員の配置、小・中学生の見学の誘致などについても検討し、より積極的に本展示を活用すべきである。また常設展示や分館展示の公開によってオープンキャンパス企画に参画し、広く高校生にも博物館の存在をアピールすべきである。

○記念講堂展示室が常時開館できなかった状態に比べれば、そう多くは無いながらも毎日入場者があり、団体客への対応もし易くなった点で評価できる。面積の狭さ、展示物の少なさが問題だが、要望を受けた場合には、本館４階会議室、３階列品室、第一分館展示と抱き合わせで公

開することで補える。展示替えを時々行なわないとマンネリになる。
○施設が狭い分、展示にさらなる工夫が必要。
○もっと入りやすく、広い空間を確保されたい。

C―⑤. 平常展示

常設展示室の開室に伴い、当館の創設以来 50 周年記念講堂２・３階で実施してきた展示を「平常展示」と呼ぶことになり、一部の展示替えを実施した。

「九州大学所蔵鉱山関連資料展」

会　期：平成 19 年 12 月 1 日～平成 22 年 3 月 10 日
会　場：50 周年記念講堂２階ホワイエ
内　容：工学部列品室で収蔵する日本を代表する鉱山の鉱石（金・銀・銅・鉛・亜鉛など）や鉱山で使用した道具、総合研究博物館が所蔵する鉱山関連文書史料などを紹介する。

第１回学生による企画展示「19 世紀の日本人」

会　期：平成 21 年 6 月 1 日～平成 21 年 11 月 30 日
会　場：50 周年記念講堂３階平常展示室
内　容：当館専門研究院と西南学院大学大学院生が企画・実施する展覧会。ロシアのサンクトペテルブルグにあるクンストカーメラ収蔵の絵画を用いて、19 世紀日本人のライフサイクルを紹介するパネル展示。

第２回学生による企画展示「日本人の婚礼と葬礼」

会　期：平成 21 年 12 月 1 日～平成 22 年 6 月 30 日
会　場：50 周年記念講堂３階平常展示室
内　容：当館専門研究院と西南学院大学大学院生が企画・実施する展覧会。日本人のライフサイクルのなかでも大きな節目となる婚礼と葬礼を中心に取り上げる。

「大塚勲と熊本県の昆虫」展

会　期：平成 22 年 3 月 26 日～
会　場：50 周年記念講堂２階ホワイエ
内　容：大塚勲氏（故人）が戦後間もなくから、多くの研究者の協力のもと、広範な分類群の昆虫について熊本県における生息状況を調べた。平成 20 年にご遺族から寄贈された膨大な標本・文献類の一部を展示し、大塚氏の業績をパネルで紹介した。

（評価と課題）　４４４３２；平均 3,4

○認知度が低く、入場者数の増加について方策を講じる必要がある。認知度の低さの理由のひとつとして、会場設定の問題があると思われる。常設展示室に近いスペースを獲得して、展示をより効果あるものとすることを検討すべである。
○ファカルティクラブ営業時には、辛うじて入場者を確保していたが、ファカルティが閉鎖し、記念講堂に博物館職員がいなくなった現在では、殆ど開けることができなくなっている。しかも大学本部の方針で、旧工学部本館にこれ以上広い部屋を獲得できないため、本館に移転することもできない。しかしすぐに廃止するのでなく、収蔵展示に性格を切り替えて、「事前申し込みで依頼があった場合に見学可」という形でしばらく存続させるのが良い。
○常設展示との統合整理が必要。

○常設展示と近接した空間を用意して欲しい。

Ｃ－⑥．第一分館展示　　資料ＩＣ⑥

平成 18 年度に旧工学部知能機械工場建物（2008 年１月に第一分館と改称）の２階に開設した骨格標本室を平成 19 年度から開学記念行事・公開講演会等に合わせて公開するとともに、外部からの依頼に応じて適宜公開している。平成 19 年度には同建物の１階に自然史資料室（高壮吉鉱物標本など）を移し博物館への移管はまだであるが公開を開始した。平成 20 年度には同建物１階に六本松地区図書館から旧玉泉館考古学資料を移し、公開へ向けての準備を開始したことから、同建物は今後ますます教育のための使用頻度が高まると予想されるが、この建物が通常無人であり、保安上の難点があることから、常時公開できないことが問題である。

（評価と課題）　５４４３３；平均 3,8

○北工場にもともとあった機械類を移動できないこと、南工場の大空間を収蔵庫に使っていること、などから旧工学部本館などに移転するのは無理で、伊都への移転までは現状のまま使わざるを得ない。骨格標本室、高標本室のオープンキャンパス、ホームカミングデーなどでの公開、北工場の各種イベントでの使用が定着しつつあり、設置した意義は十分あったと認められる。

○Ｃ−⑤と同様、認知度が低く、常設展示室近くのスペースでの展示室設置を検討すべきである。またボランティアの説明委員を配置する、照明を増設する、建物内のパネル設置、植栽の整備、行き先案内板の増設などの工夫が必要である。

○工場跡を活用した展示も考えられるのではないか。

○常時公開できない状況の改善が課題である。

○展示空間があまりにも分散し、管理・公開に支障をきたす現状は異常である。

Ｄ．開　示―情報発信―

ホームページ（毎年更新）、博物館ニュース（年２回）、研究報告（年１回）、年報（２年に１回）、の充実を通じて博物館活動を社会へ公開している。研究報告は web 版をホームページに掲載し研究者に便宜を図っている。刊行物は、市内小中高等学校など教育機関、行政、国内の大学博物館等関係機関、講演会参加者等に配布した。

平成 19・20 年度にはホームページの充実を図った。平成 19 年度に博物館ニュース第９号・第 10 号、研究報告第６号を刊行し、博物館概要・博物館概要英語版を更新した。平成 20 年度には博物館ニュース第 11 号・第 12 号、研究報告第７号を刊行するとともに、公開展示「奴国の南」に際して図録を製作し来場者･研究機関等に配布した。09 年度には博物館ニュース第 13 号を刊行するとともに、九州の大学博物館紹介リーフレット「UM」を発行した。

Ｄ－①．ホームページ

平成12年4月の総合研究博物館設立後、すぐにホームページを作成・公開した。その後も随時更新して、常に最新情報を提供している。内容は「一般向けイベント」・「展示」・「オンライン博物館」・「データベース」・「学内向けセミナー」・「連携事業」・「学芸員資格」・「出版物」・「標本」・「研究・職員」などである。

ホームページでは、博物館の概要や行事予定とともに、過去の展覧会の説明パネルやデータベースを公開し、年々充実度を高めてきた。平成 20 年度にはトップページのデザインを改善し魅力的なものとした。

（評価と課題）　５５５４３；平均 4,4 ○現在のＨＰには各種の情報が掲載され、博物館の最大のＰＲ方法としての機能を果たしていると考えられる。今後は、中期計画・目標、公募情報の掲載も検討すべきである。また関連部局等へのリンク、専任教員紹介、英文ページの構築が不十分で、より魅力的なＨＰにするためにさまざまな工夫がさらに必要である。 ○充実したものとなっており、評価できる。 ○更新が遅く、「準備中」など解決してもらいたい。

Ｄ－②．インターネット博物館

中期計画では、「“インターネット博物館”を充実させ、公開展示、大学収蔵標本の概要を紹介する」と掲げている。当館の設置以前、第 1 回先行展示として平成 21 年度に催された「倭人の形成」展から 2009 年度「昆虫のヒミツ展」に至る 11 回の公開展示・特別展示・サテライト展示の内容を、それらの展示が終了するたびに、使用した展示パネルの内容を主体に Web ページを作成して公開し、適宜情報を追加・充実させている。これは他の大学博物館では行っていない独自の取り組みであり、外部からのアクセスや出版社などからの転載依頼も多く好評を頂いている。公開の履歴は以下の通りである。

◎2005 年度

「大学博物館西東」2005 年 2 月

「倭人伝の道と北部九州の古代文化」2005 年 9 月

「九州大学所蔵標本資料展Ｉ－自然界のなかまたちー」2006 年 2 月

◎2006 年度

「九州大学教育・研究の最前線 －第 4 回 P&P 研究成果－」2007 年 2 月

「九州大学教育・研究の最前線 －第 5 回 P&P 研究成果－」2007 年 2 月

「海ののりもの展」2007 年 2 月

◎2007 年度

「九州大学教育・研究の最前線 －第 6 回 P&P 研究成果－」2007 年 12 月

◎2008 年度

「どきどきわくわく化石のヒミツ展」 2008 年 7 月

「九州大学教育・研究の最前線 －第 7 回 P&P 研究成果－」2008 年 7 月

九州大学総合研究博物館 web サイト[http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/]をリニューアル　2009 年 3 月）

◎ 2009 年度

「九州大学教育・研究の最前線 －第 8 回 P&P 研究成果－」2009 年 9 月

「昆虫のヒミツ展」 2009 年 11 月

（評価と課題）　５５５４４；平均 4,6

○公開展示の資料等を公開する場合は、公開展示の共催団体や少年科学文化会館などのサイトからもアクセスを可能にするなど、より一層のＰＲ活動が必要である。また代表的な収蔵標本のＷｅｂ上での公開を目的として、「バーチャルミュージアム」や「館内散歩」に類するものの開設も検討すべきである。

○充実したものとなっており、評価できる。

○面白いものは入館者も多いことが実感できる。この点を踏まえて効率的に運営していただきたい。

○今後も継続して情報を追加・充実させる必要がある。

D―③．所蔵標本データベース

中期計画には、「博物館が所蔵する標本資料のデータベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する」と掲げている。博物館専任教員が積極的に整理・データベース化、および検索システムの開発に関わっているほか、他部局所蔵標本・資料の整理・デーベース化を支援している。そして、平成 15 年度以降、資料部を構成する様々な分野にデータベース化推進経費を配分して標本資料の整理を促進し、その成果として平成 16 年度以降、博物館ホームページを通じて、標本資料のデータベースを公開しており、毎年その充実を図ってきた。学外からのアクセスも多く、学界に多大の寄与を果たすに至っているのに加え、来るべき新キャンパスへの移転時に他部局から当館への標本類の移管・移動が本格化することから、さらに速度を速めて標本資料の整理とデータベース化を進める必要がある。現状では、分野によって整理およびデータベース作成の進捗状況に遅速が出ていることから、博物館教員が的確に仲介して事業を推進する必要がある。

現在公開しているデータベースは以下であり、それぞれが 10～50 種ほどの個別標本・資料データベースから構成されている。

＊記録史料データベース
＊考古・人類先史データベース
＊動物・医動物データベース
＊海洋生物標本データベース
＊昆虫標本データベース
＊植物標本データベース

（評価と課題）　４４４４３；平均 3,8

○博物館の最重要任務であるのも関わらず、予算が限られているなかで、各部局の協力を得て、整備が進められている点は高く評価する。公開済みのＤＢについては、より多くの利用の促進のために、関連学会や他の博物館等のＨＰにリンクの設定を行うなどのＰＲ活動についても検討すべきである。

○標本の移転を控え、データベース公開そのものより、それを目指して各部局で資料整理を進めることが重要である。

○九大にある全体の所蔵標本に対してのデータベースの位置づけが必要。

○画像資料が少なく、活用しにくい。記録資料データベースは記録資料館の任務ではないか。データベース公開の目的を明確にし、館務として効率的に充実するよう図られたい。

D―④．出　版・広報

ア．概　要（和文・英文）　資料ＩＤ④ア

「九州大学総合研究博物館概要」は、博物館の沿革、理念、組織活動の概要を和文で分かりやすく説明したもので、平成19年度に各年度1000部を発行し、学内各部局、公開展示・特別展示入場者などに配布した。「The Kyushu University Museum」は「博物館概要」の英語版で、平成20年度に500部を発行した。

（評価と課題）　４４４３３；平均 3,6

○英語版の配布先が不明。Ｇ30 への参画、国際教養学部新設構想などの本学の教育研究戦略に呼応する形で、アジア各国の博物館や関係機関等への配布を通じて、国際化の推進を検討すべきである。

○図像のレイアウト、キャプションに工夫を。

○人事異動によるメンバー交替と改訂のタイミングとの関係でここ数年改訂改定できていない。改訂を急ぐべきである。

イ．博物館ニュース　資料ＩＤ④イ

「博物館ニュース」は学術的内容を一般向けに分かりやすく解説する読み物、各年度の行事、学術標本の紹介などを中心に紹介したパンフレットである。平成 17 年度に５・６号、平成 18 年度に７・８号、平成 19 年度に９・10 号、平成 20 年度に 11・12 号、21 年度には紙面デザインをリニューアルした 13 号を 5000 部印刷し、博物館活動を広く社会に宣伝している。

（評価と課題）　５５４４３；平均 4,2

○学外向けには冊子体の配布が望ましいが、学内向けにはＨＰ掲載や希望に応じて電子媒体での配布を行い、経費節減を検討すべきである。

○博物館活動上のニュースの役割と位置付けについて吟味されることが必要。

○内容が面白く、印刷も良い。概要との落差に驚く。

ウ．研究報告　資料ＩＤ④ウ

中期計画では、「研究紀要、資料集を発行し、博物館の研究活動を社会へ還元する」と掲げている。「九州大学総合研究博物館研究報告」を平成14年度から毎年１号ずつ定期的に発行している。博物館教員および専門研究員が主として執筆しており、標本資料を活用した研究成果、展示手法やアウトリーチ活動など博物館固有の課題に関わる研究成果のほか、学術標本の目録など資料集も掲載する。平成17年度に第４号、平成18年度に第５号、平成19年度に第６号、平成20年度に第７号、平成21年度に第８号を発行し、研究機関・研究者・他博物館等に配布した。

博物館教員それぞれの専門分野の研究成果については各分野の学術誌に発表できるが、多様な博物館活動に関わる研究成果の発表が可能な場として「研究報告」は重要かつ不可欠な役割を果たすに至っている。

（評価と課題）　４４４４４；平均 4,0

○「博物館概要」と同様、海外の博物館との関係強化のためには、英文による学術論文の投稿・掲載を推奨する必要がある。

○内容は高度であるが、博物館・所蔵資料との関連に問題がないか。

○博物館教員の研究成果のうち、各自の専門分野に関わるものは、学会誌に発表の機会があるが、さまざまな博物館活動に関わるものは、博物館学の学会誌がなく、大学博物館協議会も学会誌を刊行していない現状では、発表の場が乏しく、業績にカウントされない難点がある。したがって当研究報告は、それらの業績の発表の受け皿として機能している。内容は博物館活動や個人の研究テーマなど様々なものがあってよく、縛りをかけないほうが良い。

エ．年　報　　資料ＩＤ④エ

中期計画では、「事業計画、予算・決算、博物館活動報告等を載せた年報を作成し、学内、周辺の大学、高校、周辺市町村、県、国、関連機関等へ配布して、博物館活動への理解と協力を求める。」と掲げている。年報では博物館の多様な活動を網羅的に記録している。平成 19 年度に「九州大学総合研究博物館年報第２号 2005-2006 年度」を刊行し 17・18 年度の活動を報告した。平成 20 年度には年報の発行を行わず、平成 21 年度に「九州大学総合研究博物館年報第３号 2007-2008 年度」を刊行し平成 19・20 年度の活動を報告した。学内各部局、運営委員、近隣の博物館、自治体、他の大学博物館などに配布し、博物館活動への理解と支援を求める助けとなっている。

（評価と課題）　４４４４４；平均 4,0

○「博物館ニュース」と同様に、学内配布には電子媒体を活用することやＨＰ掲載などを検討すべきである。

○発行は次年度の早い時期が望ましい。

○回を追って充実している。

オ．その他の出版物　　資料ＩＤ④オ

公開展示などの展示に際して、内容を詳細に解説する図録を製作して配布した例がある。当該期間では、平成 17 年度の「九州大学所蔵標本・資料展Ｉ－自然界のなかまたち」展、平成 20 年度の「奴国の南―九大筑紫地区の埋蔵文化財―」展、平成 21 年度の「昆虫のヒミツ」展であり、いずれも好評であった。また、平成 19 年度の「化石のヒミツ」展に際して、親子で楽しめる展示補助ツールとして「親子　de　クエスチョン」、平成 20 年度の博物館常設展示の開設に際しては、展示補助ツール「九大博物館標本かるた」を作製し配布した。

平成 21 年度に、九州産業大学との合同学生実習として、学生の取材・デザインによる九州における大学博物館紹介リーフレットを作成した。九州内の国公私立大学 13 館の協力を得て作成したリーフレット「UM」は、学内経費により 15,000 部印刷し、協力いただいた各大学博物館へ送付するとともに広く配布している。そのほか平成 17 年度末に「九州大学総合研究博物館（平成 12～16 年度）外部評価報告書」を作製した。

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2
○公開展示のカタログなどは普及という意味で評価できる。
○現状の公開展示では、少年科学文化会館・九州国立博物館など展示施設の性格や方針などによって、展示パネルの内容が平易なものに限られたり、展示パネル数に制限があったりするため、学術的に高度な内容を盛り込みにくい。公開展示カタログはその欠点を補う意味がある。
○出版物全体について、九大出版会などと提携して販売するなど、博物館らしい収益法を考えてはいかがか。
○「博物館ニュース」「年報」と同様、電子媒体を最大限に活用する方策を検討すべきである。

D―⑤．新聞等による報道　　資料ＩD⑤

広報活動の成果として、当館のさまざまな活動が新聞等で報道されている。公開展示など展覧会における収蔵標本の公開、教員が進めている興味深い研究の成果が取り上げられることが多い。

（評価と課題）　５４４３３；平均 3,8
○よりいっそうのマスメディアへの登場を期待する。
○今後、報道機関との関係を深めていくことが重要と考えられる。
○博物館建設への理解を得るためにも一層の情報発信が必要。
○宣伝としては良いが、物珍しさに頼っており、単発的な一過性の記事になりがちである。

Ｅ．研　究

Ｅ－①．系の研究

九州大学では，人文・社会科学や自然科学に関する標本や資料を多数収蔵している。それらの保存管理や情報の抽出，展示・公開などには，標本の特性に応じ，また九州大学の研究内容に合った独自の研究が要求される。そのため博物館では，研究教育支援事業を三つに整理し，それらを円滑に機能させるために三つの研究系を設けている。

◎一次資料研究系 (Laboratory of Material Sciences)

学術標本の調査・収集、分類・保存及びその理論・方法に関する研究と教育を行う。研究成果とそれに基づいて適切に維持・管理された標本を分析・抽出のための一次資料として分析技術開発系へ提供し、開示研究系へは展示・公開のための学術標本や総合的分類の成果と分類体系を提供する。

◎分析技術開発系（Laboratory of Analytical Sciences）

学術標本から先端的分析法により新たな学術情報を抽出し、その理論・方法に関する研究と教育を行う。分析結果を新たな分類のため一次資料研究系へ提供し、開示研究系へは臨場感あふれる展示・公開のために必要な抽出情報などを提供する。

◎開示研究系（Laboratory of Information and Multimedia Sciences）

展示・公開のために学術標本の持つ情報のデータベース化と、効果的な展示・公開のための理論・方法の研究と教育を行う。総合的データベースによる標本整備状況を新たな調査・収集計画の策定のために一次資料研究系へ提供し、標本の分析状況など新たな技術開発のための情報を分析技術開発系に提供する。

（評価と課題）　４４３３３；平均 3,4

○３系の研究は多岐に及んでいるが、それぞれの使命や設置の主旨に沿い、かつ独自性を活かした特色ある研究が展開されているかどうかについて検討する必要がある。また博物館設立 10 年を迎えた現在、系としての研究がどの程度実体を備えたものであるかについても検討する必要がある。

○各系での具体的な研究計画の策定が必要。

○理念的にはわかり、研究報告もあるが、系ごとの実例をあげなければ、「系の研究」という形態が有効なのか評価しにくい。

Ｅ－②．共同研究

中期目標では、「博物館に複数の学問分野の教員が共存する利点を生かし、異なった分野間で情報交換、及び共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する」と掲げている。

当博物館の利点を活かした学際的共同研究は、博物館の設立当初から必要性を認識しており、徐々に共同研究の幅を広げつつある。平成 20 年度には、博物館教員・資料部教員が互いの専門分野への理解を深めるために月１回の頻度で「博物館談話会」を実施し研究発表を行った。このほか、平成 19・20 年度には軟体動物学、植物学を専攻する博物館教員が、共同研究の計画を立て、科学研究費補助金（基盤Ｃ）に応募した。

各教員の専門分野とは別に、博物館そのものに関わる様々な課題を追求する研究も、館員の共同研究の対象として重要性が認識されてきた。平成 19～20 年度に実施したＰ＆Ｐ研究については次項で記す。

（評価と課題）　４３３３２；平均 3,0

○博物館の特色を活用した内容の各専門分野に関する共同研究は、件数が少なく、やや不活発・低調で、中期目標を達成していないと思われる。専任教員が関係部局等に出向いて、セミナーや談話会等での発表の機会を得て、積極的に自己の研究をＰＲし、共同研究を模索する必要がある。また貴重図書や古文書の収集・保存・管理などについて、付属図書館との連携を強化すべきである。

○分野を超えた計画の策定が必要。

○データがなく、実施されたのか、また科研に採用されたのか不明。

ア．Ｐ＆Ｐ研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究―アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発―」（07～08 年度）　資料ＩＥ②ア

P&P（教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト）は、教育と研究の一層の発展を図ることを目的として、研究グループに一定の期間研究費等の重点配分を行う九大の学内公募的資金である。このＢタイプ－２（学術文化の総合的な振興を目的とした、人文・社会及び基礎科学の研究に対する配分）に、三島助教を代表とする研究が採択された。本研究は分野横断的な共同研究体制（博物館・人間環境学研究院・芸術工学研究院・ユーザーサイエンス機構）により博物館を研究対象としたもので、中期目標に掲げられた「博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う」ことと合致している。

本研究は、総合研究博物館の標本室公開や公開展示を、子供を含めた学内外の利用者がよりよく活用できるようにするため、現場にフィードバックできる実践研究を行うことを目的とした。具体的には、平成 19 年度には６回のセミナーを実施し、学外から講師を招聘してさまざまな博物館教育の実

践事例を学習するとともに、夏の公開展示を利用した学術調査を行った。平成 20 年度には、学内外から講師を招聘した７回のセミナーと４回のワークショップを実施し、さまざまな事例を学習するとともに、展示室における現地調査とアンケート調査による学術調査、博物館職員も協力した展示補助ツールの開発、インクルーシブな場の試作などを行った。

研究代表者：三島美佐子

分担研究者：平井康之(芸術工学研究院)　　清水麻記(ユーザーサイエンス機構)
南　博文(人間環境学研究院)　　中西哲也(博物館)
丸山宗利(博物館、H18年度のみ)

研 究 経 費：

年　度	交付金額（千円）
平成19年度	3,330
平成20年度	3,270
合　計	6,600

目　　的：　九州大学総合研究博物館は創設以来、公開展示や特別展示などをとおして、九大の学術研究や資料･標本をわかりやすく広く一般に伝えるアウトリーチ活動を実践している。大学博物館での展示は、フィードバック可能な実践研究の場として非常に有効である。同時に、本学博物館が他の大学博物館にはない特色を出すためにも、様々なユーザーに対応したインクルーシブな工夫していく必要がある。本研究により、アウトリーチや子どもを含むインクルーシブな取り組みについての動向を明らかにするとともに、特色ある大学博物館のモデルを探る。本研究は、伊都キャンパスに九大博物館が建設され、移転後に展示等も本格始動すると思われる十数年後への布石となるものであると同時に、大学にあるこそできる、大学博物館としての特色ある新規な役割をあぶり出し、新たな学際的研究分野のにつなげるものとする。

成　　果：　本研究の結果、以下のような学術的・普及的発表がなされた。本研究を足がかりとして、常設展示室のリニューアル、福岡市内の私立大学博物館との連携、九州産業大学との合同博物館実習の実施、新たな学内リサーチコアの形成につながっている。

学術論文・その他の報告等

三島美佐子.（2007）P&P研究費の獲得, 九州大学総合研究博物館ニュース、No. 9: p. 3.

三島美佐子・中西哲也.（2007）「2007年度公開展示わくわくドキドキ化石のヒミツ～化石が語る地球の環境～―第二回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展のご報告―」九州大学総合研究博物館ニュース、No. 9: p. 2.

三島美佐子.（2008）「常設展示室へようこそ：その１「九大博物館標本かるた」うらばなし」九州大学総合研究博物館ニュース, No. 11: 2-3.

三島美佐子.（2009）「常設展示室へようこそ：その２九大博物館展示室を利用したワークショップ①」九州大学総合研究博物館ニュース, No. 12: 2-3.

三島美佐子（2009）「」第２回パブリックヒューマニティーズ研究会: pp. 4-5、国立民族学博物館パブリックヒューマニティーズ研究会編.

三島美佐子・平井康之・清水麻記・中西哲也・丸山宗利・南博文.（2010）「九州大学における今後の「アウトリーチ」のあり方」、*九州大学総合研究博物館研究報告*、 No. 9: 43-48.

三島美佐子・佐々木圭子.（2010）「2008 年度博物館実習におけるサイエンスカフェ実習」、*九州大学総合研究博物館研究報告*、No. 9: 61-65.

三島美佐子・佐々木圭子・加留部貴行・渡辺政隆.（2010）「ワールド・カフェによる科学

コミュニケーションの試み「つどう・かたる・つなぐ～科学と社会の新しい関係づくり～」、*九州大学総合研究博物館研究報告*、No. 9: 75-81.

平井康之「インクルーシブデザインを通じた参加型学習」計測と制御 46(1):pp.51-57.

平井康之ほか.（2008）「新たなコミュニケーションの場として・・・デザインテーブルからバードハウス・カフェ誕生」Birds（NPO法人バードハウスプロジェクト会報）vol.5: 17-19.

平井康之（2009）「熊本県との官学連携-UD 移動ミュージアムプロジェクト」デザイン学研究特集号、日本デザイン学会.

平井康之（2009）「インクルーシブデザインとミュージアムノデザイン」第２回パブリックヒューマニティーズ研究会: pp. 4-5、国立民族学博物館パブリックヒューマニティーズ研究会編.

平井康之・三島美佐子・清水麻記.（2010）「デザイン教育における博物館デザインへの取り組み～九大博物館常設展示室を活用した 2008 年度生活空間造形論・演習～」、*九州大学総合研究博物館研究報告*、No. 9: 57-60.

平井康之・三島美佐子.（2010）「九州大学総合研究博物館常設展示室におけるインクルーシブデザインワークショップ」、*九州大学総合研究博物館研究報告*、No. 9: 67-74.

清水麻記・河野央・平井康之・三島美佐子・南博文.（2010）「大学博物館展示と来館者をつなげる教育補助ツールの開発と効果」、*九州大学総合研究博物館研究報告*、No. 9: 49-55.

学会発表

清水麻記、平井康之、三島美佐子、南博文、「大学博物館におけるアウトリーチ活動に関する研究」、日本理科教育学会全国大会、2007年.

三島美佐子・清水麻記・平井康之・中西哲也・南博文「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」全国大学博物館協議会・第3回博物科学会，2008年6月、大阪.

清水麻記・平井康之・南博文・河野央・三島美佐子「大学博物館展示と来館者をつなげる教育補助ツールの開発と効果―骨格標本室セルフガイド及び親子De クエスチョンの事例から―」全国大学博物館協議会・第3回博物科学会，2008年6月、大阪

平井康之・三島美佐子・清水麻記「インクルーシブデザインからの大学博物館デザイン」全国大学博物館協議会・第3回博物科学会，2008年6月、大阪.

著　　作

清水麻記・河野央・三島美佐子・佐野弘好.（2007）子供むけ展示理解補助ツール「親子De クエスチョン」.

三島美佐子・清水麻記・丸山宗利・中西哲也・黒澤茂樹.（2008）子供むけ展示理解補助ツール「九州大学総合研究博物館 標本かるた１」.

（評価と課題）　４４４４３；平均 3,8

○この種の研究が着手されて日が浅いことは事実であるが、博物館学等に関する共同研究には、その主旨から考えて、博物館専任教員の全員が参画して推進すべきであり、適切な課題の提案、組織の構築などが必要である。

○博物館固有の研究課題に始めて本格的・学際的に取り組んだものとして評価できる。研究期間終了後も何らかの形で研究を継続させ、今後、この研究で形成された人的ネットワークを基礎にさらに研究連携の幅を広げ、質的にも向上を図れるように共同研究をさらに展開し、将来の九大博

物館での実践プランを立てる必要がある。
○好評と自己採点した根拠は何か不明である。せめて参加者数ぐらいは提示されたい。

イ．学会の開催―全国大学博物館等協議会・博物科学会　　**資料ＩＥ②イ**

大学博物館は、一般の博物館と異なる大学博物館固有の課題と研究分野を持つ。それらの多くは他の大学博物館と共通しており、各館が別個に取り組むだけでなく、実践例やその結果などについて大学博物館相互で情報交換を行なうことによって、研究を活性化していくことが有効である。また情報交換は単発的でなく、システムを確立して持続的に深化していく必要がある。

そのため、平成 16 年度以降毎年、大学博物館等協議会・同館長会議・全国博物館長会議に出席し意見交換・情報収集を行っている。このような大学博物館どうしの問題意識の共有を背景として平成 18 年度に博物科学会が設立され、年に一回の大学博物館等協議会大会と同日に学会形式で課題への取り組みを研究発表する場ができた。平成 19 年度には九州大学で大学博物館等協議会 2007 年大会・第２回博物科学会が開催された。

（評価と課題）　４４４４３；平均 3,8
○協議会などへの参加の重要性は十分に認められ、今後も積極的参加が必要である。しかし、このような場で、九大博物館としてどのような情報を発信し、どのような質疑が行われ、それらを専任教員全員が共有し、その後の博物館運営にどう活かされたのかが不明である。教員会議などで報告が行われていると想像するが、より広く（運営委員会レベルなど）、各大学博物館が抱える課題や対応策について情報を共有することが必要である。
○博物科学会の開催は評価できる。
○事務局運営としてはともかく、この機会をとらえて九大から発信した様相が窺えないのは寂しい。

Ｅ－③．専門分野の研究　　**資料ＩＥ③**

各博物館専任教員は、学術標本・資料などに基づき、各自の専門分野の研究を行っている。各教員は、各自の専門分野でのキュレーション業務が円滑に推進できるように、方法論を練磨し、資料収集や分析を進めている。そうした日常的研鑽の成果を不断に発表し続ける必要がある。研究成果は国内外の学会、研究集会、シンポジウムなどで口頭或いはポスター発表され、また原著論文・調査報告が学術雑誌、報告書、単行本として刊行されている。

（評価と課題）　４４４４３；平均 3,8
○博物館専任教員の研究面でのポテンシャルをはかるひとつの尺度として国際誌上での論文発表はきわめて重要であると考えられる。しかし、国際誌での論文出版が全体に少なく、博物館としての特色ある研究の成果発表も決して十分とはいえない状況にあるといわざるをえない。博物館としての業務が多岐にわたり、自身の研究に割く時間が十分ではないことを容易に想像されるが、教員各個人が国際誌出版について数値目標を自ら設定し、専門分野における研究活動を発展させる必要がある。
○各専門分野の相互理解と境界領域の研究も望まれる。
○査読付き学術雑誌や啓蒙書をも通じて、広く成果を社会に還元していただきたい。

Ｆ．教　　育

博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部・学府の兼任教員、或いは協力講座担当教員として、本務に差し支えない範囲で、講義・実習に積極的に携わるとともに、理学部・文学部で開講している学芸員取得コースの講義を担当し、学芸員の養成に努めている。

大学・大学院では学術標本・資料の情報化過程と資料情報の解析法を習得させ、実践的な高い研究能力を持った人材を養成することが必要である。また人文科学や自然科学の狭い枠内のみに閉じこもらない知識と発想をもった人材養成のためには、分野横断的な学問の展開を、講義だけでなく学術標本・資料による実証教育を通して理解させることが必要である。博物館は、学術標本・資料の提供と実践例の提示によって、このような高等教育に積極的に寄与することも目的の一つとしている。

Ｆ－①．学芸員資格関連授業・実習　　資料ＩＦ①

博物館は、博物館・美術館・資料館などの業務に従事できる有能な人材の養成、および博物館に対する理解を広めることを目的として、学芸員資格取得に関連する講義・実習を開講している（資料4-3）。

九州大学における学芸員資格取得のための教育は、長い間、文学部・教育学部で全学に向けて実施してきた。しかし、文学部で開講する博物館学関係講義は、文科系博物館に関わること（文献史学・美術史学・考古学・民俗学）に偏るのは避けられず、理科系学生には必ずしも向いていなかった。そこで理科系教員が多い博物館の設立を契機として、平成13年度から理学部を開講部局として、理科系学生を対象とした、学芸員資格取得のための科目「博物館概論」・「博物館経営論」・「博物館資料論」・「博物館情報論」・「視聴覚教育メディア論」を開講した。理学部、農学部、理学府、生物資源環境学府、比較社会文化学府の学生が各科目30名～45名が受講している。なお、博物館の文科系教員は、理科系教員と共同で「博物館概論」・「博物館経営論」を担当するほか、文学部で開講する「博物館資料論」・「博物館学実習」にも学内非常勤講師として出講している。

博物館実習は、博物館の創設以前には、農学部学生係が窓口となって、学外の博物館・動物園・水族館・植物園などで実施してきた。平成14年1月16日に博物館相当施設に認定され、平成14年度から、学内で「植物学標本実習」・「地球惑星科学標本実習」・「動物学標本実習」を、理学部・農学部教員の協力のもとに開講した。なお、学内での実習だけでは受講希望者全員には対応できないため、従来どおり農学部を窓口とする学外施設での「博物館実習」も継続している。

（評価と課題）　５５４４３；平均 4,2

○他部局が行っているように、ＦＤを実施して教育方法の改善に役立てるべきである。
○全国に存在する博物館の種別に比して、今後、ますます理系偏重に陥る懸念がある。
○これらの授業・実習は、将来学芸員となる人材の養成に留まらず、博物館一般あるいは学術標本・文化財に対する理解・愛着を有す人材を少しでも多く社会に送り出す上で不可欠な業務であり、学生の関心を深めることに寄与している。今後も継続するとともに、日常的な博物館活動の成果を反映させつつ学生の興味関心を引き出す工夫を重ねる必要がある。

Ｆ－②．大学院教育　　資料ＩＦ②

博物館教員は、各人の専門分野と関連する学府の兼担として、理学府・工学府・農学府・比較社会文化学府・統合新領域学府において講義・演習や学生指導を担当している。

理学府では、平成 15 年度より博物館専任教員２名が地球惑星科学科の協力講座「地球惑星博物学（古生物学分野・鉱物学分野）」を担当し、理学府の大学院生の指導に当たっており、平成 19 年度に

は博物館教員が参加する理学研究院地球惑星科学専攻のカリキュラムについて、理学研究院の関連研究分野の教員と共同で内容・実施時期の検討を行なった。比較社会文化学府では、博物館教員２名が基層構造講座・地球資料情報講座の兼担として講義・演習を担当している。平成 21 年から新設された統合新領域学府には、博物館専任教員１名が兼担専任として演習を担当し、大学院生の指導に当たっている。

中期計画では、「標本資料を分析するための適切な方法論を持ち、実験・分析などの手段を通して、情報を適格に抽出できるよう教育する」と掲げている。そのため、博物館の実験・分析を行うための施設・設備の整備が進むにつれて、それらを用いたきめ細かな教育が可能になってきている。平成 19 年度に旧工学部本館に移転したのを機に、平成 20 年度から標本資料の収蔵展示室を設け、実物を用いた教育環境を整備する作業に着手し、現在継続中である。また中期計画では、「理論・学史・先行研究を総括して研究動向と問題を適切に抽出し、その中に自分の研究を適切に位置付け、オリジナルな見解を提示し、その集積を体系化できるよう教育する」と掲げている。そのため、大学院教育に必要な書籍類を順次揃えつつあり、平成 19 年度から旧工学部本館に図書室を設け利用しやすくした。平成 20 年度に受贈した膨大な量の岡崎敬氏旧蔵書も整理終了しだい利用に供する予定である。

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0

○中期計画に掲げられている「実物を用いた教育」（大学院）が実行されたのかどうか不明。実行されているのであれば、その内容や教育効果について上記Ｅ―②アのような協議会等で報告し、方法等についていっそうの改善を図るべきである。

○全国に存在する博物館の種別に比して、今後、ますます理系偏重に陥る懸念がある。

○博物館教員は博物館職員としての業務以外に各自の専門分野の研究を遂行しており、その成果を大学院生の教育に反映させる場を持つことは研究の深化上でも有効に作用している。理学府・比較社会文化学府では、それぞれの学府における大学院生教育に不可欠の役割を担うに至っている。

Ｆ―③．学部教育　　**資料ＩＦ③**

博物館専任教員は、各自の専門分野と関連する学部の兼任教員・学内非常勤講師となって、授業や学生指導を担当している。これは博物館教員が各自の専門分野での研究成果を学部学生の教育に反映させて、教育現場との関わりを維持していく上で重要な業務である。各学部で学生の教育にかかわる中で、現在の学生の知的状況を把握し、大学博物館の教育への活用法を考察する良い機会となっている。

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0

○博物館専任教員としての特色ある授業の実施が期待される。

○全国に存在する博物館の種別に比して、今後、ますます理系偏重に陥る懸念がある。

Ｆ―④．教育支援

博物館は、上記４−１～３で述べたような、館員が直接に関与する教育以外にも、他部局による教育や行事の支援事業を行ってきた。すなわち、展示の公開、展示場所や諸設備（大型カラープリンター・展示用具・展示補助具）の貸出し、など他部局が持たない施設・機器の貸出しで協力を行っている。また中期計画では、「博物館資料の情報を提供し、学生の勉学を支援する」と掲げており、標本資料の閲覧希望への対応などにより、博物館資料を用いる教育の支援を行なっている。

ア．展示施設・実物資料の活用

展示施設の公開による教育への活用のために、平成 18 年度から第一分館２階の骨格標本室を、平成 19 年度から同建物１階の自然史資料室を適宜公開した。旧工学部本館３階の常設展示室は 2008 年度から公開を開始し、芸術工学府・研究院による演習の場として提供したほか、学内各部局による授業での利用が増えつつある。

実物資料の教育への活用のために、標本の公開と新規収蔵を進めた。平成 18 年度には骨格標本、平成 19 年度には自然史資料室の高壮吉鉱物標本、平成 20 年度には常設展示室の展示物を、学内各部局からの依頼に応じて適宜公開し、学部生・大学院生の教育用として活用し始めた。このほか平成 20 年度には、六本松地区図書館から旧玉泉館考古資料を第一分館１階に移して公開の準備を始めたほか、旧工学部本館建物については、昆虫整理室に、寄贈を受けた佐々治標本・大塚標本・村井標本、および六本松地区から移動した嶌標本を収蔵した。化石標本室には六本松地区から移動した小池標本を収蔵した。植物標本室には学内に散在している標本棚の一部を移設し、最近の証拠標本および東京大学から寄贈された標本を収蔵した。液浸標本室には液浸魚類標本を収蔵した。これらも順次、学生の教育に供する予定である。

また、学生・院生による博物館所蔵標本資料の閲覧希望に対処するため、標本資料閲覧要綱（平成 18 年度制定）を定め、研究資料としての閲覧希望が多い骨格標本については、要綱に則って形質人類学・考古学専攻の大学院生への閲覧を開始した。閲覧の希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

すでに博物館に移管された資料のみならず、九大全学の学術標本の情報化を推進して提供し、学生の勉学に役立てることは大学博物館の重要な使命である。平成 19・20 年度にも標本資料データベースの充実を推進し、博物館ホームページ、研究報告、博物館ニュースを通じ情報を提供した。

このほか平成 20 年度に、国内外の昆虫学・植物学・考古学関係図書等の寄贈を受け、また研究費より博物館学関係の図書を購入して図書室に配架し、学生の勉学に供した。

なお、博物館の展示施設と展示用具を他部局の論文発表会に貸し出す形の教育支援は、平成 14 から 16 年度まで農学部農学分野の公開卒業論文発表会に対して実施したが、平成 17 年度以降、博物館運営委員会を通じて全学へ向けて卒業研究発表会の募集を行なったが応募がない状況が続いている。

イ．機器の活用

博物館が記念講堂３階の展示準備室に設置している大型カラープリンターは、専門の印刷業者や展示業者が使用する機種であり、学会発表用のポスター、行事のポスター・看板・横断幕などを大型の用紙に美麗に印刷することが可能である。博物館専任教員以外の兼任教員・運営委員会委員および、それ以外の教員で専任教員の了解を得た人には、紙代実費負担での開放を行っており、学会や卒論・修論の発表会の前には特に使用希望が多い。

また博物館は、各種展示ケース・展示台・バックパネル・吊り下げパネル（Ｂ０・Ｂ１）・立看板などの展示用具・展示補助具を多数所有している。これらは学内諸部局の依頼に応じて無償での貸出しを行っており、各種の展覧会・講演会・学会・セミナー・論文発表会などで活用されている。

設備の活用として、大型プリンターの開放、イベントパネルの貸し出しによる教育の支援を継続的に行なっている。大型プリンターは教員・学生から学会発表資料等の作成での使用希望が年々増加しており、極力要望にこたえるようにしている。

開放実績数：2005 年度 21 件、2006 年度 7 件、2007 年度 10 件、2008 年度 11 件、2009 年度 8 件

貸出実績数：2005 年度 59 件、2006 年度 20 件、2007 年度 16 件、2008 年度 8 件、2009 年度 8 件

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2

○標本の教育利用について、ＰＲ活動をいっそう強化する必要がある。

○支援業務の推進のためには、今後も実物資料の公開場所の獲得と展示・活用方法の研究・改善に努めるべきであるが、九大全体の所蔵資料の量に比べると、提供が可能になった情報量はまだ多くはないため、継続的に実施して提供量の増大を図る必要がある。これらを博物館職員が教育に活用するだけでなく、学内の各部局に積極的に情宣し、学際的活用を促していく必要がある。

○どのような教育支援が出来るかを整理し、広報を行うことにより、博物館の認知度を上げることが望ましい。

○努力の跡は見られるが、実績が年ごとに減少している現実を変えなければならない。

Ｆ－⑤．社会教育・学校外教育への貢献

大学博物館が、大学における教育のみならず、初等・中等教育さらには生涯学習にも何らかの形で貢献する必要性が高まっている。中期計画では、「青少年の理科離れの是正や総合学習を積極的に支援するため、県・市町村教育委員会との間で、小中高校教員が博物館で初等・中等教育に当たる制度を検討する」と掲げているが、今の所、県・市町村教育委員会との間での制度の検討には着手できておらず、学内的な検討に留まる。平成 16 年度に策定した事業部構想は、大学博物館が学外の地域社会に対して果たしえる種々の社会貢献（生涯学習支援・少年教育支援・研究成果展示公開など）を、学外組織と連携しつつ強力に実践するために、あらたに事業部を設け、公共団体や民間組織などに所属する人材を配置する構想であったが実現しなかった。

平成 18 年度に、USI 子供プロジェクトの教員との懇談会を開き初頭・中等教育と大学博物館の関わりに関する意見を聞いた。また平成 18 年度に実施した「海のゆりかご」企画において小学４年生対象のワークショップを実施し、その過程で実施先の小学校の総合学習担当教諭から総合学習支援に対する要望等を聞いた。平成 19 年度には、三島助教を中心とする P&P 研究「九州大学博物館を展示を利用した実践的研究―アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもの間の関わりを促すツール開発―」が採択された。初等・中等教育と大学博物館の関わりを研究するためのセミナーを、平成 19 年度に６回、平成 20 年度に６回実施したほか、個別の聞き取りも行い、当該問題に詳しい専門家から意見を聞き議論を行なった。

（評価と課題）　４４４４２；平均 3,6

○社会教育・学校外教育への貢献は避けて通れない任務となっており、方法論の研究、様々な実践を試行的に行なっていく必要がある。大学博物館が側面からの支援でなく主体的に初等・中等教育に関わる程度・方法については、大学博物館の主要ミッションとの関係で議論を重ねる必要がある。

○次世代の科学者を養成するという重要な任務の一環を博物館が担っていることについてより　自覚・認識を深め、小・中・高校での出前講義・実習・展示への積極的参加、常設展示室の利用拡大、博物館関係の学生による九大祭参加などについて検討する必要がある。要請を受けてからではなく、積極的に機会を求める姿勢で臨むことが必要である。

○公開展示や公開講演会が機能しており、評価できる。

○一部達成できていない計画・構想がある。

○努力は窺えるが、成果が見えてこない。

Ｇ．学内他部局との連携

博物館は、全学の共同教育研究施設として、特定部局の利用に偏することなく、全学の学術標本の管理、整理、保存、情報の抽出、データベース化を助け、学術標本とデータの教育・研究への利用を支援している。

Ｇ－①．教育研究における連携

公開展示はそもそも他部局との連携・協力によって可能となる事業であるが、平成14年から学内各部局の教員及び博物館専任教員からなる資料部に展示企画ワーキング・グループを設け、博物館専任教員だけではカバーしきれない学内の研究分野・標本資料分野について、全学的見地から展示の企画を行うこととした。ワーキング・グループは資料部兼任教員６名、博物館専任教員２、３名からなり、任期は２年である。１年目は次年度公開展示について大まかなテーマ案を決め、博物館に答申する。博物館は答申に基づき、展示担当部局と交渉し、実行委員会を作り、展示を具体化する。２年目は、展示の実行を見守る。

教育における他部局との連携は、博物館が旧工学部本館や第一分館に展示施設を持つようになってから顕著に進展した。旧工学部本館常設展示室は、平成20年度から芸術工学研究院による演習の場として活用されており、博物館教員も演習に参加し教育効果を高めるように協力している。博物館第一分館は農学部動物学教室、統合新領域学府等の授業に活用されるようになり、実物を用いる教育に貢献している。また研究における連携では、P&P研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」（資料5-3A）の開始を契機として、九大内において博物館を研究対象とする教員との連携が進んだ。この連携はP&P研究終了後も継続・拡大させており、平成21年度後半からは、リサーチコア形成に向けての準備を開始した。

（評価と課題）　４４４４３；平均 3,8

○実物教育の重要性のアピールが不十分であり、ＨＰのリンク拡大・充実、新入生オリエンテーション企画への積極的参加なども検討すべきである。

○博物館をフィールドとする芸術工学研究院・人間環境学研究院・統合新領域学府との連携をさらに推進し、新しい展示手法、展示空間の研究を推進すべきである。

○博物館施設の改善と連携のための広報が望まれる。

○データがなく、進捗状況などがよく分からない。

Ｇ－②．全学委員会などへの参画

博物館はセンター群協議会IIの主要メンバーとして、新キャンパス計画専門委員会（平成13年度～16年度）及び同委員会タウン・オン・キャンパスWG（13年度～21年度）、同委員会イースト・センターゾーンWG（13年度～21年度）を務め、平成20・21年度には多田内館長がセンター群協議会Ⅱ議長を務めた。また、新キャンパス専門委員会の文化財WG（平成14年度～）、埋蔵文化財調査委員会（平成21年度～）、埋蔵文化財調査委員会の埋蔵文化財WG（平成21年度～）の委員として、委員会並びにワーキング・グループに参加し、大学移転や学内文化財保護の審議に協力している。

（評価と課題）　５５４４４；平均4,4
○全学レベルでのマネージメントへの貢献は高く評価する。今後はとくにキャンパス移転に関する委員会等にはいっそう深いコミット、リーダーシップの発揮が必要である。
○伊都キャンパスへの移転に向けて農学部・理学部・文系諸学部・図書館などが設ける委員会にも何らかの形で関係し、情報を収集しつつ協力関係を築く必要がある。
○一部の教員に負担が重くないか懸念がある。

H．他博物館などとの連携

H―①．大学博物館等協議会（18年度に国立大学博物館等協議会から改称）

中期計画では、「他大学との研究情報交換システムを確立する」と掲げている。大学博物館は、各教員の個人的研究テーマとは別に、大学博物館固有の課題と研究分野を持つ。それらの多くは他の大学博物館と共通しており、各館が別個に取り組むだけでなく、実践例やその結果などについて大学博物館相互で情報交換を行なうことによって、研究を活性化していくことが有効的である。また情報交換は単発的でなく、システムを確立して持続的に深化していく必要がある。

そのため当館は、大学博物館等協議会に所属しており、平成16年度以降毎年、館長、専任教員、専門職員など３～４名が大会に参加して、各大学博物館の活動、直面する諸問題について意見交換・情報収集を行ってきた。このような大学博物館どうしの問題意識の共有を背景として平成18年度に博物科学会が設立され、年に一回の大学博物館等協議会大会と同日に学会形式で課題への取り組みを研究発表する場ができた。平成19年度には九州大学で大学博物館等協議会2007年大会・第２回博物科学会を開催し、平成20年度には、大学博物館等協議会2008年大会・第３回博物科学会、平成21年度には、大学博物館等協議会2009年大会・第４回博物科学会に参加し、館長会議・実務者会議・協議会総会において様々な問題について議論を深め他大学との情報交換に努めた。

（評価と課題）　５４４４４；平均4,2
○Ｅ−②アの場合と同様、協議会等で提出された問題点を博物館教員・事務組織全員で共有することが必要で、それをその後の博物館の運営に十分に反映させる必要がある。
○中心となる活動をしており評価できる。
○学会開催は労を多とするが、参加・連携の成果をどう示すかが課題である。
○協議会・博物科学会に積極的に参加することによって、同学会を研究情報交換システムとして熟成させていくことが望ましく、当館が主導的役割を果たせるように努力する必要がある。

H―②．福岡市博物館

九州大学の教育・研究を広く社会に紹介する場として、平成12・13・16年度に、福岡市博物館と協議して特別展示室Bを借りて公開展示を行ってきた。平成17年度以降は中断しているが、これは歴史・民俗系の博物館である福岡市博物館の性格上、自然史系・技術史系の展示は適さず、福岡市少年科学文化会館に場所を移して実施したこと、平成20年度の「奴国の南」展は九州国立博物館で開催したことによる。しかし福岡市博物館は、福岡市内で代表的な展示施設であり、今後も文化史系の公開展示を計画する場合には協力を要請する可能性があり、その他の博物館活動における連携を模索していく必要がある。

（評価と課題）　４３３３３；平均 3,2
○連携強化と同時に、同一地域内に存在する歴史・民俗系博物館との役割分担（棲み分け）の明確化と特色を活かした差別化を図る必要がある。
○普段の交流が望まれる。
○今後の連携のあり方についての検討が必要である。
○九国博との違いを見定められたい。

H―③．福岡市少年科学文化会館

少年科学文化会館は、児童生徒に科学や文化に関する興味や関心を高め、体験を通じて科学する心、文化を創造する心を育てる学習活動の場である。博物館は少年科学文化会館との意見交換を通じて、講演や実習による支援を行い、自然史系の公開展示の会場として、平成14・15・17・18・19・21年度に１階学習室を利用させてもらっている。平成14・15・17年度には夏休み前半を文化会館が計画した展示、夏休み後半を当館の展示というように期間を分けて両者が別個の展示を行っていたが、平成18年度の「空と海ののりもの展」、平成19年度の「わくわくどきどき化石のヒミツ」展、平成21年度の「昆虫のヒミツ」展では、別予算という事情から学習室の空間を二分はしたものの、夏休み期間を通じて両者が同一テーマで展示する形に変わり、協力関係がより深まったと言える。

（評価と課題）　５５４４４；平均 4,4
○同館は、小学生の利用が中心的であると思われるので、利用者の年令・知識レベルがより幅広いと思われる北九州市立「いのちのたび」博物館との連携強化も検討すべきである。
○公開展示などの協力関係が出来ており、良好と考えられる。
○科学文化会館の今後をにらみ、積極的に提言・提案していただきたい。

H―④．九州国立博物館

平成16年度に博物館では施設、設備などを見学するため、館長始め、専任教員、専門職員が、会館準備中の国立九州博物館を訪問し、学芸員から説明を受け、情報の交換を行ったが、平成17～19年度は福岡市少年科学文化会館で公開展示を実施したため、交流がなかった。平成20年度に九州国立博物館文化交流展示室第３室を借用して「奴国の南」展を実施し、国立博物館学芸員との交流が深まった。平成21年度には、平成24年度から実施される学芸員資格関連科目の増加への対応策として、国立博物館職員の協力を得るための交渉を行っている。

（評価と課題）　４４４３３；平均 3,6
○連携強化と同時に、同一地域内に存在する歴史・民俗系博物館との役割分担（棲み分け）の明確化と特色を活かした差別化を図る必要がある。
○普段の交流が望まれる。
○九国博での展示は、説明パネルの数・文字数が制限され、展示手法も美術展示風であるので、必ずしも大学博物館の研究展示に向いているとはいえない。しかし、来客数が多い九国博との展示での連携の過程で、当館の存在・業務・新キャンパスでの建物建設などへの一般の理解を増進する活動を行なっていく必要がある。
○今後の連携のあり方についての検討が必要である。
○福岡市博との違いを見定められたい。教育面での提携も期待する。

H―⑤．他大学博物館

学外大学博物館との連携は、平成 20 年度後半から準備を始め、平成 21 年度に西南学院大学博物館、九州産業大学美術館と合同で、合同実習実施・単位互換制度などを含む教育連携提案を作成し、文部科学省大学連携事業への応募を試みた。採択にはいたらなかったが、その後学芸員カリキュラム改訂に関る検討や単位互換制度などについての協議を続けている。平成 21 年度後半は、九州産業大学との合同学生実習として、リーフレット作製実習を試みている。学生の取材、デザインによる九州における大学博物館紹介リーフレットを作成するという実践実習である。この過程において、九州内の国公私立大学 13 館に協力を得ることができ、九州内の大学博物館ネットワークの基礎が構築されている。作成されたリーフレット「UM」は、学内経費により 15,000 部印刷され、協力いただいた各大学博物館へ送付するとともに、配布している。

（評価と課題）　４４４４３；平均 3,8

○九州圏内の各大学博物館との連携を今後もさらに充実・発展させることが重要である。とくに近隣の福岡大学や佐賀大学などの関連部局との連携を一層強化する必要がある。

○カリキュラムのみではなく普段の交流が望まれる。

○教育面での提携の深化を期待する。

Ｉ．社会貢献・教育普及活動

今日の大学には、学内での教育・研究に加えて、学外の一般社会に対する貢献が強く求められている。博物館は、地域の生涯学習の拠点として常時機能し、九州大学の市民への公開を積極的に進めるための「セミナーハウス」として機能することが期待されており、以下に述べる各種教育普及活動を通して生涯教育に寄与している。

Ｉ―①．公開講演会等　　資料Ｉｉ①

中期計画では、「博物館専任教員及び外部の研究者を講師とした普及講演会を開催し、生涯学習に寄与する」と掲げている。公開講演会は、地球惑星科学・考古科学・生物学など当博物館の研究領域と関係深い分野の最新の成果をわかりやすく一般に紹介する講演会である。一回に３～５人ほどの講師に依頼しており、標本や模型の展示を伴う場合もある。

平成 17 年度は第５回「シーボルトが集めたニッポン」、06 年度は第６回「よみがえる標本―骨・動物・ヒト―」、平成 19 年度は第７回「鉱山遺跡を楽しもう」（石見銀山・鉱山関係）、平成 20 年度には第８回「植物の世界－お花畑から遺伝子までー」、平成 21 年度には第９回「月の起源と進化」を実施した。館者の反応は概ね良好であり、今後もニーズを的確に把握しつつ、興味深いテーマを開拓していく予定である。

また当館主催事業ではないが、共催として、海のゆりかご実行委員会主催事業「海のゆりかご―次世代につなげる文化と生き物―」を、九大ユーザーサイエンス機構とともに共催し、写真展・市民セミナーなどを実施した。

（評価と課題）　５４４４４；平均4,2

○これまでに多彩なテーマで公開講演会を開催してきた実績はおおいに評価できる。しかし、市民の生涯学習に寄与することが主な目的であれば、学内で開催するのではなく、市民がより気軽に参加が可能である、学外の適切な会場で開催することを検討すべきである。

○興味深いテーマを揃えているが、広報が足りないのではないか。カルチャーセンターなどと提携して定期化し、広く世間に宣伝することを望む。

Ｉ―②．コミュニケーションミュージアム事業（九大糸島会・総合研究博物館）　　**資料Ｉｉ②**

この事業は、地域貢献特別支援事業費による事業として行っている。九州大学の糸島地区への移転を契機に、九州大学と同地域各自治体（前原市・志摩町・二丈町）との連携・交流を推進し、糸島地域のさらなる発展を図ることを目的に、平成14年2月に「九大・糸島会」が設立された。博物館は同会と共催で、糸島地域が持つ自然・歴史・文化・産業などの地域資源について、地域住民とともに学習しながら再発見する「地域資源再発見塾」を開催している。一般市民を対象に、博物館教員が他部局教員・職員や民間研究会の協力を得て、講演会・観察会・標本実習などを行なった。博物館職員など専門家が講師を務めることにより､興味深い話で児童生徒の理科離れ対策の役割を果たすとともに、一般社会人の生涯学習を支援し、ボランティア活動を通じた地域と大学との連携の提案を目指している。他に、九州大学を伊都キャンパスの地元に紹介し、地元の理解と支援を得るとともに、大学の教職員・学生が地元を知るために、会員交流事業・ふれあいバスツアーなどを継続的に行なっている。

（評価と課題）　５５４４３；平均4,2

○糸島地区住民との連携・交流の促進事業は、九州大学として取り組むべき重要な事業であると認識する。ただ博物館本来の社会貢献・普及活動とは若干主旨を異にすると思われるので、本務に支障が起きない範囲内での協力を進めるべきである。

○博物館固有の社会貢献活動をはみ出す部分も有るが、糸島地区自治体の社会教育関係職員との人的ネットワークの構築に効果があり、地元住民に博物館への理解を深める活動の一環として機能している。

○地域貢献の一環として評価できる。

○博物館の業務としなければならないのか、再検討を要する。

Ｉ―③．談話会・セミナー　　**資料Ｉｉ③**

博物館セミナーは、当館を来訪する研究者に、専門分野の研究成果を発表してもらい、各学界の最新知見を把握することを目指して平成16年度に始めたが、諸般の事情で中断し、平成20年度に再開した。再開時には、学内の異分野研究者の交流ならびに学際的研究の推進を主目的とした。博物館資料部教員の持ち回りとし、専任教員による話題提供から始めた。当館が抱える問題の実践的解決の必要から、専任教員と学外研究者の共同発表や話題提供も含むようになっている。一般向けを前提とする公開講演会と異なり、専門的な内容であるので、研究者向けではあるが、研究者以外の人にも公開する形で実施しており、より深い知識を求める人のニーズに応えようとしている。

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0
○談話会を再開し、異分野交流の促進を目指している点は高く評価できるし、継続させる必要がある。ただ談話会の認知度が低いので、今後はＰＲ活動にも力を入れ、より広汎な研究者の参加が実現するよう努力すべきである。
○性格がしだいに変化してきたが、学内外の異分野研究者とのネットワーク構築に機能し始めている。
○資料部教員なども参加しやすい環境での開催と広報が望まれる。
○目的と位置づけが曖昧に見え、果たして「社会貢献・教育普及活動」に入る項目か疑問。

Ｉ―④．ひらめき☆ときめきサイエンス　　資料Ｉｉ④

中期計画では、「フィールド・ミュージアム部を中心にして、社会人及び学生を対象とした野外実習を実施する」と掲げているが、実際的活動が行なえない状況が続いていたため、平成 19 年度に、農学研究院の兼任教員と、英彦山の施設を利用した昆虫の野外観察の計画を立案した。そこで、平成 20・21 年度にフィールド・ミュージアム部の活動の予行として、日本学術振興会の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用して、英彦山の施設を利用した昆虫・植物・陸貝・岩石の野外観察会を実施した。

第１回：平成 20 年８月９日～８月 10 日
第２回：平成 21 年７月 18 日～８月 21 日
場　所：県立英彦山青年の家（田川郡添田町）
主　題：英彦山の自然体験学習―昆虫・植物・陸産貝・岩石・鉱物―

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2
○資金面でのサポートが必須であり、科研費等の外部資金の獲得、地元公共団体によるマンパワーの提供を通しての支援・協力などを仰ぐ必要がある。また福岡市および近郊地区での自然観察会や文化財見学ツアーなどを企画・実施することも検討すべきである。こうした事業の企画・立案・実行などを学生主導で行い、単位化することも検討すべきではないだろうか。
○自然史系・文化史系を問わず、フィールドワークを行なう一般向け講座の実施には労力を要するが、ニーズは多いはずで、拡充が望まれる。
○一般市民を募集したこのような活動は評価出来るので､継続可能な形での類似の活動が望まれる。
○今後の発展を望みたい。少なくとも参加者数のデータは欲しい。

Ｊ．国際連携

Ｊ-①．海外研究者との交流・共同研究

中期計画では「国外の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）及び研究の訓練を行う」と掲げている。平成 19・20 年度に国外の若手研究者を招いての研修や訓練を行なうことはできなかったが、教育研究活動における国際交流の実践として、西宮市貝類館の協力を得て、別刷り類の収集を行い、カセツァート大学水産学部、プーケット海洋生物学研究センターに寄贈して施設の充実を助けた。平成 20 年度にはマレーシア科学大学で開かれた JSPS NaGISA Bivalve Taxonomy Workshop の講師となり、東南アジアの学生、若手研究者の教育を行った。

中期計画では、「関連部局の教員と共同で、東南アジアを中心に海外の研究者をパートナーとした

共同研究を実施する」と掲げている。

植物関係では、平成 19 年度は中島平和財団のアジア地域重点研究助成で採択された中国の研究者との共同研究により、中国内での野外調査（２回）を行い、また先方の研究者による国内での野外調査（２回）を行い、来年度以降の共同研究についても確約した。平成 21 年度から、インドとの共同研究が立ち上がっている。当面は、これらアジアでの共同研究を継続させている。

軟体動物関係では、平成 19・20 年度に韓国の研究者と日本の陸生貝類の起源と移動に関する共同研究を計画し韓国で野外調査を行った。またフランスの研究者とオマーンの新石器時代の遺跡から出土した二枚貝の新種の記載を進めている。

昆虫関係では平成 19 年度に中国・イラン・オーストリア・オランダ・アメリカ・カナダの研究者との共同研究を実施し、平成 20 年度にはマレーシアで野外調査を行い、中国・イラン・オーストリア・オランダ・イギリス・アメリカ・カナダ・オーストラリア・マレーシア・タイの研究者との共同研究を実施した。平成 21 年度にはエクアドル・マレーシア・タイ・カメルーンで調査を行った。

（評価と課題）　４４４３３；平均 3,6

○単に専門分野に関する共同研究の推進だけにとどまらず、学芸員養成や博物館管理・運営等の面での情報提供・意見交換も必要である。

○海外の博物館職員と交流し、日本の博物館との比較研究をするのが、当館の研究テーマとなりえるのではないか。

○博物館としの活動なのか、個人研究なのか、また、成果を博物館の事業に活かせているのか、説明が必要ではないか。

Ｊ－②．外国人研究者の受け入れ

平成 20 年 5 月 8 日～11 月 4 日まで､孔令鋒中国海洋大学講師を外国人訪問研究者として受け入れ、軟体動物の形態学的分類を指導し、マルスダレガイ科二枚貝の形態学的・分子生物学的分類の共同研究を行った（受入教員；松隈明彦）。

平成 21 年 7 月 19 日～28 日まで、Medicinal, Aromatic & Economic Plant Division, North East Institute of Science & Technology (NEIST)の、MANTU BHUYAN 氏（Scientist B）を受け入れ植物学の共同研究を行った（受入教員；三島美佐子)。

（評価と課題）　４４４３３；平均 3,6

○アジア諸国を中心に外国人研究者の受入を積極的に進め、活性化を図るべきである。

○決して多いとは言えない。短期間の調査者もリストアップしてはいかがか。

Ⅱ. 管理・運営

Ａ．管理運営の理念

博物館の管理運営にあたり、館長の権限や補佐体制及び意志決定システムを明確にし、全学的な運営方針を踏まえ、機動的、戦略的な運営を実現する。特に館長のリーダーシップの下、大学総合研究博物館としての設置理念を踏まえ、平成16年度から始まった中期目標・中期計画を適切に実施し、本

学における学術研究の中核として活動していく。また結果を学内外に情報発信することにより理解と信頼を得られるよう積極的に運営を図る。

（評価と課題）　５４４３３；平均3,8
○博物館を取り巻く厳しい学内情勢や他博物館との競合のなかで、学内外に博物館のアイデンティティを示し、学内におけるステイタスの確立・向上を目指していくための管理運営理念の策定と弾力的・機動的な管理運営体制の確立も検討すべきである。とくに館長の強力なリーダーシップの下で、建物建設や移転を推進し、博物館を九大の顔にしていく必要がある。
○少ない予算・スタッフ、劣悪な展示空間であるから、機動的・戦略的に加えて効率的・選択的な運営が強いられるのではないか。

Ｂ．管理運営体制

博物館の管理運営は、「九州大学総合研究博物館規則」など関係諸規定を遵守して行っている。

Ｂ－①．運営体制と意志決定　　資料ⅡＢ①

館長の選出と役割

館長の選出は、総合研究博物館規則に基づいて、運営委員会の推薦により総長が任命する。任期は２年で再任可、在任期間は最高４年までである。推薦にあたり、館長から全学の部局長に候補者推薦を依頼し、当該候補者について運営委員会構成員の選挙により館長に相応しい候補者を推薦することとなっている。

館長は博物館の業務を掌理するとともに、研究、教育、社会連携、国際連携などの推進および体制の整備、管理運営の効率化などを図る。なお、重要な事項については、運営委員会の審議を経て運営を行う。

副館長の選出と役割

副館長は総合研究博物館規則に基づいて、館長の指名により、運営委員会の承認を経て総長に推薦される。任期は２年とし、当該副館長への就任時における館長の任期の終期を越えることが出来ない。副館長は、博物館専任の教授及び助教授のうちから選定されることになっている。

副館長は、館長を補佐し、博物館の業務を整理するとともに、館長に事故あるときは副館長がその職務を代理する。

意思決定システム

博物館の意志決定は、事項の種類，軽重により次のとおり分けられる。

１）軽易な事項
　　館長の裁量の範囲で決定、実施
２）博物館として判断し決定する事項
　　館長が各種委員会に諮問し、審議を経て決定、実施
３）博物館として判断し決定するもののうち重要な事項
　　人事・予算など重要事項は運営委員会の承認を経て決定、実施される。

なお、運営委員会に諮られる議題については後述の教員会議において検討がなされ、提案されている。また、特に重要な事項については、運営委員会に各種専門委員会が設けられ、検討された結果が

運営委員会に報告され、審議される。

運営委員会

委員会の構成員は２９名で、総長指名の副学長、附属図書館長、情報基盤センター長、博物館専任の教授、助教授、各部局から選ばれた者及び理学部等事務長がそれぞれ参加し、審議が行われている。

審議事項は次のとおりである。

１）館長及び副館長の選考
２）教員の人事
３）教員の研究業務に関する重要事項
４）共同利用に関する重要事項
５）研究員、研究生などに関する事項
６）自己点検評価に関する事項
７）規則の制定、改廃

委員会の委員のうち、キャンパスが離れている部局から参加する委員が多いことから委員の時間的負担が多く、このため、書面会議が多い。

運営委員会開催回数

年度	本会議	書面会議	計
17	3回	3回	6回
18	3回	6回	9回
19	2回	4回	6回
20	2回	7回	9回
21	2回	6回	8回

各種委員会

委員会は次のとおり２つ設置している。

１）自己点検評価委員会
２）セクシュアル・ハラスメント等防止委員会（規程有）

また、関係する部局と協力した委員会として、次の委員会に参画している。

１）理学部等放射線安全委員会
　　博物館などの放射線障害予防などに関し審議する。
２）理学部研究院等衛生部会
　　博物館などの安全衛生管理などに関し審議する。

教員会議

博物館の日常業務を能率的にやりとげるため原則として毎月第１，３，５月曜日の午前中開催されている。メンバーは館長（議長）、専任教員、専門職員、研究支援推進員である。展示、公開講演会、学芸員資格関係授業・実習、標本・資料に関することなどを審議している重要な会議であるが、明文化された規定がない。平成16年度9月から専任教員が交代で書記となり、記録を残している。

（評価と課題）　４４４３３；平均3,6

○専任教授から館長が選任された場合、この教授は館長としての管理運営の任務と教授としての教育研究の任務の両方を背負うこととなり、スタッフの少なさからも、その仕事量は想像を超える。移転、建物建設という博物館にとってきわめて重要な大事業を控えた多難な時期をこれから迎えることとなる。そのため。原則として館長は博物館外から迎えるのが妥当ではないかと思われる。

○館長の選出方法の再検討が必要ではないか。専任教員の館長と館外の館長とどちらが良いかは、どちらも一長一短があって一概には言えないが、いずれにせよアクティブでリーダーシップがある館長が選出されるような制度が望まれる。

○意志決定機関としての教員会議の役割を明文化すべきである。

○制度としては問題ないが、実際に館長が２年限りで交替し続けては、方針が安定しない恐れがある。

Ｂ－②．事務体制

博物館に関わる研究、教育の支援事務（人事事務、勤務時間管理、物品購入、予算執行、安全管理など）は、理学部等事務部が行っている。このほか、博物館には固有の事務（運営委員会などの会議事務、博物館に関する情報収集、標本・展示物などの保管管理事務、ポスター、チラシなどの作成及び発送、ホームページの構築・管理の補助など）がある。事務には、理学部等事務部所属の専門職員１名、博物館所属の事務補佐員１名及び研究支援推進員１名が配置されている。他国立大学博物館の全学レベルの博物館事務は、事務局に所属している場合と、学部事務に所属している場合がある。

業務にあたっては研究部と事務部の連絡調整を密にしながら、事務の効率化、合理化を進めているが、社会連携充実など博物館に対する学内外の理解・支援を増進する諸事業を展開中のため、年々事務量が増加中であり、今後さらになる増加が予想され、る。

（評価と課題）　４４３２１；平均2,8

○少人数ながら、適切なサポート体制が機能していると思われる。ただ、移転および建物建設という重要な局面が迫っているため、事務局との太いパイプを持ち、各種の情報を素早く入手し、迅速・適切に対応することがますます重要になる。そのため、専門職員については理学部等事務部に依存するのではなく、大学事務局専門職員の配置を要請することを検討すべきである。

○独立した一部局として、少なくとも一名の専任の事務官が配置されるべきである。

○業務量増への対応や将来の位置付けについての検討が必要。

○事業を整理し、事務局の業務を効率化する必要がある。

Ｃ．教員組織と人事

Ｃ－①．教員の配置

３　系　　資料ⅡＣ①

博物館には、一次資料研究系・分析技術開発系・開示研究系の３系を置いている。専任教員の配置は次の通りである。

17～18 年度

系	教授	助教授	助手	
一次資料研究系	岩永省三	中牟田義博		

分析技術開発系	松隈明彦	中西哲也		
開示研究系		宮崎克則	小島弘昭	三島美佐子

19 年度～

系	教授	准教授	助教	
一次資料研究系	岩永省三	中牟田義博		
分析技術開発系	松隈明彦	中西哲也		
開示研究系		宮崎克則	三島美佐子	丸山宗利

中期計画では「一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の業務内容の見直しや、系間の境界線の撤去を検討する。また、教員相互の連携を図り、縦割りシステムを改善する」と掲げている。現在の３系体制は、1990 年代後半から大学博物館の設立が始まった際に、主要大学横並びで設置された経緯があり、より適当な体制を検討する必要は、常々議論してきた。平成 16 年度から研究と教育のほか地域連携・社会貢献を重要な柱の一つとする改組の検討を始め、平成 18 年度には各系の内容や系間の境界について教員会議で議論を始めた。これを受け、平成 19 年度には館の基本的使命（ミッション）の再検討を始め、平成 20 年度には改組に備えた将来計画会議を立ち上げ、ミッションを確認し、移転までの具体的活動計画を策定し、各系の内容や系間の境界についての議論を始めた。平成 21 年度以降に改組を具体化させていく予定であったが、平成 21 年度末に大学執行部から、伊都キャンパスにおける博物館建物建設を目指す活動を最優先させる必要性を指摘され、平成 22 年度以降活動計画・改組計画を練り直す必要が生じてきた。

資料部・フィールド・ミュージアム部

博物館には、学術標本の管理・運用にあたる資料部、および野外における教育・研修の支援のあたるフィールド・ミュージアム部が置かれ、専任教員と兼任教員が協力して各種博物館活動を行っている。

中期計画では「資料部及びフィールドミュージアム部の協力教員制度の充実を図る」と掲げている。九大が所蔵する学術標本は 750 万点を越え、博物館の専任教員７名だけでは、管理・収蔵・保管・研究などへの対応は不可能であり、学内の各部門・分野の協力教員制度を充実する必要があることは言うまでもないことから、資料部及びフィールドミュージアム部の協力教員制度の充実を図ってきた。資料部については、工学機械類・医学部附属病院カルテ類など、博物館が扱う資料分野が増加するたびに、新規に協力教員の増加を図っている。また教員の定年などに際しては速やかに後任を決定するようにしている。

中期計画では、「フィールド・ミュージアム部を中心にして、社会人及び学生を対象とした野外実習を実施する」と掲げている。フィールド・ミュージアム部については、平成 16 年度に内規を定めたものの実際的活動が行なえない状況が続いていたため、平成 18 年度にその活性化について教員会議で議論を行ない、平成 19 年度に、農学研究院の兼任教員と、英彦山の施設を利用した昆虫の野外観察の計画を立案した。平成 20・21 年度にはフィールド・ミュージアム部の活動の予行として、学振の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用し英彦山の施設を利用した昆虫・植物・陸貝・岩石の野外観察会を実施した。今後、関係施設と連絡をとり、活動内容や協力研究員へのフィールド・ミュージアム部参画の呼びかけ、事故・災害への保証・対応を検討し、活動を具体化する必要がある。

協力研究員

協力研究員とは、博物館の業務支援のため協力を申し出た学外者を言う。中期計画では、「学外の研究者、名誉教授等を対象とした協力研究員制度の充実を図る」と掲げている。平成 16 年度以降毎年、協力研究員の充実を図っており、平成 19・20 年度も協力研究員の充実を図り、資料整理、資料に基づく研究に協力してもらっている。平成 18 年度まで協力研究員用の作業室は記念講堂４階の狭隘な部屋しかなかったが、平成 19 年度後半に旧工学部本館建物に分野別の標本整理室を獲得できたので、余裕を持った空間で作業してもらえるように平成 20 年度から設備面の整備を進めている。

専門研究員

専門研究員とは博物館において研究を行う者を言う。平成 20 年度にあらたに専門研究員制度を立ち上げ、数名を受け入れ、専任教員とともに研究を実施している。

（評価と課題）　４４４３３；平均 3,6

○開館 10 年を迎え、博物館を取り巻く情勢はかなり変容しているにもかかわらず、博物館設置以来、数少ない専任教員をあえて３系に配置する方式はほとんど変わっていない。これを機に、3系に教員を配置することのメリット、デメリットを検討し、３系の廃止をも含めた改組について検討すべきである。

○1996 年以降新設された全国の大学博物館横並びの３系体制は、業務の実態と乖離している。実態に即した組織への改組が必要である。

○部門はわかりやすいが、系は実際には分かちがたい。単純に部門で配置するのが望ましい。兼任教員の実態・活動内容が不明である。

Ｃ－②. 教員の選考　　資料ⅡＣ②

総合研究博物館の専任教員の選考は、平成12年6月5日の運営委員会において提案・承認された総合研究博物館教官（教員）選考内規に基づき、選考委員会を設けて行われている。17年度以降では、19年度に助教１名の選考を行った。教員の選考にあたっては、全国関係機関への公募を行い、選考委員会で選考のうえ、運営委員会において議決する。資格審査は平成16年度からは原則として選考委員会において行っている。

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0

○完全公募により、適切な人材を広く求めてきた選考方式には問題がなく、今後も維持していくべきであると考えられる。ただ、ポイント制度の弾力的運用が可能になっているので、転出・退職等による欠員が生じた場合や余剰ポイントの有効活用などにより戦略的・機動的に人事選考を行って、博物館の各種業務を発展させることも検討すべきである。

○選考委員の選出方法の再検討が必要ではないか。

○部門ごとの教員数のバランスに不安がある。

Ｄ．財政

Ｄ－①. 予算

運営交付金の配分

博物館の運営交付金の配分の考え方は次のとおりである。

1) 教育研究基盤校費

予算額から全館的に必要な諸経費（光熱水料、事務経費など）を控除し、教員会議で決めた職種別比率で配分している。

2) 教員研究旅費

教員会議で決めた職種別比率で配分している。

3) 附属施設等経費

本経費と教育研究基盤校費から移算された共通経費を合算し、事業費並びに事務経費及び光熱水費などに使用する。

開設以後の予算の推移はつぎのとおりである。

運営交付金　　単位（千円）

<table>
<tr><th>区　分</th><th>17 年度</th><th>18 年度</th><th>19 年度</th><th>20 年度</th><th>21 年度</th></tr>
<tr><td>教育研究基盤校費</td><td>10,634</td><td>10,536</td><td rowspan="2">10,857</td><td rowspan="2">10,614</td><td rowspan="2">12,184</td></tr>
<tr><td>教育研究旅費</td><td>806</td><td>799</td></tr>
<tr><td>付属施設等経費</td><td>12,800</td><td>12,672</td><td>12,545</td><td>12,420</td><td>12,296</td></tr>
<tr><td>計</td><td>24,240</td><td>24,007</td><td>23,402</td><td>23,034</td><td>24,480</td></tr>
</table>

学内予算（全学間接経費など）の配分

博物館の特別事業について年度毎に総長に要望し、事業内容などについて了承を得て、全学の間接経費などにより配分されている。公開展示に伴う費用、データベース化推進経費は、当館に不可欠の経費として連年獲得できている。学内のP&Pは、平成19～20年度に三島助教を中心とする共同研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究―アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもの間の関わりを促すツール開発―」が採択された。

年度	区　分	課　題	交付額（千円）
平成17	重点的教育県基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	７，０００
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本・資料のデータベース化	５，３４７
	地域連携事業	コミュニケーションミュージアム事業	４，０００
平成18	重点的教育県基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	７，０００
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本・資料のデータベース化	５，７６１
	地域連携事業	コミュニケーションミュージアム事業	１，２００
平成19	Ｐ＆Ｐ（B2タイプ）	九州大学博物館展示を利用した実践的研究	３，３３０

	重点的教育研究基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	７，０００
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本･資料のデータベース化	５，３２３
	地域連携事業	コミュニケーションミュージアム事業	１，５００
平成20	Ｐ＆Ｐ（B2タイプ）	九州大学博物館展示を利用した実践的研究	３，２７０
	重点的教育研究基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	７，０００
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本･資料のデータベース化	６，４１２
	地域連携事業	コミュニケーションミュージアム事業	１，３００
平成21	重点的教育研究基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	６，８０６
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本･資料のデータベース化	６，９５１
	Ｐ＆Ｐ（特別枠）	大学移転を活用した九州大学総合研究博物館における実践的教育プログラムの開発と推進	１，４２０
	地域連携事業	コミュニケーションミュージアム事業	６１７

※　Ｐ＆Ｐ：九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0
○学内の競争的資金獲得、有効利用を一層進めるべきである。
○積極的に外部資金の導入を図るべきである。

Ｄ－②．外部資金

中期計画では、「競争的資金の獲得を積極的に行う」と掲げている。平成 16 年度以降毎年、すべての専任教員が科学研究費補助金、その他の研究費補助金に応募している。そのほか、平成 17 年度に１件、18 年度に２件、19 年度に１件、20 年度に３件の民間研究助成を得ている。
中期計画では、「寄付の意識を高める運動を行う」と掲げている。平成 18 年度に大学博物館等協議会

の機会を通じて、他博物館の博物館後援会について意見を聞いたが、平成 19・20 年度まで着手できていない。平成 19・20 年度には大学博物館等協議会等の機会を通じて、他博物館の博物館後援会について意見を聞いた。平成 21 年度には、大学執行部から、伊都キャンパスでの博物館建物の建設費を外部資金で獲得する必要があり、寄付を仰ぐための努力の不足、プロモーション活動の推進の必要性を指摘された。

中期計画では、「標本の同定・分析依頼に対しては内規を定め、料金の徴収を検討する」と掲げている。平成 18 年度に同定・分析依頼について料金を取ることについて教員会議で議論したが、まだ具体的規定案の検討には入っていない。

科学研究費補助金

科学研究費補助金採択状況は、次のとおりである。

年度	区　分	研究代表者（初年度のみ表示）・課題	直接経費金額（千円）
平成17	特定領域研究	中西哲也・日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成	５，３００
	基盤研究(C)	中牟田義弘・カンラン石の格子歪みによるコンドライト隕石の被衝撃圧の定量的評価	１，０００
	若手研究（B）	小島弘昭・国内における林冠昆虫相研究の展開	７００
平成18	基盤研究(C)	カンラン石の格子歪みによるコンドライト隕石の被衝撃圧の定量的評価	７００
	基盤研究(C)	岩永省三・古墳時代社会の変容過程の研究	１，０００
	若手研究(Ｂ)	国内における林冠昆虫相研究の展開	５００
平成19	基盤研究(C)	古墳時代社会の変容過程の研究	８００
平成20	基盤研究(C)	古墳時代社会の変容過程の研究	８００
	基盤研究(C)	宮崎克則・シーボルトが集めた「博物」資料のデジタル再構築	１，７００
	若手スタートアップ	丸山宗利・ヒゲブトハネカクシ亜科の高次体系に基づく好蟻性種の分類と進化	１，３４０
平成21	基盤研究(B)海外学術研究	三島美佐子・常緑照葉樹を寄主とするゴール形成昆虫（タマバエ類・タマバチ類）の適応放散の起源	６，６００
	基盤研究(C)	古墳時代社会の変容過程の研究	８００
	基盤研究(C)	宮崎克則・シーボルトが集めた「博物」資料のデジタル再構築	１，４００
	基盤研究（C）分担	清水麻記・科学系博物館における資料の周辺情報のデジタル記録及び利用促進に関する実践的研究	１５０
	若手研究（B）	中西哲也・生産遺跡における製錬スラグの科学的分析と体系化に関する研究	１，２００

	若手研究（B）	清水麻記・巡回展示学構築に向けた基礎的研究－博物館間の連携に基づく実践研究－	１，６００
	若手スタートアップ	ヒゲブトハネカクシ亜科の高次体系に基づく好蟻性種の分類と進化	１，２００
	特別研究員奨励費	石川京子・アジア地域における抜歯儀礼と社会変容	１，０００

寄　金

寄　金の受入状況は、次のとおりである。

年　度	金額　単位（千円）	備考
平成17年度	９５０	財団法人九州大学後援会平成17年度助成事業
平成18年度	４００	無機結晶評価のための研究資金
平成18年度	９００	財団法人九州大学後援会平成18年度助成事業「虫えい形状の進化～寄主植物の種分化と地理的変遷からのアプローチ～」受け入れ先：三島美佐子
平成19年度	３０	無機結晶評価のための研究資金
平成20年度	１０５	財団法人平和中島財団アジア地域重点学術研究助成「日本と中国に共通するタマバエ類とその種分化」受け入れ先：三島美佐子
平成20年度	２５０	無機結晶評価のための研究資金
平成20年度	１，０００	財団法人九州大学後援会平成20年度助成事業

ひらめき☆ときめきサイエンス

日本学術振興会の委託により大学が実施するプログラム

参照　http://www.jsps.go.jp/hirameki/

年　度	プログラムのテーマ名	金額(千円)
平成２０	英彦山で自然を学ぼう－昆虫・植物・陸産貝・岩石・鉱物の体験実習	４５０
平成２１	英彦山で自然を学ぼう－昆虫・植物・陸産貝・岩石・鉱物の体験実習	４７０

（評価と課題）　４４３３２；平均3,2

○根拠資料にリストされている外部資金獲得状況では、専任教員の専門分野での応募が大多数を占め、博物館学等に関する細目での獲得がきわめて少ない。科研費、民間財団、地方公共団体等の各種助成に対して、博物館として組織的に申請・応募して、資金を獲得することを検討すべきである。

○博物館建設に係る資金確保の活動へ取り組む必要がある。

○基盤のＢ、更にはＡクラスの採択に取り組むべきである。

○地道に競争的資金獲得の努力を続ける必要があるが、外部に寄付を仰ぐには、外部からの評価を受

けるに足る、活動の蓄積とそれなりの自前の施設の獲得とが必要である。

Ⅲ. 施設・設備

A．施設の状況

A－①．博物館の施設の状況　　資料ⅢA①

中期計画では、「博物館の施設、設備を充実させる」ことを掲げているが、伊都キャンパスへの移転まで新しい博物館建物の建設が望めない状況が続くことは、当博物館にとって深刻な問題である。当面は、箱崎キャンパスにおいて暫定的な施設を少しでも多く獲得し、展開可能な博物館活動を拡大する努力を続けている。

施設については、創設以来４年間、旧工学部図書館建物内旧印刷所の教員室、50 周年記念講堂の一部の展示室・標本整理室、旧応力研建物の一部の実験室以外に施設が増やせない状況が続いていた。平成 16 年度に“標本収蔵室及び研究室の確保について（緊急的要望）”を提出し、記念講堂４階の 50 m^2 の一室が新たに使用を許され、標本収蔵室として利用し始めた。また、移転までの中長期的利用のため“箱崎地区での建物確保についての要望書”をキャンパス計画及び施設管理委員会に出した。

この間、特に標本収蔵施設を持てなかったことは、学内各部局等の標本の移管、学内外からの標本の寄贈を困難にし、博物館にとって致命的な弱点となっていた。

平成 17 年度に工学部の移転が始まったが、たまたま同時期に医学部基礎研究 A 棟に所在し比較社会文化研究院が管理していた古人骨・動物骨格標本が移転を迫られたために、比較社会文化研究院から当館へ移管手続きを行ない、旧工学部知能機械工場２階（500 ㎡）を収蔵施設として獲得した。それを契機に、工学部移転に伴い残置された技術史系資料を保存し活用するために、博物館の過渡的施設整備について「要望書」を作成して標本室・展示室の必要性を訴えた。その結果、平成 18 年度に旧知能機械工場建物１階（1500 ㎡）を博物館施設として獲得し、同建物１階に工学機械収蔵室を設けたのに続いて、平成 19 年度に同建物１階に自然史資料室を設けた。平成 20 年度には同建物１階に玉泉館資料展示室および、故岡崎敬先生旧蔵資料・書籍類収蔵室を整備した。

平成 19 年度に旧工学部本館建物において合計約 925 ㎡の部屋の使用が認められ、平成 20 年度にかけて教員室・会議室・展示準備室・実験室・書庫・標本整理室を整備し、平成 20 年度には旧９番階段教室を改造して常設展示室を開設した。また同建物４階会議室を当館管理下に移して展示室とした。また 19 年度に旧工学部４号館建物に 730 ㎡の部屋の使用が認められカルテ資料収蔵室とした。

中期計画では、「教員研究室・実験室を整備する」と掲げている。創立以来狭隘な教員研究室・実験室しか持たなかった当館にとって、その整備は緊急を要する課題であった。平成 16 年度に部屋の要望（緊急的要望）、中期的建物の確保の要望を出し、平成 17 年度に旧工学部知能機械工場２階を骨格標本収蔵施設として獲得したのを契機に、その一郭に資料調査室を設け研究・調査用としたが、教員室から離れている難点があった。平成 18 年度に工学部移転後の空きスペースを確保するため要望書を提出し、平成 19 年度に旧工学部本館建物に教員室（計 218 ㎡）、実験室（計 150 ㎡）を獲得し、平成 20 年度にはその整備を進めた。平成 21 年度から本格的に稼動させつつ、研究・実験のための環境をさらに整えつつある。

なお、中期計画では、「博物館建物の建設に際しては、学部学生、大学院生のために研究の便宜を

図るスペースを確保するよう考慮して設計に当たる」と掲げているが、伊都キャンパスへの移転まで新しい博物館建物の建設が望めない状況が続くために、当面は、箱崎キャンパスの博物館施設に学部学生・大学院生の勉学のためのスペース確保を続けている。平成 20 年度には旧工学部本館３階に、学生教育用の研究室・ゼミ室を設け、顕微鏡などの教育機器を設置し学習図書を配架した。第一分館２階の研究室および 50 周年記念講堂３・４階の一部を学生の研究・教育用に整備した。生物系標本整理室には、作業台・椅子を配し、研究・教育・ワークショップなどに活用できるように整備した。これらを教育に有効利用するとともに今後もスペースの充実を図る予定である。

（評価と課題）　５３２２１；平均 2,6

○教員の居室、会議室、準備室などの整備拡充が徐々にではあるが進められている点は高く評価できる。

○スペースの確保と少ないスペースの有効活用が望まれる。

○今後もスペースの拡充を図る必要がある。

○劣悪きわまりないが、これは博物館の責任ではなく、本学執行部の見識の問題であろう。

○博物館設立後５年間の状況に比べれば、状況改善の努力は少しずつ成果を出しつつある。しかし、現状が劣悪であるのは否めない。今後の移転部局の協力を得ながら施設獲得の努力を続ける必要がある。

Ａ－②．部局の標本収蔵庫の状況　　資料ⅢＡ②

15-1で述べたようにこの５年間で博物館の施設が増加したものの、いまだ収蔵庫面積が不足している状況に変わりはなく、各部局の収蔵物の大半は、当面これまで通り関係各部局で管理せざるを得ず、伊都キャンパスへの移転時に箱崎キャンパスに留置せざるをえなくなる標本資料の収蔵をどうするかが深刻な問題になりつつある。

平成16年時点での各部局の主要な標本資料の保管状況は資料15-2のとおりである。その後の5年間に当館管轄下の建物に移動した標本資料（移管済み・未移管両方あり）は、資料ⅢA②の「Ⅰ－３．動物骨格標本」、「Ⅲ－１．中島コレクション」、「Ⅲ－５．矢原コレクション」、「Ⅴ－１．高壮吉鉱物標本」、「Ⅴ－10．理学研究院所蔵岩石標本」、「Ⅵ－１．旧玉泉館収蔵考古資料」、「Ⅵ－３．古人骨標本」、「Ⅶ－２．実験工場所蔵歴史的工作機械」があり、資料15-2不掲載のものとして「九大病院カルテ資料」がある。それらの収蔵面積は合わせて約2000㎡分であるが、当館に未移動でいまだに各部局に収蔵されている標本資料が膨大である状況に変わりはない。

（評価と課題）　３３２２１；平均 2,2

○工学部移転後の空き施設の利用等が進められてきたことは高く評価できる。しかし、狭隘性、分散配置、収蔵室としての機能等の点で、一時的標本資料収蔵施設としても不適当・不十分であることは明白である。博物館の設置目的、理念、将来構想をふまえ、博物館の最優先課題のひとつとして十分な一時的収蔵施設の確保について早急に検討を進めるべきである。

○収蔵すべき標本資料のリスト等を早急に策定し、大学当局との交渉を進めるべきである。

○博物館の収蔵庫不足の解消が課題である。

○劣悪であるが、これは博物館の責任ではなく、本学執行部の見識の問題であろう。

Ｂ．設備の状況

設備については、博物館が研究・研究支援・教育・教育支援を行う上で不可欠であるが、設立当初、博物館の設備としては、教員室に机や本棚、コピー機などの事務機器が設けられたのみであった。その後、平成12年度から平成13年度にかけて学内経費の配分を受けて展示用設備（大型プリンター、展示ケース、バックパネルなど）を購入し、記念講堂の展示室に設置し、常設展示や特別展示のためのパネルやポスターの作成を行ってきた。平成13年度には学内経費によりデータベース化のための画像解析システムが導入された。その後、平成13年度から平成16年度にかけて学内経費、科研費などにより研究用設備を整備してきた。

中期計画では、「保存環境に配慮した安全な標本庫と安定した標本の整理・管理システムを作り、民間等のタイプ標本を含む重要標本の寄贈、寄託に寄与する」と掲げている。当館は創設以来長らく自前の標本収蔵施設を持たず、安全な標本庫導入の余地がなかったために、重要標本の寄贈・寄託に対応できず、重要標本が他館に収蔵された事例もある。これは九大にとって大きな損失であった。平成 17 年度までは少量の標本のみを受け容れ、暫定的に 50 周年記念講堂の展示室の一角に保管してきた。平成 18 年度に開設した骨格標本室も空調設備を備えるに至っていない。平成 19 年度に旧工学部本館建物に分野別の収蔵展示室を獲得できたので、平成 20 年度には各整理室は UV カットフィルムを窓ガラスに貼り付け、空調を整備することによって紫外線と湿気による標本の劣化を防ぐ努力をした。平成 22 年度以降には保存環境をさらに整えるとともに、標本の整理・管理システムの構築に着手し、今後増加すると予想される標本の寄贈・寄託に備える必要がある。

また中期計画では、「博物館の研究と教育研究支援業務を円滑に行うための分析機器の導入を図る」と掲げている。平成 16 年度まで分析機器の導入のため概算要求の申請を行なったが、平成 17 年度以降は標本庫・展示室の緊急の整備を図るため営繕工事の要求を行い、機器の導入のための概算要求は行なわなかった。高額の分析機器の導入は運営経費の枠内では困難であり、平成 17・18 年度には他部局からの中古品の移管で何とかしのいだが、大学院生の研究・教育に利用できるようにはなった。平成 20 年度には生物系標本整理室に殺虫用の超低温冷凍庫を設置した。今後も機器類の整備を続け、学生・大学院生の研究・教育への活用という本来の目的に沿った活用を図る必要があるが、予算獲得の困難が問題点である。

博物館の主要な設備

1）大型プリンター
2）画像解析システム
3）岩石・鉱物薄片作成システム
4）遺伝子分析前処理システム
5）微少試料粉末Ｘ線回折システム
6）三次元形状計測システム
7）顕微ラマン分光装置

安全管理体制

1）X線発生装置を持つ各施設はX線作業主任者を持つことが義務付けられている。博物館のX線回析システムにはX線作業主任者の配置が必要である。現在、博物館は1名の資格取得者を擁し、この規定を満たしている。
2）博物館は、労働安全衛生法により衛生管理者を配置することとされている。博物館では衛生管理者を置き、研修会に参加して衛生管理に注意している。
3）毒劇物の管理は管理責任者、管理補助者を決め、保管庫に収納している。管理者命免簿、

管理補助者命免簿、毒物劇物使用簿、毒劇物点検確認書、毒劇物廃棄依頼書兼整理簿を整備し、管理している。

（評価と課題）　４３３３２；平均3,0

○将来構想や人事構想に対して整合性をもった設備導入計画も検討すべきである。大型機器の導入設置に関しては、キャンパス移転を念頭に置いて、関連部局所有の設備との重複の回避は考慮されるべきである。また現有主要設備が、専門分野の研究だけではなく、社会貢献や普及活動に対して利用され、十分な役割を果たしているかについては継続的・自律的に点検を行い、将来の設備導入の際の検討材料とすべきである。

○教育・研究支援を遂行するためにさらなる充実が望まれる。

○標本の保存環境の整備が必要である。

○博物館が独自に備えるべきものと他部局と共同購入・利用すべきものとの境界が曖昧。

Ｃ．新キャンパス計画

九州大学は福岡市西区元岡地区への移転を進めている。平成 10 年 5 月に「新キャンパス造成基本計画」が決定され、ゾーニングと移転順序の検討が始まった。平成 11 年 7 月に県道桜井太郎丸線（学園通り線）に接する部分を本部・交流・全学共通教育ゾーン、その東側ゾーンを文系、西側に広く展開するゾーンを理系とすること、移転を第Ⅰ期（平成 17～19 年頃）、第Ⅱ期（平成 20～23 年頃）、Ⅲ期（平成 24～26 年頃）に分けて行うことが決まった。

平成 13 年 3 月に『九州大学　新キャンパス・マスタープラン 2001』が提示され、新キャンパスへの統合移転の基本方針が明らかにされた。そこでは、研究・教育施設、共通利用施設が立地するアカデミック・ゾーンが、ウェスト、センター、イーストの３ゾーンに分節され、センター・ゾーンに博物館が配置され、博物館にはインフォメーション・サービス、ビジター・センターやキャンパスの歩行者動線の起点としての役割が付与された。

その後、平成 14～15 年にセンター地区基本設計が検討され、博物館、産学連携施設、地域連携施設を中心に、社会に開かれた九州大学の顔が作られる方針が再確認されるとともに、博物館の建設予定位置に変更が加えられた（３－１参照）。

当初、博物館の移転時期は第IIステージに当てられていただけであり、標本資料の移転の問題は取り扱われていなかったため、平成14年12月に「九州大学総合研究博物館の早期移転に関する要望書」を施設部整備計画課に提出し、第IIステージでも最初の時期(平成20年)での移転を要望した。しかし、平成15年度後半に入ってから、第II・IIIステージの移転をめぐる情勢が大きく変化し、センター地区の施設整備に大きな進展はないまま、博物館の移転は第IIIステージに変更され、計画通り移転が進行しても、博物館の開館は平成26年以降ということになった。

その後、平成 16 年度に移転スケジュールが改定された。第Ⅰステージ（平成 17 年度～平成 19 年度）、第Ⅱステージ（平成 20 年度～平成 23 年度）、第Ⅲステージ（平成 24 年度～平成 31 年度）であり、第Ⅲステージに入ってから、理学系・人文社会系・全学教育、農学系等の順で移転することになった。やはり博物館は第Ⅲステージの最後に位置付けられており、計画通り移転が進行しても、博物館の開館は平成 31 年以降ということになった。

平成 18 年度にさらにスケジュールに変更があったが、六本松地区の移転に関わるものであり、博物館の移転時期には変化がない。

Ｃ－①. 位　置

新キャンパスの中央やや東よりに学園通り線が南北に貫通している。大学通線に接する両側がセンター地区であり、博物館の位置は、『マスタープラン 2001』では、大学通り線のすぐ西側で、キャンパスの東西の骨格軸である歩行者専用「キャンパス・モール」のすぐ南側に定められ、JR 線の駅から新キャンパスへの主要ルートである南側から見た場合、最も手前の目立つ位置にあり、「大学の顔」としての役割が期待されていた。

平成 14 年 8 月にセンター地区の基本設計の開始に先立つ設計条件設定のための調査が、施設部整備計画課によって実施され、『マスタープラン　2001』の記載内容について確認および修正の意見・要望を出すことが求められ、博物館では、土地利用計画及び配置計画について様々な要望を行い、特に『マスタープラン　2001』における博物館と大学事務局庁舎の場所の入れ替えを要望した。その結果、平成 15 年 6 月に了承されたセンター地区基本設計では、博物館の位置はセンター地区の南端から、アカデミック・プラザをはさんだ反対側で幹線道路のすぐ南に変更された。

平成 21 年度にセンターゾーンがオープンした。ビッグ・オレンジの東側の駐輪場が、博物館建設予定地である。

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0

○早期移転の実現に向けて、あらゆる方法・可能性を探ると同時に、学内外の支持を拡大していくことに全力を注ぐべきである。

○位置に問題はないが、そこに相応しい建物が建たなければ、好条件が逆効果となる。

○博物館建設の具体的なビジョンを明確にする必要がある。

Ｃ－②. 建　物

平成 14 年 8 月に、総必要面積、必要な部屋の種類・面積・数・利用者数・使用目的・設計上の配慮事項などを記載した「諸室調査票」を提出した。総必要面積は 12,000 ㎡とし、必要各室の選定と面積の割り振りを行った。博物館の回答に対して、展示室の種類・必要性・面積の整理が求められ、施設面積を圧縮するように要望があった。移転後に各部局が自前の標本庫を持たない場合、重要標本の収蔵に必要な面積、および研究・教育・展示・管理運営に必要な面積として、全学面積の内の約 4,600 ㎡の利用を要望し、残り 7,400 ㎡を概算要求と外部資金導入で確保するよう努めることとした。

12 月にタウン・オン・キャンパスにおける施設整備方針の発表があり、規模に見合った用地面積を確保し、将来増築が可能な配置を検討していることが明らかになった。

平成 15 年 3 月にセンター地区基本設計における建物配置計画案が提示されたが、建物の形状に不都合な点があることを指摘し、研究・研究支援・教育・展示にかかわる部分を最初から機能を満たせるように東の隅に造り、収蔵庫は西方で当初は必要最低限とし、予算が付くたびに増設していくのが現実的であることを主張した。

6 月に了承されたセンター地区基本設計では、博物館の要望を容れて設計が変更されたが、その後、センター地区の施設整備に大きな進展はないまま現在に至っている。

（評価と課題）　４４３２２；平均 3,0
○建物建設には学内外の圧倒的な支持・協力が不可欠であり、大学の経営戦略もふまえた将来構想を掲げ、博物館の存在意義・重要性を強烈・鮮明に主張する必要がある。また建物設計に際しては、他の博物館（とくに海外の大学博物館）の事例を入念に検討し、長所を取り入れる必要がある。
○早急に予算処置についての対策と対応が必要である。
○６年前の計画がまだ有効なのか、不安である。
○博物館建設の具体的なビジョンを明確にする必要がある。

Ⅳ. 将来構想・将来計画

A．将来計画

大学の移転を控えて、当館の将来構想を検討する会議を、平成 20 年６月から９月にかけて７回実施し、主要ミッション、九州大学の学術標本についての基本的認識と博物館の役割、新キャンパスの移転に関する要望、博物館の移転に向けた活動計画、移転までの具体的活動計画、についてまとめた。

九州大学総合研究博物館の将来計画

九州大学総合研究博物館の主要ミッション

収蔵管理　：人類の知的財産たる膨大な学術標本とその価値を未来に継承する為に、一元的収蔵・管理・保存を図り、整理・資料化（データベース化・教育資料化・研究資料化）を推進する。
研　　究　：真理の発見と知の体系化のために、学術標本を活用した学際的・国際的研究を推進するとともに、学内外の研究に協力し支援する。
教　　育　：学術標本を用いて自然・文化に深い理解をもつ有為な人材を育成する教育に貢献する。
展示公開　：教育機能の実践の場として展示公開を位置付け実践する。
社会貢献　：大学の知的諸活動の社会への還元に寄与する。

九州大学の学術標本についての基本的認識と博物館の役割

九州大学には､現在までの研究過程で蓄積した多くの学術標本が存在します｡これらの学術標本は、これまでの研究結果を担保する証拠標本として、また、研究の検証可能性を保証するものです。現在では入手することが難しいものも多く、今後の研究を進めていく上で貴重な研究資料でもあります。大学博物館は、現在、各部局に分散して保管されているこれらの学術標本の散逸を防ぎ、一元的に保管管理する組織として、他の博物館にはない重要な役割を担うものであり、このことが大学博物館設立の第一義であると言えます。このような大学博物館の役割の確実な実行は、これまで行われてきた研究を担保する上で、また、今後の研究の展開をサポートし標本・資料を活用した専門教育を行う上で、九州大学が果たさなければならない責務と考えます。

博物館の新キャンパスへの移転に関する要望

総合研究博物館の伊都キャンパスへの移転は、評議会において、第Ⅲステージ（平成 24～31 年度）の

最後と公表されています。元岡地区への移転に関して、当館は以下のように考えておりますので、全学的な移転計画の一部として遂行して頂くように要望いたします。

当館は、前項で記した重要な役割を果たすために、伊都キャンパスにおける博物館建物の建設を、概算要求によってなるべく早く実現して頂きたいと考えております。とくに、伊都キャンパスにおいて、現在各部局に分散して保管されている貴重な学術標本を一元的に保管管理し後世に伝える役割を果たすためには、移転時においては、まず収蔵室・収蔵展示室（学生・院生の日常的教育に不可欠）・展示準備室・標本整理室などを備えた建物が不可欠と考えます。一般向けの展示室をはじめ各種の社会貢献に必要な施設ついては、場所、時期を含めて、福岡市や企業などとの連携を計って実現する可能性も考えられます。博物館建物の完成後には、移転まで箱崎キャンパスで遂行してきた各種業務を伊都キャンパスへ移します。ただし、旧工学部本館建物が、九州大学を記念する建物として保存される場合には、同建物内に、総合研究博物館のサテライト展示を開設する可能性があります。

元岡地区への移転に向けた総合研究博物館の活動計画

九州大学の学術標本の重要性は前述の通りですが、伊都キャンパスにおいて、各部局はそれぞれ独自の学術標本収蔵・展示スペースを持たないことが確定しております。そのため博物館は、今後移転する各部局が保管収蔵してきた学術標本について、移転時における**混乱・散逸**などの深刻な事態を未然に防ぎ、安全・確実に保管・管理するために、以下のように対処することを考えます。

1　各部局に保存されてきた学術標本の博物館への移管を推進する。
2　暫定的収蔵室を各部局と調整のうえ、箱崎キャンパスにさらに確保していく。
3　すでに確保した収蔵室・展示室の収蔵環境の整備を進める。
4　１～３の遂行のために必要な経費は博物館経費のみでは不足するので、全学的支援を得るよう努力する。
5　各部局所蔵の学術標本の再調査を実施し、現有資料を把握するとともに、整理・データベース化を一層推進する。
6　新キャンパス博物館の基本構想を検討し、理念、基本設計（機能・グレード・デザイン）、実施設計（施行のための設計）などを他部局・事務部・業者を交えて準備する。

移転までの具体的活動計画

本年度から移転までの間は、箱崎キャンパスにおいて通常の業務を以下のように遂行します。

収蔵管理

伊都キャンパスへの移転準備が中心となる。前項との重複を避け省略する。

研　　究

1　総合博物館としての利点である学際的研究を企画する。
2　アジアを重視した国際的共同研究・共同調査を企画推進する。
3　資料部兼任教員との連携を進め、共同研究を実施する。
4　研究成果を印刷公表し、より一層の外部資金獲得を目指す。
5　協力研究員・専門研究員・国内外からの訪問研究者の研究環境の整備を進める。
6　Ｐ＆Ｐ研究の取り組みを継続する。

教　　育

1　学術標本・博物館施設を活用した全学共通教育科目の開設を検討する。
2　学芸員資格関連科目の一層の充実をはかる
3　学部・大学院の教育への参加を継続し、シラバスを整備する。
4　体系的講義に利用可能な常設展示室、収蔵展示室の整備を行い、学術標本・展示を大学教育に活かし、実物に触れる機会を増やす。
5　博物館等で働く学芸員のための研修の場を設ける。

展示公開

展示公開は上記の高等教育機能の実践の場として位置付け、大学博物館でなければできない展示を実践することで、学部・大学院教育に貢献するとともに、以下の意義を持つ。①大学で行っている種々の研究に対する理解を深めることにより，次世代の後継者を掘り起こすという入学者確保への投資。②九大所蔵標本を広く一般に認知してもらうことにより，博物館維持等に対するサポートを得るベースを作る。③大学でしか持ち得ない標本・資料を公開することにより生涯学習をサポートし、九州大学が行う社会貢献の一端を担う。

1　公開展示・P&P 展示を継続する。
2　常設展示室・収蔵展示室のデザイン・展示内容を再検討・改善し充実させる。
3　サテライト展示については、本学と各サテライトをネットワークでつなぎ、サテライト展示システムを導入する。
4　HP（トップページのデザインを含む）の充実をはかる。

社会貢献

展覧会・講演会などの実施やボランティア機会の提供などによって、大学の活動・知的成果を学外に紹介・発信し、大学への理解を深め、次世代の後継者を掘り起こすとともに、初等中等教育・社会教育・生涯学習にも貢献する。

1　社会連携事業（九大・糸島会コミュニケーションミュージアム事業など）で地域との連携を推進する。
2　学振ひらめきときめきサイエンス事業、科学の公園事業等で小中高生への教育を行うとともに、優秀な高校生を発掘する。
3　福岡市立少年科学文化会館との連携協力体制を一層推進するとともに、福岡市を中心とした地域社会学習ネットワークの形成をはかる。
4　地元大手企業との連携を模索開始する。
5　常設展示室・図書室・会議室（ゼミ室）を利用した活動を支援する。

（評価と課題）　４４３３３；平均 3,4

○多くの項目が示されており、博物館業務がきわめて多岐に及ばざるを得ない状況がよく見て取れる。しかし、その中でも移転・建物建設という大事業の推進のために、総花式に項目を羅列するのではなく、より多くの精力を注ぐべき重点項目を選んで取り組んでいく必要がある。またここに列挙された項目はどれも重要なものであるが、博物館が直面する厳しい情勢を突破できる斬新な内容を含んだ魅力的なものかどうかやや疑問にかんじる。たとえば、全学教育の担当拡大、学芸員リカレント教育の継続的実施など教育面での積極的貢献について将来計画として検討すべきである。関

連して、外国人学生をも対象とする学芸員養成コースやサイエンスコーディネーター養成コース、国内外の学芸員リカレント教育コースなどを含む“ミュージアムサイエンス専攻”の新設を視野に入れた将来計画を検討すべきである。
○博物館の将来計画について、どのように学内外の理解を得ていくかという構想も必要である。
○博物館建設の具体的なビジョンを明確にする必要がある。
○具体的活動計画に具体性がない。総花的でメリハリがなく、スタッフ数から見て無理が無いか不安である。

B．事業部構想

平成 16 年度に策定した事業部構想は、平成 16 年度４月の国立大学法人化の前後から、「大学と地域市民を結ぶ機能」が大学博物館に強く求められるようになった社会情勢に対応し、大学博物館が学外の地域社会に対して果たしえる種々の社会貢献（生涯学習支援・少年教育支援・研究成果展示公開など）を、学外組織と連携しつつ強力に実践するために、博物館を改組してあらたに事業部を設ける構想であった。博物館の関わる様々な役割について専門的に研究する研究部と、研究部における研究成果に社会的ニーズを反映させ大学博物館の社会貢献に関する実践的活動を行う事業部を設け、それぞれの部の行うべき任務を明確にし､行事に関与する人員の所属する組織を明確にすることを計画した。これは、博物館建物を福岡市の支援も加えて建設し、事業部に公共団体や民間組織などに所属する経験豊富な人材を配置する構想とも連動するものであったが、けっきょく改組を目指す概算要求は実現せず、事業部構想は頓挫してしまった。

その後、概算要求の方向性を変え、旧工学部知能機械工場建物（現第一分館）の工場部分を技術史・科学史の資料・標本の収蔵保存・展示施設としての改修を行うことを計画した。展示コンセプトは「日本の科学技術の発展の流れにおける九州大学の果たした役割と未来への知り組み」とし、自然史資料保存展示施設、続いて考古・文化史資料保存展示施設を年次計画で整えていき、キャンパス移転への対応をしながら、博物館の充実を図っていく計画であった。平成 19 年度の概算要求を目指したが、これも実現しなかった。

（評価と課題）　３２２２１；平均 2,0
○「事業部」がかつてめざした社会貢献、社会への情報発信を専門とし、実践能力を備えた人材の採用について将来構想および人事構想の中で検討すべきである。
○博物館の理念と将来構想に則った事業計画を策定し、新たな構想を立ち上げることが望まれる。
○構想が達成されていない。
○現状分析と今後の方針が未定である。

Ⅴ. 中期目標・中期計画　　資料Ⅴ

平成15年度に運営委員会で承認、平成16年度にを得た。主な内容は以下の通りである。

A．教育に関する目標

（1）博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部・学府の兼任教員として、本務に差し支えない範囲で講義・実習に積極的に関与する。
（2）博物館施設・設備の開放、標本の貸出し、展示の公開などにより博物館資料を使った教育を支援する。
（3）博物館資料の情報を提供し、学生の勉学を支援する。

（評価と課題）　５４４４３；平均 4,0
○H15 年当時としては、適切な目標・計画の設定であったと評価できる。
○博物館専任教員全員が一体となって教育できる環境への移行が望まれる。
○「兼任教員として」ではなく、博物館教員として博物館関係の授業に重点を置くべきではないか。

B．研究に関する目標

（1）異分野間で情報交換、共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する。
（2）博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う。
（3）紀要、資料集を発行し、博物館の研究成果を社会へ還元する。
（4）データベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する。
（5）資料部、フィールドミュージアム部、協力研究員を充実させる。
（6）研究室、実験室、標本庫の確保に努め、設備を充実させる。

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2
○H15 年当時としては、適切な目標・計画の設定であったと評価できる。
○展示研究など、博物館に特有の研究をも遂行すべきである。

C．その他の目標

（1）青少年の理科離れ対策や総合学習を積極的に支援するため、地方自治体などと検討を行う。
（2）ボランティア制度を取り入れる。
（3）国外の博物館職員、研究者の研修、訓練を行う。
（4）東南アジアを中心とした海外の研究者と共同研究を実施する。

（評価と課題）　５４４３３；平均 3, 8
○H15 年当時としては、適切な目標・計画の設定であったと評価できる。
○博物館のアイデンティティを活かした幅広い活動目標が望まれる。
○展示の充実、展示施設の確保などを通じて、人を呼び込む努力を記さなければならない。

Ⅵ. 点検評価

館の活動に対する点検は、日常的なものと、５年毎の自己点検評価・外部評価を実施している。中期計画では、「入館者に対するアンケート調査を行い、博物館に対する要望、評価をこまめに受けると共に、定期的に外部評価を実施する」と掲げている。

日常的なものでは、平成 19・20 年度に公開展示、公開講演会などに際してアンケートを実施し、参加者の要望の把握に努め、結果を分析し活動の改善に有効に反映させるよう努力した。また、P&P 研究を通してこれまで登録されていた一般の方々を対象にアンケート調査を実施し、要望等を分析した。

A．平成 16 年度実施の自己点検評価　　資料VIA

博物館は平成16年度で創設満5年となったため、学内共同教育研究施設においても自己点検・評価を行い、常に目的達成に向かって努力するという大学の方針に従い、平成16年12月14日の運営委員会において、平成16年度中に自己点検・評価を行うことを決定した。自ら点検・評価を行いこれまでの活動を真摯に総括し、博物館が置かれている状況を正確に把握して、今後の活動の指針の策定に反映させることが極めて重要である。

博物館の自己点検・評価委員会に関する規程が未制定であったため、例外的に規程整備しないまま、運営委員会で点検評価委員5名（博物館専任教員２名、館外の運営委員３名）を選んだ。委員は文科系、理科系、事務部、博物館（文科系、理科系）の各分野の運営委員がバランス良く選ばれている。

評価委員

松隈明彦（博物館、委員長）　　岩永省三（博物館）
藤井美男（経済学研究院）　　毛利孝之（農学研究院）
大森禮次郎（理学部等事務長）

自己点検・評価委員会では評価項目（要素）を選定し、評価方法、スケジュールを検討して、点検評価を行い、運営委員会へ点検・評価報告書を提出した。また、委員会では博物館自己点検・評価委員会内規（案）を作成し、運営委員会へ提案した。

自己点検評価では、様々な課題を指摘したが、特に、施設の狭隘・分散によって博物館での教育・研究に重大な支障をきたしていることを重視し、当面は箱崎地区に教育、研究、展示、標本収蔵のスペースを確保し、大学教育、社会教育、標本の収蔵・整理・公開に取り組むべきと述べた。現実にその後の5年間は、そうした方向の諸活動を実施することとなった。

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2

○多方面からの有意義な指摘がなされており、Ｈ１７以降の博物館業務の重要な指針になった点で高く評価できる。

○効果の面だけでなく、反省点も記すべきではないか。

B．平成17年度実施の外部評価　　資料VIB

平成 16 年度末に実施した自己点検評価を受けて外部評価を実施した。

平成 17 年度の第一回博物館運営委員会において、博物館自己点検・評価委員会で手順・内容を検討し、外部評価を実施することが決まった。博物館自己点検・評価委員会では、３回の会合を重ねて、評価対象年度、評価項目・評価方法・報告書作成スケジュールを検討し、外部評価委員の人選を行った。外部評価では、広い視野から九州大学総合研究博物館の活動を分析し、今後さらに一層内外の期待と要望に応えるよう批判・助言を戴くため、博物館関係者（大学博物館２名、その他の博物館２名）、

学識経験者（１名）、博物館利用者（２名）、マスコミ関係者（１名）の合計８名の方を外部評価委員に選んだ。

外部評価委員

藤田　正一氏　　委員長、北海道大学総合博物館長
板橋　旺爾氏　　読売新聞西部本社編集委員
遠藤　秀紀氏　　京都大学霊長類研究所教授
大場　秀章氏　　東京大学総合研究博物館教授
菊水　研二氏　　元岡「市民の手による生物調査」代表
斎藤　靖二氏　　前国立科学博物館地学研究部長
西　憲一郎氏　　福岡市博物館長
山内　祐司氏　　九州大学理学部地球惑星科学科２年

九州大学総合研究博物館外部評価委員は、平成 17 年 12 月 18 日に、外部評価委員会を開催した。博物館の現状を把握したうえで議事を行い、特に大学博物館のあるべき姿の議論に多くの時間を割いた。委員それぞれの立場と経験に基づいて現状を分析し、九大博物館がその役割・使命を果たすために改善すべき点、努力すべき点について意見を出し合った。

外部評価委員からの意見は多岐にわたるが、当館の業務が多岐に広がり過ぎ、力を注ぐべき方面が手薄にならざるを得ない現状を指摘し、ミッションの再検討・絞込みを促すもので、今後の業務の見直しに非常に示唆的であった。その後の５年間は、箱崎キャンパス内での建物・施設の獲得と標本・資料の移管・収蔵・整理およびアウトリーチ活動に重点を置き、今回の自己点検評価を迎えることとなった。

（評価と課題）　５４４４４；平均 4,2

○多彩な分野から選定された評価委員による評価結果は、いずれも当を得たものと思われ、改善に向けたポジティブな指摘が多くなされている。
○その後の５年間の活動指針となった。
○効果の面だけでなく、反省点も記すべきではないか。

Ｃ．今回の自己点検・評価

平成 16 年度末に実施した自己点検評価、平成 17 年度に実施した外部評価を受けて平成 17 年度～21 年度の活動を行ってきた。今回は、その 5 年間の諸活動などを総合的に点検・評価し、問題点を洗い出して課題を明確化し、今後５年間の活動の指針とすることを目指している。

運営委員会で選出されていた自己点検・評価委員会委員４名（博物館専任教員２名、館外の運営委員２名）が、平成22年９月に自己点検・評価委員会を開催し、理学部事務長を委員に加えることを決めた。

評価委員

岩永省三（博物館、委員長）　　中牟田義弘（博物館）
佐野弘好（理学研究院）　　坂上康俊（人文科学研究院）
根本正明（理学部等事務長）

また自己点検・評価委員会では、評価の対象年度は平成17～21年度とし、評価方法、評価項目は前回の

自己点検評価を踏襲し一部訂正することとした。平成22年中に点検評価を終え、博物館運営委員会の承認を得て、報告書を完成させることとした。

（評価と課題）　４４４４４；平均 4,0

〇評価項目・方針および結果等について、ＨＰ上での公開を検討すべきである。

〇総合評価のような項目、重点を置いて解決すべき問題の指摘、などといった項目があっても良かったと思う。特にＢで既に指摘されていた「業務が多岐に広がり過ぎ」「ミッションの絞り込み」といった課題がそのまま残されているというのが実感であるが、項目分けした結果、こうした課題が却って見えにくくなった憾みがある。

第三部　参考資料

資料ＩＡ　九州大学総合研究博物館の概要

１．沿革および設置構想の経緯

九州大学には、1911（明治 44）年の創設以来、研究と教育を通じて大量の学術標本・資料が蓄積されてきた。しかしながら、整理・保管のための十分なスペースがなく、標本・資料を効率良く利用し、新しい研究を効果的に再生産するという理想には程遠いものであった。そのため、1971（昭和４６）年に九州大学総合研究資料館設置準備委員会が設けられ、蓄積された学術標本・資料を有効に活用するため、保管・研究。展示の３部門からなる研究資料館新設構想の検討が開始された。1985（昭和 60 年）には、学内に 500 万点を超える自然史系及び文化史系の貴重な学術標本・資料があることを学内外に広く知ってもらい、その活用のためには研究資料館が必要であることを訴えるため、「九州大学所蔵標本・資料」が刊行された。

1995（平成７）年に学術審議会情報資料分科会の学術資料部会から出された報告「ユニバーシティ・ミュージアム設置について」を受けて、大学が所蔵する学術標本を教育・研究に活用するため、主要な国立大学に総合研究博物館が設置されるようになった。

1996（平成８）年、杉岡総長を委員長とする九州大学ユニバーシティ・ミュージアム設置準備委員会が設置された。そこで 1998（平成 10）年度の概算要求へ向けてのユニバーシティ・ミュージアム構想作りが開始され、専門委員会が設けられた。大学博物館の必要性を大学内外に訴えるため、1997（平成９）年「倭人の形成」、1998（平成 10）年「雲仙普賢岳の噴火とその背景」、1999（平成 11）年「九州大学／医学の歩みー寄生虫学の展開と医の文化ー」という３回の先行展示が行われた。

2000（平成 12）年度概算要求書において、教授２、助教授３、助手２で、一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の３系からなる総合研究博物館の新設を要求し、認められた。

2000（平成 12）年４月１日、館長、一次資料研究系（助教授１、助手１）、分析技術開発系（教授１、助教授１）、開示研究系（助教授１）、専門職員、事務補佐員の陣容で、工学部保存図書館印刷所跡を研究室、五十周年記念講堂ホワイエを展示場とし、事務を当面理学部等事務部が担当することとして九州大学総合研究博物館が発足した。

２．博物館の理念と設置の目的

理念：九州大学には、開学以来の研究と海外調査等により集められた 700 万点を超える学術標本があり、各学部、大学院研究科、及び各研究施設において保存されている。近年、分析技術の向上に伴い、実証的研究を行う上で学術標本の利用要請が高まっており、分野横断的な研究に学術標本の重要性が認識されてきている。また、「理科離れ」や「モノ離れ」対策として、学術標本を用いて学生に知的刺激を与える実物教育が必要となってきている。博物館は統一したシステムのもとで標本およびデータの提供を行い、学部教育・大学院教育・研究への学術標本の多角的・効率的有効活用を図る大学組織としての機能を持つ。

博物館はまた、大学と社会の接点となる施設であり、大学で行われている教育・研究を社会へ紹介し、社会の大学への要望を受け取る窓口としての機能を持つ。高齢化社会の中で、学術標本や情報の一般公開を通じて、地域の行政や他の博物館と密接に連携しながら、地域住民の生涯学習を支援し、社会に貢献する博物館であることも理念とする。

目的：総合研究博物館の目的は以下の通りである。

（1）学術標本の一元化と体系的な収集・分類・整理により、異分野の研究者等の利用を効果的に支援する。

（2）学術標本の適正な保存・管理により破壊・変質を防止し、恒久的保存を図る。

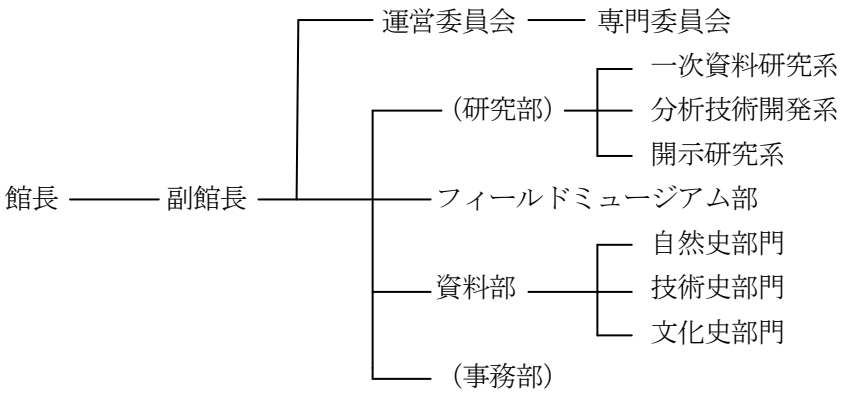
（3）学術標本情報の抽出と提供により学際的研究を推進する。

（4）学術標本に関する情報交流の窓口となり、学内外の教育・研究を支援する。

３．組織・機構

博物館には、館長、副館長、専任教員および関係部局の協力により兼任教員を配置している。また、博物館規則により、研究・教育等の組織として一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系を配置するとともに、博物館の運営審議機関として総合研究博物館運営委員会を設置した。なお、博物館事務については、当分の間、理学部等事務部が担当することとしている。

また、2000（平成 12）年、第１回運営委員会で博物館に資料部、フィールドミュージアム部を新設することが提案され、承認された。



４．規則

博物館の理念を実現するために、博物館の目的、組織等を博物館規則として定める。そのほか、博物館の業務、活動、運営のため以下の諸規則を定めている。

総合研究博物館規則

総合研究博物館資料部内規

総合研究博物館フィールドミュージアム部内規

総合研究博物館教員選考内規

総合研究博物館外国人学者受入に関する内規

総合研究博物館協力研究員の委嘱に関する内規

総合研究博物館セクシャル・ハラスメント等防止委員会内規

資料ＩＢ②　移管標本・資料一覧

平成 17 年度

ａ．エアーハンマー（B. & S Massey 社製）ほか工作機械

６点。九州大学工学研究院より移管。移管日平成 17 年 10 月 31 日。

ｂ．鉱山関連文書・材料工学部所蔵文書

255 点。九州大学工学研究院より移管。移管日平成 18 年 3 月 24 日。

平成 19 年度

ａ．人文科学研究院考古学研究室旧蔵考古資料

老朽化プレハブ２棟収蔵分。収蔵していたプレハブが 2004 年の台風 20 号で倒壊寸前となったため、平成 20 年１月に、箱崎文系地区から第一分館へ移動し、管理を考古学研究室から総合研究博物館へ移した。移管日平成 20 年１月 28 日。

ｂ．九大病院カルテ資料

段ボール箱 8000 箱、16 万冊。九大病院地区の再開発に伴い、平成 20 年１月に、病院地区旧看護師宿舎から箱崎地区旧工学部４号館１・２階（第二分館）へ移動し、管理を九大病院から総合研究博物館へ移した。移管日平成 20 年２月 14 日。県立福岡病院時代の明治 10 年代のカルテもあり、「人の記録」として保存・整理・目録化し、今後の研究に活用していく必要があるが、「個人情報保護法」など法的側面からの検討が必要となる。

ｃ．玉泉館資料

10,245 点。玉泉館は旧制福岡高等学校教授・玉泉大梁氏が収集した資料を中心とする展示施設であり六本松地区に存在したが、1987 年に解体され、資料は図書館六本松分館に移され、考古学資料は比較社会文化研究院基層構造講座が管理してきた。すでに平成 18 年度に博物館に移管されていたが移動はしていなかった。六本松地区の伊都への移転に先立ち、平成 20 年 9 月に第一分館に移動した。整理を進め 2009 年度以降に一般公開する予定である。

資料ＩＢ③　受贈標本・資料一覧

平成 17 年度

ａ．小菅 貞男著『W. H. Dall 記載の貝類模式標本写真集(北・西太平洋産巻貝類)』ほか書籍

19 点。軟体動物学研究所長　小菅 貞男氏より。平成 17 年 6 月 22 日受贈。

平成 18 年度

ａ．鏡山 猛先生の発掘調査図面・写真・実測図・本など

衣装ケース・ダンボール箱 57 個。日本習字教育財団理事長　原田 博至氏より。平成 18 年 10 月 20 日受贈。

ｂ．佐々治コレクション（甲虫類文献資料ほか）

約 300 点。佐々治 紀子氏より。平成 18 年 10 月 29 日受贈。

ｃ．中山平次郎先生収集考古資料および原稿・抜刷など

整理棚一棹分一括。岡部 信彦氏より。平成 19 年 1 月 10 日受贈。

ｄ．上宮コレクション（ハエ目キモグリバエ科）

約 2 万点。上宮 健吉氏より。平成 19 年 3 月 22 日受贈。

平成 19 年度

ａ．アマミノクロウサギ・アマミシギ

各１点。環境省九州地方環境事務所那覇自然環境事務所より。平成 19 年７月 18 日受贈。

ｂ．現生イモガイ類（軟体動物門腹足綱イモガイ科）

２種６個体。総務部法令審議室・百崎義隆孝氏より。平成 20 年１月に受贈。

ｃ．中国旧熱河省凌源県産ジュラ紀魚類化石

１点（木製標本箱入り）。農学研究院・江頭和彦教授より。平成 20 年２月７日受贈。

ｄ．昆虫コレクション

約 2400 箱。（故）大塚勲氏収集。平成 20 年２月８日受贈。

平成 20 年度

a. 旧「日独友好協会」福岡支部所蔵フィルム

35 点。言語文化研究院・福元圭太郎教授より。平成 20 年４月 11 日受贈。

b. 昆虫標本（テントウムシ・カメムシ・ガ類）

ドイツ型標本箱 25 箱・桐箱 14 箱。（故）村井省三氏収集。平成 20 年９月 25 日受贈。

c. 日本産イラクサ科ヤブマオ属ほか植物さく葉標本

約 4000 点。東京大学大学院理学系研究科付属植物園・邑田　仁園長より。平成 20 年 12 月５日受贈。

d. 昆虫用標本箪笥

３棹。久留米大学医学部生物学教室・河内俊英氏より。平成 21 年１月 25 日受贈。

e. 理科教育用生物標本

液浸瓶 40 本、頭蓋骨１点。高等教育開発研究センター・松本　顕助教より。平成 21 年２月２日受贈。

f. ホンドテン剥製標本

１点。言語文化研究院・高橋　勤准教授より。平成 21 年２月２日受贈。

g. 世界の昆虫標本

約 10 万点。長崎県平戸市田平教会・烏山邦夫氏より。平成 21 年２月 5 日受贈。

h. 考古学関係学術調査資料および書籍類

書架 70 棹分一括。（故）岡崎敬教授収集。平成 21 年３月４日受贈。

平成 21 年度

a. 中国陶磁器関係書籍類・調査資料および関連書籍類

書架４棹分一括。福津市・森本朝子氏より。平成 21 年８月 18 日受贈。

b. 分銅式精密天秤及び偏光顕微鏡

２点。九州大学理学研究院　池田剛准教授より。平成 21 年 10 月 19 日受贈。

c. 東南アジア・南アメリカ産肺吸虫圧平標本

標本箱 17 個。九州大学医学研究院　古賀正宗准教授より。平成 22 年２月 22 日受贈。

資料ＩＢ④．九州大学総合研究博物館標本・資料貸与要項

（平成 17 年５月 17 日　総合研究博物館運営委員会裁定）

この要項は、九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）が所蔵・保管している標本・資料に関して、展示・研究・教育などの目的のために、他機関に貸与する際に必要な事項を定めるものとする。

１．借用依頼への対応

電話連絡等で借用依頼を受けた博物館専任教員は、該当部門の博物館資料部教員と協議し、貸与の可否を決定して依頼者に連絡する。協議に際しては、以下の条件を考慮する。

○当該資料が、輸送展示等に耐える保存状態を有しているか。

○借用希望機関等における資料の保存管理方法、および展示施設、展示ケース等が資料保存上、適当か。

２．必要書類の提出

貸与内諾の場合は、依頼者に申請書を送付する。依頼者は必要事項を記入し、借用開始日の 30 日前までに博物館長に提出する。

借用目的が展示の場合、開催要項等必要書類を添付する。

写真撮影を希望する場合には、別に定める必要書類を提出する。

３．貸与・返却時の立会い者

資料の貸与･返却に際しては､博物館専任教員もしくは専任教員から委託を受けた者が立ち会う。

４．利用成果の発表

借用目的が研究の場合、標本・資料を利用して得た研究成果を、口頭あるいは印刷等の形で発表する場合には､前もって博物館専任教員の許可を得るとともに､後日､成果物を博物館に提出する。

なお、すでに発表先が確定している場合は、申請書に記入する。

５．注意事項が遵守されなかった場合の取り扱い

下記の注意事項等が遵守されなかった場合、その依頼者への今後の貸与は許可しない。

６．実施

この要項は、平成 17 年５月 17 日から実施する。

……

◎標本資料の取り扱い注意事項

借用者は、利用に際して以下の取り扱い注意事項を遵守する。

☆借用資料の確定後に、「借用標本リスト」に、借用する標本・資料に関する必要事項を記入して提出する。

☆標本・資料が破損した場合、破片等をすべて回収し、博物館専任教員に届け指示を受ける。無届の放置、あるいは無許可での補修はしない。補修を指示された場合はそれに従う。

☆補修等に必要な費用は、借用者が負担する。借用時に保険をかける場合には、賠償金額は博物館と借用者の協議によって決定する。

九州大学総合研究博物館所蔵標本・資料借用申請書

年　月　日

九州大学総合研究博物館館長様

九州大学総合研究博物館標本・資料貸与要項にのっとり、所蔵標本・資料の借用を申請します。

※機　　関
名　称　　：
所在地　　：
電　話　　：

※担　当　者（借用者が個人の場合も、ここに記入）
氏　名　　：
所　属　　：
電　話　　：
E-mail　　：

※借 用 資 料（量が多い場合、リストを別紙で添付）
：

※借 用 目 的：　展示・研究・その他（　　）

※借 用 期 間：　　年　月　日～　　年　月　日

※展示期間（展示の場合）
：　　年　月　日～　　年　月　日
※展示場所（展示の場合）
：
※展覧会名（展示の場合）
：
※研究課題名（研究の場合）
：
※研究成果発表予定（研究の場合）
：　口頭・印刷・その他（　　）
題目・学会名・学会誌名・巻号など具体的に記入。

注）この申請書は、貸与開始日の 30 日前までに九州大学総合研究博物館事務室あて提出して下さい。

借用標本リスト（人類先史分野用）

借用者は、借用する標本に関する必要事項を本リストに記入して提出してください。

箱番号	遺　跡　名	標　本　名	借用部位	利用方法

資料ＩＢ⑤．九州大学総合研究博物館標本・資料閲覧要項

（平成１８年５月３１日　総合研究博物館運営委員会裁定）

この要項は、九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）が所蔵・保管している標本・資料に関して、研究・教育などの目的のために閲覧する際に必要な事項を定めるものとする。

１．必要書類の提出

閲覧希望者は申請書・誓約書に必要事項を記入し、紹介者の推薦書とともに閲覧開始日の７日前までに博物館長に提出する。

閲覧希望者が学生の場合、研究業績一覧、指導教員の推薦書を添付する。

写真撮影を希望する場合には、別に定める必要書類を提出する。

２．紹介者

紹介者は、博物館専任教員もしくは該当部門の博物館資料部教員とし、閲覧申請者の閲覧状況についての責任を負う。

３．閲覧の可否の決定

申請を受けた博物館専任教員は、該当部門の博物館資料部教員と協議し、閲覧の可否を決定して申請者に連絡する。

４．部屋の開錠・施錠

標本収蔵室の利用に際しての、各室の開錠・施錠は、博物館**の専任教員のみ**が行う。

５．利用時の立会い者

標本収蔵室の利用に際しては､博物館専任教員もしくは専任教員から委託を受けた者が立ち会う。

６．部屋の利用

利用は博物館専任教員が指定した場所で行い、利用時に持ち込んだ私物は必ず持ち帰り、室内に放置しない。室内の物品の移動や配置の変更はしない。

７．利用成果の発表

標本・資料を利用して得た研究成果を、口頭あるいは印刷等の形で発表する場合には、前もって博物館専任教員の許可を得るとともに、後日、成果物を博物館に提出する。

なお、すでに発表先が確定している場合は、申請書に記入する。

８．注意事項が厳守されなかった場合の取り扱い

下記の注意事項等が遵守されなかった場合、その利用者の今後の利用は許可しない。

９．実施

この要項は、平成１８年６月１日から実施する。

……

◎標本資料の取り扱い注意事項

利用者は、利用に際して以下の取り扱い注意事項を遵守する。

☆「利用標本リスト」に、利用した標本・資料に関する必要事項を記入して立会い者に提出する。

☆利用終了後は、利用した標本・資料を収納箱内の原位置に戻す。

☆収納箱をキャビネットの原位置に戻す。

☆収納状況の現状変更はしない。

☆標本・資料が破損した場合、破片等をすべて回収し、博物館専任教員に届け指示を受ける。

無届の放置、あるいは無許可での補修はしない。補修を指示された場合はそれに従う。

九州大学総合研究博物館標本・資料閲覧申請書

年　月　日

九州大学総合研究博物館館長様

九州大学総合研究博物館標本・資料閲覧要項にのっとり、所蔵標本・資料の閲覧を申請します。

※閲　覧　者
氏　名　　：
所　属　　：
住　所　　：
電　話　　：
E-mail　　：

※紹　介　者
氏　名　　：
所　属　　：
住　所　　：

※閲 覧 期 間：　　年　月　日～　　年　月　日

※閲 覧 方 法：　計測・実測・写真撮影・その他（　　）

※研究課題名：

※研究成果発表予定：　口頭・印刷・その他（　　）
題目・学会名・学会誌名・巻号など具体的に記入。

誓　約　書

私は、九州大学総合研究博物館が所蔵する標本・資料の閲覧に際して、閲覧要項の定めるところを遵守することを誓約いたします。

閲覧者名　　印

注）この申請書は、閲覧開始日の７日前までに九州大学総合研究博物館事務室あて提出してください。

利用標本リスト（人類先史分野用）

利用者は、利用した標本に関する必要事項を本リストに記入して立会い者に提出してください。

箱番号	遺　跡　名	標　本　名	利用部位	利用方法

資料ＩＣ①．公開展示一覧

平成 17 年度公開展示「自然界のなかまたち」－九州大学所蔵標本資料展Ｉ－

会　期：平成 17 年 8 月 12 日～9 月 4 日
会　場：福岡市立少年科学文化会館
主　催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年科学文化会館
後　援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会
入場者数：6815 名
内　容：九州大学が保管する標本のすばらしさを一般の市民に知ってもらうために，理学研究院，農学研究院，工学研究院，比較社会文化研究院，薬学研究院の各部局に保管されている自然史標本を中心とした展示を行うとともに，展示標本の写真付き解説書を発行した。（参考資料）

平成 18 年度公開展示「海ののりもの展」

期間：平成 18 年 7 月 21 日～8 月 30 日
会場：福岡市立少年科学文化会館
主催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年科学文化会館
後援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会
協力部局：工学研究院海洋システム工学部門
入場者数：9304 名
内　容：地球の表面の 7 割は海であり、地球環境全体に果たす海の役割はとても大きい。このため、将来、人間がより豊かで安らぎのある生活を送るためには、海への理解を深め、海と調和して行くことが不可欠である。とくに、周りを海に囲まれている日本にとっては、人や荷物を輸送するために、また、魚や鉱物などの資源を確保するために、海を有効に利用して行くことが重要である。このため、九州大学の海洋システム工学部門では、海の交通を担う船についての研究をはじめとして、浮体式海上空港などによる海上の利用や、海洋環境を守るための海中観測技術など、海に関わるさまざまな研究を行っている。これらの研究の一端を紹介し、模型船や船の部品の展示、研究室で行われている実験の実演や自分の船を作って水槽で走らせるクラフトコーナーなどで、「海ののりもの」のおもしろさを感じていただいた

平成 19 年度公開展示「わくわくどきどき化石のヒミツ―化石が語る地球の環境―」

（第２回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展）
会　期：平成 19 年 7 月 21 日～８月 30 日
会　場：福岡市立少年文化会館　１階学習室
主　催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年文化会館
入場者数：23,098 名
内　容：現在化石化した過去の生物は、過去に起きた地球環境の変化を現在に伝えてくれる。過去の地球環境の変化の末に現在の地球環境が形作られ、さらにその先には、将来の地球のすがた姿を予測することもできる。九州大学では、理学研究院と比較社会文化研究院において、過去の地球環境を探ろうとしている研究部門があり、その研究の一端を紹介した。この公開展示は、福岡市少年科学文化会館との最初の本格的な合同企画展となった。

平成 20 年度公開展示「奴国の南―九大筑紫地区の埋蔵文化財―」

会　期：平成 21 年１月１日～２月８日　9:30～17:00

会　場：九州国立博物館　４階文化交流展示室

主　催：九州大学総合研究博物館・九州国立博物館

入場者数：40,161 名

内　容：九州大学は、筑紫地区の諸施設の建設に先立って、1978 年度から 1998 年度まで埋蔵文化財の発掘調査を行い、多大の成果をあげた、しかし諸般の事情からその調査成果や出土品がまとまって学外に紹介される事はなかった。今回の展示では、主要出土品－巴形銅器鋳型・銅戈鋳型・祭祀遺構出土土器などの弥生時代遺物、石釧・須恵器・須恵器製作用具などの古墳時代遺物、墨書土器・硯・丸鞆・木簡・ヘラ書き須恵器などの歴史時代遺物－を網羅的に展示するとともに、他機関から関連品を借用し、比較検討できるようにした。。展示は九州国立博物館の常設展示室の一郭を借用したが、国博は説明文を極力用いない方針であるため、研究成果を詳細に提示する図録を作成し、最近の研究成果を盛り込んで、周辺地域の近年の発掘調査成果も参照しつつ当該地域の有した歴史的位置を明らかにした。

平成 21 年度公開展示「昆虫のヒミツ―昆虫学入門―」

会　期：平成 21 年７月 18 日～２月８日

会　場：福岡市少年科学文化会館　１階学習室

主　催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年文化会館

入場者数：23,000 名

内　容：農学研究院・比較社会文化研究院・熱帯研究センター・総合研究博物館の昆虫研究者が総力を挙げて開催した。さまざまな昆虫のくらし、昆虫と地球環境の問題、昆虫と人間のかかわりなどのヒミツを、パネルや模型、飼育展示で解説した。アリやゲンゴロウ、セミ、カイコ、ぴょんぴょんととびはねる蛹が愉快なヨーロッパトビチビアメバチなど、普段あまりじっくり見ることの出来ないような虫達が大変人気だった。海ののりもの展以来恒例のクラフトコーナーでは、塗り絵や切り絵や木製パズル、そして今年の一番人気だったカイコのまゆ人形とミサンガ作りを実施し、就学前の子どもから大人まで皆様に楽しんでいただけた。 同じ会場内に展示した当館所蔵「烏山邦夫世界の昆虫標本」は、国内外の美しい昆虫の標本がずらりと並び、来場者を魅了していた。８月終りの標本作製講座と昆虫同定会は、夏休みの自由研究の手助けになった。

資料ＩＣ②．特別展示一覧

「九州大学教育・研究の最前線－第４回 P&P 研究成果一般公開－」

会　期：平成 17 年 5 月 9 日～6 月 10 日

会　場：九州大学 50 周年記念講堂

共　催：九州大学総合研究博物館・九州大学 P&P 専門委員会

内　容：九州大学の研究を代表するＰ＆Ｐ採択課題のうち７課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「“超高温・好気発酵法”による有機性廃棄物の資源化新技術の創生」代表 金澤慎二郎（農学

研究院）
「地球外物質による生命の起源を含めた太陽系形成に関する研究」代表 村江達士(理学研究院)
「医工連携による先端医療の開発」代表 岩本幸英（医学研究院）
「インドネシアにおける環境を考慮した石炭鉱山の開発」代表 松井紀久男（工学研究院）
「計算理工学総合リサーチコアの活動展開」代表 金山寛 (工学研究院)
「糸島地域における健全な水循環系の構築」代表 神野健二（工学研究院）
「教育改善を促進する評価手法の開発と教育評価マニュアルの作成」代表 関口正司（法学研究院）

「ひとあし先に行ってきました」－伊都キャンパスの植物たち－
会　期：平成 17 年 10 月 17 日～11 月 13 日
会　場：九州大学 50 周年記念講堂
主　催：九州大学総合研究博物館
内　容：元岡・伊都キャンパスの植物を紹介した。

「九州大学教育・研究の最前線－第５回 P&P 研究成果一般公開－」
会　期：平成 18 年 5 月 9 日～6 月 9 日
会　場：九州大学箱崎キャンパス旧知能機械工場 1 階展示室
共　催：九州大学総合研究博物館・九州大学 P&P 専門委員会
内　容：九州大学の研究を代表するＰ＆Ｐ採択課題のうち 14 課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。
「飛行船を用いた地雷探査システムの研究」代表 後藤昇弘（工学研究院）
「浸潤・転位能と腫瘍血管新生を標的とした HGF アンタゴニスト・NK4 による膵癌の遺伝子治療」代表 田中雅夫（医学研究院）
「次世代化学機能デバイスの基盤技術としてのセラミックスウエットプロセッシング －ナノレベルからの構造と機能の制御－」代表 寺岡靖剛（総合理工学研究院）
「グリーンケミストリーの確立を目指した先導的教育・研究システムの構築と展開」代表 成田吉徳（先導物質化学研究所）
「アジアにおける小児先端医療の展開：保健衛生環境調査と主要疾患の発症要因・病態の解析および診断・治療・予防法の確立」代表 原 寿郎（医学研究院）
「生体工学における学際的教育の創設」代表 村上輝夫（工学研究院）
「ハイブリッド型船舶自動航行システムの開発に関する研究」代表 貴島勝郎（工学研究院）
「生体防御機構を基盤とした先端医学」代表 原田実根（医学研究院）
「農学分野における研究パートナーシップの構築」代表 江頭和彦（農学研究院）
「ウシ初期成長期の代謝生理的インプリンティング効果を利用した荒廃農地放牧による安全な牛肉生産システムの構築」代表 後藤貴文（農学研究院）
「消化器癌の網羅的遺伝子解析に基づいた分子標的治療の開発」代表 前原喜彦（医学研究院）
「植民地朝鮮における日本人生活誌の再構成 －木浦とその周辺地域を事例として－」代表 石川捷治（法学研究院・韓国研究センター）
「感性融合技術の創造－学部・大学院の教育研究から最先端技術の開発，ベンチャー設立まで－」代表 今坂藤太郎（工学研究院）

「九州大学の新しい英語教育― 平成 16-17 年度 P&P の成果を踏まえて」代表 徳見道夫（言語文化研究院）

「九州大学教育・研究の最前線―第６回Ｐ＆Ｐ研究成果一般公開―」

会　期：平成 19 年５月９日（水）～６月８日（金）
会　場：50 周年記念講堂
共　催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会
入場者数：440 名
内　容：九州大学の研究を代表するＰ＆Ｐ採択課題のうち８課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「植民地朝鮮における日本人生活誌の再構成―木浦とその周辺地域を事例として―」代表　石川捷治（法学研究院）
「立木の非破壊的品質評価技術の開発に向けた基礎的研究」代表　古賀信也（農学研究院・農学部付属演習林北海道演習林）
「新キャンパス地域の遺跡探査」代表　牛嶋恵輔（工学研究院）
「ユビキタス社会における電子図書館のソフト面高度化に関する研究」代表　池田大輔（システム情報科学研究院）
「ポストゲノム発達脳科学の創生とその研究・教育基盤の構築」代表　吉良潤一（医学研究院）
「雲仙火山のマグマ供給系とマグマ蓄積過程の解析」代表　清水　洋（理学研究院附属地震火山観測研究センター）
「「天然物」と「人」の整理・感性相互作用に着目した自然と人のインターフェイス解析」代表　清水邦義（農学研究院）
「溶媒可溶化カーボンナノチューブ」代表　中嶋直敏（工学研究院）

「古人骨資料・動物骨格標本一般公開」

会　期：平成 19 年５月 11 日
会　場：第一分館骨格標本室
入場者数：103 名
内　容：貴重な古人骨資料 60 体・脊椎動物骨格標本 200 体の公開。古人骨は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料。動物骨格は希少種を含む九州有数のコレクション。

「九州大学教育・研究の最前線―第７回Ｐ＆Ｐ研究成果一般公開―」

会　期：平成 20 年５月９日～６月６日
会　場：50 周年記念講堂２・３階
共　催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会
入場者数：373 名
内　容：九州大学の研究を代表するＰ＆Ｐ採択課題のうち８課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「新しい知覚の学―アイステーシスからの人間理解―」代表　三浦佳世（人間環境学研究院）
「平成 18 年問題に対応するための数学・理科基礎学力調査」代表　風間英明（数理学研究院）
「伊都キャンパス農学研究院分室を拠点とした糸島地域の持続的農業のための効率的水資源利用技

術の研究展開」代表　平松和昭（農学研究院）
「窓ガラス清掃ロボットの開発」代表　山本元司（工学研究院）
「地下水位観測に基づく福岡地域の地震活動予測の研究」代表　江原幸雄（工学研究院）
「ナノ・マイクロ・マクロ生体医工学研究教育拠点の形成」代表　村上輝夫（工学研究院）
「系統別樹状細胞前駆細胞の同定および機能解析」代表　赤司浩一（九大病院）
「相対性理論シミュレーター：教材開発の実習プログラム」代表　松井　淳（理学研究院）

「中山平次郎先生関係資料展」
会　期：平成 20 年５月９日～６月６日
会　場：50 周年記念講堂３階展示室
内　容 2007 年１月に寄贈された医学部初代病理学教授中山平次郎先生収集の考古学資料を初公開する。鴻臚館を福岡城内と推定した根拠資料など学史上重要な資料を含む。

「古人骨資料・動物骨格標本一般公開」
会　期：平成 20 年５月 12 日
会　場：第一分館骨格標本室
入場者数：78 名
内　容：貴重な古人骨資料 60 体・脊椎動物骨格標本 200 体の公開。古人骨は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料。動物骨格は希少種を含む九州有数のコレクション。

「「九州帝国大学」のパブリックアートと葦ペンで描く「九大」展」
会　期：平成 20 年５月 12 日
会　場：旧工学部本館４階第２会議室
内　容：1930 年から使われ帝国大学時代の雰囲気をよく残す豪華な会議室と、壁面を飾る巨大な油絵（青山熊治作）を公開。
入場者数：440 名

「九州大学教育・研究の最前線―第８回Ｐ＆Ｐ研究成果一般公開―」
会　期：平成 21 年５月８日～６月６日
会　場：九州大学総合研究博物館常設展示室
共　催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会
入場者数：866 名
内　容：九州大学の研究を代表するＰ＆Ｐ採択課題のうち６課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。
「調停技法の小学校導入にむけたトライアル・プロジェクト 」代表五十君（安武）麻里子（法学研究院）
「デジタルブレイン教育・研究拠点の形成」代表 宮城靖（デジタルメディシン・イニシアティブ）
「国際交換講義およびインターナショナル・ファカルティデベロプメント(IFD)によるグローバル教育システムの構築」代表 伊藤早苗（応用力学研究院）
「インストラクショナルデザインに基づいた高校「生物」未履修対策自習プログラムの開発」

代表 山岡章浩（医学研究院）

「環境ホルモン・ビスフェノールA受容体の作用発現機構解析と新リスク評価法の確立」代表 松島綾美（理学研究院）

「新奇細胞毒素を利用したBt菌バイオ研究新領域への総合展開」代表 北田栄（理学研究院）

「中山平次郎先生関係資料展」

会　期：平成 21 年５月８日～６月５日

会　場：総合研究博物館平常展示室（50 周年記念講堂３階）

内　容：平成 19 年１月に寄贈された医学部初代病理学教授中山平次郎先生収集の考古学資料を公開する。鴻臚館を福岡城内と推定した根拠資料など学史上重要な資料を含む。

「古人骨資料・動物骨格標本一般公開」

会　期：平成 21 年５月 11 日

会　場：第一分館骨格標本室

入場者数：195 名

内　容： 貴重な古人骨資料 60 体・脊椎動物骨格標本 200 体の公開。古人骨は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料。動物骨格は希少種を含む九州有数のコレクション。

「旧工学部本館４階会議室公開」

会　期：平成 21 年５月８日～５月 17 日

会　場：旧工学部本館４階第２会議室

内　容：1930 年から使われ帝国大学時代の雰囲気をよく残す豪華な会議室と、壁面を飾る巨大な油絵（青山熊治作）を公開。

入場者数：249 名

「大塚勲と熊本県の昆虫」展

会　期：平成 22 年３月 14 日～３月 25 日

会　場：総合研究博物館平常展示室（50 周年記念講堂２階ホワイエ）

内　容：大塚勲氏（故人）が戦後間もなくから、多くの研究者の協力のもと、広範な分類群の昆虫について熊本県における生息状況を調べた。平成 20 年にご遺族から寄贈された膨大な標本・文献類の一部を展示し、大塚氏の業績をパネルで紹介した。

資料ＩＣ③．サテライト展示一覧

Ａ．福岡空港サテライト展示（福岡空港第１ターミナル２階待合室）

「川と海の生命展Ⅰ，川の生命を守ろう」；平成 17 年２月１日～4 月 27 日

「川と海の生命展Ⅱ，旅する魚たち」；平成 17 年４月 28 日～8 月２日

「川と海の生命展Ⅲ，海の生命を守ろう」；平成 17 年８月３日～2005 年 11 月５日

「川と海の生命展Ⅳ，マリンバイオ」；平成 17 年 11 月６日～2006 年６月７日

「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅰ」；平成 18 年６月８日～10 月 25 日

「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅱ」；平成 18 年 10 月 26 日～2007 年３月 11 日

「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅲ」; 平成 19 年３月 12 日～８月８日
「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅳ」; 平成 19 年８月９日～12 月 17 日
「倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅴ」; 平成 19 年 12 月 17 日～2008 年５月 20
「化石のヒミツⅠ」;　平成 20 年５月 21 日～９月 28 日
「化石のヒミツⅡ」;　平成 20 年９月 29 日～平成 21 年２月４日
「化石のヒミツⅢ」;　平成 21 年２月５日～６月 14 日
「化石のヒミツⅣ」;　平成 21 年６月 15 日～10 月 27 日
「化石のヒミツⅤ」;　平成 21 年 10 月 28 日～平成 22 年３月８日
「化石のヒミツⅥ」;　平成 22 年３月９日～平成 22 年８月 18 日

B．前原市伊都文化会館サテライト展示（伊都文化会館玄関ロビー）
「九州の地下資源―金」; 平成 17 年２月 19 日～10 月 14 日
「九州の地下資源―地熱」; 平成 17 年 10 月 15 日～平成 18 年９月２日
「川と海の生命展―川の生命」; 平成 18 年９月３日～11 月２日
「川の命を守ろうー田で生活する生物たちの危機」; 平成 18 年 11 月３日～平成 19 年１月６日
「旅をする魚たちー有明海だけで生活するエツってどんな魚」; 平成 19 年１月７日～３月３日
「川の生命―うなぎははるか外洋で産卵する」; 平成 19 年３月４日～５月９日
「川の生命―うなぎ仔魚の長い旅―」; 平成 19 年５月 10 日～７月 28 日
「とる・つくる・そだてる―東シナ海の魚―」; 平成 19 年７月 29 日～９月 21 日
「とる・つくる・そだてる―資源の保護と管理―」; 平成 19 年９月 22 日～11 月 11 日
「とる・つくる・そだてる―作り育てる漁業―」; 平成 19 年 11 月 11 日～平成 20 年１月 13 日
「マリンバイオ―食べ物と健康に役立つ海の生き物―」; 平成 20 年１月 13 日～３月２日
「マリンバイオ―大きな可能性を秘める海の小さな生き物―」; 平成 20 年３月２日～５月３日
「マリンバイオ―遺伝子って何だろう―」; 平成 20 年５月４日～７月８日
「海の生命―九州近海に見られる温暖化―」; 平成 20 年７月９日～９月６日
「海の生命―海の生命を守ろう―」; 平成 20 年９月７日～11 月１日
「行橋市琵琶隈古墳」; 平成 20 年 11 月２日～平成 21 年１月３日
「飯塚市山ノ古墳」; 平成 21 年１月４日～３月３日
「京都郡番塚古墳」; 平成 21 年３月４日～５月８日
「対馬ガヤノキ遺跡」; 平成 21 年５月９日～７月３日
「対馬塔の首遺跡」; 平成 21 年７月４日～９月５日
「一支国カラカミ遺跡」; 平成 21 年９月６日～11 月１日
「一支国原の辻遺跡」: 平成 21 年 11 月２日～平成 22 年１月９日
「末慮国宇木汲田遺跡」: 平成 22 年１月９日～３月 13 日
「伊都国三雲遺跡」: 平成 22 年３月 13 日～

C．福岡市保健衛生研究所「まもるーむ福岡」サテライト展示（まもるーむ福岡・展示室）
「植物をもっと知ろうⅠ」 ; 平成 17 年 11 月２日～平成 18 年６月６日
「植物をもっと知ろうⅡ」; 平成 18 年６月７日～平成 19 年６月 18 日

「植物をもっと知ろうⅢ」; 平成 19 年 6 月 19 日～平成 21 年 1 月 20 日
「植物をもっと知ろうⅣ」; 平成 21 年 1 月 21 日～11 月 12 日
「川と海の生命Ⅰ」: 平成 21 年 11 月 13 日～

D．志摩町総合保健福センター「ふれあい」サテライト展示

「福岡県で絶滅に瀕している植物たち」; 平成 18 年 1 月 19 日～4 月 15 日
「福岡県で絶滅に瀕している貝たち」; 平成 18 年 4 月 16 日～7 月 9 日
「福岡県で絶滅に瀕している魚たち」; 平成 18 年 7 月 10 日～9 月 2 日
「川と海の生命展－マリンバイオ」; 平成 18 年 9 月 3 日～11 月 2 日
「マリンバイオー大きな可能性を秘める海の小さな生き物」
; 平成 18 年 11 月 3 日～平成 19 年 1 月 6 日
「マリンバイオー遺伝子って何だろう」; 平成 19 年 1 月 7 日～3 月 3 日
「海の生命―海の生命を守ろう」; 平成 19 年 5 月 10 日～7 月 28 日
「川の生命―多様性をはぐくむワンド」; 平成 19 年 5 月 29 日～9 月 21 日
「川の生命―田で生活する生物たちの危機」; 平成 19 年 9 月 22 日～11 月 11 日
「川の生命―有明海だけに生息するエツってどんな魚」
; 平成 19 年 11 月 11 日～平成 20 年 1 月 13 日
「川の生命―うなぎははるか外洋で産卵する」; 平成 20 年 1 月 13 日～3 月 2 日
「川の生命―うなぎ仔魚の長い旅」; 平成 20 年 3 月 2 日～5 月 3 日
「とる・つくる・そだてる―東シナ海の魚」; 平成 20 年 5 月 4 日～7 月 8 日
「とる・つくる・そだてる―限りある水産資源の保護と管理」; 平成 20 年 7 月 9 日～9 月 6 日
「とる・つくる・そだてる―作り育てる漁業」; 平成 20 年 9 月 7 日～11 月 1 日
「対馬ガヤノキ遺跡」: 平成 20 年 11 月 2 日～平成 21 年 1 月 3 日
「対馬塔の首遺跡」: 平成 21 年 1 月 4 日～3 月 3 日
「一支国カラカミ遺跡」: 平成 21 年 3 月 4 日～5 月 8 日
「一支国原の辻遺跡」: 平成 21 年 5 月 9 日～7 月 3 日
「末慮国宇木汲田遺跡」: 平成 21 年 7 月 4 日～9 月 5 日
「伊都国三雲遺跡」: 平成 21 年 9 月 6 日～11 月 2 日
「奴国須玖岡本遺跡」; 平成 21 年 11 月 2 日～平成 22 年 1 月 9 日
「奴国板付遺跡」; 平成 22 年 1 月 9 日～平成 22 年 3 月 13 日
「八女市岩戸山古墳」; 平成 22 年 3 月 13 日～

E．二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」サテライト展示

「絶滅に瀕している植物たち」; 平成 18 年 1 月 19 日～4 月 15 日
「福岡県で絶滅に瀕している魚たち」; 平成 18 年 4 月 16 日～7 月 9 日
「福岡県で絶滅に瀕している貝たち」; 平成 18 年 7 月 10 日～9 月 2 日
「川と海の生命展－とる・つくる・そだてる」; 平成 18 年 9 月 3 日～11 月 2 日
「とる・つくる・そだてる－限りある水産資源の保護と管理」
; 平成 18 年 11 月 3 日～平成 19 年 1 月 6 日
「とる・つくる・そだてる－作り育てる漁業」; 平成 19 年 1 月 7 日～3 月 3 日）
「マリンバイオー食物と健康」; 平成 19 年 3 月 4 日~5 月 9 日

「マリンバイオ―小さな生き物」；平成 19 年５月 10 日～７月 28 日
「マリンバイオ―遺伝子って何だろう」；平成 19 年７月 29 日～９月 21 日
「海の生命―九州近海に見られる温暖化」；平成 19 年９月 22 日～11 月 11 日
「海の生命―九州近海に見られる温暖化の影響」；平成 19 年 11 月 11 日～平成 20 年１月 13 日
「川の生命―多様性をはぐくむワンド」；平成 20 年１月 13 日～３月２日
「川の生命―田で生活する生物たちの危機」；平成 20 年３月２日～５月３日
「川の生命―有明海だけに生息するエツってどんな魚」；平成 20 年５月４日～７月８日
「川の生命―うなぎははるか外洋で産卵する」；平成 20 年７月９日～９月６日
「川の生命―うなぎ仔魚の長い旅」；平成 20 年９月７日～11 月１日
「松盧国宇木汲田遺跡」；平成 20 年 11 月２日～平成 21 年１月３日
「伊都国三雲遺跡」；平成 21 年１月４日～３月３日
「奴国須玖岡本遺跡」；平成 21 年３月４日～５月８日
「奴国板付遺跡」；平成 21 年５月９日～７月３日
「八女市岩戸山古墳」；平成 21 年７月４日～９月５日
「行橋市琵琶隈古墳」；平成 21 年９月６日～11 月１日
「飯塚市山ノ神古墳」：平成 21 年 11 月２日～平成 22 年１月８日
「京都番塚古墳」：平成 22 年１月９日～３月 13 日
「対馬ガヤノキ遺跡」：平成 22 年３月 13 日～

資料ＩＤ④．出版物一覧

ＩＤ④ア．概要（和文・英文）

九州大学総合研究博物館概要 2007（日本語版）（平成 19 年６月）
九州大学総合研究博物館概要 2007（英 語 版）（平成 20 年２月）

ＩＤ④イ．博物館ニュース

九州大学総合研究博物館ニュース　No.5　平成 17 年 10 月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.6　平成 18 年３月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.7　平成 18 年 10 月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.8　平成 19 年３月
九州大学総合研究博物館ニュース　No. 9　平成 19 年 10 月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.10　平成 20 年３月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.11　平成 20 年 11 月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.12　平成 21 年３月
九州大学総合研究博物館ニュース　No.13　平成 21 年 10 月

ＩＤ④ウ．研究報告

九州大学総合研究博物館研究報告　第４号　平成 18 年１月
九州大学総合研究博物館研究報告　第５号　平成 19 年１月
九州大学総合研究博物館研究報告　第６号　平成 20 年１月
九州大学総合研究博物館研究報告　第７号　平成 21 年３月
九州大学総合研究博物館研究報告　第８号　平成 22 年３月

ＩＤ④エ．年報

九州大学総合研究博物館年報　第２号（2005-2006 年度）　平成 19 年 10 月
九州大学総合研究博物館年報　第３号（2007-2008 年度）　平成 21 年９月

ＩＤ④オ．その他の出版物

九州大学所蔵標本・資料展Ｉ－自然界のなかまたち－　平成 17 年７月
九州大学総合研究博物館（平成 12～16 年度）外部評価報告書　平成 18 年３月
奴国の南―九大筑紫地区の埋蔵文化財―　平成 21 年１月
昆虫のヒミツ　平成 21 年７月
ＵＭ　UNIVERSITY MUSEUM　平成 22 年３月
展示補助ツール「親子　de　クエスチョン」平成 19 年８月
展示補助ツール「九大博物館標本かるた」　平成 20 年７月

資料ＩＤ⑤．新聞等による報道一覧

平成 17 年度

◎熱帯のチョウ・ナナフシ・クワガタ...　九大の標本公開（朝日　平成 17 年 8 月 12 日）

◎九大伊都キャンパス開校記念「可也山」登り歴史知ろう「九大・糸島会」（読売　平成 18 年 2 月 19 日）

◎謎の巻き貝じわり拡大野菜荒らす外来種　九大・松隈教授が実態本格調査（西日本　平成 18 年 2 月 25 日）

平成 18 年度

◎総合研究博物館骨格標本室を特別公開（毎日，読売，朝日，西日本　平成 17 年 5 月 9，10 日）

◎総合研究博物館古人骨資料公開　頭骨を中心に 60 体展示（読売　平成 18 年 5 月 25 日）

◎九州大学で古人骨公開　学際研究へ活用を期待（朝日　平成 18 年 6 月 2 日）

◎外来種「オオクビキレガイ」生態系への影響探る　松隈教授（朝日　平成 18 年 7 月 13 日）

◎「海ののりもの展」少年科学文化会館で（朝日　平成 18 年 8 月 16 日）

◎九大と糸島地区一市二町　地引き網交流（西日本　平成 18 年 10 月 22 日）

◎外来カタツムリ繁殖　農作物への食害調査開始　松隈教授（紀伊　平成 19 年 1 月 16 日）

◎古文書を解読　実相に迫る　変遷の視点　宮崎助教授（朝日　平成 19 年 1 月 27 日）

◎大学・地域との連携　松隈明彦九大・糸島会幹事長（読売　平成 19 年 3 月 21 日）

平成 19 年度

◎「わくわくどきどき化石のヒミツ展」展　九大博物館（朝日　平成 19 年 8 月 20 日）

◎日本人の起源探る第一歩に（朝日関西版　平成 20 年 3 月 3 日）

平成 20 年度

◎九大の学術標本 230 点　常設展示室オープン　箱崎　希少土器、鉱石など多彩に（毎日・日経・朝日　平成 20 年 5 月 9・24 日）

◎アマミノクロウサギ剥製と骨格標本収蔵　九大総合研究博物館（南日本　平成 20 年 7 月 23 日）

◎植物の世界を探訪　九大博物館が来月 29 日講演会（朝日　平成 20 年 10 月 4 日）

◎キャンパスは美の宝庫　巨大壁画、肖像彫刻…実は巨匠の名作（平成 20 年 10 月 19 日）

◎外来陸貝生息域拡大　家庭菜園や花壇食害　松隈明彦総合研究博物館教授（読売　平成 20 年 12 月 5 日）

◎発見！九大のお宝ザックザク　探検！旧工学部本館　箱崎キャンパス（毎日　平成 21 年 1 月 1 日）

◎奴国の南　遺物展示　九州大筑紫地区　九博で発掘成果展（読売・日経　平成 21 年 1 月 16・21 日）

◎九州大学総合研究博物館　七百五十万点に及ぶ学術標本（日経　平成 21 年 2 月 18・26 日）

◎お宝発見　400 万点超える昆虫標本　九州大（朝日　平成 21 年 3 月 30 日）

平成 21 年度

◎30 年かけ収集の昆虫標本　九大に 10 万点寄贈（西日本　平成 21 年 7 月 7 日）

◎生態や秘密など紹介　九大の研究者ら中央区で「昆虫」展（毎日　平成 21 年 8 月 20 日）

◎全国一の規模を誇る学術標本　九州大学総合研究博物館（朝日小学生　平成 21 年 9 月 10 日）

◎外来の陸貝　対処法学ぶ　松隈明彦総合研究博物館長（山口　平成 22 年 3 月 8 日）

資料ＩＥ②ア．Ｐ＆Ｐ研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究
―アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発―」での事業一覧

来場者調査

「わくわくどきどき化石のヒミツ」展に際して実施した。

展示補助ツールの開発

「わくわくどきどき化石のヒミツ」展に際してクイズ形式の「親子 de クエスチョン」を作成・配布し好評であった。

セミナー

第０回（プレセミナー）

日　時：平成 19 年５月 22 日（火）18:30～19:30

場　所：箱崎キャンパス旧工学部本館２階 207 号室

「研究計画について」三島美佐子（総合研究博物館）

「江戸のモノづくりに見るアウトリーチ活動」中西哲也（総合研究博物館）

「全米チルドレンズミュージアム学会及び全米博物館協会 2007 の報告」清水麻紀（USI こどもプロジェクト）

第１回

日　時：平成 19 年７月６日（金）18:30～20:30

場　所：箱崎キャンパス 21 世紀交流プラザ・セミナー室

「みんなの「夢」を「かたち」にするには」松永　久（三菱総合研究所・地域経営研究センター　主任研究員）

「「夢」が「かたち」になったらエデュケーターの出番！」太田　歩（国立歴史民俗博物館・広報サービス室　研究支援推進員）

第２回

日　時：平成 19 年８月 31 日（金）17:00～19:30

場　所：旧工学部本館２階 207 号室　USI セミナー室

「くるしまぎれの陳列棚―コミュニケーションをデザインすること―」木村政司（日本大学芸術学部デザイン学科　教授）

「自然史博物館とサイエンスコミュニケーション」渡辺政隆（文部科学省科学技術政策研究所　上席研究官）

第３回

日　時：平成 19 年 11 月 20 日（火）17:30～19:00

場　所：旧工学部本館２階 207 号室　USI セミナー室

「展示、それは利用者の経験―国内外の展示例・開発プロセス・経験のあとに―」染川香澄（ハンズ・オン・プランニング代表）

第４回

日　時：平成 19 年 12 月 17 日（月）17:30～19:00

場　所：21 世紀交流プラザＩ・セミナー室Ｂ

「科学者と子どもたちで作る野の草花図巻―ケータイを使ったコラボレーション―」竹中真希子（大

分大学教育福祉科学部・付属教育実践総合センター　准教授）

「水族館における、携帯電話を使用した連携学習の試み」高田浩二（マリンワールド海の中道海洋生態科学館　館長）

第５回

日　時：平成 20 年３月 25 日（火）18:00～20:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

「博物館職員・研究者の立場から―日本の博物館教育の現状を考える―」井上由佳（国立歴史民俗博物館　研究支援推進員）

「人の記憶・地域の記憶と、博物館をつなぐ」重盛恭一（まち研究所　代表）

第６回

日　時：平成 20 年３月 26 日（水）18:00～19:30

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・Culture　Cafe

「サイエンスカフェってなに？」三上直之（北海道大学 CoSTEP　特任教授）

第７回

日　時：平成 20 年６月 27 日（金）18:30～20:00

場　所：九州大学大橋サテライト・ルネット１階

「インクルーシブデザインからの大学博物館デザイン・アプローチ」平井康之（九州大学芸術工学研究院　准教授）

第８回

日　時：平成 20 年７月８日（火）18:30～20:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

「大学美術館が実践する『ひらめきアートプログラム』」緒方　泉（九州産業大学美術館　准教授）

第９回

日　時：平成 20 年８月 11 日（月）17:00～19:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

「サイエンス・コミュニケーションとサイエンス・ライティング」渡辺政隆（科学技術振興機構科学コミュニケーションスーパーバイザー）

第 10 回

日　時：平成 20 年８月 27 日（水）18:30～20:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

「大学博物館の現在像―今、博物館に求められるもの―」岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館　館長）

第 11 回

日　時：平成 20 年 10 月１日（水）18:30～20:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

「コミュニケーターってなに？」黒川紘美（日本科学未来館　科学コミュニケーター）

第 12 回

日　時：平成 21 年３月２日（月）18:00～19:30

場　所：旧工学部本館２階 207 号室　USI セミナー室

「オットー・ノイラートの視覚教育（アイソタイプ）―ミュージアム、展示デザインへの貢献を中心として―」伊原久裕（九州大学芸術工学研究院　准教授）

第 13 セミナー（最終回）

日　時：平成 21 年３月２日（月）18:00～19:30

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・２階セミナー室Ｂ

「キャンパスが移るということ―都心と郊外の位相―」中川壽之（中央大学大学史編纂課）

ワークショップ

「コミュニケーション・ワーク：全２回」

日　時：１回目平成 20 年６月１２日　18:30～20:00

２回目平成 20 年６月１６日　18:30～20:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

内　容：コミュニケーションに関するグループワークと、発声についてのワークショップ。

講　師：鮫島宗哉（フリーアナウンサー）

「みんなで博物館をつくろう！インクルーシブデザインワークショップ」

日　時：平成 20 年６月 28 日（土）10:00～17:00

場　所：総合研究博物館常設展示室

内　容：総合研究博物館・常設展示室について、現状を理解しグループで提案を作る。

講　師：平井康之（九州大学芸術工学研究院　准教授）

「つどう・かたる・つなぐ－科学と社会の新しい関係づくり－」

日　時：平成 20 年７月５日（土）14:00～18:00

場　所：六本松キャンパス学生会館第一食堂

内　容：研究者・学生など科学に携わっている大学人と、学外一般の方が一堂に会し、科学について語ったワールドカフェ。

参　考：主催「つどう・かたる・つなぐ」実行委員会（三島美佐子・加留部貴行・佐々木圭子・小田垣孝）、共催「科学の公園」をつくる会、九州大学総合研究博物館、九州大学ユーザーサイエンス機構、協力（独）科学技術振興機構（ＪＳＴ）、ＮＰＯ法人日本ファシリテーション協会、九州大学女性研究者支援室(SOFLe)

「サイエンスライティング・エディティング」

日　時：平成 20 年８月 11 日（月）13:00～16:00、12 日（火）10:00～12:00

場　所：21 世紀交流プラザⅠ・１階多目的ホール

内　容：一般向けサイエンス・ライティングに関するスキルと、研究者が書いた難解な解説や文章を一般向けに書き下すスキルに関する実習。

講　師：渡辺政隆（科学技術振興機構　科学コミュニケーションスーパーバイザー）

「今日はキッズミュージアムの日！」

日　時：平成 21 年３月 14 日（土）10:00～17:00

場　所：総合研究博物館常設展示室

内　容：総合研究博物館・常設展示室の現状を理解し、「こんな展示があったらいいな」という提案を作る。

講　師：平井康之（九州大学芸術工学研究院　准教授）

資料ＩＥ②イ　第10回全国大学博物館等協議会・第２回博物科学会の開催

期　間：平成19年６月７日（木）～８日（金）
場　所：50周年記念講堂・21世紀交流プラザ
参加者：31団体、74名

挨　　拶　多田内　修（九州大学総合研究博物館館長）
挨　　拶　梶 山 千 里（九州大学総長）
挨　　拶　馬 渡 俊 介（全国大学博物館等協議会会長・北海道大学総合博物館館長）
挨　　拶　久保庭真一（博物館協会専務理事）
特別講演「GBIFと日本の自然史系博物館：標本資料データベースから何が展望できるか」
　　松浦啓一（国立科学博物館標本資料センター）
一般講演「サイエンスミュージアムネットの現状と課題」
　　井上　透（国立科学博物館）
「新しい標本研究の道具：浮遊性有孔虫電子標本システム」
　　佐々木　理（東北大学）・岩下智洋（ホワイトラビット）
「コンテンツマネージメントシステム（XOOPS）を使った電子博物館サイト構築の試み」
　　吉田尚生（北海道大学総合博物館）
「北大総合博物館セミナー及び企画展示ホームページ自動更新システムのすべて」
　　荘子香織・小俣友輝（北海道大学総合博物館）
「大人向け体験学習プログラム「貝体新書」の開発」
　　大野照文（京都大学総合博物館）
「名古屋大学博物館における標本資料の管理－到達点と課題」
　　西川輝昭・西田佐知子（名古屋大学博物館）
「愛知教育博物館－私立の自然史博物館のさきがけ」
　　西川輝昭（名古屋大学博物館）
「次世代ミュージアムに係る研究－M3プロジェクト」
　　洪　恒夫・松本文夫（東京大学総合研究博物館）
「来館者調査－研究プロジェクトとしての取り組み」
　　阿部剛史・内田智子・小林快次・小俣友輝・庄子香織・湯浅万紀子
　　（北海道大学総合博物館）
「準分類学者（パラタクソノミスト）養成講座の成果と問題点」
　　山本ひとみ・大原昌宏（北海道大学総合博物館）
「ラオスにおけるトラベリング・ミュージアムの実践」
　　落合雪野（鹿児島大学総合研究博物館）・佐藤優香（国立歴史民俗博物館）
「自律型ボランティア組織の実践：みんぱくミュージアム・パートナーズの活動」
　　野林　厚志（国立民族学博物館）
「教職・学芸員希望の学生と連携した「地域子ども教室」の取組について」
　　宇田津徹朗・植松秀男（宮崎大学）
「地域に開かれた博物館を目指して」
　　江口太郎（大阪大学総合学術博物館）
「大学博物館と科学館の連携によるフィールドセミナーの試み：Ｉ．運営について」

東田和弘（名大博）・桂田祐介（名大博）・亀高正男（名大博）・西本昌司（名市科学館）・
中村壽男（名市科学館）・吉田英一（名大博）・足立守（名大博）・毛利勝廣（名市科学館）
「大学博物館と科学館の連携によるフィールドセミナーの試み：Ⅱ．実施について」
桂田祐介（名大博）・東田和弘（名大博）・亀高正男（名大博）・西本昌司（名市科学館）・
中村壽男（名市科学館）・吉田英一（名大博）・足立守（名大博）・毛利勝廣（名市科学館）
「岩手大学 OB を知ってもらうための展示―宮沢賢治企画点―」
岡田幸助・宮本　裕・竹原明秀・藤田公仁子（岩手大学ミュージアム）
「体感型の古地図展示―京都大学総合博物館企画展「地図出版の四百年」を例に―」
上杉和央（京都大学総合博物館）
「自然史の成果を伝える―京都大学総合博物館「動物地理学」企画展を例に―」
本川雅治（京都大学総合博物館）
「江戸時代に制作された木骨の比較研究」
片岡勝子（広島大学）・安嶋紀昭（広島大学）・馬場悠男（国立科学博物館）

館長会議

実務者会議

総　　会

資料ＩＥ③．専門分野の研究一覧

岩永省三（いわなが　しょうぞう）

Shozo　IWANAGA

一次資料研究系・教授

≪研究概要≫

日本の弥生時代から８世紀に至る社会を主要な研究対象とし、以下の諸問題を研究している。①弥生時代青銅器の形態・機能上の特質の形成要因。②階級社会及び古代国家の形成過程に関する諸理論。③日本における階級社会・古代国家の形成過程の具体像および東アジア他地域との比較。④日本古代都城制の成立・変容の過程とその特質の成因。⑤都城の国家的施設の構造や機能からみた王権の特質。⑥仏像彫刻・瓦塼類の様式変遷とその歴史的背景。

≪所属学会≫

日本考古学協会、九州考古学会、木簡学会

≪研究資金≫

科学研究費・基盤研究（C）（2006～2009 年度：代表）古墳時代の変容過程の研究

≪学外委員等≫

①．春日市文化財専門委員会委員

②．島根県古代文化センター客員研究員

≪海外渡航≫

2008.８.22－26．大韓民国、九州考古学会・嶺南考古学会合同学会

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①．岩永省三，2006．国家形成の東アジアモデル．東アジア古代国家論．すいれん舎，東京，87-119.

②．岩永省三，2006．大嘗宮の付属施設．喜谷美宣先生古希記念論集．喜谷美宣先生古希記念論集刊行会，大阪，343-355.

③．岩永省三，2007．いわゆる東夷社会における国家形成モデル．東アジアと日本：交流と変容総括ワークショップ報告書．九州大学，福岡，123-135.

④．岩永省三，2007．段台状仏塔の構造と系譜．史跡土塔―遺構編―，堺市教育委員会，760-84.

⑤．岩永省三，2008．内裏改作論．九州大学総合研究博物館研究報告，６号，81-105.

⑥．岩永省三，2008．日本における都城制の受容と変容．九州と東アジアの考古学―九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集―，上巻，469-493.

⑦．岩永省三，2009．老司式・鴻臚館式軒瓦出現の背景．九州大学総合研究博物館研究報告，７号，11-33.

＜報　　告＞

①．岩永省三，2006.07.16．日本古代都市の形成と変容．九州大学 21 世紀 COE プログラム『東アジアと日本：交流と変容』第一サブテーマワークショップ『古代東アジアにおけるアイデンティティの形成と変容』．

②．岩永省三，2006.11.08．東夷社会における国家形成モデル．九州大学 21 世紀 COE プログラム『東アジアと日本：交流と変容』総括ワークショップ『東アジア世界の形成と中華の変容』．

＜学会発表＞

①. 岩永省三，2008.12.13. 老司式Ⅰ式・鴻臚館Ⅰ式軒瓦出現の背景. 平成 20 年度九州史学会考古学部会，九州大学.

＜講 演 等＞

①. 岩永省三，2006. 8. 12. 荒神谷の銅剣について. 平成 18 年度荒神谷博物館特別講座（第５回）

②. 岩永省三，2007.11.11. 寺福堂銅戈と武器形青銅器祭祀. 小郡市平成 19 年度特別展記念講演会.

③. 岩永省三，2008. 5 .10. 平城宮の成立と変容. 下関市立考古博物館一般教養講座.

中牟田義博（なかむた　よしひろ）

Yoshihiro　NAKAMUTA

一次資料研究系・准教授

≪研究概要≫

微小試料のＸ線回折法，顕微ラマン分光分析，電子顕微鏡などを用い，隕石中の微小鉱物の性質から初期太陽系の進化過程やその中に含まれる鉱物の生成メカニズムを解明する研究を行っている。また，このような微小試料の解析技術を生かし，装飾古墳中の顔料の分析，無機材料の評価などについても他分野との共同研究を行っている．この微小試料のＸ線回折法は国立科学博物館にも移植し，博物館試料の評価に利用されている. 隕石中の微小鉱物を用いた研究では，現在，以下のような具体的テーマに関して同時並行的に研究を進めている。

①. ユレイライト隕石中のダイヤモンドの生成過程と生成条件

ユレイライト隕石中に含まれる微小炭素質鉱物のラマン分光分析を行うとともに，ガンドルフィカメラを用いた粉末Ｘ線回折パターンを得ることにより，その構造を精密に評価し，ダイヤモンドとそれに共生するグラファイトの性質から隕石中でのダイヤモンドの生成条件と生成過程を明らかにする。

②. カンラン石の格子歪みによるコンドライト隕石の衝撃変成度の定量的評価

惑星同士の衝突は，太陽系初期における惑星形成の主要な駆動力となっている。本研究は隕石中に含まれるカンラン石の格子歪みを微小試料Ｘ線回折法により精密に決定し，惑星の衝突により引き起こされた衝撃変成作用を定量的に評価する。

③. コンドライト隕石母天体の温度構造と形成過程

微小結晶のＸ線回折法をもとにした斜長石温度計により, コンドライト隕石の変成温度を推定し，初期太陽系におけるコンドライト隕石母天体の温度構造を明らかにし，その形成過程を検討している。

博物館関係資料の研究としては,

①. 装飾古墳中の緑色顔料の研究

東京文化財研究所の研究院と共同で，装飾古墳より得られた緑色顔料のＸ線分析を行い文化財としての古墳評価，古代の流通経路解明を行っている。

≪所属学会≫

日本鉱物科学会，日本結晶学会，アメリカ鉱物学会，隕石学会，放射光学会，日本粘土学会

≪研究資金≫

◎. 科学研究費・基盤研究（C）（2004～2006 年度：代表）

カンラン石の格子歪みによるコンドライト隕石の被衝撃圧の定量的評価

◎寄付金の受け入れ：

①. 無機結晶評価のための研究資金，西日本技術開発株式会社，400 千円(2006 年 12 月)

②. 無機結晶評価のための研究資金，応用地質株式会社，30 千円（2007 年 4 月）

③. 無機結晶評価のための研究資金，西日本技術開発株式会社，250 千円(2008 年 8 月)

≪学外委員等≫

①. 日本鉱物学会 編集委員， 1992 年9月～2000 年9月

②. 岩石鉱物科学 編集委員, 2000 年9月～現在

③. 日本鉱物学会 評議員， 2006 年9月～2009 年9月

④. 日本鉱物科学会 評議員，2007 年９月～2008 年９月 ，2009 年９月～2012 年９月

≪海外渡航≫

2006 年８月６日～12 日，スイス国チューリッヒ，国際隕石学会にて研究発表。

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①. 藤昇一・青木大空・中牟田義博，2005. 収束イオンビーム法を用いたＸ線単結晶試料の加工. 九州大学超高圧電顕室研究報告，No. 29，97-98.

②. 青木大空・藤昇一・中牟田義博，2005. Ｘ線回折実験を行った衝撃隕石の微細組織観察. 九州大学超高圧電顕室研究報告，No. 29，97-98.

③. 青木大空・藤昇一・中牟田義博，2006. コンドライト隕石中のかんらん石結晶の見かけ格子歪みと転移の関係. 九州大学超高圧電顕室研究報告，No. 30，113-114.

④. Y. Nakamuta, T. Nakamura and N. Nakamura, 2006. Structural state of plagioclase from the Kobe CK chondrites: implications for the thermal history of the CK parent body. Journal of mineralogical and petrological Sciences, Vol. 101, 308-318.

⑤. H. Mashima, J. Akai, Y. Nakamuta, S. Matsubara 2008. Orthorhombic polymorph of rengeite from Ohmi region, central Japan. *American Mineralogist*, Vol. 93, 1153-1157.

＜学会発表＞

①. Y. Nakamuta, Y., Owaki, R. and Takeda, H., 2005. Plagioclase thermometry of Caddo County IAB iron meteorite. NIPR, Tokyo.

②. 中牟田義博，2005. 隕石中に lonsdaleite は存在するか？日本鉱物学会 2005 年度年会，愛媛.

③. 青木大空，藤昇一，中牟田義博，2005. Ｘ線単結晶試料のＦＩＢ加工. 日本鉱物学会 2005 年度年会，愛媛.

④. 大脇亮一，中牟田義博，武田弘，2005. Caddo County IAB 鉄隕石中の斜長石の生成温度と組織. 日本鉱物学会 2005 年度年会.

⑤. Y. Nakamuta, S. Yamada and K. Yoshida, 2006. Estimation of shock pressure experienced by each ordinary chondrite with an X-ray diffraction method. 69th Annual Meeting of the Meteoritical Society, Zurich.

⑥. Y. Nakamuta, 2006. Lonsdaleite, doubt on the existence in meteorites. 19th general Meeting of the International Mineralogical Association, Kobe.

⑦. Y. Nakamuta and S. Uehara, 2006. Ko collection of minerals and the Kyushu University Museum, Japan. 19th general Meeting of the International Mineralogical Association, Kobe.

⑧. Y. Nakamuta, 2006. Raman spectra of carbon minerals in Antarctic ureilites. The 30th Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.

⑨ T. Aoki, S. Toh and Y. Nakamuta, 2006. TEM observation of olivine crystals in chondrites

focused on dislocation density in relation to apparent strain of a lattice. 19th General Meeting of the International mineralogical Association, Kobe.

⑩. C. Nishizaki and Y. Nakamuta, 2006. Mineralogical properties of Sahara98222 L6 chondrite: Implications for the thermal history. 19th General Meeting of the International mineralogical Association, Kobe.

⑪. T. Aoki and Y. Nakamuta, 2006. The difference of apparent strain of olivine crystals between clastic and nonclastic parts of Naryilco LL6 chondrite. The 30th symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.

⑫. Y. Nakamuta, 2007. Carbon minerals in the highly shocked Goalpara ureilite. The 31st Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.

⑬. 中牟田義博　2007. Formation mechanism of diamonds in the Goalpara ureilite. 日本鉱物科学会 2007 年度年会，東京大学.

⑭ T. Aoki, Y. Nakamuta, and S. Toh 2007. Dislocation densities of olivine crystals structurally strained in variable degrees from a shocked chondrite. The 31st symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.

⑮. 青木大空・中牟田義博 2007. Naryilco L/LL6 コンドライトの分類の検討. 日本鉱物科学会 2007 年度年会，東京大学.

⑯. 堂込大介・中牟田義博 2007. NWA2129 CK3/4 コンドライト中の斜長石の化学組成分布と結晶化温度の推定. 日本鉱物科学会 2007 年度年会，東京大学.

⑰. Y. Nakamuta 2008. In situ observation of diamond in ureilites by Raman spectroscopy. 71th Annual Meeting of the Meteoritical Society, 島根県松江市.

⑱. T. Aoki, Y. Nakamuta, S. Toh, T. Nakamura 2008. TEM observations of synthesized forsterite crystals after shock experiments. 71th Annual Meeting of the Meteoritical Society, 島根県松江市.

⑲. 中牟田義博 2008. 強い衝撃作用を受けた Goalpara ユレイライト隕石中のダイヤモンドの結晶構造. 日本鉱物科学会 2008 年度年会, 秋田大学　手形キャンパス.

⑳. 青木大空，中牟田義博，中村智樹，藤昇一 2008. 衝撃回収フォルステライトの TEM 観察：とくに転位密度の圧力依存性について. 日本鉱物科学会 2008 年度年会, 秋田大学 手形キャンパス.

㉑. 関涼子，中牟田義博，武田弘 2008. TS072 ureilite 隕石中のダイヤモンドの産状と性質.日本鉱物科学会 2008 年度年会，秋田大学　手形キャンパス.

㉒. 中牟田義博，藤昇一，青木大空　2009. TEM観察によるユレイライト隕石中ダイヤモンドのグラファイトからの転移メカニズムの解明. 日本鉱物科学会 2009 年度年会，北海道大学.

㉓. Y. Nakamuta and D. Dogomi 2009. Estimation of metamorphic temperature of NWA 2129 CK-chondrite: Implications for the formation process. The 32nd symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.

松隈明彦（まつくま　あきひこ）

Akihiko　MATSUKUMA
分析技術開発系・教授

≪研究概要≫

①. 二枚貝綱の分類学的研究

インド-西太平洋海域における Glycymerididae, Psammobiidae, Tellinidae, Chamidae, Veneridae 各科の種多様性とその起源、種分化のメカニズムを硬質部の形態形質と生物地理、お

よび分子生物学的情報から検討する。

②. 西太平洋新生代二枚貝相の形成過程に関する研究
日本産新生代二枚貝相の現生・化石生物地理学的研究から日本周辺海産二枚貝相の形成過程を明らかにする。

③. 逆転現象に基づく種分化の研究
螺旋卵割の方向の逆転は正常個体と各器官の配置が鏡対称の逆転個体を作り出す。正常個体と逆転個体間に生殖的隔離が働く場合、逆転による種分化が予想される。Mytilidae, Chamidae を用いた新しい分類群の形成過程の研究を行う。

④. 日本産陸産貝類相の起源と移動に関する研究
福岡県の陸産貝類相を記載し、その成立の過程を考察するとともに、環境の保全に基礎的データを提供する。

⑤. 外来性貝類相の起源に関する研究
近年我が国に侵入した陸産貝類、特に *Rumina decollata*、の原産地国の推定、侵入方法、国内での拡散方法とスピード、生殖様式と侵入について植物検疫統計と分子生物学的情報から検討する。

≪所属学会≫

日本貝類学会(副会長, 2001.1～), 日本古生物学会, Western Society of Malacologists（アメリカ）

≪学外委員等≫

①. 日本貝類学会副会長（2005-2006, 2007-2008, 2009-2010 年度）

②. 西宮市貝類館顧問、2007.4.1-2008.3.31, 2008.4.1-2009.3.31, 2009.4.1-2010.3.31

③. 西宮市貝類館運営委員、2006.11.1-2007.5.31, 2007.6.1-2008.10.31, 2008.11.1-2009.5.31, 2009.6.1-2009.10.31, 2009.11.1-2010.5.31

④. 福岡県希少野生生物保護検討会議委員、 2007.9.10-

≪海外渡航≫

①. 2005.7.23-7.26, 韓国江原道春川市ほか, 陸産貝類相の調査.

②. 2005.11.24-12.24, 文部科学省学芸員等在外研修, Museum National d’Histoire Naturelle, Paris.

③. 2006.7.20～7.27, 国際二枚貝集会, バルセロナ自由大学.

④.2009.３.８. －12.
Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia
JSPS-NaGISA Bivalve Taxonomy Training Workshop, （二枚貝分類ワークショップの講師として出張）

⑤. 2009.11.15-11.22、中国海洋大学、中国科学院海洋研究所、青島

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①. Hamada, N. & Matsukuma, A., 2005. A new species of Japanese Chama (Bivalvia: Chamoidea), with a calcitic outermost layer. Venus (Japan. Jour. Moll.), 64(1-2): 11-21.

②. 亀山宗彦・下山正一・宮部俊輔・宮田雄一郎・杉山哲男・岩野英樹・檀原徹・遠藤邦彦・松隈明彦, 2005. 姶良カルデラ堆積物の層序と年代について–鹿児島県新島（燃島）に基づく研究–. 第四紀研究 44(1): 15-29.

③. Matsukuma, A., 2006. Species of *Exotica* (Bivalvia: Tellinidae) from New Caledonia. Organisms Diversity and Evolution, 6, Electric Supplement, 16, part 1: 56.

④. 松隈明彦・秋月定良・秋月シズカ・嶺井久勝, 2006. 偶発的移入種オオクビキレガイ（腹足綱：オカクチキレガイ科）の福岡県での生息状況とその拡散速度. ちりぼたん 37(1): 7-12.

⑤. 高田大輔・松隈明彦, 2007. 日本産ヤマボタルガイの分子生物地理. 日本貝類学会平成 19 年度大会研究発表要旨集, 27.

⑥. 松隈明彦・武田悟史, 2009. 外来種オオクビキレガイ（軟体動物門腹足綱）の日本での分布状

況と移動方法、付録―農林水産省植物防疫所植物検疫統計―輸入植物検査病菌・害虫発見記録(1997-2007)の軟体動物.九州大学総合研究博物館研究報告, no. 7, 35-84.

＜著　書＞

①.　松隈明彦, 2005.　二丈町誌, 第１章, 自然, 3-31, 53-86, 118-124.

②. 松隈明彦, 2009. 魚介類（貝類), 生態系の保全. 志摩町史自然編, 47－53, 62－66, 74.

＜報　　告＞

①. Kajiwara, T. & Matsukuma, A., 2005.　Molluscan specimens of Kyushu University, Japan. 1.　Cenozoic molluscan fossils collected by Professor Emeritus Tsugio Shuto.　Bulletin of the Kyushu University Museum, no. 3: 107-206.

＜学会発表＞

①. 松隈明彦, 2006.6.23. 九大博の社会連携活動-コミュニケーションミュージアム事業. 第１回博物科学会, 北海道大学.

②. Matsukuma, A., 2006. Species of *Exotica* (Bivalvia: Tellinidae) from New Caledonia, International Congress of Bivalvia, Universidad Autonoma de Barcelona.

③. 松隈明彦・武田悟史, 2007.4.21. オオクビキレガイの日本への侵入と拡散. 日本貝類学会平成１９年度大会, 豊橋市自然史博物館.

④. 高田大輔・松隈明彦・三島美佐子, 2007.4.22. 日本産ヤマボタルガイの分子生物地理. 日本貝類学会平成１９年度大会, 豊橋市自然史博物館.

⑤. 松隈明彦, 2008.4.12. 植物検疫統計(1997-2006)の外来性貝類. 日本貝類学会年会創立 80 周年記念大会, 東京家政学院.

⑥. 氏野優・松隈明彦, 2008. 内生二枚貝の生息姿勢とその行動. 日本貝類学会 2008 年度年会, 東京家政学院.

⑦. 堀雅史・松隈明彦, 2008. 日本産キクザルガイ科二枚貝の分類学的再検討. 日本貝類学会 2008 年度年会, 東京家政学院.

⑧. 松隈明彦, 2008.6.5. 松本達郎名誉教授寄贈の地質学・古生物学関係文献. 第３回博物科学会, 大阪大学（豊中キャンパス).

⑨. 氏野優・松隈明彦, 2009.1.31. ニッコウガイ上科（Tellinoidea）二枚貝における生息姿勢の多様性とその進化生物学的意味. 日本古生物学会第 158 回例会, 琉球大学・沖縄県立博物館美術館.

⑩. 江口泰教･松隈明彦･氏野優, 2010.1.30. 鹿児島県獅子島東部における二枚貝貝化石群集を用いた堆積環境の復元、日本古生物学会、第 159 回例会、滋賀県立琵琶湖博物館

⑪. 氏野優・松隈明彦, 2010.1.31. 殻形態に基づくニッコウガイ上科の生息姿勢の推定、日本古生物学会、第 159 回例会、滋賀県立琵琶湖博物館.

＜講 演 等＞

①. 松隈明彦, 2006.2.2. 私の国際交流. 前原市国際交流協会, 前原市役所.

②. 松隈明彦, 2006.6.19. 福岡県のオオクビキレガイ. 西宮市貝類館.

③. 松隈明彦, 2006.6.19. 福岡県糸島郡の陸産貝類相. 西宮市貝類館.

④. 松隈明彦, 2006.10.14.大学博物館は何を目指すか. 九州大学理学部同窓会, 博多都ホテル.

⑤. 松隈明彦, 2007.2.17.貝類から見た糸島の自然. 九大・糸島会地域資源再発見塾, 志摩町.

⑥. 松隈明彦, 2007.5.19. 大学博物館はどこへ行くか. 東京能古会, 池袋簡保センター.

⑦. 松隈明彦, 2007.9.8. 貝類から見た糸島の自然. 志摩町町民大学, 志摩町総合保健福祉センター.

⑧. 松隈明彦, 2007.9.15. 糸島の自然と貝類. 阪神貝類談話会９月例会, 西宮浜公民館.

⑨. 松隈明彦，2007.10.13．地球温暖化と貝の外来種．東京電力科学ゼミナール，電力館（渋谷）.
⑩. 松隈明彦，2007.11.18．貝の学名の語源と性．阪神貝類談話会 11 月例会，西宮浜公民館.
⑪. 松隈明彦，2008.10.7-8．地球温暖化と貝の外来種．放送大学面接講義，放送大学福岡校.
⑫. 松隈明彦，2008.7.20．市場で見られるパキスタン産マルスダレガイ科二枚貝．阪神貝類談話会７月例会，西宮浜公民館.
⑬. 松隈明彦，2008.10.19．ウロコガイ超科の微小種．阪神貝類談話会 10 月例会，西宮浜公民館.
⑭. 松隈明彦，2008.12.21．オオクビキレガイは１種か２種か．阪神貝類談話会 12 月例会，西宮浜公民館.
⑮. 松隈明彦，2009.11.18．最近日本に侵入した外来貝類、中国海洋大学・海洋大学交流中心.
⑯. 松隈明彦，2009.11.28．糸島の自然、講演会「糸島を知ろう！～前原・志摩・二丈の魅力～、前原市図書館・伊都文化会館
⑰. 松隈明彦，2010.1.31．最近糸島地域に入ってきた貝の外来種，松隈農地環境整備組合環境保全講演会，糸島市志摩松隈公民館
⑱. 松隈明彦，2010.3.1．最近日本に侵入した外来の陸貝オオクビキレガイ、山口県下関市立豊田ホタルの里ミュージアム

＜新聞記事＞

①. 松隈明彦，2008.6.20．マンション計画地に希少貝．読売新聞夕刊.

中西哲也（なかにし　てつや）

Tetsuya　NAKANISHI

分析技術開発系・准教授

≪研究概要≫

日本の鉱山技術史を、科学的データをもとに体系化するために、国内各地の主要鉱山について現地調査や、鉱石および製錬滓の採取／分析を行ない、科学分析の結果を基に当時の製錬技術や採掘の対象となった鉱石について検証を試みている。また、江戸時代の銀貨である一分銀について、蛍光Ｘ線分析による非破壊定量分析を試み、分析法の確立と分析データの評価法について研究を進めている。

奈良の大仏に銅を供給したといわれる山口県長登銅山では、銅の生産が酸化銅鉱を原料とした製錬である事を明らかにし、銅製錬再現実験の学術的なサポートを行っている。研究成果の一部は平成 21 年 4 月に竣工する長登銅山文化交流館の展示に反映されている。

この他、福岡県香春銅山、鹿児島県国分銅山、宮崎県見立鉱山、槙峰銅山、島根県石見銀山、兵庫県生野銀山、明延鉱山、宮城県鹿折金山、涌谷町（砂金）などで現地調査を行い、鉱山資料の所在調査や、試料採取を行った。

≪所属学会≫

資源地質学会，資源・素材学会，日本鉱業史研究会

≪研究資金≫

①. 科学研究費・特定領域研究(A)「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査研究」，計画研究（2002-2005 年度　代表）「日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成」
②. P&P（2007～2008 年度：分担）九州大学博物館展示を利用した実践的研究～アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもの間の関わりを促すツール開発～

≪海外渡航≫

①. 2005.9.4-20, スウェーデン・ドイツ・スロバキア, 鉱山の調査.
②. 2006.9.15-9.29, 中国北京, BUMA-VI参加. 江西省・安徽省・湖北省, 鉱山・鉱山関連遺跡の巡検.
③. 2009.9.-10., インド, National Institute of Advanced Studies に参加.
④. 2009.9.-10.,中国, 四川省文物考古研究院, 遺跡調査.

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①. 吉川竜太・本村慶信・中西哲也・井澤英二, 2005. 古代長登銅山の製錬滓の研究. 日本鉱業史研究, No. 50, 27-40.
②. T. Nakanishi, R. Yoshikawa, Y. Motomura and E. Izawa, 2006. Characteristics of Ores and Slags from the Iwami-Ginzan Silver Mine Site. *The 6th International Conference on the Beginnings of the Use of Metals and Alloys*, 49-50.
③. R. Yoshikawa, Y. Motomura, T. Nakanishi and E. Izawa, 2006. Smelting of Oxidized Copper Ore -Ore and Slag from the Naganobori Mine in the Early 8th Century. *The 6th International Conference on the Beginnings of the Use of Metals and Alloys*, 26-27.
④. 中西哲也・井澤英二, 2006. 山梨県丹波山金山遺跡の鉱石探索. 資源・素材学会 2006 年秋季大会講演集.
⑤. 吉川竜太・本村慶信・中西哲也・井澤英二, 2006. 大分県木浦鉱山天神原地区のゆりかすと千人間歩地区のスラグ, 日本鉱業史研究, No. 51, 5-16.
⑥. 中西哲也, 2007. 江戸期鉱業の器物資料ー所在と保存の現状ー. 資源・素材学会 2007 年春期大会講演集, 121-124.
⑦. 井澤英二・中西哲也, 2007. 中国揚子江流域の古代銅鉱山遺跡を訪ねて. 資源・素材学会 2007 年春期大会講演集, 129-132.
⑧. 井澤英二・吉川竜太・本村慶信・中西哲也, 2007. 石見銀山の高品位鉱石の特徴と製錬, 本鉱業史研究, No. 53, 36-55.
⑨. 中西哲也, 2007. 江戸時代の鉱山に関するモノ資料の所在. 日本鉱業史研究, No.54, 68-73.
⑩. 中西哲也, 2007. 日本の前近代の鉱山と関連資料. 考古学ジャーナル, 562 号, 40-41.
⑪. 中西哲也, 2007. 鉱山古文書に見る山師の探査技術. 資源・素材学会 2007 年秋期大会講演集, 197-198.
⑫. 中西哲也, 2008. 鹿児島県国分銅山の製錬滓についての予察的研究. 資源・素材学会 2008 年春期大会講演集, 97-98.
⑬. 大石徹・鳥越俊行・中西哲也・大串融, 2008. 石見銀山の福石鉱床について（その 1). 日本鉱業史研究, No.56, 45-64.
⑭. 中西哲也, 2008. 蛍光 X 線分析による古銭の定量分析. 資源・素材学会 2008 年秋期大会講演集, 127-128.
⑮. 中西哲也, 2009. 宮崎県日之影町見立鉱山の旧採掘跡について. 資源・素材学会 2009 年春季大会講演集, 95-96.
⑯. 中西哲也, 2009. 蛍光 X 線分析による古銭の非破壊分析―現状と課題―. 資源・素材学会 2009 年秋季大会講演集.
⑰. Tetsuya Nakanishi,2006.Variations of the chemical composition of Japanese early modern

silver coin “Ichibu-gin”,*The 7th International Conference on the Beginnings of the Use of Metals and Alloys*,49.

⑱. 井澤英二・中西哲也・本村慶信，2009．酸化銅鉱製錬で生成する砒素銅と鉄塊―古代銅精錬復元実験の産物―．日本鉱業史研究.

⑲. 中西哲也，2009．呷拉宗遺跡製鉄遺構の理化学的分析．国際ワークショップ『東アジア青銅器・初期鉄器時代の諸問題』.

⑳. 中西哲也，2010．愛媛県佐多岬半島の製錬滓について．資源・素材学会 2010 年春季大会講演集.

＜学会発表＞

①. 中西哲也・井澤英二，2006．江戸時代の鉱山技術資料の調査．第8回江戸のモノづくり国際シンポジウム「近世科学技術のDNAと現代ハイテクにおける我が国科学技術アイデンティティーの確立」.

②. 井澤英二・中西哲也，2006．南蛮吹の伝播と普及～ヨーロッパの銅精錬技術の影響～．第8回江戸のモノづくり国際シンポジウム「近世科学技術のDNAと現代ハイテクにおける我が国科学技術アイデンティティーの確立」.

③. T. NAKANISHI, R. YOSHIKAWA, Y. MOTOMURA and E. IZAWA, 2006. Characteristics of ores and slags from the Iwami-Ginzan silver mine site. The 6th International Conference on the Beginning of the Use of Metals and Alloys (BUMA-VI).

④. 中西哲也・井澤英二，2006．山梨県丹波山金山遺跡の鉱石探索．資源・素材学会

⑤. 吉川竜太・本村慶信・中西哲也・井澤英二，2006．石見銀山の鉱石の特徴と製錬．資源・素材学会

⑥. 中西哲也・吉川竜太・井澤英二，2006．鉱山技術史への鉱床学の貢献 - 新しい鉱山技術史を目指して - ．資源地質学会

⑦. 中西哲也，2007．江戸期鉱業の器物資料－所在と保存の現状－．資源・素材学会2007年春期大会.

⑧. 中西哲也，2007．鉱山古文書に見る山師の探鉱技術．資源・素材学会.

⑨. 中西哲也，2008．鹿児島県国分銅山の製錬滓についての予察的研究．資源・素材学会.

⑩. 中西哲也，2008．蛍光 X 線分析による古銭の定量分析．資源・素材学会.

⑪. 中西哲也，2009．宮崎県日之影町見立鉱山の旧採掘跡について．資源・素材学会.

⑫. 中西哲也，2009．蛍光 X 線分析による古銭の非破壊分析―現状と課題―．資源・素材学会.

⑬. 中西哲也，2009. Variations of the chemical composition of Japanese early modern silver coin “Ichibu-gin”, The seventh International Conference on the Beginnings of the Use of Metals and Alloys (BUMA-VII).

⑭. 中西哲也，2009．呷拉宗遺跡製鉄遺構の理化学的分析．国際ワークショップ「東アジア青銅器・初期鉄器時代の諸問題」.

宮崎克則（みやざき　かつのり）

Katsunori　MIYAZAKI

開示研究系・准教授

≪研究概要≫

文献史料・口頭伝説・記念碑などを利用し、近世日本の民衆文化論を研究する。最近はシーボルト「NIPPON」の書誌学的研究を行っている。また、画像データの管理システムの開発とともに、学術資料の目録データの横断検索システムを開発し運用している。

≪所属学会≫

洋学史学会，日本史研究会，九州史学研究会

≪研究資金≫

①．平成 18 年度三菱財団助成，シーボルト『NIPPON』の書誌学的検討とその歴史的意義.

②．科学研究費・基盤研究（C）（2008～2010 年度：代表）「シーボルトが集めた『博物』資料のデジタル再構築」

≪学外委員等≫

①．人間文化研究機構国文学研究資料館共同研究員．2006 年 5 月 24 日～2007 年 3 月 31 日

②．福岡市史編纂委員

③．佐賀県東松浦郡玄海町文化財保護委員

≪海外渡航≫

①．2005 年 7 月 3 日～5 日　韓国の倭城調査（永登浦城，松真浦城，長門浦城，熊川城，晋州城）.

②．2005 年 9 月 4 日～20 日　ヨーロッパの主要な銀山・銅山と製錬技術の調査 (スウェーデン・ファールン鉱山，ドイツ・フライベルク鉱山，スロバキア・バンスカスティアビニツカ鉱山).

③．2006 年 12 月 2 日～22 日　ドイツのシーボルト・コレクション調査 (ボフム大学・ブランデンシュタイン城博物館，ミュンヘン国立民族学博物館).

④．2007 年８月 29 日～９月 30 日
スイス・チューリッヒ大学，ドイツ・ボフム大学，オランダ・ライデン大学
ヨーロッパのシーボルト・コレクション調査－スイス・ドイツ・オランダ－

⑤．2008 年８月 30 日～10 月６日
ドイツ・ボフム大学，オランダ・ライデン大学，フランス・パリ国立図書館
ヨーロッパのシーボルト・コレクション調査－ドイツ・オランダ・フランス－

⑥．2008 年 12 月２日～12 月 12 日
ロシア・サンクトペテルブルグ　クンストカーメラ（国立民族学博物館）
ロシアにある江戸時代の日本風俗画の調査

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①．K. Miyazaki, 2005. Characteristic of popular movements in nineteenth-century Japan:Riots during the second Choshu-War. JAPAN FORUM, The British Association for Japanese Studies, No. 17-1.

②．宮崎克則, 2006. シーボルト『NIPPON』の山々と谷文晁『名山図譜』. 九州大学総合研究博物館研究報告, 4 号.

③．宮崎克則, 2007. シーボルト『NIPPON』の色つき図版. 九州大学総合研究博物館研究報告, 5 号.

④．宮崎克則, 2007. 九大附属図書館にある天和２年「御国絵図」の来歴について. 市史研究ふくおか, 2 号，福岡市博物館市史編纂室.

⑤．宮崎克則，2008. シーボルト『NIPPON』のフランス語版. 九州大学総合研究博物館研究報告，6 号，1－32.

⑥．宮崎克則，2009. シーボルト『NIPPON』の捕鯨図. 九州大学総合研究博物館研究報告，7 号，85－103.

＜著　　書＞

①．宮崎克則, 2005．古地図の中の福岡・博多．海鳥社.

②．宮崎克則，2009．九州の一揆・打ちこわし．海鳥社，１－372.

＜学会発表＞

①．宮崎克則，2009.3.28-29．シーボルト「NIPPON」のロシア語版．洋学史学会・実業史研究会合同京都大会，京都大学.

＜講 演 等＞

①．宮崎克則, 2005/11/15．九州大学デジタル・アーカイブの構築について．公開シンポジウム「大学ミュージアム・アーカイブズを考える」，駿河台大学「大学ミュージアム・アーカイブズを考える」実行委員会, 駿河台大学, 埼玉県.

②．宮崎克則, 2006/2/18．逃げる百姓　追う大名．豊前市人権推進委員会, 豊前市隣保館, 福岡県.

③.宮崎克則, 2006/3/3．復元　シーボルト日本の配本．国際シンポジウム「日独シーボルト・シンポジウム」，ドイツ大使館・日独文化交流会，ドイツ大使館，東京都.

④．宮崎克則, 2006/5/11．古地図の中の福岡・博多．九州大学開学記念式典講演会，九州大学・財団法人九州大学講演会，九州大学５０周年記念講堂.

⑤．宮崎克則, 2006/11/12．江戸時代にタイムスリップ－古地図の中の福岡・博多－．福岡県立図書館読書週間事業，福岡県立図書館.

⑥．宮崎克則，2006/11/19．九州大学のシーボルト・コレクション．平成１８年度福史連地区研究集会，福岡県地方史研究連絡協議会，九州大学５０周年記念講堂.

⑦．宮崎克則，2007.7.14-15．シーボルトが描いた日本の捕鯨．立教大学日本学研究所主催　国際シンポジウム－捕鯨を通してみる世界Ⅲ－，立教大学（東京）.

⑧．宮崎克則，2007.11.14．古地図で歩く福岡・博多．福岡県立図書館読書週間事業　郷土史講座，福岡県立図書館

小島 弘昭（こじま ひろあき）

Hiroaki　KOJIMA

開示研究系・助教（～2006 年度）

≪研究概要≫

生物界で最大の分類単位といわれるゾウムシ科を含むゾウムシ上科を材料に，分類をベースとした総合的自然史研究を行っている。現在知られているだけでも６万種，推定種数は少なく見積もって 20 万種以上ともいわれる膨大な種数を含むゾウムシ類についてイギリス，ドイツ，カナダ，アメリカ，オーストラリアなど世界各地の研究者と連携し，世界のゾウムシ相を解明しようという 21 世紀の多様性生物学，あるいは分類学最大のチャレンジテーマに取り組んでいる。私の担当は，主にアジアー太平洋地域であるが，高次レベルでの関係を調べる際などは世界的視野に立った材料の検討も行っている。また，ゾウムシ類は植食性の甲虫で，植物と密接に関係しながら進化してきたグループで，ゾウムシー植物の相互関係にも深い関心を持ちつつ研究を進めている。

アジア地域の材料を主に研究していることと，大きな分類群を扱っていることから日華系生物群の起源や林冠昆虫相の多様性にも興味を持っており，とくに林冠研究については昆虫相解明に向けたプロジェクトを近年スタートさせた。

大学博物館では情報関連の研究系に所属しており，研究のサブワークとしてデータベース化などにも取り組んでいる。また，これまでの分類学の成果は特定の研究者以外には使いづらいという話

も聞かれるので，近年の情報関係の技術を導入し，誰にでも使い易い分類学的業績の出版形態なども模索中である。

≪所属学会≫

日本昆虫学会，日本鞘翅学会，アメリカ甲虫学会

≪研究資金≫

①. 科学研究費・若手研究(B)（2004～2006 年度　代表）　国内における林冠昆虫研究の展開：植食性甲虫の多様性と寄主特異性

②. 科学研究費・基盤研究(A)（2005～2007 年度　分担）　熱帯アジアにおける昆虫インベントリーと国際ネットワークの拡大

③. 科学研究費・基盤研究(B)（2006～2008 年度　分担）　ゴンドワナ起源の陸塊に隔離分布する食材性昆虫類の分子に基づく系統生物地理学的研究

④. 科学研究費・基盤研究(A)（2006～2008 年度　分担）　アジア産農林害虫・有用昆虫の種情報の体系化・ネットワーク化と分散検索システム

≪学外委員等≫

①. 日本昆虫学会庶務幹事，2005・2006 年度

②. 日本鞘翅学会非常任幹事，2003 年～

③. 日本ゾウムシ情報ネットワーク幹事，2002 年～

④. 昆虫分類学若手懇談会幹事，2004～2005 年

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①. H. Kojima and Idris A.G., 2005. *Cotasteromorphus*, a new genus of Cotasteromimina (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae, Pissodini) from the Malaysian moss forests. Elytra, 33: 134-141.

②. Morimoto, K. & H. Kojima, 2005. Three additional species of Brentidae to the fauna of Japan (Coleoptera, Curculionoidea). Elytra, 33: 126-133.

③. H. Kojima and K. Morimoto, 2005. Weevils of the tribe Acalyptini (Coleoptera: Curculionidae: Curculioninae): redefinition and a taxonomic treatment of Japanese, Korean and Taiwanese species. Esakia, (45): 69-115.

④. 小島弘昭・関東準之助・福澤卓也，2005. イリオモテシギゾウムシはブナ科利用か？　甲虫ニュース，(152): 4.

⑤. 小島弘昭，2005. イボイボアナアキゾウムシ九州に産する. 甲虫ニュース，(152): 7-8.

⑥. 小島弘昭・的場　績，2005. コバンモチから得られたツブゾウムシ属の 2 種. 甲虫ニュース，(152): 8.

⑦. 小島弘昭，的場　績，関東準之助，2005. アトキリノミゾウムシの分布ならびに成虫の採集記録. 甲虫ニュース，(152): 12.

⑧. 小島弘昭，2005. ヒラシマシギゾウムシの分布および成虫の採集記録. 甲虫ニュース，(152): 22.

⑨. H. Kojima and K. Morimoto, 2007. The tribes Ottistirini and Viticiini (Coleoptera, Curculionidae) from the Islands of Lanhsu, Taiwan. Elytra, 35: 238-245.

⑩. K. Morimoto and H. Kojima, 2007. Taxonomic notes on the tribe Mecysolobini (Coleoptera, Curculionidae), with descriptions of three new taxa from Japan. Elytra, 35: 226-237.

⑪. H. Kojima, 2006. Association of Viticiini (Coleoptera: Curculionidae: Cyclominae) with *Ficus* (Moraceae). Coleopterists Bulletin, 60: 42.

⑫. K. Morimoto and H. Kojima, 2006. Larvae of Desmidophorus crassus and the systematic position of the Desmidophorini (Coleoptera: Curculionoidea). Esakia, (46): 89-100.

⑬. 小島弘昭, 2006. シギゾウムシ2種の分布記録と寄主植物の推定. 甲虫ニュース, (156): 13.

⑭. 小島弘昭, 2006. ヒダカノミゾウムシの分布および成虫採集記録. 甲虫ニュース, (156): 30.

⑮. 小島弘昭, 2006. ヤシ類の花に群がるゾウムシ. 昆虫分類学若手懇談会ニュース, (83): 5-21.

⑯. 小島弘昭, 2006. クリシギゾウムシのウラジロガシからの採集記録. 甲虫ニュース, (153): 28.

⑰. 小島弘昭, 2006. アジアの昆虫地理概説. 昆虫と自然, 41 (3): 16-20.

⑱. 小島弘昭, 2006. 特異な吻と産卵習性. 昆虫と自然, 41(6): 11-17.

＜著　書＞

①. 小島弘昭, 2006. 東南アジアのゾウムシ　起源と多様性, 植物との関わり. 緒方一夫ほか編著「昆虫たちのアジア」, 九州大学出版会.

②. 小島弘昭, 2006. 単子葉植物に適応したオサゾウムシ. 丸山宗利編著「森と水辺の甲虫誌」, 東海大学出版会.

③. K. Morimoto, H. Kojima and S. Miyakawa, 2006. The Insects of Japan 3. Curculionoidea: General Introduction and Curculionidae: Entiminae (Part 1). Phyllobiini, Polydrusini and Cyphicerini (Coleoptera). 406pp. 日本昆虫学会編, 櫂歌書房.

＜報　告＞

①. 小島弘昭, 2006. ハイビスカスの危機！　九州大学総合研究 博物館ニュース, (6): 2-3.

②. H. Kojima, 2005. An inventory of the tropical Asian weevils, with special reference to the Malesian fauna (Coleoptera: Curculionoidea). Report on Insect Inventory Project in Tropic Asia (TAIIV): 249-287.

③. 小島弘昭, 2005. 輸入家具から羽化した外国産タマムシ. 九州大学総合研究博物館ニュース, (5): 2-3.

＜学会発表＞

①. 小島弘昭・金城政勝, 2006. ハイビスカスが枯れる！ハスオビコブゾウムシによる被害の現状. 第66回日本昆虫学会大会, 鹿児島大学.

②. 小島弘昭・Idris A.G., 2005. ヤシ類の訪花性甲虫ゾウムシ類を中心とした熱帯アジアでの多様性. 第65回日本昆虫学会大会, 岡山大学.

③. 小島弘昭, 2005. ゾウムシ類の進化　口吻の獲得と寄主植物との共進化. 第 65 回日本昆虫学会大会, 岡山大学.

④. 小島弘昭・今坂正一, 2005. 国内の林冠甲虫相 (1) ーフォギング法による九州中間温帯林での調査結果ー. 日本鞘翅学会第18回大会, 倉敷市立自然史博物館.

三島美佐子（みしま　みさこ）

Misako　MISHIMA

開示研究系・助教

≪研究概要≫

①. ゴール形状多様化の機構解明

ゴールの形状は非常に多様化しており、そのような形状がどのように決定・形成され、また進化

してきたのかを明らかにしようとしている。

②. 植物の倍数性進化と種分化

バラ科キイチゴ属、ワレモコウ属、イラクサ科サンショウソウ属などを用い、交雑や倍数化を伴う種分化研究と生物地理学的研究を行っている。

③. 大学博物館のあり方に関する研究：アウトリーチ、科学コミュニケーション、展示評価、バックヤード、感性などをキーワードとして、観察と実践調査に基づき、大学博物館のあり方と、博物館における「感性」のあり方を探る。

≪所属学会≫

日本進化学会，日本植物学会，日本植物分類学会，（財）染色体学会，種生物学会，植物地理分類学，日本植生史学会，日本昆虫学会

≪研究資金≫

〈学外資金〉

①. 平成 18 年度財団法人九州大学後援会教員の研究プロジェクト助成事業（2006 年度：代表）「虫えい形状の進化～寄主植物の種分化と地理的変遷からのアプローチ～」

②. 財団法人平和中島財団 2007（平成 19 年度）アジア地域重点学術研究助成（2007 年度：代表）「日本と中国に共通するタマバエ類とその種分化」

〈学内資金〉

①. 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（2003-2006 年度：分担）「生物多様性の保全と進化に関する研究拠点形成（代表：矢原徹一）」

②. 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（2007-2008 年度：代表）「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」

≪学外委員等≫

①. 日本植物分類学会ニュースレター 編集幹事，2005 年 1 月～2006 年 12 月

②. 種生物学会和文誌 編集委員，1998 年 4 月～2006 年 12 月

≪海外渡航≫

①. 2006 年 3 月 4 日～6 日　大韓民国，済州島.

≪研究業績≫

＜原著論文＞

①. M. Mishima and J. Yukawa, 2007. Dimorphism of leaf galls induced by *Pseudasphondylia neolitseae* (Diptera: Cecidomyiidae) on *Neolitsea sericea* (Lauraceae) and their distributional patterns in Kyushu, Japan. Bulletin of the Kyushu University Museum, 5, 57-64.

②. S.Sato, T.Ganaha, J.Yukawa, Y.Liu, J-C.Paik, N.Uechi and M.Mishima, 2009. A new species of the genus Rhopalomyia (Diptera:Cecidomyiidae) inducing large galls on wild and cultivated Chrysanthemum (Asteraceae) in China and on Jeju Island, Korea. *Applied Entomology and Zoology*, 44 (1), p.61-72.

＜報告など＞

①. 三島美佐子，2007.　ムシできない話・その１．日本植物分類学会ニュースレター.

②. 三島美佐子，2007. ムシできない話・その２．日本植物分類学会ニュースレターNo. 25, p.19.

③. 三島美佐子，2007. P&P 研究費の獲得. 九州大学総合研究博物館ニュース，No.9, p.3.

④. 三島美佐子・中西哲也，2007. 2007 年度公開展示「わくわくドキドキ化石のヒミツ～化石が語る地球の環境～」－第二回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展のご報告－. 九

州大学総合研究博物館ニュース，No. 9，p. 2.

⑤. 三島美佐子，2007．九州大学のハーバリウムと所蔵標本のご紹介．日本植物分類学会ニュースレター，No. 27，p. 14-16.

⑥. 三島美佐子，2008．常設展示室へようこそ：その１「九大博物館標本かるた」うらばなし．九州大学総合研究博物館ニュース，No. 11，p. 2-3.

⑦. 三島美佐子，2009．常設展示室へようこそ：その５　九大博物館展示室を利用したワークショップ①．九州大学総合研究博物館ニュース，No. 12，p. 2-3.

＜学会発表＞

①. 三島美佐子, 2005．シロダモに形成される虫えいの多型．日本植物学会，富山市.

②. M. Mishima, M. Nakazawa, T. Yahara and J. Yukawa, 2005/9. Differentiation in gall morph prior to gall midge speciation: a case study of gall dimorphism exhibited by *Pseudasphondylia neolitseae* (Diptera: Cecidomiiydae). The 4th international symposium of gall forming insects., Kyoto City.

③. 三島美佐子・佐藤信輔・湯川淳一，2006．ブナカイガラタマバエのゴール多型と遺伝的分化．種生物学会，高島市.

④. M. Mishima, S. Sato and J. Yukawa, 2006. Significance of gall polymorpphism in the speciation of galling cecidomyiids (Diptera: Cecidomyiidae)., 6th International Congress of Dipterology, 2006/09, Fukuoka City.

⑤. 中澤幸・三島美佐子・藤田卓・田金修一郎・矢原徹一・河原孝行，2006．シロダモ（クスノキ科）とその近縁種の類縁関係と地理的変異．日本植物分類学会，沖縄市.

＜講演等＞

①. 三島美佐子, 2006．12．　理系のススメ．九州大学女子中高生向け「理系への招待」—同窓会組織との連携による理系進学者ロールモデル明示プラン—（平成 18 年度文部科学省「女子中高生理系進路選択支援事業」），明治学園高等学校，北九州市戸畑区.

丸山宗利（まるやま　むねとし）

Munetoshi　MARUYAMA

開示研究系・助教（2007 年度～）

≪研究概要≫

おもにアリと共生する昆虫の分類と系統に関する研究を行っている。また、非常に分類の困難なヒゲブトハネカクシ亜科の高次系統関係、日本各地で絶滅の危機に瀕している潮間帯性甲虫の分類と分布調査、きわめて豊かな多様性を誇る東南アジアの熱帯雨林の昆虫調査などを手掛けている。

≪所属学会≫

日本進化学会，日本生態学会，日本昆虫学会，日本動物分類学会，日本生物地理学会，日本甲虫学会，日本鞘翅学会，ウィーン甲虫学会，日本蟻類研究会，日本直翅目研究会，コガネムシ研究会，水生昆虫談話会，ハネカクシ談話会等

≪研究資金≫

科学研究費・若手スタートアップ（2008～2009 年度：代表）「ヒゲブトハネカクシ亜科の高次体系に基づく好蟻性種の分類と進化」

≪学外委員等≫

日本蟻類研究会　編集委員長，2003 年～2009

≪海外渡航≫

①. 2008 年 7 月 22 日～8 月 1 日
マレーシア・ランビル国立公園（ワラワク州）における好蟻性昆虫の調査

②. 2009 年 2 月 15 日～3 月 1 日
エクアドル（ナポ州）における好蟻性昆虫の調査と NHK テレビ撮影の監修

③. 2009 年 3 月 7 日～16 日
マレーシア・ウル=ゴンバッ（セランゴール州）における好蟻性昆虫とアリの調査

④. 2009 年 9 月 4 日～12 日
マレーシア・ウル=ゴンバッ（セランゴール州）における好蟻性昆虫とアリの調査

⑤. 2009 年 10 月 25 日～11 月 4 日
タイ・カオ=ルアン（ナコンシータマラート州）における好蟻性昆虫とアリの調査

⑥. 2009 年 11 月 4 日～11 月 22 日
マレーシア・キャメロン=ハイランド（ペラ州）およびウル=ゴンバッ（セランゴール州）における好蟻性昆虫とアリの調査

⑦. 2009 年 1 月 16 日～2 月 3 日
カメルーン（サウスウェスト州）における好蟻性昆虫とアリの調査

⑧. 2009 年 3 月 3 日～3 月 19 日
マレーシア・キャメロンハイランド（ペラ州）における好蟻性昆虫とアリの調査

≪研究業績≫

＜原著論文＞

① M. Maruyama, J. Klimaszewski and V. Gusarov, 2008. *Osakatheta yasukoae*, a new intertidal genus and species of athetine rove beetles (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae) from Japan. Zootaxa,1683: 39-50M.

②. M. Maruyama, B. L. Patrick and J. Klimaszewski, 2008. First record of the genus *Myrmedonota* Cameron (Coleoptera, Staphylinidae) from North America, with descriptions of two new species. Zootaxa, 1716: 35-43.

③. M. Maruyama, R. H. L. Disney, 2008. Scuttle flies associated with Old World army ants in Malaysia (Diptera: Phoridae; Hymenoptera: Formicidae, Dorylinae). Sociobiology, 51(1): 65-71.

④. T. Komatsu and M. Maruyama, 2008. Symbiotic host of *Triartiger reductus* Nomura (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphidae, Clavigeritae) in the island of Tsushima, Japan. Elytra, 36(1): 227-228.

⑤. M. Maruyama, F. M. Steiner, C. Stauffer, T. Akino, R. H. Crozier and B. C. Schlick-Steiner, 2008. A DNA and morphology based phylogenetic framework of the ant genus *Lasius* with hypotheses for the evolution of social parasitism and fungiculture. BMC Evolutionary Biology, 2008, 8: 237.

⑥. M. Maruyama, H. R. L. Disney and R. Hashim, 2008. Three new species of legless, wingless scuttle flies (Diptera: Phoridae) associated with army ants (Hymenoptera: Formicidae) in Malaysia. Sociobiology, 52(3): 485-496.

⑦. T. Komatsu, M. Maruyama, S. Ueda and T. Itino, 2008. mtDNA phylogeny of Japanese ant crickets (Orthoptera: Myrmecophilidae): diversification in host specificity and habitat use. Sociobiology, 52(3): 553-565

⑧. M. Maruyama, Y. Katayama, W. Sakchoowong and S. Nomura, 2008. First record of *Lebioderus* (Coleoptera, Carabidae, Paussinae) from the Indochinese Peninsula, with description of a new species. Esakia, (48): 47-49.

⑨. M. Maruyama, 2008. *Giraffaenictus eguchii* (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae), a new genus and species of fully myrmecoid myrmecophile from a colony of *Aenictus binghami* (Hymenoptera, Formicidae, Aenictinae) in Vietnam. Esakia, (48): 51-56.

⑩. M. Maruyama, T. Akino, R. Hashim and T. Komatsu, 2009. Behavior and cuticular hydrocarbons of myrmecophilous insects (Tysanura; Coleoptera: Staphylinidae; Diptera: Phoridae) associated with Asian *Aenictus* army ants (Hymenoptera; Formicidae). Sociobiology, 54: 19-35.

⑪. S. Yamamoto and M. Maruyama, 2009. Description of *Aleochara* (*Maseochara*) *hiranoi* sp.n. from Japan (Coleoptera: Staphylinidae: Aleocharinae). Koleopterologische Rundschau, 79: 65-70.

⑫. M. Maruyama and M. Hayashi, 2009. Description of the intertidal aleocharine Halorhadinus sawadai sp.n. from Japan, with notes on the genus Halorhadinus Sawada, 1971. Koleopterologische Rundschau, 79: 71-82.

⑬. T. Komatsu, M. Maruyama and T. Itino, 2009. Behavioral differences between two ant cricket species in Nansei Islands: host-specialist versus host-generalist. Insectes Sociaux, 56: 389-396.

⑭. M. Maruyama, 2009. *Rhinocerotopsis nakasei* (Coleoptera, Scarabaeidae, Aphodiinae), a new genus and species of Stereomerini from Peninsular Malaysia. Esakia, (49): 103-106.

⑮. M. Maruyama, 2009. A new species of the genus *Merismoderus* (Coleoptera, Carabidae, Paussinae) from Laos, with a revised key of the genus and a new combination. Esakia, (49): 107-109.

⑯. M. Maruyama, 2009. On the myrmecophilous genus *Losiusa* Seevers, 1978 (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae). Esakia, (49): 111-116.

⑰. M. Maruyama, 2010. A new genus and species of myrmecophilous aphodiine beetle (Coleoptera, Scarabaeidae) inhabiting the myrmecophytic epiphyte *Platycerium* sp. (Polypodiaceae) in the Bornean rainforest canopy. In: Ratcliffe B, Krell F-T (Eds) Current advances in Scarabaeoidea research. Zookeys, 34: 49–54.

⑱. A. Ballerio, and M. Maruyama, 2010. The Ceratocanthinae of Ulu Gombak: high species richness at a single site, with descriptions of three new species and an annotated checklist of the Ceratocanthinae of Western Malaysia and Singapore (Coleoptera, Scarabaeoidea, Hybosoridae). In: Ratcliffe B, Krell F-T (Eds) Current advances in Scarabaeoidea research. Zookeys, 34: 77-104.

＜学会発表＞

①. 小松貴・丸山宗利・市野隆雄，2008．寄主アリ及びハビタット特異性からみた好犠牲昆虫アリヅカコオロギ属 *Myrmecophilus* の分子系統．日本生態学会第 55 回全国大会，福岡.

②. 丸山宗利・秋野順治・Rosli Hashim・小松貴，2008．ヒメサスライアリに多様化した好蟻性昆虫の形態・行動・体表炭化水素．日本生態学会第 55 回全国大会，福岡.

③. 丸山 宗利，2008．好蟻性昆虫の形態進化の可塑性と寄主への適応．日本進化学会第 10 回大会，札幌.

④. 丸山宗利・Florian M. Steiner・Birgit C. Schlick-Steiner・秋野順治・升屋勇人・濱口京子・坂本洋典，2008．ケアリ属 *Lasius*(ハチ目：アリ科)における社会寄生・菌共生・形態の進化．日本昆虫学会第 68 回大会，高松.

⑤. 小松貴・丸山宗利・市野隆雄，2008．アリヅカコオロギ属 *Myrmecophilus*（バッタ目：アリヅカコオロギ科）におけるスペシャリスト種とジェネラリスト種の寄主アリ巣内での行動および生存の違い．日本昆虫学会第 68 回大会，高松.

⑥. 丸山宗利・秋野順治・小松貴，2008．　ヒメサスライアリ属 3 種の好蟻性昆虫群集における形態・行動の多様性と体表炭化水素．日本昆虫学会第 68 回大会，高松.

⑦. 須島充昭・丸山宗利・小松貴，2008．　好白蟻性クロバネキノコバエ（*Pnyxiopalpus* sp.）の発見とその特異な生態．日本昆虫学会第 68 回大会，高松.

⑧. 丸山宗利・小松貴・R. Henry L. Disney，2008．シロアリノミバエ亜科（仮称）Termitoxeniinae の日本からの発見．日本鞘翅学会第 21 回大会・日本甲虫学会 2008 年次大会・日本昆虫分類学会第 11 回大会，松山.

⑨. 小松貴・丸山　宗利・市野　隆雄、2009．アリヅカコオロギ属内におけるスペシャリスト種とジェネラリスト種：寄主アリに対する行動の違い．日本生態学会第 56 回全国大会，盛岡.

⑩. 遠藤真太郎・ 丸山宗利・ 市野隆雄、2009．クサアリ亜属 5 種の形態分類と CHC 組成の比較．日本生態学会第 56 回全国大会，盛岡.

⑪. 丸山宗利・小松貴・伊藤文紀・Rosli Hashim、2009．熱帯雨林における生物種多様性指標としてのヒメサスライアリ．日本昆虫学会第 69 回大会，津.

＜講 演 等＞

①. 丸山宗利, 2008.2.13. 日本の海岸線の甲虫. シンポジウム“海と陸の間: 日本の命があふれるところ” 札幌.

資料ＩＦ①．学芸員資格関連授業・実習一覧

平成 17－平成 18 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
博物館概論	松隈・岩永	理学部	前期
博物館経営論	岩永・松隈	理学部	後期
博物館資料論	中牟田	理学部	前期
博物館情報論	中西	理学部	前期
視聴覚教育メディア論	中西	理学部	後期
植物学標本実習	三島(分担)	理学部	前期
地球惑星科学標本実習	松隈・中牟田・中西	理学部	前期
動物学標本実習	小島(分担)	農学部	前期
博物館資料論	宮崎	文学部	前期
博物館資料論	岩永	文学部	後期
博物館学実習Ⅲ	宮崎	文学部	前期
博物館学実習Ⅳ	宮崎	文学部	後期

平成 19－平成 20 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
博物館概論	松隈・岩永	理学部	07 前期・08 前期
博物館経営論	岩永・松隈	理学部	07 後期・08 後期
博物館資料論	中牟田	理学部	07 前期・08 前期
博物館情報論	中西	理学部	07 前期・08 前期
視聴覚教育メディア論	中西	理学部	07 後期・08 後期
植物学標本実習	三島	理学部	07 前期・08 前期
地球惑星科学標本実習	松隈・中牟田・中西	理学部	07 前期・08 前期
博物館資料論	岩永	文学部	08 前期
博物館学実習Ⅲ	宮崎	文学部	07 前期
博物館学実習Ⅳ	宮崎	文学部	07 後期・08 前期
動物学標本実習	丸山（分担）	農学部	08 前期

平成 21 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
博物館概論	松隈・岩永	理学部	09 前期
博物館経営論	岩永・松隈	理学部	09 後期
博物館資料論	中牟田	理学部	09 前期
博物館情報論	中西	理学部	09 前期
視聴覚教育メディア論	中西	理学部	09 後期
植物学標本実習	三島	理学部	09 前期
地球惑星科学標本実習	松隈・中牟田・中西	理学部	09 前期
博物館学実習Ⅲ	宮崎	文学部	09 前期

博物館学実習Ⅳ	宮崎	文学部	09 後期

資料ＩＦ②．大学院教育関係授業一覧

◎平成 17－平成 18 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
生物圏進化学	松隈	理学府	前期
地球史生物史	松隈(分担)	理学府	後期
地球惑星科学特別研究Ⅰ	松隈	理学府	通年
地球惑星科学特別研究Ⅱ	松隈	理学府	通年
階級社会形成論Ⅰ・Ⅲ	岩永	比較社会文化学府	前期
階級社会形成論Ⅱ・Ⅳ	岩永	比較社会文化学府	後期
鉱物解析学	中牟田	理学府	前期
物質科学演習	中牟田(分担)	理学府	前期
地球惑星科学特別研究Ⅰ	中牟田	理学府	通年
地球惑星科学特別研究Ⅱ	中牟田	理学府	通年
歴史資料学(資料解析論)Ⅰ・Ⅲ	宮崎	比較社会文化学府	前期
歴史資料学(資料解析論)Ⅱ・Ⅳ	宮崎	比較社会文化学府	後期
鉱物工学実験第一	中西	工学府	通年
鉱物工学実験第二	中西	工学府	後期
昆虫学演習	小島	農学府	通年
農学特別研究	小島	農学府	通年

◎平成 19－平成 20 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
進化古生物学	松隈	理学府	07 前期
地球惑星物質科学演習	中牟田	理学府	07 前期・08 前期
X 線結晶学	中牟田	理学府	08 前期
鉱物工学実験第一	中西	工学府	07 前期・08 前期
鉱物工学実験第二	中西	工学府	07 前期・08 後期
階級社会形成論Ⅰ・Ⅲ	岩永	比較社会文化学府	07 前期・08 前期
階級社会形成論Ⅱ・Ⅳ	岩永	比較社会文化学府	07 後期・08 後期
地域資料情報論Ⅲ	宮崎	比較社会文化学府	07 通年
地域資料情報論Ⅳ	宮崎	比較社会文化学府	08 通年
博物館情報科学特論	中西	芸術工学府	08 集中（３月）
感性学入門	三島（分担）	新学府プレ授業	08 後期

◎平成 21 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
進化古生物学	松隈	理学府	09 前期
地球惑星物質科学演習	中牟田（分担）	理学府	09 前期

X 線結晶学	中牟田	理学府	09 前期
鉱物工学実験第一	中西	工学府	09 通年
鉱物工学実験第二	中西	工学府	09 後期
階級社会形成論Ⅰ・Ⅲ	岩永	比較社会文化学府	09 前期
階級社会形成論Ⅱ・Ⅳ	岩永	比較社会文化学府	09 後期
地域資料情報論Ⅰ・Ⅲ	宮崎	比較社会文化学府	09 前期
地域資料情報論Ⅱ・Ⅳ	宮崎	比較社会文化学府	09 後期
博物館情報学特論	中西	芸術工学府	09 後期

資料ＩＦ③．学部教育関係授業一覧

◎平成 17－平成 18 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
地球惑星生物学	松隈	理学部	3 年前期
地球惑星生物学実験Ⅰ	松隈(分担)	理学部	2 年後期
地球惑星生物学実験Ⅱ	松隈(分担)	理学部	3 年前期
地球惑星科学実習Ⅰ	松隈(分担)	理学部	3 年前期
地球の構成と環境	松隈(分担)	全学共通	1 年後期
地球惑星科学特別研究	松隈	理学部	通年
考古学講義ⅩⅣ	岩永	文学部	後期
結晶物理化学	中牟田	理学部	2 年後期
地球惑星科学特別研究	中牟田	理学部	通年
農学実験第一	小島	農学部	2 年後期
農学実験第二	小島	農学部	3 年前期
農学実験第三	小島	農学部	3 年後期
農学実験第四	小島	農学部	通年

◎平成 19－平成 20 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
地球の構成と環境	松隈（分担）	全学共通	07 後期
地球惑星生物学	松隈	理学部	07 前期・08 前期
古生物学	松隈	理学部	08 後期
地球史生物史演習	松隈（分担）	理学部	07 前期・08 前期
地球惑星科学実験	松隈（分担）	理学部	07 前期
結晶物理化学	中牟田	理学部	07 後期
地球惑星物質科学	中牟田	理学部	08 後期
考古学講義ⅩⅣ	岩永	文学部	08 後期

◎平成 21 年度

科　目	担当者	開講部局	開講時期
古生物学	松隈	理学部	09 後期

地球史生物史演習	松隈（分担）	理学部	09 前期
地球惑星物質科学	中牟田	理学部	09 後期

その他

大　学	担当者	科　目	開講時期
福岡教育大学	岩永	考古学概論	08 集中（8 月）
西南学院大学	宮崎	古文書学	05・06・08 通年

資料Ｉｉ①．公開講演会等一覧

Ａ．公開講演会

第５回公開講演会「シーボルトが集めた日本」

日　時：平成 17 年 11 月 13 日（日）13:00～17:00
会　場：九州大学 50 周年記念講堂４階大会議室
主　催：九州大学総合研究博物館
演　題：「シーボルトの日記からみた再来日のコレクション」石山禎一(東海大学)
「シーボルト植物コレクションにみる科学的収集」藤井伸二(人間環境大学)
「シーボルト収集の鳥獣類標本について」武石全慈(北九州市立自然史・歴史博物館)
「ナガサキアゲハの江戸参府；シーボルトの昆虫標本が教えてくれる 200 年前の自然」久松正樹(ミュージアムパーク茨城県自然博物館)

６回公開講演会「よみがえる標本－骨・動物・人－」

日　時：平成 18 年 10 月 21 日（土）13:00～17:00
会　場：九州大学 50 周年記念講堂４階大会議室
主　催：九州大学総合研究博物館
演　題：「小型哺乳類と標本」毛利孝之(九州大学)
「遺体科学の挑戦」遠藤秀紀(京都大学)
「人骨から見える古代社会」田中良之(九州大学)

第７回公開講演会「鉱山遺跡を楽しもう」

日　時：平成 20 年３月８日（土）13:00～16:30
会　場：50 周年記念講堂４階大会議室
主　催：九州大学総合研究博物館
入場者数：79 名
演　題：「歴史の中の鉱山」井澤英二（九州大学　名誉教授）
「金山の道標として―田舎の小さな博物館―」小松美鈴（甲斐黄金村・湯之奥金山博物館学芸員）
「ロボットによる石見銀山間歩探査―間歩内部映像から見た石見銀山の凄さ！―」久間英樹（松江工業高等専門学校　准教授）

第８回公開講演会「植物の世界―お花畑から遺伝子まで―」

日　時：平成 20 年 11 月 29 日（土）13:00～17:00
会　場：50 周年記念講堂４階大会議室
主　催：九州大学総合研究博物館
入場者数：114 名
演　題：「ウラジオストク植物紀行―対岸からみる日本列島の植物―」いがりまさし（植物写真家）
「花と虫の出会い―送粉昆虫の訪花直前飛行の解析から―」川窪伸光（岐阜大学・准教授）
「植物の見かけの多様性、その背景にある遺伝子の変化」塚谷裕一（東京大学・教授）

第９回公開講演会「第一部　月の起源と進化，第二部　九州大学における宇宙研究」

日　時：平成 22 年 3 月 14 日（日）13:00～17:00
会　場：旧工学部本館 3 階第一会議室
主　催：九州大学総合研究博物館
入場者数：200 名
演　題：「スーパーコンピュータで探る月誕生の秘密」小久保英一郎（国立天文台・准教授）
「隕石研究と衛星探査によって解き明かされた月の姿」武田弘（東京大学・名誉教授）
「地球低軌道における宇宙ゴミ環境の不安定性について」花田俊也（九州大学・教授）
「宇宙天気予報の最前線」湯元清文（九州大学・教授）

B．海のゆりかご～次世代につなげる文化と生きもの～

主　催：海のゆりかご実行委員会主催、
共　催：九州大学総合研究博物館
九州大学ユーザーサイエンス機構（Varietas・子どもプロジェクト）

◎中尾勘悟写真展「有明海の漁と人々のくらし」
日　時：平成 19 年 1 月 19 日(金)～1 月 28 日(日)　10 時～19 時（19 日のみ 17 時～）
会　場：九州大学ユーザーサイエンス機構サテライト・LUNETTE　1 階

◎第３回サイエンスカフェ　ばりカフェスペシャル
「ありあけレストラン―撮る・採る・食べる・愛してる！―」
日　時：平成 19 年 1 月 19 日（金）18 時～
会　場：九州大学ユーザーサイエンス機構サテライト・LUNETTE　1 階
スピーカー：中尾勘悟　氏（写真家）

◎市民セミナー「宝の海・有明海の秘密－それは“濁ったみず”」
日　時：平成 19 年 1 月 20 日(土)　13 時 30 分～15 時 30 分
会　場：アクロス福岡文化情報ラウンジ 2 階・セミナー室２
講　師：田中　克　氏（京都大学フィールド科学教育研究センター）

◎クロージングセッション「守りたい！海のゆりかご～有明海の夜明けを迎えるために～」
日　時：平成 19 年 1 月 28 日(日)　15 時～17 時
会　場：九州大学ユーザーサイエンス機構サテライト・LUNETTE 2 階
スピーカー：田北　徹　氏（長崎大学名誉教授）
モデレーター：佐藤 剛史 氏（九州大学農学研究院）

資料Ⅰｉ②．コミュニケーションミュージアム事業一覧

※平成 17 年度

第８回地域資源再発見塾

日　時：平成 17 年 9 月 23 日(金)

会　場：解放センター前原市隣保館

演　題：「ロボットによる町づくり」山本元司（九州大学工学研究院）

第９回地域資源再発見塾

日　時：平成 17 年 11 月 6 日(日)

会　場：二丈町立中央公民館

演　題：「里山保全と竹林拡大を考える」薛 孝夫（九州大学農学研究院）

第 10 回地域資源再発見塾

日　時：平成 17 年 3 月 5 日(日)

会　場：志摩町総合保健福祉センターふれあい

内　容：可也山シンポジウム「歴史に学び，魅力と未来を語ろう」

午前の部　可也山登山

午後の部　1. 基調報告「降倭武将・沙也可～名前の由来とその人物」丸山雍成（九州大学　名誉教授）

2. パネルディスカッション「歴史に学び，魅力と未来を語ろう」

※平成 18 年度

第 11 回地域資源再発見塾

日　時：平成 18 年 7 月 22 日(土)

会　場：二丈町立中央公民館

演　題：「食と農を考えるー食の安全と健康な生活ー」今泉 勝己（九州大学農学研究院　教授）

第 12 回地域資源再発見塾

日　時：平成 18 年 9 月 16 日(土)

会　場：伊都文化会館

演　題：「変化アサガオの世界」仁田坂 英二（九州大学理学研究院）

第 13 回地域資源再発見塾

日　時：平成 19 年 2 月 17 日(土)

会　場：志摩町総合保健福祉センター

演　題：「貝類から見た糸島の自然」松隈 明彦（九州大学総合研究博物館　教授）

※平成 19 年度

第 14 回地域資源再発見塾

日　時：平成 19 年 10 月 20 日（土）10:30～12:00

会　場：伊都文化会館

演　題：「環境に優しいエコ BEEF」後藤貴文（九州大学農学研究院　准教授）

第 15 回地域資源再発見塾

日　時：平成 19 年 11 月 24 日（土）13:30～15:00

会　場：二丈町立中央公民館
演　題：「農薬を正しく理解するために」桑野栄一（九州大学農学研究院　教授）

第 16 回地域資源再発見塾

日　時：平成 20 年２月９日（土）10:00～12:00
会　場：志摩町役場第２庁舎
演　題：「里山の現状と潜在力及び市民保全活動の展望」重松敏則（九州大学芸術工学研究院教授）
「竹林拡大問題とその解決に向けた取り組み」藤井義久（九州芸術工科大学芸術工学研究院博士）

第 17 回地域資源再発見塾

日　時：平成 20 年２月 16 日（土）13:00～15:30
会　場：伊都文化会館調理室
演　題：「草木染を楽しもう」福原美恵子（九州大学総合研究博物館　研究支援推進員）

※平成 20 年度

第 18 回地域資源再発見塾

日　時：平成 20 年７月 26 日（土）９:00～12:00
会　場：志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」・志摩町健康管理センター体育館
演　題：「紙飛行機教室・飛行コンテスト」東野伸一郎（九州大学工学研究院　講師）

第 19 回地域資源再発見塾

第１回
日　時：平成 21 年１月 31 日（土）10:00～15:00
会　場：前原市大字瑞梅寺「ふるさと体験館のぞみ」
演　題：「『水の浄化材料としての竹炭』と炭焼き体験」久場隆広（九州大学工学研究院　准教授）
第２回
日　時：平成 21 年２月 21 日（土）10:00～12:00
会　場：前原市大字瑞梅寺「ふるさと体験館のぞみ」
演　題：「『水の浄化材料としての竹炭』と炭焼き体験」久場隆広（九州大学工学研究院　准教授）

第 20 回地域資源再発見塾

日　時：平成 21 年７月 30 日（木）10:00～15:00
会　場：二丈町中央公民館
演　題：「耕作放棄地を考える―豊かな生物資源を生かす―」鄭紹輝佐賀大准教授（九州大学工学研究院　准教授）

会員交流事業（九州大学教職員と糸島一市二町職員の交流促進）

平成 17 年度
日　時：平成 17 年 10 月 8 日（土）11:00～13:00
会　場：志摩町新町

平成 18 年度
日　時：平成 18 年 10 月 21 日（土）11:00～13:00
会　場：志摩町新町

平成 19 年度

日　時：平成 19 年 9 月 29 日（土）11:00～13:00
会　場：志摩町新町
平成 20 年度
日　時：平成 20 年 8 月 23 日（土）11:00～13:00
会　場：志摩町新町
平成 21 年度
日　時：平成 21 年 10 月 10 日（土）11:00～13:00
会　場：志摩町新町

ふれあいバスツアー（新キャンパス見学，地域の再発見，大学と地元の交流）
平成 17 年度
日　時：平成 18 年 2 月 12 日（日）
コース：九大伊都キャンパス → 二見浦 → 志摩町総合保健福祉センター → 伊都国歴史博物館 → 白糸酒造 → 二丈町福ふくの里 → 浮嶽神社
平成 18 年度
日　時：平成 18 年 11 月 25 日（土）
コース：雷山千如寺 ⇒ 伊都国歴史博物館 ⇒ 九大伊都キャンパス
平成 19 年度
日　時：平成 19 年 11 月 10 日（土）8:50～15:30
コース：芥屋大門公園 ⇒ 二見ケ浦 ⇒ 九州大学伊都キャンパス
平成 20 年度
日　時：平成 20 年 11 月 1 日（土）8:30～15:30
コース：加茂ゆらりんこ橋 ⇒ 福ふくの里 ⇒ 福吉 ⇒ 九州大学伊都キャンパス
平成 21 年度
日　時：平成２１年５月 11 日（月）
コース：九州大学開学記念式典参加、大学博物館・宙空環境研究センター見学

資料Ｉｉ－③．セミナー一覧

第１回博物館談話会
日　時：平成 20 年 10 月 28 日（火）17:00～18:00
会　場：九州大学 21 世紀交流プラザ　多目的ホール
演　題：「微小試料を用いたＸ線回折法による精密分析：『隕石中のダイアモンドの性質と生成メカニズム』および『装飾古墳に使用された緑色顔料の解析』」中牟田　義博

第２回博物館談話会
日　時：平成 20 年 11 月 18 日（火）17:00～18:00
会　場：九州大学 21 世紀交流プラザ　講義室Ａ
演　題：「日本の軟体動物相と古生物学・軟体動物学」松隈明彦

第３回博物館談話会

日　時：平成 20 年 12 月 22 日（月）17:00～18:00

会　場：九州大学総合研究博物館常設展示室

演　題：「鉱山遺跡を科学する―長登銅山、石見銀山の例から―」中西哲也

第４回博物館談話会

日　時：平成 21 年１月 19 日（月）17:00～18:00

会　場：九州大学総合研究博物館常設展示室

演　題：「観世音寺の屋根瓦－老司式軒瓦出現の背景」岩永省三

第５回博物館談話会

日　時：平成 21 年８月 28 日（金）16:00～17:30

会　場：九州大学 21 世紀交流プラザ多目的ホール

演　題：「１．東京大学総合研究博物館の活動紹介，２．ミュージアム研究紹介」
寺田鮎美（政策研究大学院大学・東京大学総合研究博物館）

第６回博物館談話会

日　時：平成 21 年 12 月１日（火）16:00～19:00

会　場：九州大学総合研究博物館常設展示室

テーマ：「ブナを寄主とするタマバエ類の分類・生態・地理的分化」

演　題：「ブナの形態地理変異に基づく冷温帯林生態系機能と生物多様性の地理的分布」日浦　勉（北海道大学）
「ブナの遺伝的地域性」陶山佳久（東北大学）
「ブナに寄生するタマバエ類の分類と多様性」佐藤信輔（宮崎大学）
「ブナ葉を利用する食植性昆虫の緯度勾配」中村誠宏（北海道大学）
「ブナカイガラタマバエの同所的種分化」三島美佐子（九州大学）

第７回博物館談話会

日　時：平成 21 年 12 月 15 日（火）18:00～19:30

会　場：九州大学総合研究博物館常設展示室

演　題：「ボランティアとのいい関係作り」加留部　貴行(統合新領域学府・特任准教授)

資料ⅡＢ－①．九州大学総合研究博物館規則

平成 16 年度九大規則第 37 号

施　行：平成 16 年４月１日

最終改正：平成 23 年４月１日

第１条（趣　旨）

この規則は、九州大学学則（平成 16 年度九大規則第１号。以下「学則」という。）題 13 条第２項の規定に基づき、総合研究博物館（以下「博物館」という。）の内部組織その他必要な事項を定めるものとする。

第２条（目　的）

博物館は、学術標本の収蔵、分析、展示・公　開等及び学術標本に関する研究教育の支援並びにこれらに関する調査研究を行うとともに、学内外の研究教育活動に寄与することを目的とする。

第３条（館　長）

学則第 26 条の規定により、博物館に、館長を置く。

２　館長は、九州大学の教授のうちから第５条に規定する運営委員会の推薦により、総長が任命する。

３　館長の任期は、２年とする。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

４　館長は再任されることができる。ただし、引き続き再任される場合は、一回を限度とする。

第４条（副館長）

学則第 26 条の規定により、博物館に、副館長を置く。

２　副館長は、博物館の専任の教授及び助教授のうちから館長の推薦により、総長が任命する。

３　副館長の任期は、２年とする。ただし、当該副館長への就任時における館長の任期の終期を越えることはできない。

４　副館長は、再任されることができる。

第５条（運営委員会）

学則第 39 条の規定により、博物館に、博物館の重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

２　運営委員会は、次の各項に掲げる事項を審議する。

(1)　館長および副館長の選考に関すること。

(2)　博物館の教員人事に関すること。

(3)　教員の研究業務に係る重要事項に関すること。

(4)　共同利用に係る業務の重要事項に関すること。

(5)　研究員等に関すること。

(6)　研究生等に関すること。

(7)　博物館内の諸規則等の制定改廃に関すること。

(8)　博物館の自己点検・評価に関すること。

(9)　その他博物館の管理運営に関すること。

３　前項第２号に掲げる事項のうち、教員の選考のための資格審査については、原則として、博物館に設置する教員選考委員会において行うものとする。ただし、必要に応じて、博物館の教育研究に関係する部局の教授会において行うことができる。

第６条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　総長が指名する副学長

(2)　館長及び副館長

(3)　博物館の専任の教授及び准教授（副館長の職にある者を除く。）

(4)　附属図書館長

(5)　情報基盤センター長

(6)　各研究院（数理学研究院を除く。）の教授及び准教授のうちから選ばれた者　各一人

(7)　各附属研究所（マス・フォア・インダストリ研究所を除く。）の教授及び准教授のうちから選ばれた者　各一人

（8）　数理学研究院及びマス・フォア・インダストリ研究所の教授及び准教授のうちから選ばれた者　１人

（9）　理学部等事務長

(10)　その他運営委員会が必要と認めた者　若干人

２　前項第６号から第８号まで及び第 10 号の委員の任期は、２年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

３　前項の委員は、再任されることができる。

第７条　運営委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会を主宰する。

３　運営委員会に、副委員長を置き、副館長をもって充てる。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第８条　運営委員会は、委員の２分の１以上が出席しなければ議事を開き、議決することができない。

２　運営委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

第９条（専門委員会）

運営委員会に、専門的事項を審議するため、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

第 10 条（兼任の教員）

博物館に、兼任の教員を置くことができる。

２　兼任の教員は、九州大学の教員のうちから運営委員会の推薦により、総長が任命する。

３　兼任の教員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

第 11 条（事　務）

博物館に関する事務は、当分の間、理学部等事務部において処理する。

第 12 条（雑　則）

この規則に定めるもののほか、博物館の組織及び運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、館長が定める。

附　則

１　この規則は、平成 16 年４月１日から施行する。

２　この規則の施行後、最初に任命される館長及び運営委員会の委員は、この規則の相当規定に基づき任命されたものと見なす。

３　この規則の施行の際現に九州大学総合研究博物館規則（平成 12 年４月１日施行。以下「旧規則」という。）の規定に基づき、兼任の教員に任命されている者は、この規則の相当規定に基づき任命されたものとみなし、その任期は旧規則による兼任の教員として在任した期間を控除した期間とする。

附　則（平成 18 年度九大規則第 51 号）

この規則は、平成 19 年４月１日から施行する。

附　則（平成 22 年度九大規則第 128 号）

１　この規則は、平成 23 年４月１日から施行する。

２　この規則施行の際現にこの規則による改正前の九州大学総合研究博物館規則（以下「旧規則」という。）第６条第１項第６号の規定に基づき、運営委員会の委員として数理学研究院から選ばれた者は、この規則による改正後の九州大学総合研究博物館規則第６条第１項第８号の規定に基づき選ばれたものとみなし、その任期は、旧規則による当該委員として在任した期間を控除した期間とする。

館長・副館長・運営委員会委員・事務部名簿

館　　長

平成 17 年 4 月－平成 18 年 3 月　村江達士（理学研究院）
平成 18 年 4 月－平成 19 年 3 月　嶌　洪　（比較社会文化研究院）
平成 19 年 4 月－平成 21 年 3 月　多田内修（農学研究院）
平成 21 年 4 月～　　松隈明彦（総合研究博物館）

副館長

平成 16 年 4 月－平成 21 年 3 月　松隈明彦（総合研究博物館）
平成 21 年 4 月～　　岩永省三（総合研究博物館）

運営委員会委員

◎平成 17 年度

村江 達士（総合研究博物館長・委員長），松隈 明彦（副館長・副委員長），中野 仁雄（副学長），今西 裕一郎（附属図書館長），村上 和彰（情報基盤センター長），佐伯 弘次（人文科学研究院），服部 英雄（比較社会文化研究院），堀 賀貴（人間環境学研究院），熊野 直樹（法学研究院），北澤 満（経済学研究院），鈴木 敦典（言語文化研究院），佐野 弘好（理学研究院），隠居 良行（数理学研究院），皆川 洋子（医学研究院），名方 俊介（歯学研究院），田中 宏幸（薬学研究院），江原 幸雄（工学研究院），山下 茂樹（芸術工学研究院），金子 邦彦（システム情報科学研究院），橋爪 健一（総合理工学研究院），毛利 孝之（農学研究院），嘉村 功（生体防御医学研究所），市川 香（応用力学研究所），藤尾 瑞枝（先導物質化学研究所），岩永 省三，中牟田 義博，中西 哲也，宮崎 克則　（総合研究博物館），大森 禮次郎（理学部等事務長）

◎平成 18 年度

嶌 洪（総合研究博物館長・委員長），松隈 明彦（副館長・副委員長），柴田 洋三郎（副学長），有川 節夫（附属図書館長），村上 和彰（情報基盤センター長），佐伯 弘次（人文科学研究院），服部 英雄（比較社会文化研究院），堀 賀貴（人間環境学研究院），熊野 直樹（法学研究院），北澤 満（経済学研究院），鈴木 敦典（言語文化研究院），佐野 弘好（理学研究院），隠居 良行（数理学研究院），目野 主税（医学研究院），名方 俊介（歯学研究院），田中 宏幸（薬学研究院），江原 幸雄（工学研究院），大島 久雄（芸術工学研究院），高橋 規一（システム情報科学研究院），大滝 輪卓（総合理工学研究院），飯田 弘（農学研究院），籐 博幸（生体防御医学研究所），市川 香（応用力学研究所），三島 正章（先導物質化学研究所），岩永 省三，中牟田 義博，中西 哲也，宮崎 克則　（総合研究博物館），秋枝 一敏（理学部等事務長）

◎平成 19 年度

多田内修（総合研究博物館館長・委員長），松隈明彦（副館長・副委員長），柴田洋三郎（副学長），有川節夫（付属図書館長），村上和彰（情報基盤センター長），佐伯弘次（人文科学研究院），服部英雄（比較社会文化研究院），堀　賀貴（人間環境学研究院），熊野直樹（法学研究院），北澤　満（経済学研究院），鈴木敦典（言語文化研究院），佐伯弘好（理学研究院），隠居良行（数理学研究院），目野主税（医学研究院），名方俊介（歯学研究院），田中宏幸（薬学研究院），江原幸雄（工学研究院），大島久雄（芸術工学研究院），高橋規一（システム情報科学研究院），大瀧倫卓（総合理工学研究院），飯田　弘（農学研究院），籐　博幸（生体防御医学研究所），市川　香（応用力学研究所），三島正章（先導物質科学研究所），岩永

省三（総合研究博物館），中牟田義博（同），中西哲也（同），宮崎克則（同），秋枝一敏（理学部等事務長）

◎平成 20 年度

多田内修（総合研究博物館館長・委員長），松隈明彦（副館長・副委員長），柴田洋三郎（副学長），有川節夫（附属図書館長），村上和彰（情報基盤センター長），佐伯弘次（人文科学研究院），溝口孝司（比較社会文化研究院），堀　賀貴（人間環境学研究院），熊野直樹（法学研究院），堀井伸浩（経済学研究院），中里見　敬（言語文化研究院），佐伯弘好（理学研究院），隠居良行（数理学研究院），目野主税（医学研究院），名方俊介（歯学研究院），田中宏幸（薬学研究院），江原幸雄（工学研究院），古賀　徹（芸術工学研究院），高橋規一（システム情報科学研究院），堤井君元（総合理工学研究院），川口栄男（農学研究院），籐　博幸（生体防御医学研究所），市川　香（応用力学研究所），三島正章（先導物質科学研究所），岩永省三（総合研究博物館），中牟田義博（同），中西哲也（同），宮崎克則（同），秋枝一敏（理学部等事務長）

◎平成 21 年度

松隈明彦（総合研究博物館館長・委員長），岩永省三（副館長・副委員長），水田祥代（副学長），丸野俊一（附属図書館長），青柳　睦（情報基盤センター長），佐伯弘次（人文科学研究院），溝口孝司（比較社会文化研究院），堀　賀貴（人間環境学研究院），熊野直樹（法学研究院），堀井伸浩（経済学研究院），中里見　敬（言語文化研究院），佐伯弘好（理学研究院），隠居良行（数理学研究院），目野主税（医学研究院），名方俊介（歯学研究院），田中宏幸（薬学研究院），江原幸雄（工学研究院），古賀　徹（芸術工学研究院），高橋規一（システム情報科学研究院），堤井君元（総合理工学研究院），川口栄男（農学研究院），籐　博幸（生体防御医学研究所），市川　香（応用力学研究所），三島正章（先導物質科学研究所），中牟田義博（総合研究博物館），中西哲也（同），宮崎克則（同），根本正明（理学部等事務長）

事　務　部

◎平成 17 年度

専　門　職　員：都築 健二

事 務 補 佐 員：山本 亜希子（～2005 年 7 月 31 日），赤峰 倫佳（2005 年 8 月 15 日～）

研究支援推進員：福原 美恵子

◎平成 18－平成 20 年度

専　門　職　員：木下 隆司

事 務 補 佐 員：赤峰 倫佳

研究支援推進員：福原 美恵子

◎平成 21 年度

専　門　職　員：木下隆司

事 務 補 佐 員：柾木真紀子

研究支援推進員：福原美恵子

資料ⅡＣ－①．九州大学総合研究博物館の教員組織に関する内規

第１条（趣旨）

この内規は、九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の教員組織に関し必要な事項を定めるものとする。

第２条（教員組織）

博物館に、教員組織として次の表の左欄に掲げる系を置き、当該系の任務は、同表の右欄に定めるとおりとする。

系	任　　務
一次資料研究系	学術標本の調査・収集、分類・保存及びその理論・方法に関する研究と教育
分析技術開発系	学術標本の先端的分析法による新たな学術情報の抽出及びその理論･方法に関する研究と教育
開　　示研究系	学術標本の展示･公開のための情報のデータベース化及びその効果的な展示･公開のための理論・方法の研究と教育

附　則

この内規は、平成 19 年度４月１日から施行する。

九州大学総合研究博物館資料部内規

第１条　九州大学総合研究博物館に、学術標本の管理、運用にあたる資料部を置く。

第２条　資料部は専任教員及び兼任教員で構成される。

第３条　資料部に自然史、文化史、技術史の３部門を置き、各部門に専門分野を置く。

２　専門分野は当分の間、以下のとおりとする。

自然史部門：動物・医動物、植物、昆虫、水生生物、地史古生物、岩石、鉱物、人類先史、有機化石、地球電磁気、生薬

文化史部門：考古、記録史料、建築史

技術史部門：資源・素材、機械

第４条　各専門分野に分野主任を置く。

２　分野主任は、当該分野に関係のある兼任教員をもって充てる。なお、必要に応じて博物館の専任教員も分野主任となることができる。

３　分野主任の選出は、各分野の推薦に基づき、館長が委嘱する。

４　分野主任は館長の下に、各分野における学術標本の管理、運用の取りまとめを行う。

５　分野主任の任期は２年とし、補欠の任期は前任者の残任期とする。なお、再任を妨げない。

第５条　博物館に学術標本の管理・運用に関わる諸事項および各分野の連絡調整を計るため、主任会議を置く。

２　主任会議は各分野主任および博物館専任教員をもって構成する。

３　館長は主任会議を招集し、その議長となる。

附　則

１　この内規は、平成 16 年４月１日から施行する。

２　この内規施行後最初に任命される分野主任の任期は、第４条第５項の規定に関わらず、平成 18 年３月 31 日までとする。

附　則

この内規は、平成 16 年 11 月 22 日から施行する。

九州大学総合研究博物館資料部名簿

◎平成 17－平成 18 年度

※下線は分野主任，(　)内は所属を示す。所属の省略は以下の通り。

人文：人文科学研究院，比文：比較社会文化研究院，法：法学研究院，経：経済学研究院，理：理学研究院，医：医学研究院，薬：薬学研究院，工：工学研究院，農：農学研究院，博：総合研究博物館

【自然史部門】

動物・医動物分野：姫野 國祐(医)，毛利 孝之(農)，飯田 弘(農)，金子 たかね(農)

植　物　分　野：矢原 徹一(理)，井上 晋(農)，安井 秀(農)，川口 栄男(農)，三島 美佐子(博)

昆　虫　分　野：嶌 洪(比文)，高木 正見(農)，矢田 脩(比文)，荒谷 邦雄(比文)，多田内 修(農)，上野 高敏(農)，緒方 一夫(農)，紙谷 聡志(農)，津田 みどり(農)，小島 弘昭(博)

水生生物分野：松井 誠一(農)，川口 栄男(農)，野島 哲(理)，森 敬介(理)，望岡 典隆(農)

地史古生物分野：酒井 治孝(比文)，高橋 孝三(理)，佐野 弘好(理)，松隈 明彦(博)，鹿島 薫(理)，下山正一(理)，坂井 卓(理)，清川 昌一(理)

岩　石　分　野：寅丸 敦志(理)，石田 清隆(比文)，池田 剛(理)，中牟田 義博(博)，宮本 知治(理)

鉱　物　分　野：加藤 工(理)，石田 清隆(比文)，石橋 純一郎(理)，中村 智樹(理)，久保 友明(理)，中牟田 義博(博)，桑原 義博(比文)，上原 誠一郎(理)，本村 慶信(理)，

人類先史分野：田中 良之(比文)，中橋 孝博(比文)

有機化石分野：村江 達士(理)，山内 敬明(理)，北島 富美雄(理)

地球電磁気分野：湯元 清文(理)

生　薬　分　野：田中 宏幸(薬)

【文化史部門】

考　古　分　野：岩永 省三(博)，宮本 一夫(博)，溝口 孝司(比文)

記録資料分野：服部 英雄(比文)，有馬 学(比文)，吉田 昌彦(比文)，植田 信廣(法)，西村 重雄(法)，田北 廣道(経)，荻野 喜弘(経)，佐伯 弘次(人文)，中野 等(比文)，高野 信治(比文)，熊野 直樹(法)，宮崎 克則(博)

建築史分野：未　定

【技術史部門】

資源・素材分野：福島 久哲(工)，渡邊 公一郎(工)，中西 哲也(博)，今井 亮(工)

機　械　分　野：鬼鞍 宏猷(工)

◎平成 19 年度　　※下線は分野主任，(　)内は所属を示す。

【自然史部門】

動物・医動物分野：姫野國祐（医），飯田　弘（農），金子たかね（農）

植　物　分　野：矢原徹一（理），川口栄男（農），井上　晋（農），安井　秀（農），三島美佐子（博）

昆　虫　分　野：矢田　脩（比文），高見正見（農），多田内修（農），緒方一夫（熱研），荒谷邦雄（比文），植野高敏（農），紙谷聡志（農），津田みどり（農）

水生生物分野：川口栄男（農），野島　哲（理），森　敬介（理），望岡典隆（農）

地史古生物分野：高橋孝三（理），佐野弘好（理），松隈明彦（博），鹿島　薫（理），清川昌一（理）下山正一（理），坂井　卓（理），

岩　石　分　野：寅丸敦志（理），石田清隆（比文），池田　剛（理），中牟田義博（博），宮本知治（理）
鉱　物　分　野：加藤　工（理），石田清隆（比文），桑原義博（比文），石橋純一郎（理），中村智樹（理），久保友明（理），中牟田義博（博），上原誠一郎（理），本村慶信（理）
人類先史部門：田中良之（比文），中橋孝博（比文）
有機化石分野：山内敬明（理），北島富美雄（理）
地球電磁気分野：湯元清文（理）
生　薬　分　野：田中宏幸（薬）
【文化史部門】
考　古　分　野：宮本一夫（人文），岩永省三（博），溝口孝司（比文）
記録資料分野：佐伯弘次（人文），服部英雄（比文），有馬　学（比文），吉田昌彦（比文），中野　等（比文），高野信治（比文），植田信廣（法），熊野直樹（法），田北廣道（経），宮崎克則（博）
建築史分野：未　定
【技術史部門】
資源・素材分野：福島久哲（工），渡邊公一郎（工），今井　亮（工），中西哲也（博），
機　械　分　野：鬼鞍宏猷（工）

◎平成 20 年度
【自然史部門】
動物・医動物分野：飯田　弘（農），金子たかね（農）
植　物　分　野：矢原徹一（理），川口栄男（農），井上　晋（農），安井　秀（農），三島美佐子（博）
昆　虫　分　野：矢田　脩（比文），高見正見（農），多田内修（農），緒方一夫（熱研），荒谷邦雄（比文），植野高敏（農），紙谷聡志（農），高須啓志（農），津田みどり（農）
水生生物分野：川口栄男（農），野島　哲（理），森　敬介（理），望岡典隆（農）
地史古生物分野：高橋孝三（理），佐野弘好（理），松隈明彦（博），鹿島　薫（理），清川昌一（理）下山正一（理），坂井　卓（理），
岩　石　分　野：小山内康人（比文），寅丸敦志（理），石田清隆（比文），池田　剛（理），中牟田義博（博），中野伸彦（比文），宮本知治（理）
鉱　物　分　野：加藤　工（理），石田清隆（比文），桑原義博（比文），石橋純一郎（理），中村智樹（理），久保友明（理），中牟田義博（博），上原誠一郎（理），本村慶信（理）
人類先史部門：田中良之（比文），中橋孝博（比文）
有機化石分野：山内敬明（理），北島富美雄（理）
地球電磁気分野：湯元清文（理）
生　薬　分　野：田中宏幸（薬）
【文化史部門】
考　古　分　野：宮本一夫（人文），岩永省三（博），辻田純一郎（人文），溝口孝司（比文）
記録資料分野：佐伯弘次（人文），後小路雅弘（人文），服部英雄（比文），有馬　学（比文），吉田昌彦（比文），中野　等（比文），高野信治（比文），植田信廣（法），熊野直樹（法），田北廣道（経），宮崎克則（博）
建築史分野：未　定
カルテ資料分野：前原喜彦（医），江頭健輔（医），水元一博（附属病院），宮崎克則（博）

【技術史部門】
資源・素材分野：福島久哲（工），渡邊公一郎（工），今井　亮（工），中西哲也（博），
機　械　分　野：鬼鞍宏猷（工）

◎平成 21 年度
【自然史部門】
動物・医動物分野：飯田　弘(農)、金子たかね(農)
植　物　分　野：矢原徹一(理)、井上　晋(農)、安井　秀(農)、川口栄男(農)
昆　虫　分　野：荒谷邦雄(比文)、阿部芳久(比文)、高須啓志(農)、紙谷聡志(農)、
矢田　脩(比文)、高木正見(農)、上野高敏(農)、津田みどり(農)、
緒方一夫(熱研)、多田内　修(農)
水生生物分野：野島　哲(理)、森　敬介(理)、川口栄男(農)、望岡典隆(農)
地史古生物分野：清川昌一(理)、高橋孝三(理)、佐野弘好(理)、鹿島　薫(理)、
下山昌一(理)、坂井　卓(理)、小池裕子(比文)
岩　石　分　野：小山内康人(比文)、中野伸彦(比文)、寅丸敦志(理)、石田清隆(比文)、
池田　剛(理)、宮本知治(理)
鉱　物　分　野：加藤　工(理)、久保友明(理)、石田清隆(比文)、桑原義博(比文)、
石橋純一郎(理)、上原誠一郎(理)、中村智樹(理)
人類先史部門：田中良之(比文)、中橋孝博(比文)
有機化石分野：山内敬明(理)、北島富美雄(理)
地球電磁気分野：湯元清文(理)
生　薬　分　野：田中宏幸(薬)
【文化史部門】
考　古　分　野：辻田淳一郎(人文)、宮本一夫(人文)、溝口孝司(比文)
記録資料分野：後小路雅弘(人文)、佐伯弘次(人文)、服部英雄(比文)、吉田昌彦(比文)、
中野　等(比文)、高野信治(比文)、植田信廣(法)、熊野直樹(法)
カルテ資料分野：前原喜彦(医)、江頭健輔(医)、水元一博(附属病院)
【技術史部門】
資源・素材分野：今井　亮(工)、福島久哲(工)、渡邊公一郎(工)、鬼鞍宏猷(工)
機　械　分　野：福島久哲(工)、渡邊公一郎(工) 、鬼鞍宏猷(工)

九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部内規

第１条　九州大学総合研究博物館に、野外における教育・研修支援のためにフィールド・ミュージアム部を置く。

第２条　フィールド・ミュージアム部は専任教員及び兼任教員で構成される。

第３条　フィールド・ミュージアム部に陸生生物、水生生物及び地学の３部門を置く。

第４条　各部門に部門主任を置く。

２　部門主任は、当該部門に関係のある兼任教員をもって充てる。なお、必要に応じて博物館の専任教員も部門主任となることができる。

３　部門主任の選出は、各部門の推薦に基づき、館長が委嘱する。

４　部門主任は館長の下に、各部門における野外における教育・研修支援の取りまとめを行う。

５　部門主任の任期は２年とし、補欠の任期は前任者の残任期とする。なお、再任を妨げない。

第５条　博物館に野外における教育･研究支援に関わる諸事項および各部門間の連絡調整を計るため、主任会議を置く。

２　主任会議は各部門主任および博物館専任教員をもって構成する。

３　館長は主任会議を招集し、その議長となる。

附　則

１　この内規は、平成 16 年４月１日から施行する。

２　この内規施行後最初に任命される分野主任の任期は、第４条第５項の規定に関わらず、平成 18 年３月 31 日までとする。

九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部名簿

◎平成 17－平成 18 年度

陸　生　生　物：大賀 祥治(農・演習林)，薛 孝夫(農・演習林)，大槻 恭一(農・演習林)

水　生　生　物：野島 哲(理)，森 敬介(理)

博 物 館 教 員：館長および専任教員

◎平成 19－平成 20 年度

陸　生　生　物：大賀祥治（農・演習林），薛　孝夫（農・演習林），大槻恭一（農・演習林）

水　生　生　物：野島　哲（理），森　敬介（理）

博 物 館 教 員：館長および専任教員

◎平成 21 年度

陸　生　生　物：大賀祥治(農・演習林)、薛　孝夫(農・演習林)、大槻恭一(農・演習林)

水　生　生　物：野島　哲(理)、森　敬介(理)

博 物 館 教 員：館長および専任教員

協力研究員の受け入れに関する内規

第１条　この内規は、九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の業務に協力する協力研究員（以下「研究員」という。）の受入れに関し、必要な事項を定める。

第２条　この内規において「協力研究員」とは、博物館の業務支援のため協力を申し出た学外者を言う。

第３条　学外者とは、原則として次の者をいう。

１　国立、公立及び私立の教育研究機関に所属する、又は所属した教育職員及び研究者。

２　学術標本の調査、収集、整理、保存、公開展示等について専門知識を有する者。

第４条　受入れを希望する研究員は、博物館の専任教員及び兼任教員が所定の申請書により、博物館長に申し出るものとする。

第５条　博物館長は前項の申請を受け入れた場合、運営委員会に報告するものとする。

第６条　研究員は任期を定めないものとする。

第７条　博物館長は、研究員が博物館における業務を継続することが不適当と認めたときは、その職務を解くことができる。

第８条　研究員は、博物館の諸規定に従い、博物館を利用するものとする。

第９条　研究員の受入れは、随時、これを行うことができる。

第 10 条　この内規に定めるもののほか、必要な事項は、運営委員会で決定する。

附則

この内規は、平成 16 年４月１日から施行する。

協力研究員名簿

◎平成 17－平成 18 年度

相原 安津夫(九州大学名誉教授)，青木 義和(九州大学名誉教授)，井澤 英二(九州大学名誉教授)，井川 敏恵(㈱産業技術総合研究所特別研究員)，木船 悌嗣(福岡大学名誉教授)，三枝 豊平(九州大学名誉教授)，平嶋 義宏(九州大学名誉教授)，森本 桂(九州大学名誉教授)，柳 哮(九州大学名誉教授)，湯川 淳一(九州大学名誉教授，元博物館長)，島田 允堯(九州大学名誉教授)

◎平成 19 年度

相原 安津夫（九州大学名誉教授），青木 義和（九州大学名誉教授），井澤 英二（九州大学名誉教授），井川 敏恵（㈱ 産業技術総合研究所特別研究員），木船 悌嗣（福岡大学名誉教授），小島 弘昭（東京農業大学准教授），三枝豊平（九州大学名誉教授），嶌　洪（九州大学名誉教授・元博物館長），島田 允堯（九州大学名誉教授），平嶋 義宏（九州大学名誉教授），森本　桂（九州大学名誉教授），柳　哮（九州大学名誉教授），湯川 純一（九州大学名誉教授・元博物館長）

◎平成 20 年度

相原安津夫（九州大学名誉教授），青木義和（九州大学名誉教授），井澤英二（九州大学名誉教授），井川敏恵（㈱ 産業技術総合研究所特別研究員），木船悌嗣（福岡大学名誉教授），小島弘昭（東京農業大学准教授），三枝豊平（九州大学名誉教授），嶌　洪（九州大学名誉教授・元博物館長），島田允堯（九州大学名誉教授），高橋直樹（純真短期大学助教），中島　淳（日本学術振興会特別研究員），中山慎也（出雲市立第一中学校教諭），平嶋義宏（九州大学名誉教授），廣永輝彦（㈱ 地球環境計画九州支社），本村慶信（元九州大学助教），森本　桂（九州大学名誉教授），柳　哮（九州大学名誉教授），湯川純一（九州大学名誉教授・元博物館長）

◎平成21年度

相原安津夫（九州大学名誉教授），青木義和（九州大学名誉教授），井澤英二（九州大学名誉教授），井川敏恵（㈱産業技術総合研究所特別研究員），木船悌嗣（福岡大学名誉教授），小島弘昭（東京農業大学准教授），三枝豊平（九州大学名誉教授），嶌　洪（九州大学名誉教授・元博物館長），島田允堯（九州大学名誉教授），中島　淳（日本学術振興会特別研究員），中山慎也（出雲市立第一中学校教諭），平嶋義宏（九州大学名誉教授），廣永輝彦（㈱地球環境計画九州支社），本村慶信（元九州大学助教），森本　桂（九州大学名誉教授），柳　哮（九州大学名誉教授），湯川純一（九州大学名誉教授・元博物館長），廣永　輝彦（（株）地球環境計画九州支社）

専門研究員の受け入れに関する内規

第１条　この内規は、九州大学が定める研究院等の受入規定に基づく研究院以外の者を総合研究博物館（以下「博物館」という。）の専門研究員として受け入れることに関し、必要な事項を定める。

第２条　専門研究員とは、博物館において研究を行う者を言う。

第３条　専門研究員の申請資格を有する者は、国内あるいは海外の大学または高等専門学校を卒業した者、あるいはこれと同等以上の学力があると認められた者とする。

第４条　専門研究員の受入期間は、１年以内とする。ただし、受入期間は延長できるものとする。

第５条　受入れを希望する者は、博物館専任教員を通じ、以下の書類を付して博物館長に提出する。研究期間の延長を申し出る者は、改めて以下の書類を博物館長に提出するものとする。

１．履歴書
２．研究業績
３．研究計画書
４．受入教員の推薦書
５．他機関に所属する者については、当該所属機関長の承諾書

第６条　博物館長は、博物館運営委員会の議を経て、専門研究員の受入を許可する。

第７条　専門研究員は、受入教員とともに研究に従事し、博物館は研究上必要な便宜をはかるものとする。

第８条　博物館長は、専門研究員が研究を継続することが不適当と認められる場合、受入教員の申し出により、許可を取り消すことができる。

第９条　専門研究員の受入れは、随時、これを行うことができる。

附則

この内規は、平成 20 年８月１日から施行する。

専門研究員名簿

氏名	期間 1	期間 2	2008 年度	2009 年度
高橋直樹	H20.10.01～H21.09.30	H21.10.01～H22.09.30	○	○
柳　真一	H20.10.01～H21.09.30	H21.10.01～H22.09.30	○	○
三田井克志	H20.10.01～H21.09.30	H21.10.01～H22.09.30	○	○
浦川　和也	H20.10.01～H21.09.30	H21.10.01～H22.09.30	○	○
安永　浩	H20.10.01～H21.09.30	H21.10.01～H22.09.30	○	○
林原　泰子	H20.10.01～H21.09.30	H21.10.01～H22.03.31	○	○
青木　大空	H21.04.01～H22.03.31			○
古賀　康士	H21.04.01～H22.03.31			○
矢野健太郎	H21.04.01～H22.03.31			○
清水　麻記	H21.04.01～H22.03.31			○
村尾　竜起	H21.04.01～H22.03.31			○
黒澤　茂樹	H21.07.01～H22.03.31			○
		計	6 人	12 人

資料ⅡＣ－②総合研究博物館教員選考内規

第１条　九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の教員の選考は、この内規に定めるところによる。

第２条　教員候補者の選考にあたっては、運営委員会に教員選考委員会（以下「選考委員会」という。）を置く。

第３条　選考委員会の委員は次に掲げる者をもって組織する。

（１）博物館長

（２）運営委員会から４名の教授又は准教授を選出するものとする。

２　前項第２号の委員の選出にあたっては、原則として博物館の教授又は准教授からの委員及び博物館以外の教授または准教授からの委員は同数とする。

３　教授候補者の選考については教授をもって構成する。

４　委員の交代又は補充を必要とするときは、選考委員会委員の選出の際の次点者を当てることにする。

第４条　選考委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

２　委員長は、選考委員会を招集し、その議長となる。

第５条　選考委員会は、教員候補者として１名を決め運営委員長に報告する。

２　選考委員会は、運営委員会における議決をもって解散する。

第６条　運営委員長は、前条第１項の報告に基づき運営委員会の議に付するものとする。

２　運営委員会の審議にあたっては、教員候補者の履歴及び研究業績等を提出するものとする。

３　教員候補者の議決には、教授候補者の場合は教授の運営委員が、准教授及び助教又は教務助手候補者の場合は教授及び准教授の運営委員があたることとする。

４　教員候補者として議決するには、議決にあたる出席運営委員の３分の２以上の賛成がなければならない。

第７条　運営委員長は、前条により教員候補者が選定されたときは、その任用のため、所定の手続きをとる。

第８条　この内規に定めるもののほか、教員選考に関し必要な事項は、運営委員会の定めるところによる。

第９条　この内規の改正は、運営委員会委員総数の３分の２以上の出席した運営委員会で、出席者の３分の２以上の賛成があることを要する。

附　則

この内規は、平成１６年４月１日から施行する。

附　則

この内規は、平成 19 年４月１日から施行する。

資料Ｖ　九州大学総合研究博物館の中期目標・中期計画

中　期　目　標	中　期　計　画
Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標 １　教育に関する目標 （１）教育の成果に関する目標 １）学士課程 ○博物館専任教員は関連部局の学部教育に積極的に参加する。 ○学芸員資格関連科目を担当し、研究の素養を有する学芸員の養成を目指す。 ２）大学院課程 ○高度な専門的知識を持ち、自立できる研究者の養成を目指す。	Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 １　教育に関する目標を達成するための措置 （１）教育の成果に関する目標を達成するための措置 １）学士課程 ○博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部の兼任教員として、本務に差し支えない範囲で、講義、実習に積極的に関与する。 ２）大学院課程 ○博物館専任教員は、専門に沿った学府の兼任教員、或いは協力講座担当教員として、本務に差し支えない範囲で、大学院教育に積極的に関与する。 ○標本資料を分析するための適切な方法論を持ち、実験・分析などの手段を通して、情報を的確に抽出できるよう教育する。 ○理論・学史・先行研究を総括して研究動向と問題を適切に抽出し、その中に自分の研究を適切に位置付け、オリジナルな見解を提示し、その集積を体系化できるよう教育する。
（２）教育内容等に関する目標 １）教育方法に関する基本方針 ○博物館の施設を使った標本資料を用いた実験、実習、講義により、学生の興味を引き出し、できるだけ効果的な教育を行うよう支援する。	（２）教育内容等に関する目標を達成するための措置 １）教育方法に関する具体的方策 ○博物館施設、設備の開放、標本資料の貸出し、展示の公開等により博物館資料を使った教育を支援する。 ○論文発表会の開催を支援する。 ○博物館の施設、設備を充実させる。
（３）学生への支援に関する目標 １）学生の学習支援に関する基本方針 ○学生が自発的に学習し、多角的な視野で問題を考察する能力を養うよう、博物館施設や標本資料の活用を通じて幅広い支援を行う。	（３）学生への支援に関する目標を達成するための措置 １）学生の学習支援に関する具体的方策 ○博物館資料の情報を提供し学生の勉学を支援する。 ○博物館の建物の建設に際しては、学部学生、大学院生のために研究の便宜を図るスペースを確保するよう考慮して設計に当たる。

２　研究に関する目標 （１）研究水準及び研究の成果等に関する目標 １）目指すべき研究の水準に関する基本方針 ○博物館を核として、学術標本に基づいた国際的・学際的・先駆的研究を行うことで、先端・応用研究を支援すると共に、長期的視野に立った研究成果を上げていく強固な基礎研究組織を確立する。 ２）成果の社会への還元等に関する基本方針 ○博物館での教育研究活動を社会へ還元し、標本資料に基づく研究の発展に寄与するとともに、生涯学習に貢献する。	２　研究に関する目標を達成するための措置 （１）研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置 １）目指すべき研究の方向性 ○他大学との研究情報交換システムを確立する。 ○博物館に複数の学問分野の教員が共存する利点を生かし、異なった分野間で情報交換、および共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する。 ○博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う。 ２）成果の社会への還元等に関する具体的方策 ○研究紀要、資料集を発行し、博物館の研究活動を社会へ還元する。 ○博物館が所蔵する標本資料のデータベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する。 ○年報、ホームページ、博物館ニュース、紀要等を通じて博物館活動の状況を社会に公開する。
（２）研究実施体制等の整備に関する目標 １）研究者等の配置方針 ○博物館の使命である研究、教育、標本資料の整理と情報の発信を円滑に行うため、大学全体の研究者の協力体制の確立を図る。 ２）研究環境の整備に関する基本方針 ○国際的・中核的大学博物館として、標本資料に基づく研究拠点となることを目指す。 ○外部資金の拡充を図るとともに、自己収入の増加に努める。 ○博物館活動を行うにあたり、経費の抑制に努める。 ○安全で快適な教育研究環境の確保のため、災害等の防止に努める。	（２）研究実施体制等の整備に関する目標を達成するための措置 １）研究者等の配置に関する具体的方策 ○資料部、及びフィールドミュージアム部の協力教員制度の充実を図る。 ○学外の研究者、名誉教授等を対象とした協力研究員制度の充実を図る。 ２）研究環境の整備に関する具体的方策 ○教員研究室・実験室を整備する。 ○競争的資金の獲得を積極的に行う。 ○寄付の意識を高める運動を行う。 ○標本の同定依頼に対しては内規を定め、料金の徴集を検討する。 ○新キャンパスの博物館の設計に際しては、常設展示ができた後は入館料を徴集すること、博物館内にミュージアムショップを設け、図録、写真、絵葉書、図鑑など知的生産物の販売を行うことを検討する。 ○光熱水費の節約を図る。 ○新キャンパスでの博物館建物の建設に際しては省エネ型建物を目指す。 ○新キャンパスでは、人の空間と標本の空間を可能な限り分離して、防虫等のための薬品の影響が人に及ばないよ

	うに努める。新キャンパス移転後は、模式標本など貴重標本の収蔵・管理のため、標本庫の滅菌、殺虫消毒を定期的に行うが、薬剤による燻蒸を避け、冷凍による滅菌、殺虫を行い、博物館の職員、学生の安全を図る。
３）教育研究組織の見直しに関する目標	３）教育研究組織の見直しの方向性
○多岐に亘る研究資料を新たな研究や教育に活用できるようにするため、博物館専門職員の充実を図り、整理、情報化を推進する。	○一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の業務内容の見直しや、系間の境界線の撤去を検討する。また、教員相互の連携を図り、縦割りシステムを改善する。
４）研究の質の向上システムに関する基本方針	４）質の向上に関する具体的方策
○博物館から質の高い情報の発信を行い、内外の研究者の研究の発展に寄与する。 ○自己点検・評価、外部評価により、博物館の設置目的をより効率的に達成するための改革を行う。	○博物館の設計に当たり、博物館資料のデータベース化を進め、内外の研究者へ向けた情報の発信を行うスペース、国内外の研究者との研究交流を発展させるスペースを設けるよう検討する。 ○事業計画、予算・決算、博物館活動報告等を載せた年報を作成し、学内、周辺の大学、高校、周辺市町村、県、国、関連機関等へ配布して、博物館活動への理解と協力を求める。 ○入館者に対するアンケート調査を行い、博物館に対する要望、評価をこまめに受けるとともに、定期的に外部評価を実施する。
５）施設設備の整備などに関する目標	５）施設設備の整備などに関する目標を達成するための措置
○貴重な学術標本を安全かつ良好な環境下で保管し、教育研究に活用するため、新キャンパスでの博物館の建物を整備する。	○新キャンパスにおける博物館については、楽しみながら学ぶ、ゆとりある魅力的な施設を整備する。 ○博物館の研究と教育研究支援業務を円滑に行うための分析機器の導入を図る。 ○保存環境にに配慮した安全な標本庫と安定した標本の整理・管理システムを作り、民間等のタイプ標本を含む重要標本の寄贈、寄託に寄与する。 ○科学研究費補助金等を利用して、主として東南アジアを含む東アジアの学術調査を行い、標本の充実を図る。

３　その他の目標 （１）社会との連携、国際交流等に関する目標 １）教育研究における社会との連携・協力に関する基本方針 ○総合研究博物館は、基礎科学研究に重点を置きながら、産学連携に柔軟に対応した研究を進めていく。 ○地域自治体と連携した社会教育を行い、生涯学習や児童学生の理科離れ対策に貢献する。 ○博物館活動を通じて、地域社会との連携を深める。	３　その他の目標を達成するための措置 （１）社会との連携、国際交流等に関する目標を達成するための措置 １）教育研究における社会との連携・協力の推進方策 ○学内展示、及び国公私立博物館との共催の公開展示、サテライト展示を通じて、大学の研究、教育を社会に紹介する。 ○“インターネット博物館”を充実させ、公開展示、大学収蔵標本の概要を紹介する。 ○フィールドミュージアム部を中心にして、社会人、及び学生を対象とした野外実習を実施する。 ○博物館専任教員及び外部の研究者を講師とした普及講演会を開催し、生涯学習に寄与する。 ○国内の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）、及び研究の訓練を行う。 ○青少年の理科離れの是正や総合学習を積極的に支援するため、県・市町村教育委員会との間で、小中高校教員が博物館で初等、中等教育にあたる制度を検討する。 ○博物館活動を支援する館外組織としてボランティア制度を取り入れる。九州大学総合研究博物館の社会教育事業を通じて、博物館の円滑な運営を助ける教育ボランティアと標本の収集、整理、データベース化と研究を補助する研究ボランティアの育成を図る。
２）教育研究活動に関連した国際交流に関する基本方針 ○博物館活動を通じて国際交流に寄与する。	２）教育研究活動に関連した国際交流に関する具体的方策 ○国外の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）、及び研究の訓練を行う。 ○関連部局の教員と共同で、東南アジアを中心に海外の研究者をパートナーとした協同研究を実施する。

資料ⅥＡ．九州大学総合研究博物館自己点検・評価委員会内規

（設置）

第１条　九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）に九州大学自己点検・評価委員会規則（平成１６年度九大規則第１３号）第８条の規定に基づき、九州大学総合研究博物館自己点検・評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任務）

第２条　委員会は、博物館における自己点検・評価について、次に掲げる事項を行う。

⑴ 博物館の教育及び研究、組織及び運営並びに施設及び設備（以下「教育研究等」という。）の自己・点検評価に関すること。

⑵ 中期目標・中期計画の達成度の自己点検・評価に関すること。

⑶ 自己点検・評価に関する報告書の作成及び公表に関すること。

⑷ 博物館の教育研究等についての外部評価の聴取及びその検討に関すること。

⑸ その他自己点検・評価に関する重要事項に関すること。

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

⑴ 副館長

⑵ 前号を除く博物館の専任の教授及び助教授のうちから館長が指名する者　　１人

⑶ 第１号及び第２号を除く博物館運営委員会委員のうちから館長が指名する者　２人

⑷ その他委員会が必要と認めた者　　若干人

２　第２号から第４号の委員の任期は、２年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

３　前項の委員は、再任されることができる。

（委員長）

第４条　委員会に委員長を置き、構成員の互選により定める。

２　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

（議事）

第５条　委員会は、委員の２分の１以上が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

２　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数の時は、議長の決するところによる。

（補足）

第６条　この内規に定めるもののほか、博物館の自己点検・評価に関し必要な事項は、博物館運営委員会の議を経て、委員長が定める。

附　則

１　この内規は、平成１７年４月１日から施行する。

九州大学総合研究博物館
平成 17 ～ 21(2005 ～ 2009)年度
外部評価報告書

発行日：2011 年 8 月 15 日

編　集：2010 年度九州大学総合研究博物館
外部評価委員会

発行者：九州大学総合研究博物館
〒 812 - 8581　福岡市東区箱崎 6 - 10 - 1
Phone/Fax　092 - 642 - 4252

印刷所：城島印刷株式会社
Tel　092 - 531 - 7102

九州大学総合研究博物館
Kyushu University Museum